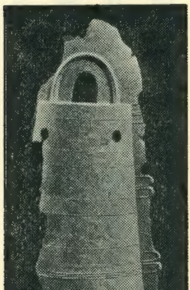
三月情話

佐々木守



三日月情話



佐々木守

三日月は、月の輝く部分である
それでは陰の部分には何があるか
人間同志のめぐりあいも
三日月のように、輝く部分だけを見ているのではないだろうか
人間は、他人の陰の部分を見ることはできない
人間関係とは、いわば「三日月の関係」である

三日月情話●もくじ

失踪

奇怪な異変はすでに始まっていたが、結婚生活わずか六か月、まだ新妻の歓びにひたりきっていた克子には、知るよしもなかった。

その日の午後——

神崎克子は、産婦人科へ診察してもらいに行った。「もしや」という気だった。克子は三十歳だが、小ざっぱりした装い、無造作に束ねた髪など、特別な粧いをこらしていないところが、かえって初々しく、平凡だがそれなりに満ちたりた若奥さまの絵だった。

克子は、期待と不安のこもった緊張ぎみなまるまっちい眼で、カルテを手にした医師の顔を食い入るように見つめていた。

「間違いありません、おめでたですよ」

そのとたん、克子の顔から不安が消え、明るい喜びがいっぱいにひろがった。

「妊娠三か月に入っています」

産科の診察室をでた克子の心は、いやがうえにもはずみ、とめどがなかった。

「赤ちゃんができた。わたしとあの人の赤ちゃんが！」

結婚して六か月目の赤ちゃんである。人は早すぎるというかもしれない。けれども、今年三十歳の神崎克子にとっては、むしろおそすぎる赤ちゃんであるともいえた。克子の喜びはひとしおだった。

結婚が人よりもおそかったのには、事情があった。身よりも兄弟もない克子は、年とった母親を養わなければならなかったからである。しかし、その母親も一年前に亡くなり、その淋しさをまぎらわせるために出かけた旅先で、克子は一人の男と知りあった。それが現在の夫、神崎拓也である。恋というにはありふれた交際期間を経て、二人は結婚生活に入った。しかし、肉親の情うすく育った克子にとって、それは夢のようにしあわせな半年であった。

帰りしなに、克子は酒屋に立ち寄ってワインを買った。なにはともあれ、赤ちゃんができたことを、夫と一緒に乾杯しようと克子は思った。夫の拓也も克子と同じように、両親も兄弟もない身の上だった。

「……わたしたちの新しい家族を、あの人も喜んでくれるにちがいない」

克子と拓也はアパートに住んでいた。一階、二階に三家族が入れる小さなつくりで、マンションというにはいささかはばかられるが、民営アパートにしては、わりに立派なほうである。買い物を両手で抱えた克子が、二階への階段を昇りかけたとき、ちょうどそこへ、隣室の主婦、飯野澄子が降りてきた。

「お帰りなさい」と澄子が、克子に声をかけた。「どうなさったの、ニコニコして！　なにかいいことでもあったの？」

「エッ、ええ、ちょっと」

「あ、奥さま、さっき御主人もお帰りになったようでしたわ」

「あらッ」と、克子は思わずはずんだ声をあげた。

夫の拓也がこんな早い時間に会社から帰ったことを、いつもなら、いぶかしく思うはずなのに、《受胎告示》でわくわくしていた克子は、そうは思わなかった。きっと、虫が知らせたんだわ！

「ただいまッ」と、克子は勢い込んで玄関のドアをあけた。夫の靴が脱いである。克子は、はずむ気持ちを抑えながら、自分の靴と一緒に、それを下駄箱へ入れた。境の襖がひらかれていて、夫の拓也が居間の本棚の前に立ち、着替えもしないまま本を読んでいる姿が見えた。

「お帰りなさい。ずいぶん早かったのね」

「ああ」と拓也が本に眼を落としたまま言った。「ちょうど外まわりの仕事があって、予定より早く片づいたものだから、そのまま帰って来ちゃったよ」

住まいの間どりは、玄関と台所、風呂場、それに居間兼食堂、その奥に寝室というつくりである。居間の一方の壁はずっと本棚がうずめていて、営業部員らしい拓也の経済関係の本や、外国のミステリー本、古代史や邪馬台国関係の本などが、びっしり並んでいる。拓也は、そのサラリーマンにしては多すぎる蔵書の一冊をむさぼり読んでいた。

「また邪馬台国について、新しい説でもでたの？」

「うん、まあね」と、拓也は生返事である。

拓也は本を読みだしたら最後、めったなことでは人の話など聞くほうではない。克子は、赤ちゃんのことを言いかけて諦め、食事のときに話をしようと思い直した。「あなた、ネクタイぐらいはずしたら？　きゅうくつでしょう」

克子が背広を脱がそうとすると、拓也は本を閉じて言った。

「めしには間があるだろう。ちょっと出かけてくる」

克子はそのとき、拓也が本屋にでも行くのだろうと、さほど気にもとめていなかった。
「お風呂だってすぐわくわよ」と、克子は鼻をならした。
「わかってる」と、拓也は言い、そのまま玄関に行って、下駄箱から靴をとりだした。
「どこへいらっしゃるの？」
拓也はちょっと言葉につまり、それから、思いきったように「竜宮城」と答えた。
「竜宮城？」
克子は思わず吹きだした。いったい、竜宮城なんていうパチンコ屋が、この近所にあったのかしら？　が、靴をはいた拓也は、そんなくったくのない笑顔の克子を、まじまじと見つめていた。
「どうかなさったの」
「いや、それじゃ」
そう言って背を向けた拓也に、克子はかるく笑いながら「早く帰ってね」と声をかけた。
パタンと玄関のドアが閉まり、足音が静かに遠のいていった。
……あとで考えれば、これが、克子と拓也のみじかい結婚生活の最後だったのである。
克子は、夫と夕食をともにしながら赤ちゃんのことを語りあうことを、とても楽しみにしていた。そのうち、待ちくたびれて外にでた。階段のいちばん下の段に、肩をつぼめるようにして坐りながら、夫がいま帰るか、もう帰るだろうと、いつまでも待っていた。
――その夜は三日月だった。
吐息とともに見あげる空には、鎌のように細い《三日月》がかかっており、克子にはなぜか、それが夫の眉のようにも、瞳のようにも思えた。拓也はその夜、ついに帰らなかった。結婚六か月にして、はじめてのことだった。

そうして二日たち、三日たちするうちに、克子も夫の蒸発を認めないわけにはいかなかった。ほかに、女ができたというのだろうか？　が、克子には夫の蒸発がどうにも合点がいかなかった。拓也は色恋に血迷うような男ではなかったし、この就職難時代に、極東製紙のような一流会社を、女のためにやめるほど向こう見ずでもなかった。克子にしてもどだい、夫に捨てられたという実感がまるでないのである。

会社のほうにも、何の連絡もなかった。克子からことのいきさつを打ち明けられた部下の坂本は、神崎係長の失踪事件を内密にし、表向きは病気欠勤にするなどの手を打っていた。克子はこの坂本と相談するために、丸の内の、会社の近くの喫茶店に出かけた。

「坂本さん、いろいろ申しわけありません」

「いいえ、念のために心あたりの取引先に問い合わせてみたんですが、どこにも見えてないんですよ」

「そうですか」と、克子は目を伏せた。

「だけど、係長はどこへ行っちゃったのかなあ、いったいぜんたい」

「あの、坂本さん、竜宮城って何かご存知ありませんか」

「竜宮城？」

「ええ、でかけるとき、竜宮城へ行くと言っていたもんですから」

これには、坂本も笑って首をひねるだけだった。坂本は、バーとかキャバレーの名前かと思ったが、そんなところへ行ったという話は係長から聞いたこともなかった。で、二人は、何か連絡が入りしだい互いに報告し合うことを約束して別れた。

帰りしなに、克子は原宿にまわって、律子の店「ブランコ」に立ち寄った。律子は高校の先輩で、彫金家だった。一生独身を通すのだと気ままに暮している。道路に面した部分が店になっていて、ガラス戸で仕切られた奥が作業室である。律子は、片隅に作りつけられた小さな台所コーナーで茶の用意をしながら、茶化すようにわざと浦島太郎を歌った。

「律子、やめてッ」と、克子がイライラしたように金切り声をあげた。

「何よ、亭主が一と晩や二た晩、帰らなかったからって、クヨクヨするんじゃないわよ」

「でも会社にも連絡がないなんて」

「だから半年前に言ったでしょ。せっかく三十まで独身できたんだから、結婚なんかするなって。苦労するだけよ。あげくの果ては、ほかの女のところから帰らなくなって、すったもんだの末は離婚よ」

律子の《離婚》という言葉が、傷ついた克子の胸にグサッときた。

「拓也さんだって三十三の初婚でしょ。それなりのことは覚悟してなきゃ」

「だけど、あの人、そんな気のきいたことできる人じゃないのよ」

「猫かぶってたのよ。大丈夫、今夜あたり、申しわけないって、顔で戻ってくるわよ。うんととっちめてやることね。はじめが肝心、最初に甘い顔みせたらもうおしまいよ。男なんて、図々しくてどうしようもないんだから」

「律子、実は私……」と、克子はきれぎれに言った。「赤ちゃんができたの……三か月だって」

「あら、ホント、おめでとう。けど拓也さんもひどいわね。それを知ってながら遊びに行っちゃうなんて」

「ううん、そのことを言う前にあの人……」

「えッ、彼は知らないの？　じゃ、大丈夫。子どもができたことがわかると、だいたい浮気の虫がおさまるってのが、日本の男どものパターンよ。安心しなさい」

律子のそんな荒っぽい言葉が、かえって傷ついた心にうまくとけあい、克子もいくらか気がまぎれた。ところが——

夕暮れ近くになって家に帰りついた克子は、思わず「あッ」と驚いた。居間の書棚から、拓也の本がすべて消えていたのである。がらんとした本棚は、わびしいものだった。克子は、寝室に眼を移した。洋服ダンスが少しあいている。ハッとなって扉をあけてみると、拓也の洋服やネクタイが、すべて消えていた。克子は、急いで洋服函をあけてみた。男物の函の中はすべてからっぽである。

消えた。夫のものがすべて消えた。この部屋に、夫が生活していたという痕跡は、いっさい消えてしまっていたのである。克子は、一一〇番に電話して盗難を通報すると、そこにぺたんと坐り込んでしまった。

「……ちがう。拓也さんがやったんじゃないわ！　あの人に、こんな冷酷な仕打ちなどできるわけがないわッ」

パトカーが間もなく、けたたましいサイレンとともに馳せつけ、二人の警官が克子の前にやってきた。が、取り調べの警官は、盗難は事実としても、指輪や現金がそのままになっていることにはやはり疑問を抱いたらしく、思わず「これは単なるドロボウとは思えませんな」と首をひねった。

「それに、失くなったのはご主人のものばかりでしょ。いや、以前にもあったんです、盗難とどけが出されましてね。ところが、あとになってみると、旦那がそいつを別の女のとこにそっくり運んでたってことがわかりまして……」

「ちがいます。あの人は、そんな人じゃありません」
「いや、失礼しました。それじゃとにかく、手配をしますから、盗難とどけだけは出しといてください」
　言って警官は引き上げていった。力なく椅子に坐りこんだ克子は、眼の前に輝く婚約指輪をそっととり上げると、祈るような気持ちで「あなた」と囁きかけた。ひとすじの涙が頬をつたい、たそがれが、傷心の克子をおしつつんでいった。
　そして、翌る朝——
　玄関のブザーが鳴り、男の呼ぶ「神崎さあん」という声に克子は起こされた。やつれた顔の克子が、髪をかきあげながらドアをあけると、それは郵便配達夫で、
「書留速達です。印鑑おねがいします」
　克子があわててハンコを渡すと、郵便屋は大きな封筒を置いていった。封筒の宛名は「神崎克子様」となっている。裏を返すと、住所はなく「拓也」の文字だけが眼を射た。克子は、居間へかけこむと、もどかしげに封を切り、中のものをひき出した。
　貯金通帳、株券、証券などがでてきた。それらは、すべて「神崎克子」名儀になっている。が、克子は最後の一枚をみて、思わずハッと眼を丸めた。それは《離婚届》でそこにはすでに夫の名前が書きこんであり、ハンコも押してある。克子は、ただもう茫然となって、その離婚届をみつめるばかりだった。
　そのとき、ブザーが鳴り、律子の声が聞こえてきた。
「いるんでしょ。空いてるから入るわよォ」と陽気にあがりこんできた律子も、ガックリ肩を落とした克子のただならぬ気配におされて口ごもった。

「克子、いったいどうしたのよ」と、律子は横に坐って、そこにひろげられた貯金通帳や証券類をみた。「えッ、これみんな、あんたの名義になってるんじゃない、どういうことなのよ……なにッ、離婚届って、これは……」
「送ってきたのよ、たった今」
耐えられなくなって、克子は顔を伏せた。
「こんなものいきなり送りつけたりして、拓也さん、どういう気なのよ。ね、手紙かなにか入ってなかったの？　電話は？　克子ッ」
その声に応えるように、突如、電話が鳴りひびいた。克子がハッと顔をあげ、律子がツイと立ちあがった。と、それより早く克子が電話にとびついた。いったい何が起こったのか、みるうち、克子の顔が蒼ざめていった。血の気の失せた顔面に痙攣がはしり、その手から受話器がすべり落ちた。そして、崩れるように、そこに坐りこんでしまった。
「どうしたの、克子ッ」
「あの人が……自殺……」
律子が電話をかわった。警察からの知らせであった。ナゾの自殺——が、それは夫の蒸発にはじまる奇怪な異変の終わりでなく、次の段階のはじまりだったのである。
その日の午後、南伊豆の断崖にくだける怒涛にそった白い道を、律子の車が走っていた。助手席には、克子が、魂を失った人形のようにゆられていた。家がひしめいている狭い道をぬけると、律子の車は海岸へ出た。漁網の修繕をしている老漁夫に道を尋ねるまでもなく、めざす駐在所はすぐわかった。
駐在所には老警官と刑事がいて、すぐに奥から背広やズボンをもってきて、バサリ、バサリと机

の上においた。その上に財布、定期入れ、名前入れなどの小物を並べ、最後に靴を横においた。まぎれもなく、それは拓也の衣類であり、所持品だった。近くの岩場にきちんとたたんでおいてあり、釣りに行った人が見つけて通報したものだという。背広をにぎりしめ、うつろな面持ちで窓の外に眼を向けた克子を、老警官と刑事がいたましげにみつめていた。
自殺の現場は、眼下に白い波を泡立てている断崖の突端である。
「ここから飛びこみますと、めったに遺体はあがらんですよ」と、案内に立った老警官が言い、刑事がそのあとを補足した。
「意外に底が深いうえに、岩が入り組んでるらしくてね。むろん、潮の関係もあるんでしょうが」
話を聞いていた克子が、ふらふらと倒れかかり、律子は急いで支えながら、車の中へ運んだ。
走る車の中で、克子は風呂敷包みを抱え、虚脱したように坐っていた。涙も流れない、ただ空白の時間のみを克子は感じていた。そのとき突然、律子が急ブレーキをかけて車をとめると、納得のいかない顔で克子をみた。
「変だわ、ね、ちょっとそれみせて」と、律子は、克子の膝の風呂敷包みを解いた。「拓也さん、自殺するのにどうして、わざわざ背広やズボンまで脱いじゃったのかしら？　靴をぬいで揃えておくっていうのならわかるけど、ちょっと変じゃない？」
克子は、何のことか意味がつかめずに、きょとんとしていた。律子は、疑問をほおっておけない性格だったが、それにしても、この事件には疑惑が多すぎると思ったとたん、もうギューンと車をターンさせ、駐在所に向けて突っ走らせていた。
駐在所の前に車を横づけすると、中にいた若い警官が驚いたように顔をあげた。それから、何とも妙なことになった。律子が勢いこんで駐在所に入っていくと、若い警官が「何か」といぶかしげ

に聞いた。
「あの、さっきの自殺者のことで、もうちょっとお伺いしたいんですけど」
「えッ、ここで自殺があったんですか」
「なに言ってるんですか」と、律子はあきれたように言った。「つい一時間ほど前、私たちとここで、年配の……そう五十がらみのごましお頭のお巡りさんと……」
「ちょっと待ってください」と、若い警官が首をひねった。「おかしいな、そういう巡査はここにはいないんですがね」
「そんなバカな」と、克子もしびれをきらしたように口を出した。「だって刑事さんも一緒だったじゃないの、本署の川村刑事とか」
「川村……さあ、うちの管内には、そんな川村なんて刑事はいないんですがね」
「何ですって」と、律子が唖然とした顔で言った。「じゃ、さっきのお巡りさんや刑事さんはニセモノ……」
　これが果たして、現実のできごとなのだろうか？　克子は、自分が幻をみているのではないか、長い夢の中にいるのではないかと疑った。が、克子の胎内に新しいいのちが息づいていることだけは、まぎれもない真実であり、現実だった。

ニセ警官まで使って自殺に見せかけた理由は、いったい何なのか？　拓也の失踪にまつわる疑惑は、深まるいっぽうだった。驚いて駈けつけた極東製紙の坂本も、あまりにも唐突なりゆきを、どう解釈していいものやらわからなかった。
「もしかしたら、主人は誘拐されているのかもしれませんわね」と、克子は祈るような気持ちで言った。「仕事のことで何か脅迫されてるとか、坂本さん、主人は会社でいったいどんな仕事をしていたんでしょうか。何か危険なことでも……」
「すると奥さんは、係長が産業スパイにかかわりがあるとでも」と、これには坂本も苦笑せざるを得なかった。「製紙業界は、弱電メーカーなんかと違ってパテントとか新製品開発には、それほど神経質な業界じゃありませんし、係長の誘拐はまず考えられませんね」
　克子は、話のつぎ穂を失って黙りこくってしまった。が、考えれば考えるほどわけのわからない、まったくとりつく島もない奇怪な異変だった。
「それより、やはり係長が家を出られるときに言った《竜宮城》という言葉が、何かのヒントになるんじゃないですか」

竜宮城といえば、バー、キャバレーのほかに、パチンコ屋、トルコ風呂、ラブホテル、モーテルなどが考えられる。坂本の言葉に励まされて、克子は盛場のそうした店を尋ねまわったが、夫が自分に隠れてこんな場所に出入りしたのかと気が滅入るばかりで、一向にラチがあかなかった。

こうして拓也を尋ねまわりながら、克子は、結婚前の夫の生活をほとんど知らなかったことに気づいた。旅先の偶然の出合いから、三か月後の結婚。一流会社の社員という安心感と、共に身よりのない者同士といういたわりあい、それが克子の、神崎拓也に対する愛を燃えあがらせていたのかもしれなかった。

疲れはてて克子がアパートへ帰ってきたとき、いきなり隣室から飯野澄子の悲鳴が聞こえた。二三日前から飯野家は、どうしたことか《蛇》にとりつかれていた。蛇がベランダに這っていたり、ベッドの下からでてきたり、捨てても捨てても、どこからともなくまたでてくるのである。隣室の飯野澄子はこのため、すっかりノイローゼぎみになっていた。

奇怪な異変つづきに悩まされていた克子も蛇の影におびえていたが、すぐ隣りなのに克子のほうには、なぜか一度も蛇は現われなかった。奇怪といえば、これもなんとも気味の悪いできごとだった。隣室のそんな蛇騒動のさなかに、克子は、大沢洋子という女子大生の訪問を受けた。拓也の手帳を拾ったからといって、わざわざ届けにきてくれたのである。

「あの、この手帳を、いったいどうして」

「十日ほど前に、浦島太郎の墓の前で拾ったんです」

「浦島太郎のお墓?!」

そのとたん、克子は《竜宮城》と《浦島太郎》の奇妙な符号に気がついて、思わずギョッとなった。

「浦島太郎のお墓なんてあるんですか」

「ええ」と、大沢洋子はくったくのない笑顔で答えた。「ほんとかどうか知りませんけど、土地の人はそう言ってますわ。浦島寺の裏手に、こんもりした塚があって、それが」

「浦島寺？　なあに、それ！」

克子は大げさな声をあげた。思いがけなく飛びこんできてくれたこの女子大生から、もっといろいろな情報を引きだそうという、せい一杯の演技だった。

「バカみたいね」と、大沢洋子はすぐ乗ってきた。「浦島太郎なんてお伽噺でしょ。なのに真面目にまつったお寺があったり、お墓があったり、物好きな人間もいるもんね」

「いったい、どこにあるんですか」

「場所は横浜、東神奈川駅の近所だけど」

克子は女子大生が帰ると、すぐに国電で横浜に向かった。もしも浦島神社が現実にあるとすれば、夫の失踪について何か手がかりがつかめるかもしれないと思った。が、東神奈川に来て何気なく番地表示板をみたとき、思わずハッと立ちどまった。

そこには「横浜市神奈川区亀住町」と出ており、その《亀住町》の文字が、いま、克子の眼を射た。亀の住む町、それはあの浦島伝説に出てくる、大海亀のことであろうか？　浦島太郎を竜宮城へ連れていったという亀がここにいたというのであろうか？

克子は足を速める。現実に、ここに「亀の住む町」という町名がある。あの日、出て行くとき「竜宮城へ行くんだ」といった夫の言葉が、にわかにリアリティをもって迫って来る。

歩くほどに、克子は息をのんだ。

「浦島公園」がある。「浦島薬局」がある。「亀の湯」がある。その公衆浴場の前には、亀にのって竜宮城へ向かう浦島太郎の、絵本などで見なれた絵が、タイルに描かれてある。

子どもたちのざわめきが聞こえる。角を曲がっておどろいた。何とそこには「浦島小学校」とかかれているではないか。

これが現実か！　浦島太郎というのはお伽噺の出来事だったのではないのか。

克子は、浦島太郎のお墓のあるという寺を訪れた。しかし、墓というのは特になくて、そこはかつて浦島太郎をまつったというお寺であることがわかった。慶雲寺という。

克子は、手あたりしだいに町の人たちに、浦島太郎について聞いてまわった。

浦島太郎は、もともと丹後の国の出身であると、町の人々は語った。竜宮城から帰った浦島は、すでに父も母も死んでいることを知った。あまりのことに茫然とした浦島は、ある夜、夢をみたという。その夢の中で、観音様があらわれて告げた。

「あなたが行方不明になって以来、老いたお父さんは嘆き悲しまれた。そして、そのお父さんのお墓は、武蔵国霞ケ浦にある」

その武蔵国霞ケ浦が、ちょうどこの横浜にあたったという。さっそくこの地を訪れた浦島は、ここで父の菩提をとむらって一生を終わった。

浦島太郎が、抱きついて泣いたといわれる「涙石」もこの町にあるし、浦島が足を洗った「足洗い井戸」もある。そして、亀の背にのった観音像が、いま、この寺の寺宝になっているといわれる。

それは、現実と伝説が、まざりあった、奇妙な町であった。しかし、それはまた、疑いもなく近代都市横浜の一画に、厳然と存在する事実なのである。

克子は、浦島寺の住職に聞いた。

「あの、十日ほど前のことですけど」と、克子は思いきって拓也の写真をとりだし、住職に見せた。「こういう人を、ここでお見かけになりませんでしたでしょうか？」

住職は、写真を受けとってじっとみつめていたが、ふと思いだしたように「ああ、この人なら来ましたよ」と、あっさり言った。

「ホントですか」と、思わず声がはずんだ。

「話しかけても知らん顔して、この塚の前に坐り、じっと眼をとじてましたな」と、住職は遠くをみる眼で言った。「何か思いつめたように、一心こめてお祈りしとったようだな。変わったお人じゃった」

「お祈りを……それで、その人は何も言いませんでしたか？」

「そうそう帰りしなに、富戸の竜神様へ行くと言うとりましたな」

「富戸といいますと、あの……」

「伊豆ですよ。伊東温泉の先に、富戸という村がありましてな。そこに竜神をまつった祠があって、土地の人は《竜神様》といってるようですがね」

親切な住職に厚く礼をのべると、克子はきびすを返して歩きだした。口もとがほころぶような思いで、足どりも軽かった。が、束の間、克子はふと妙な気配を感じてふり向いた。浦島塚の陰から、一人の中年男がじいっと克子を見つめていた。

一瞬、克子はそれが、先日、刑事に化けた男ではないかと思ったが、そうではなかった。男は、克子の強いまなざしを避けるように眼をそらせてしまい、背を向けてぎごちなく歩み去った。奇妙な男であった。

　東神奈川から克子がアパートに帰ったのは、もう薄暮の時分だった。と、アパートの前にトラックが横づけされていて、どんどん家具が積みこまれていた。隣室の蛇騒動も奇妙な異変のうちとみれば、飯野澄子と夫の二人もまさしく犠牲者だった。不気味な蛇の出没にたまりかね、とうとう引っ越すことにしたのだというのである。
　隣りが空き室となった、その夜の気味わるさといったらなかった。ゴオーッとベランダのガラス戸をゆさぶる風の音にも、ゾクゾク寒気がするほどイヤな晩だった。妄想をふり払おうと、克子は肩をすくめながら、思いきってベランダの戸を開け、外を覗いてみた。
が、そのとたん、克子はハッと息をのんだ。隣室のベランダに、蛇が這っている。夜目にも鮮やかな白い蛇は部屋から出てきたように尻尾を向け、ゆっくり這ってベランダから下に消えた。住人が居なくなった部屋には、もう用はないといった風情だった。克子はピシャンと戸を締めると、しっかりカギをかけた。
　気をとり直すように、東神奈川からの帰り道に買って来た「浦島太郎」の絵本を手にしたとき、玄関のブザーが鳴った。いまごろ、いったい誰だろう？　いぶかしく思いながらドアを開けた克子は一瞬、なぜかギョッとなった。外の暗がりの中に、白髪の老婆が深々と頭をさげて立っていた。
老婆はインギン丁重に顔をあげた。
「たった今、お隣りに引っ越してまいりました者です。尾形トメと申します」
「まあ」と、克子は安息ともつかない複雑な気持ちで言った。「いまさっき、お隣りさんが引っ越されたばかりでしたが、もう」
「はい、アパートを探しておりましたら、空いたお部屋があると聞きまして、早速……どうぞ、よろしくお願いします」

「こちらこそよろしくお願いします」
挨拶が終わって、克子が顔をあげたとき、尾形トメの視線は克子の手にした「浦島太郎」の絵本にすいつけられていた。そして、その口もとがかすかに歪んだ。と思う間に、老婆はもうくるりと背中をみせていた。

静岡県伊東市富戸町は、伊豆急で伊東温泉をすぎ、ゴルフで有名な川奈の次にあたる。その日は三島神社の祭礼で、たいへんな賑わいだった。神社の境内には、鹿島踊りの見物人が多勢つめかけ、いまや白い衣裳の鹿島士たちが踊り狂って興奮のるつぼと化していた。その人ごみの中には、失踪した拓也を探し求めて《竜神様》にやってきた、克子と律子の姿も交っていた。
が、克子は人波に押されて、少しずつ律子からはぐれていた。「律子ォ」と克子が呼び、律子も手をあげて応えるが、すごい人ごみで思うにまかせない。すると、そのとき、克子はグイと手を何者かにつかまれた。思わずふりかえって、克子はアッと驚いた。それはまぎれもなく、横浜の浦島寺で見かけた男にちがいなかった。この男が、いったいどうして、この伊豆の村にまで来ているのだろうか？
「来てくださいッ」と、男がその手を強く引いて、克子をはがいじめにした。「もう逃がしやしない、来てくれッ」
「律子、助けてェ」と、克子は恐怖にひきつりながら、必死でもがいた。「何すんのよ、乱暴しないでよッ」
境内の興奮が昂まって、人波はドドッとゆれた。それに押されて、克子と男もよろめいた。そこへ「克子ォ、克子ォ」と、律子が人びとをかきわけ、近づいてきた。克子も、一瞬ひるんだ男の手

をふり払うと、泳ぐように律子のそばへ逃れた。
「どうしたのよ、克子」
「いま、変な男に腕をつかまえられて」
しかし、そこにはもう男の姿はなく、人、人、人の波となっていた。と、ドッと笛や太鼓のしゃぎり（お囃子）が始まり、鹿島踊りにかわって御輿が練りだしてきた。威勢のいい、はげしい御輿であった。
御輿は町中を練り歩きながら、やがて海岸へとくだっていった。竜神様へ奉納されるためである。富戸海岸には岩壁がそそり立ち、白波が打ち寄せていた。その岩頭の松林の中に立つ竜神様の小さな祠の前に、盛んな御輿がかつぎこまれた。
その御輿をみながら、克子は、あの横浜で味わったと同じ興奮を感じていた。
何と、その御輿にある飾りの彫り物は、亀にのった浦島太郎の図ではないか。
そして、いま、その御輿がかつぎこまれていった小さな祠は、土地の人たちは「竜宮神社」と拝んでいるという。そういえば、そこにはためいている祭礼ののぼりには、はっきりと「竜宮神社」と書かれてあった。
土地の人たちは、鹿島踊りの行なわれた三島神社は、出雲系の神様であると語った。
出雲系の神とは何だろうか。あの新婚旅行で有名な出雲大社の系統だというのだろうか。
そういえば――と克子は思う。私と拓也さんとは、新婚旅行らしい旅行はしていなかった。そしていま、拓也は、克子にはだまって横浜や、この伊豆の竜宮神社をたずね歩いていたらしい。そのことも、拓也を信じ切っていた克子にはおどろきであったが、それよりも、次々と目の前にあらわれる「浦島太郎」の幻影に克子は圧倒されていた。

文福茶釜の茂林寺は、館林と千葉にあって本家争いをしているとか、かつて新幹線が岡山まで通ったとき、桃太郎の「きび団子」は、実は「吉備団子」といって岡山が産地であるといわれたことなどを、ほほえましく聞いていたものだったが、それにしても、竜宮城へ行った浦島太郎の伝説が、これほど現実的に存在しているのだとは、夢にも思わなかった。

ほんとうに、夫はひょっとしたら、浦島太郎のように、竜宮城へ行ったのではないか。あの日、出がけにいった「竜宮城へ行く」という言葉は、夫の真実のことばだったのではないか。

その証拠に、いま目の前に「竜宮神社」がある――。

克子は、じいっとその小さな祠をみつめていた。うすぐらい神殿の奥に「白竜大社」という額がかかっている。律子が、それをみて、

「白竜っていうと、白い蛇ってことだわね」と、ひとりごちた。

「蛇……」

克子は、アパートの隣室が、突如、蛇にとりつかれて、引っ越していったことを思いだした。その眼に、澄子たちの引っ越し姿や、夜になってベランダから消えていった白蛇の姿がうかんだ。あのアパートにあらわれた蛇と、この白竜神社とは、何かつながりがあるのだろうか？

「ホラ、昔から白蛇は、神様のおつかいだって言うじゃない」

のんびりした律子の声を、克子は逆に、ふるえるような思いで聞いていた。それから、まるで何かをさがし求め、匂いをかごうとするかのように、克子は、松の木の間を縫って突端の岩場へと歩いて行った。

「どうしたの？　克子……」

「誰かが、何かの理由で、あの人をどこかに連れてったんだわ」と、克子は確信をこめて言った。

「そして、なぜか、浦島太郎の伝説と関係がありそうなのよ」
「じゃ、いったいどういうことなのかしら。拓也さんを連れていった相手は、少なくとも何人かの人間が動いているとみていいわね。あのニセ警官だけだって二人の男がいたわ」
「そのほかにも、へんなのがまだ……」と言いかけた克子の手を、律子がいきなり強く引き、竜宮神社のほうをみつめながらアゴをしゃくった。その視線を追って、克子は「あっ」と立ちすくんだ。小さな鳥居の前に、またあの奇妙な男が立ってこちらをみていた。
「律子、あの男よ。さっき私の腕をつかまえたのは！」
男はやおら歩きだし、もう獲物はこっちのものだと言わんばかりに、いやに落ち着きはらって、ゆっくり近づいてきた。
「せっかく、敵さんのほうからでてきてくれたんだから、話をつけようじゃん」
と、律子は強気である。ところが、男は急にハッとしたように足をとめた。松林の間から白髪の老婆が覗いているのをみて、克子も思わずギョッとなった。木陰から姿をあらわしたのは、まぎれもなく蛇騒動のあった隣室に移ってきた老婆である。
「尾形トメ……」
なぜ？　あのお婆さんが、なぜ、こんなところにいるのかしら？
男は、尾形トメをじいっと見つめていたが、次の瞬間、足早やに去っていった。トメは、にっこり笑って見送ると、克子に近づいて、いんぎんな物腰でお辞儀をした。克子は、射すくめられたように身動きもできずにいた。
「ここに来てらしたんですか」と、トメが空とぼけて言った。「そうおっしゃっていただけば、ご一緒いたしましたのに」

「……」
「お祭りが大好きでしてね。変わったお祭りがあるなどと聞きますと、汽車賃を使っても来てみたくなるんですよ」
「……」
「それでは、お先に」
言って尾形トメは、松林の間を、ひょいひょいと歩み去っていった。
克子は町のほうからひびいてくるにぎやかなお囃子を、一瞬、遠い思いで聞いていた。隣室の老婆に対する疑惑はつのるいっぽうだった。……ひょっとすると、私は監視されているのでは？　前の人を蛇でおどして追いだして……まさか！
その夜――
克子は、アパートまで律子の車で送ってもらった。今夜は一緒に泊ってあげようかという律子をふり切って二階に駈けあがり、ドアの鍵をあけていると、隣室の尾形トメがひょっこり顔をだした。克子は息をこらした。
「今日は思いがけないところでお会いして」と、いつものいんぎんな口調で尾形トメが言った。
「私もびっくりいたしました」
「ほんとに……どうも失礼いたしました」
ドアが開いたので、克子が「おやすみなさい」と言って入ろうとすると、「神崎さん」と尾形トメに呼びとめられた。
「こんなことを申しちゃなんですが、ご主人が行方不明になられたとか」
「……」

「さぞ、ご心配でしょうね」
「……………」
「でもね、ふいにいなくなった人は、常世の国へ行ったとか申しますからね」
「トコヨノクニ……？」と、思わず克子は聞き返した。
「私どもの生まれた村では、そう言われておりました。常世の国というのは、まるで極楽浄土のようなところで、神かくしにあった人は、そこで楽しく暮らしているそうですよ」
「……………」
「ですから、無理に捜したりしないほうが、その人のためだと言われていますよ」
「お婆さん、あなたはいったい……」
克子はついカッとなって言いかけたが、尾形トメは聞こえなかったふうに、「長話をいたしました。それでは、おやすみなさいまし」と、いんぎんに自室に引っ込んだ。克子は、なすすべもなく見送るほかなかった。
常世の国。はじめて聞く言葉であった。神かくしのように、ふいに姿を消した者は、その常世の国でしあわせに暮らしているから、無理に捜したりしないほうがいいという。尾形トメのその言葉には、年寄りらしい同情というよりも、なぜか警告のようなひびきが感じられ、克子をいらだたせた。すると、この老婆もやはり、夫を連れ去った者たちと、何か関係があるのだろうか？
その夜更け、隣室からひびいてくる妙な物音に、克子はふと眼をさました。コオン、コオンという金属音が、断続的にひびいている。それは、いったい何と言ったらいいのだろうか、お寺の鐘にしてはささやかすぎるし、仏前の鉦にしてはまた、妙に不思議な重さがあった。かと言って、教会の鐘の音ともちがっていた。しかし、どこか澄んだひびきをもって、しかも聞く者の胸をかきむし

るような哀切な余韻をただよわせながら、その金属音はつづいていた。何だろう?
　克子は、そっと起きあがり、隣室の壁に耳を押しつけた。そのとたん、思わずドキリとして克子は壁から耳を離し、また、こわごわ耳を押しつけた。コオン、コオンという妙な金属音にまじって、老婆の読経とも、呪文ともつかない不気味なつぶやきが、低く聞こえていた。
　克子は、足をガクガク震わせながら、ベッドに戻ろうとしたとき、あわてふためいてテーブルにつまずいた。ちょうどその上に置いてあった拓也の手帖が床に落ちて、パタリと開いた。克子は、拾いあげようとして、ふと「丹後」とのみ記されてあとは空白になっている片面に眼をとめ、首をかしげた。その日付は、夫が出張だと言って家をあけた日だったことを思いだしたからである。パラパラめくってみると、ほかはびっしりと几帳面に行動が記録されていたが、空白のページがもうひとつあり、そこには「讃岐」とのみ記されていた。

手帖の空白に疑問を抱いた克子は、翌朝、さっそく極東製紙の坂本に問いあわせてみた。案の定、拓也が出張といって家をあけた先月の八日から二日間と、十五日からの三日間は有給休暇の届けが出ている、との坂本の返事だった。

でも夫は、丹後のどこへ行ったのかしら?

旅行案内を買って、丹後半島のあたりを調べてみた克子は、「あったわ!」と飛びあがるような思いで叫んだ。半島の東、若狭湾に面した伊根という町に、やはり浦島神社があったのである。しかも、すぐ近くには亀島というところもある。一瞬、克子の眼に「竜宮城へ行く」と言った夫の幻がよぎった。

大急ぎで旅仕度を整えると、克子は、東京駅から新幹線で京都に向かった。京都から山陰線で綾部に向かい、さらに宮津線に乗りかえて、丹後半島の入口である天ノ橋立へと向かった。そこから先は連絡船である。船は、天ノ橋立の美しい夕景を眺めながら、行き過ぎた。

その夜は、伊根の観光ホテルに泊まり、翌朝さっそく、克子は宇良神社を訪ねた。そこには、浦島伝説にちなむ玉手箱とか、その玉とか、縁起絵巻などが陳列されており、宮司がでてきて、この

神社の縁起について語ってくれた。宮司の話によると、玉手箱についている亀甲の紋章は、出雲大社のそれと同じであり、浦島太郎は出雲族だったという。

浦島太郎の伝説が、文献にあらわれたのは古く、『万葉集』巻九には、高橋虫麻呂作と伝えられる「泳水江浦嶋子一首幷短歌」があり、『日本書紀』『丹後風上記』にもその名が見える。『丹後風土記』によれば、浦島は、水の江の浦島子といわれ、丹後国与謝郡日置の黒同川村の出身となっている。水江は、現在の竹野郡網野町にあたり、その網野町にも、浦島神社がある。

もっとも、名前が浦島太郎となり、亀の恩返しで竜宮城へ行くという形になったのは、中世になってからであるらしいが、しかし、丹後国は、古くから、浦島の誕生の地であったのだ。

そういえば、横浜の浦島伝説でも、浦島太郎は丹後の国から、横浜へ来たのだ、といわれていたことを克子は思い出した。

しかし、それにしても、宮司の語った、浦島太郎は出雲族であるという言葉は、何を意味するのか。たしか、伊豆の富戸でも、三島神宮は出雲系の神様であるといわれていたのではないか。

いったい「出雲系」とはどういうことを意味するのか。

なぜ、人々は「出雲系」にこだわるのか。そしてそれは、いなくなった夫とどんな関係があるというのだろうか。

拓也は、やはりこの浦島神社にも姿をあらわしていた。克子が夫の写真をとり出してみせると、宮司はよく記憶していた。ここでも夫は、まる一日、この浦島神社の社殿のなかで、じっと祈るように瞑黙しながら坐りつづけていたのである。宮司の話から、夫がそのあと、常世の浜に向かったこともわかった。

常世の浜がここにもあった！　それは、あの奇妙な隣人、尾形トメの言った常世の国と何か関係

があるのかしら？

が、常世の浜は、岩山にはさまれた、小さな入江にすぎなかった。常世の国は、言ってみれば、大昔の人たちが夢みたユートピアにちがいない。一年中、春ばかりで、果物はたわわに実り、不老不死を約束された人びとが歌ったり踊ったりして楽しく暮らしている国……その常世の国へこの浜から船出したというような言い伝えがあったにちがいない。しかし、夫がなぜ、こんなところへわざわざきたのだろうか？　克子は、まるでわけがわからなかった。

黝んだ日本海の荒波をみつめていた克子は、ふと人の気配を感じてふり向き、「あっ」と声をあげた。なぜか克子をつけ回している、あの男が、すぐ背後に立っていたのである。逃げようにも、前は荒い海である。

「お待ちしていました。下条鋭一です」と、その言葉づかいは意外に丁重だったが、きびしい顔つきで男は言った。「浦島太郎が訪れた竜宮城というのは、実は常世の国だった。そうですね。そして、浦島伝説と常世の国とは、切っても切れない関係がある、隠したってダメだ！」

すさまじい気迫に押されて、思わず、後ずさりすると、下条鋭一は反射的に襲いかかって克子の腕をぎゅうとつかんだ。

「妻をかえしてほしい、佐知子をかえしてくださいッ！」

と、下条鋭一が悲痛な声で絶叫したのである。えッ?!　と一瞬、こわばった克子の顔がけげんな表情に変わった。

「佐知子さん？」

「佐知子を、いったいどこへやったんだッ」

「知りません、そんな人……」

「嘘だ、君は妻を連れていった連中と、何か関係があるはずだ」
　夫をかえしてほしいのは、こちらである。そう思ったとき、克子はふと、この男の妻もひょっとしたら、自分の夫と同じ運命におちいったのかもしれないと気づいた。で、克子が、早口で自分も夫を捜していることを打ちあけると、下条鋭一は驚いて手を放した。
「それじゃ、あなたのご主人も、突然いなくなったとおっしゃるんですか」
　下条鋭一の妻の佐知子は、すでに半年も前に消えていた。彼は、会社づとめもやめ、わずかの退職金と失業保険で、妻の足どりを必死で追いつづけた。そしてやっと、妻がいなくなる前に、あちこちの浦島神社を訪ねている事実をつかんだというのである。
「あなたは、わずか一週間でよく、この浦島神社のことがわかりましたね」と、改めて感心した声で下条鋭一が言った。「その浦島神社で、必ずあなたに会いました。ですから、つい、あなたが妻を誘拐した連中と関係があるのだろうと……」
「誘拐されたとおっしゃるんですか」
「そうにきまっています」と、下条鋭一は確信をこめて言った。「この浦島神社とどう関係があるのかわかりませんが、奇妙な連中がうごめいていることは確かです。その証拠に、妻がいなくなった直後、偽警察まで使って、自殺のように見せかけたんですから」
　それから、アパートの隣室を蛇でおどし、かわりに、気妙な監視人をおいたことも同じだった。
　やはり！　と克子は、気味の悪い隣室の老婆、尾形トメのことを思いだして、そのとたん、ゾクゾクッと鳥肌がたった。
「神崎さん」と、下条鋭一がどこか淋しげな翳をたたえながら言った。「もしよかったら、これからいっしょに行動しませんか。どうやら、あなたと私の目的は同じようですから」

「残念ですけど、私、まだそこまであなたを信じていいかどうか、わかりませんので」
「神崎さん!」
「失礼します」と、克子は歩きだしたが、すぐまたふりかえって言った。「どうか、もう後を追ったりしないでください。そうすれば、少しだけ信じられると思います」
それからはもう、ふりかえらずに足早やに歩きながら、克子の心はすっかり乱れていた。ただ下条鋭一が、二度と後をつけて来なかったことが、小さな救いとなった。
克子がアパートに帰ったのは、翌日の昼ちかくだったが、留守中、極東製紙の坂本が訪ねてきたらしく、「至急ご連絡を乞う」と、走り書きした名刺が投げ込まれていた。会社に電話をすると、係長のことで新事実がわかったから、すぐ来てくれという。克子は、着替えもそのままに部屋をとびだした。
指定された丸の内ビルの喫茶店に駈け込むと、坂本は総務課の須山という青年と一緒に克子を待っていた。
「あれから、会社でいろいろ係長のことを聞いてまわったんですよ」と、坂本が勢い込んで言った。「そしたら、この須山君が、妙なところで係長を見たって言うもんですから」
「妙なところと言いますと……」
「蒸発する三日ばかり前らしいんですがね。須山君が友だちの家を訪ねたとき」と、坂本はちょっと具合わるそうに声を落として言った。「おい須山、おまえから説明しろよ」
「けど、こんなこと言っていいかどうか」
「話してください。驚きません、私」
「それじゃ申しあげますけど、実は」と、須山は神妙な顔つきで言った。「学生時代の友だちが錦

糸町のほうにいましてね。そいつのアパートを訪ねたとき、偶然、別の部屋から神崎係長が出てこられたのを、お見かけしたんですよ」
「錦糸町のアパートで……？」
「奥さん驚かないでくださいよ」と、坂本が代わって言った。「そのとき、係長は、若い女性と一緒だったらしいんです」
増田千恵子というその女が、どこかクラブの踊り子らしいと聞いて、克子は、さすがに動揺をかくせなかった。須山から、そのアパートの所番地を聞いたものの、とても乗り込む勇気はなかった。こういうことは、律子の力を借りるしかないと、その足で、克子は原宿にある彫金の店「ブランコ」に向かった。
律子に相談すると、活発な行動派の彼女は否も応もなかった。
「ま、まかしといて！」と、はずんだ声で律子が言った。「でも、浦島神社だの、常世の国だの、蛇だのって、さんざん驚かしてくれたあげくが、若い踊り子の出現か。俗っぽいところへ落ちついたものね」
「律子ッ」
「ゴメンよ。でもさ、人間が相手のほうが、ずっと、やりやすいってもんじゃないさ」
それから三十分後、律子の運転する車は、錦糸町駅から一キロほど南へ下った、ある機械工場の古ぼけたアパートの前でとまった。ところが、管理人に、増田千恵子の部屋を聞くと、女は数日前にそこを引っ越してしまっていた。夜中に突如、友だちが車で荷物をとりに来て、いったいどこへ引っ越したのかもわからないという。
が、ここで管理人の話から、克子は、ちょっとした手がかりをつかんだ。増田千恵子の田舎が、

信州の木曽だと聞いたとき、克子はオヤと思った。夫の拓也も、子どものころ、信州の木曽にいたことがあるという話を、聞いたことがある。

律子と別れてから、克子は念のために区役所へ寄って夫の戸籍を洗ってみた。すると、拓也の本籍は、昭和三十八年に東京に移されたものであることがわかった。その前の本籍は案の定、長野県木曽郡粕屋村となっていた。

一つの事実は、また一つの謎を呼んだ。東京の人だとばかり思っていた夫は、十三年前に本籍を木曽の山村から移しており、夫が蒸発する前に訪ねていったという踊り子も、同じ木曽である。果たして、信州の木曽に何があるのか。一度、夫の生まれ故郷をたずねてみようと克子は思った。

区役所からでてきた克子は、大通りに沿って歩きだしたとき、偶然、この明かるい通りにそぐわない人影を見つけて、ハッと足をとめた。車道の向こうの歩道をせかせかと急ぎ足で遠ざかっていくのは、あの、奇妙な隣人の尾形トメだった。

それは、不思議な眺めで、気のせいか、老婆は日の当たる場所をさけ、なるべく、日かげを日かげをとえらんでいるように思えた。克子は、急いで歩道橋をかけのぼると、尾形トメの後をつけた。二人が歩くすぐ横は崖になっていて、その下を国電が走りすぎていった。

尾形トメは坂道をくだって、古いビル街にでた。その一滞は、戦前からのものと思われる古いビルが建ち並び、中には蔦のからんだビルもある。ほとんど人通りがないその道を、トメは、日かげを、日かげをと拾いながら歩いていった。そのあとを、克子は、物かげから物かげへと移りながら、こっそりつけた。

下条鋭一が言っていたように、もしあの尾形トメが、自分を監視するために、夫を連れ去った者たちから差し向けられているのだとすれば、あるいは、そこから夫の手がかりが得られるかもしれ

ない！

突然、尾形トメが一軒の古いビルの中へと入っていった。ちょっと間をおいて、克子もそっと忍び込んだ。エレベーターはなく、石の階段がのびており、トメの足音が二階に向かっていた。勇気をおして、克子もあがっていった。

二階の廊下には、ずらりといろいろな事務所が並んでいた。と、廊下を折れまがったあたりで、バタンとドアの閉まる音がした。足音を忍ばせながら角をまがると、一室だけドアに何も書いてない部屋がある。克子は、そっと近づいて、ドアに耳をつけてみたが、何の音も聞こえなかった。

そっとノブを握ってみると、まわる。克子は、ドキドキしながら、思いきってドアを細めにひらいて、中を覗き込んだ。そのとたん、さあーと強い光線が克子の眼を射た。あっと眼が眩んだ瞬間、克子はよろけて前につんのめり、後でバタンとドアが閉まった。克子は、あわてて逃げようとしたが、足がひきつって動けなかった。

と、同時に、尾形トメの部屋から夜になると聞こえてきた、あの読経とも呪文ともつかない声がわきあがった。ガクガクしながらも克子がふりかえると、何と、部屋全体に赤いじゅうたんが敷きつめられ、その中央に、数名の老婆が坐っていて、あの不思議な呪文をとなえながら、大きな数珠を、手から手へとまわしているのである。

老婆たちの向こうには、白木の祭壇がしつらえられ、その中央には奇妙な形の金属器が飾ってある。が、細長い円筒形のそれは、つり鐘でも教会の鐘でもない。克子の初めてみるものだったが、それこそ、楽器とも祭器ともその用途が謎とされている古代の「銅鐸」にほかならない。

銅鐸の前には、三方のお供物と白い壺に入れられた神酒が二本、左右の柱には、勾玉と錦の袋に入れた剱が飾られている。銅鐸の上部にあたるところには、銅鏡が飾ってある。そして、祭壇の前

にひざまずいているのは、尾形トメである。
銅鐸は、天井から吊り下げられていて、トメがそれをゆすると、中の舌とふれあって、コオン、コオンという冴えたひびきを奏ではじめた。克子のからだは、まるで催眠術でもかけられたように、ぐらっ、ぐらっと大きくゆれた。
と、トメが静かに立ちあがってふり向き、二人の眼があった。そのとたん、銅鏡がキラリと光って、克子が、思わずよろめくその眼を、また、キラリ、キラリ、鏡の光が射た。そして、トメがいつの間にか、克子のすぐ眼の前にきていた。
トメは、両手を上にかざして、じいっと克子の眼をみた。すると、克子のからだは、妙にだるくなり、腰がぬけたように、へなへなとそこにしゃがみこんだ。老婆たちの呪文の合唱が、いちだんと高くなった。
祭壇の前に戻ったトメはちょっとまた、ひざまずいてから、一方の白木の扉をうやうやしく開いた。と、そこから、静かにあらわれたのは、夫の拓也だった。ズボンにワイシャッという、何の変哲もない姿である。
拓也が、すぐ克子の存在に気づいて、思わず駈け寄ろうとすると、トメはさっと両手をひろげて立ちはだかり、首を左右にふった。拓也は、トメの言いなりになって、そこからじいっと克子をみつめていた。そんな夫の姿が克子には幻のように思われた。
「克子ッ」
と、また近づこうとする拓也を、トメがおしとどめて、首をふった。克子は、幻の夫を手さぐりするように求めた。
「あなた……あなたなんですね」

そんな克子をみつめる拓也の眼に、一瞬、いとおしさがよぎった。

「よく聞いてほしい、克子ッ」と、拓也が冷静な声で言った。「克子、俺のことはもう忘れてほしい。わずかだが、貯金も株券も、すべて君の名儀にして送ったはずだ。離婚届も君がサインすればいいだけになっている。どうか、君なりの新しい人生をみつけてほしいのだ」

克子は、手さぐりで激しく夫を求めていた。

「もう会えない。今日かぎりで、俺を捜すこともやめてほしい。俺の、最後の頼みだッ」

「あなたッ」

拓也は、じいっと克子をみつめていたが、トメにうながされて、静かに去ろうとした。

「あなたッ」と、克子は絶叫した。「私たちの赤ちゃんは、どうなるんですか!」

拓也は、扉の前で、はっとふりかえった。トメも驚き、老婆たちも手をとめた。

「子どもって……俺たちのか……」

「赤ちゃんが……あなたと私の赤ちゃんができてるんです!」

幻の夫に向かって、克子は手さぐりで求めながら、けんめいに呼びかけた。拓也も驚いて、確かに反応はあったが……克子の記憶の糸は、そこでプツンととぎれていた。夢と現実の間をさまよい、われにかえったとき、克子は小公園のベンチによりかかっていた。子どもたちの騒がしい声がひびき、それから、夕方近い小公園で元気に遊ぶ姿が目に入ってきた。

克子は、はっと立ちあがると、小公園の外に出て、ちょうど通りかかったタクシーにとび乗り、原宿へと走らせた。まるで、狐つきにあわされたような、なんともわけのわからない気持ちであった。彫金の店「ブランコ」の前で車をとめると、克子は、転がるような勢いで「律子ッ」と、店の中に入っていった。

「会ったのよッ、あのひとと！」
「なんですって」と、律子もびっくりして立ちあがった。「拓也さんに会った？」
「それが」と、克子はちょっと声がつまった。「夢なのか現実なのか、どうもへんなのよ」
「落ち着いて、克子。妊娠の初期ってのは、精神的にも不安定で、人によっては、幻覚をみたりするって言うじゃないの」
「そうじゃないったら！　尾形トメを尾行して、そのビルへ入ったのは確かなのよ」
行動派の律子は話が早い。そんなバカな、と言いながらも仕事をさっさと片づけると、克子をせきたて、ともかく、そのへんてこりんな儀式の現場へ行ってみようと車を飛ばした。すでに、夜のとばりはおりていたが、めざす古いビルはすぐわかった。
律子は、そのビルの前に、車をでんと横づけにした。二階の事務所は、あかあかと明かりが灯っていたが、ビルの横にまわってみると、そのあたりと思しき部屋だけが、なぜかまっ暗だった。
「おかしいですね、あの部屋は」と、管理人が鍵束をガチャつかせながら言った。「先月からずっと空部屋なんですがね」
「そんなことありません。確かに、赤いじゅうたんが敷きつめられてあって、白木の祭壇もあるはずなんです」
「しようがありませんな。それじゃ、とにかくご自分の眼で確かめてくださいよ」
言って管理人は、二階の部屋に二人を案内し、鍵穴にキイをさしこんでドアを開けた。まっ先に覗き込んだ克子は、思わず息をのんだ。そこは、管理人が言ったとおりの、ガランとしたほこりっぽい空部屋にすぎなかったのである。
「言ったとおりでしょう」

「ほんとにすみません、ご無理を言いまして」と、律子が言った。「どう克子、これで納得いった？」

克子は、ぼんやりとその部屋をみつづけていた。やはり、あれは幻だったのかしら？　夫に出会ったように思ったのは、白日夢だったのかしら？　しかし、克子は、赤ちゃんのことを知らせたときにみせた哀しげな夫の表情だけは、現実のものだったと信じたかった。

律子は、克子をアパートの前まで車で送って行った。と、克子は、いきなりドアをあけて車をおりると、すごい勢いで階段を駈けあがっていった。「克子ッ」と、律子もすぐその後を追った。克子は、尾形トメの部屋のドアをはげしくノックしていた。

「尾形さんッ、出てきてください！　尾形さん、お話があるんです、尾形さんッ！」

「克子……」

心配そうに声をかけた律子の胸に、克子は崩れ込んだ。トメの部屋は深閑としていた。

その夜も、三日月であった。夫が消えた夜よりも少し丸みをおびていたが、やはりするどくとがった三日月が、なぜか真赤に輝いてみえた。

寝覚の床

新宿駅のホームはひどい人ごみだった。東京行きの特別快速がすべり込み、電車から吐き出された人、乗り込む人びとで、ひときわごった返した。同じホームの反対側には、ガラ空きの列車がのんびり止まっていて、その窓際の席のひとつに、克子の旅姿があった。

やがて、発車のベルがけたたましく鳴りひびき、列車はガクンと動きだした。と、ホームの柱のかげでは、尾形トメが、じいっと出ていく列車を、克子を、見送っていた。列車はしだいに早くなって、遠ざかっていった。

克子の心は、早くも木曽へと飛んでいた。思えば、ふいに夫が姿を消してからすでに十日の日がすぎていたが、その十日間は、身も心も疲れ果てるような、長い長い旅の連続だった。列車はいままた、そんな多恨の克子をのせて、谷あいを、山の中腹を、渓谷の上をひたすらに走りつづけていた。

夫の拓也には、何か出生の秘密があるらしい！　克子は、本能的にそれを嗅ぎつけていた。おなかの中の子どものために、ぜがひでも夫を奪い返さねば！　克子は、ともすればくじけそうな気持ちを、自らはげまし、ふるいたたせた。

列車は諏訪湖をまわって塩尻を通り、さらに木曽路へとくだっていった。そして、午後の二時すぎに、克子は上松駅で下車した。それから駅前の観光案内所で紹介してもらい、ひとまず、旅館でくつろぐことにした。

ところが、思いがけなく、宿の女中の話から、ここにもまた浦島伝説があることを知らされた。もともと夫は、浦島伝説をもつ近くの村で生まれ育ったのだ。が、それにしてもなぜ、こんな山深いところに、浦島太郎の伝説が残されているのだろうか？　克子は、胸のふるえるのを感じた。

時間がまだ早かったので、克子はその浦島太郎がいたと言われる「寝覚めの床」まで、ぶらっと散歩にでてみた。

巨岩と奇岩の多い景勝の地で、ハイヒールをはいた克子には難所だった。岩に坐って、ぼんやり釣り糸をたれている数人の男たちが、まるで彫像のようにみえた。

やっとの思いで、克子は、岩の突端の小さな祠の前に立った。夕やけが白い岩々をまっ赤に染め、その向こうを、列車が轟音をたてて通りすぎていった。そこら一帯は、寝覚山臨川寺の境内で、古ぼけた釣り竿が奉納されてあった。これも、浦島太郎にちなむものだということだった。

土地の伝説によれば、ある日、この寝覚めの床の岩の上から、一人の男がつり糸をたれていた。誰かと聞くと、「私は丹後の国水の江のものだが」と語り、この寝覚めの床の岩の下にある竜宮城で、乙姫とたのしい日々を過したと話した。

寝覚めの床は、花崗岩に、木曽川の水が、浸蝕し、深い淵となり、切りたった白い岩と、折りかさなる巨岩、奇岩の中に、エメラルドグリーンの水が、のぞきこむ者を吸いとるような妖しい光をたたえている。

浦島太郎は、竜宮城から帰って、ここで目がさめたのだという。だから、本当は「寝覚めの床」

ではなくて、「目覚めの床」が正しいのだと土地の人は言った。
それにしても、と克子は思う。横浜にしろ、伊豆にしろ、丹後の伊根にしろ、すべて海辺の町であった。海辺の町に浦島伝説のあるのはうなずける。だが、どうしてこんな山の中に……疑問はいつまでもつきなかった。
その夜、興奮をおさえきれずに、克子は東京へ長距離電話をかけた。
「……信じてよ律子、私もはじめは、まさかこんな山奥に浦島伝説があるなんて信じなかったわ。けど、ホントなのよ……ね、律子、やっぱり来てよかったわ。明日は、主人の生まれ故郷へ行ってみようと思ってるの。手がかりがつかめそうな気がしてきたわ」
そのとき、部屋の外の廊下には、ひっそりと男の影が立っていた。影は、部屋からもれてくる克子の声にじいっと耳をすましていた。監視の手がここまでのびていることなど、克子は気づくよしもなかった。

谷川に沿った曲がりくねった山の道を、バスがのろのろと登っていった。そのバスの中に、克子がゆられていた。バスは木々の間を走り抜けると、また、深い谷川をのぞむ崖の道にでた。すると間もなく、細い吊り橋がみえ、その向こうに小さな村落があった。
バスは吊り橋のたもとで停車し、克子は運転手に声をかけられて、あわてて下車した。ワイヤーロープで吊られたその細い吊り橋を渡ることに、克子はためらうものを感じた。吊り橋は、すでに風でいくらかゆれていた。
夫の生まれた村は、想像していたよりもはるかに山の中だった。こんな奥深いところからでてきた夫と、東京の片隅でひっそり生きてきた自分が結ばれたことに対して、克子は、人間の出会いの

不思議さと、運命の神のいたずらを思い、しばし心をうたれた。

思いきって、克子は吊り橋を渡りはじめた。たよりなげにゆらゆら揺れる橋は、一歩ごとに、はげしく揺れた。克子は二三歩すすんでは手すりつかまって立ちどまり、揺れの静まるのを待って、またそろそろ渡っていった。

小さな村落は、ひっそり閑と静まり、まるで無人の村のようだった。細い村の道を歩いてきた克子は、戸の開いた小さな農家の前に立つと、大きな声で「ごめんください、ごめんください」と連呼した。が、何も返事はなく、横手へまわろうとすると、物かげからいきなり、鶏がけたたましい鳴き声とともに羽搏いた。

克子は諦めてまた、村の道を歩きだした。道端に道祖神が祀られてある。丸い石に彫られた男女交歓のほほえましい図である。克子は、道祖神の前にちょっとひざまづいて、どうか夫を返してくださいと心をこめて合掌した。と、そのとき、近くの民家から、何かものの動くかすかな音が聞こえてきた。

克子は、その音に向かって足を早めた。キイッ、バタン、キイッ、バタンという音は、どうやら機を織る音とわかった。やはり開け放たれた戸口から、そっと中を覗くと、うす暗い家の中で、老婆が、機を織っていた。

「ごめんください」と声をかけて、克子は中に入った。老婆の織っているのは、木曽の麻衣織りである。尾形トメそっくりの白髪だったが、その顔は、トメとは似ても似つかない柔和な顔立ちだった。克子はほっとしながら近づいて、「ご精がでますね」と声をかけた。

「東京から来なさったのかな」

「はい、この辺に、粕屋村というところがあると聞いてまいりましたが……」

「なに、粕屋村を訪ねて来なすったか」と、老婆はハタリと機を織る手をとめて、克子をみつめた。「粕屋村は、もうないねッ。ええと、そうだね、もうひと昔以上も前になくなってな」

老婆の話によると、粕屋村というのは、ダムの建設のために、先祖代々の家も、田んぼも、墓も、みんな湖の底に消えてしまったという。克子は、がくぜんとしないわけにはいかなかった。

老婆の家を出ると、克子はすぐ湖に向かった。夕霧がわたっていく岸辺に立ち、克子は感傷にふけっていた。水の中から枯れた木がニョキニョキと突きでており、もとは、そこが陸であったことを物語っていた。

克子は、水際まで歩いていった。その水には、夫の残り香があるような気がし、夫のぬくもりが残っているようにも思われた。木曽の御岳山が、眼前にそびえ立っていた。克子は裸足になると、水の中に足首をひたした。夫を思いながら、祈るような気持ちであった。

そんな克子を、近くの草むらからじいっと様子をうかがっている男がいた。昨夜、旅館で電話を盗み聞きしていた男である。克子は、まったく気づかなかった。と、男はころあいよしとみるや、いきなり襲いかかった。

「早まるんじゃないッ」と、男は克子を後から抱きとめて言った。「死んだりしちゃ、いけません！」

「ちがいます。そんなんじゃありません！」

びっくりして、克子は叫んだ。しかし、男は抱きしめた手をゆるめようとはせずに、ズルズルと引っぱった。

「自殺じゃありません。すみません、もうけっこうですッ」と、克子は自分をなおも引っぱろうとする男に叫んだ。「放してください。ちがうんですッ、放してくださいッ」

克子の口と鼻が、抱きしめた男の手の白いハンカチでおおわれた。苦しくなって、克子は、うろっともがいた。が、男はいっぽうの手で克子を抱きしめ、いっぽうの手のハンカチを放そうとはしなかった。白いハンカチはエーテルのしみこんだもので、そのうち、克子はぐったりと男の腕の中に倒れてしまった。

克子にじいっと見入る男は、いつか、拓也の失踪を自殺に見せかけようとした。あの偽刑事の片割れであった。が、後から抱きしめられ、そのままエーテルをかがされた克子には、それを見破るすべもなかった。

それから後のことについて、克子には何の記憶もなかった。強いて言うならば、半覚醒状態のもうろうとかすんだ記憶が、ないわけではない。白くかすんだ世界の中で、ときおり、手術用の無影燈らしい強く光るものがあった。カチカチと、医療器具らしい金属のふれあうかすかな音も記憶のどこかに残っている。そして、うごめくものは白衣である。しかし、それら半覚醒状態の記憶は、遠い昔のことのようでもあり、意識の下に重く沈んで、めったなことには浮かびあがってきそうにもなかった……。

中央アルプス連山に、朝日がのぼり、白樺の林の中は、キラキラと朝露が光っていた。その草むらに、克子は死んだように横たわっていた。

木の葉から落ちた朝露の雫が、克子の顔にポタリとあたった。克子はふっと眼をさました。はっとして、あたりを見まわし、髪や洋服が朝露にぐっしょりぬれているのに気づいて、克子はからだを起こそうとした。

が、体内からおしよせてくる疼痛に、克子は思わず眉をしかめ、かるいうめきをあげた。とりわけ、下腹部がしめつけられるように痛かった。克子は、木につかまりながら、よろよろ、やっとの

思いで立ちあがった。
「痛いッ！」
たまらず、克子は悲鳴をあげた。下腹部をおさえ、うめきをこらえながら、そろそろと歩きだした。遠くからやってくるエンジンの音を耳にしたのは、そのときだった。克子は痛む下腹部をおさえながら、けんめいに足をひきずり、やっとの思いで林から山の道にころがり出た。
けたたましいエンジンの音をひびかせながら、耕耘機が、リヤカーをひいてのんびりと近づいてきた。
「助けてくださーい」と、草むらに伏せていた克子は、身をよじって手をあげ、きれぎれに言った。「おねがいします……流産……しそうなんですッ」
こうして克子は救出され、木曽福島の病院まで耕耘機で運ばれた。克子は、下腹部の疼痛を妊娠のためだと思っており、流産をなによりもおそれていたのである。ところが、病院に運ばれた彼女は、産婦人科の医師から、まったく思いがけない事態を知らされることになった。
診療室で治療を終え、カーテンのかげからでてきた克子は、医師に「ありがとうございました」と、心をこめて礼を言い、それから念のために「あの、赤ちゃんは大丈夫でしょうね」と、たずねた。下腹部の疼痛は嘘のようにうすらいでいた。
「何を言っとるんだね」と、医師があきれたような声で言った。「君はソウハの手術をしたばかりじゃないか」
「何ですって！」と、思わず克子は叫んだ。
「流産しそうだなんて、ソウハの手術をしたばかりだろう。妙なことを言うひとだね」
「知りませんッ」と、克子は甲高い声で叫んだ。「私、手術なんかしてません」

「しかし、明らかに人工妊娠中絶の手術をうけたあとだよ」
言葉を柔らげ、なだめるように医師が言った。
「先生ッ……私、知りません……何も知りませんッ。気がついたら、山に寝かされてたんです……そんな、中絶したなんて……赤ちゃんは……私の赤ちゃんは、いったい、どうなってしまったんですか！　先生ッ」
言って、克子はしゃにむに、医師のひざにむしゃぶりついていった。
消えた……。消えたのは、夫の拓也だけではなかった。拓也のふるさとも、消えていた。そして、いままた、克子の胎内に息づいていた、いたいけな、小さないのちまでもが消えてしまった。いや、消されてしまったのである。だれが？　いったい、何のために？
克子は、がっくり椅子に坐りこんだ。
そのとたん、克子の頭に、とつぜん衝撃的にひらめいた追憶があった。それは、あの古ビルの一室の、幻想なのか現実なのかわからない、奇妙な追憶である。手さぐりをして求める克子の前に、幻の夫、拓也が立っていた。克子は、夫をひきとめようと、夢中で声をかけた。
——赤ちゃんは、どうなるんですか？
——子ども？　俺たちの子どもが、できてるっていうのか！
——そうです。あなたと、私の、赤ちゃんです！
拓也は、驚いて、じいっと克子の顔をみつめた。尾形トメの手が、わなわなふるえていた。祭壇の扉から消え去ろうとする拓也に、克子は、なおも手をさしのべながら叫んだ。
——あなたッ……赤ちゃんが……私たちの赤ちゃんが！
幻想的な、克子のその追憶は、廊下から聞こえてくる医師の大声で中断された。

「何だって、小原医院に強盗が入ったァ?」
「はあ、昨夜おそく押し入って」と、刑事らしい男が答えた。「先生ご夫妻と、住み込みの看護婦さんを縛りあげましてね……ところが、妙なことに、何もとられてはいないんですよ……ただ、よく調べてみると、手術室が使われたらしい形跡がありまして」
「ほう、すると、強盗がだれか仲間の手術をしたってことですかな」
克子は、廊下の話を聞くともなしに聞いていたが、そのうち、悪い空想がはいり込んでわけもなくドキドキしてしまった。小原医院に入った強盗が、尾形トメの仲間だとすると、手術は妊娠中絶で、手術されたのは……。一瞬、背すじを悪寒が走って、克子はゾクゾクとなった。そんなバカな! 医師が入ってきたとき、克子は思わずギクリとなって立ちあがった。
「あなたは」と、医師が克子に言った。「手術をうけた覚えはないと言ってましたね」
克子は、黙ってうなずくほかはなかった。
「昨日の夕方、湖で何者かに襲われて、気がついたら今朝、林の中に寝かされていた……そうでしたね?」
「……」
「となると、あなたは自分でも知らないうちに、妊娠中絶の手術を……」
「それじゃ先生ッ」と、ガクガクふるえながら克子が言った。「小原医院へ入った強盗というのが……まさか!」
「具合はどうですか」と、医師が猫なで声で言った。「もしよかったら、私と一緒に警察へ……」
「結構です、もう」
「しかし」と、なだめすかすように、医師が言った。

「いいんです、もう」

言ってコートをとりあげると、そそくさと克子は診察室をでた。いま、何を話してみたところで、誰にも信じてもらえないだろうと思った。

中山道の旧道は、家々の軒が道に張り出しているといった感じで、細い道がつづいていた。その道を、がっくり肩を落としながら、克子はわびしい思いで旅館に向かっていた。

いったい、誰が信じてくれるだろう。竜宮城へ行くといって、蒸発した夫のこと、そのあとに次次とあらわれる浦島伝説をめぐる奇怪なできごと、白蛇の出現や、尾形トメの奇妙な行動や、夢とも幻ともつかないような夫との再会などを、いったい誰が信じてくれるだろうか？

旅館では昨夜、克子が外出したまま帰らなかったので、たいそう心配していた。

克子は、部屋に戻ったものの、わびしさはつのるいっぽうで、東京の律子を呼びだしておしゃべりでもしないことには、どうにも収拾のつかない思いだった。原宿の「ブランコ」に電話をかけるとたんに「ああ克子ッ、心配してたよ、いま木曽から？」と、律子のはずんだ声が流れてきた。

たった一人の味方の声を聞いたとき、克子の胸にはじめて哀しみがこみあげてきた。

「なんですって、赤ちゃんが？」と、さすがの律子も二の句がつげないように、言葉をつまらせた。「そんなバカな！　いったい誰が……もしもし、……それで、あんたはいま何してるの……もしもし、克子……わかったわ、私もそっちへすぐ行くよ……とにかく、今日一日、ゆっくり休むのよ……からだが第一だからね！」

電話を切ったとたん、がっくり、はりつめていた気がぬけて、克子は、受話器に手をおいたまま頭を垂れた。その口から、とどめようのない嗚咽がもれ、それはやがて、あたりかまわぬ号泣になっていった。

夫の拓也がただひとつ残してくれた愛のかたみ、それすらが、何者とも知れぬ者の手によってあえなく葬り去られ、克子は無念でならなかった。いまは、泣くことだけが、克子に残された行為であった。が、こんなとき、ただ泣くことしかできぬとは、女とはなんと哀しい定めの生きものなのだろうか。克子は、全身から声をしぼりだすように泣きつづけ、失われた愛を惜しみながら、心ゆくまで泣きに泣いた……。

その夜の十時すぎに、克子の身を案じて、律子が特急で上松に駈けつけた。

「どんなヤツだか、全然わかんなかったの、克子ッ」と、部屋へ入ってくるなり、律子は怒ったように言った。「ブン殴ってやりたいよ。卑劣な男ねえ、まったく！」

が、これは、いかにも律子らしい慰めの言葉でもあった。実際、パンチのきいたその第一声で、ウェットな克子の気持ちもスイと遠のいた感じだった。それに、克子も飽きるほど泣いたあとでもあったので、ふわっと乗せられた。

「だって、後からいきなりだったんだもの」

「すると、やっぱり、伊豆のニセ警官や、あの尾形トメってバアさんの仲間なのかしら」

「そうよ」と、思わず挑戦的な顔つきになって、克子が言った。「そうにきまってるわ」

「けど、変だわ、どうしてあんたが妊娠してるってことが、やつらにわかったのかしら。だって、拓也さんさえ知らなかったことなんでしょ」

「そうなのよ」と、克子が息をはずませて言った。「律子ッ、やっぱり、あれは現実だったのよ。あのビルで、尾形トメをつけていったあのビルで、拓也さんに会ったのは本当だったのよ。だから……」

「でも、あの部屋は空部屋だって、管理人さんが言ってたでしょ」

「だけど、私が、赤ちゃんができてることを話したのは」と、克子が確信をこめてきっぱり言った。「あなた以外には、あのビルの、あの変な儀式のときだけだったわ！」
「なるほど、でも……」
「信じるしかないわ。やっぱり、あそこで拓也さんに会ったのは、現実だったんだわ」
「……となると、一度、あのビルの管理人をとっちめる必要がありそうね」
疑惑は疑惑を生み、ますますひろがるいっぽうだった。翌る朝、克子は律子と一緒にまた湖に行った。拓也の生まれた村が、湖の底に沈んでしまったという話に、律子もこの奇怪な事件をあらためて見直す気持ちになったようである。いっぽう、克子のほうは、もう一度、粕屋村をおしえてくれたあの機織りの老婆に会いたかった。会って、もう少し拓也のことを聞いておきたいと思った。
渓谷のうえにかかっているワイヤーロープの吊り橋は、こわごわ渡った昨日とちがって、克子も、律子とはしゃぎながらやりすごすことができた。暗い事件さえなければ、これほど楽しい旅行もないという気分だった。
克子と律子が吊り橋を渡って、対岸の村落にさしかかると、今日は、なぜか村の中が少しざわめいていた。道端の道祖神の前では、律子も克子の殊勝な心がけにならい、ひざまずいて合掌した。面白半分のしぐさながら、そこには友の無事を祈る気持ちが、ありありと感じられた。
ところが、機織りの老婆の家の前まで来ると、数名の村びとがたむろして、なにごとかヒソヒソ囁きあい、ただならぬ気配がただよっていた。その村びとたちは、克子たちに気づくと話をやめ、けげんな視線を向けた。
克子は、不吉な予感がして「何かあったんでしょうか」と、手前の男に声をかけた。

「ああ、この家のばあちゃんが、亡くなりなすったんだよ」
「えッ、あのおばあさんが？」
克子の驚きようといったらなかった。それから、急に何か強い力が働いたように、克子は人眼もはばからず、家の中に入っていった。いまは、主なき機が、うす暗い土間の片隅にひっそりと寄せられていた。
克子は、白布をかけられた老婆の遺体のすぐそばまでひざをすすめ、それから、しばらくじっと眼をとじ、手を合わせて、老婆の冥福を祈った。なぜか、そうせずにはいられなかった。終わって、そばに坐っていた息子に、克子は、簡単なお悔みの言葉をのべた。
「そうですか」と、息子は、克子をまじまじとみつめてから言った。「おふくろが、粕屋村の話をしたちゅう東京の人は、あんただったんですか」
「どうして、それを……」と、克子はびっくりして聞いた。
「昨日、おふくろが何度も、話すんじゃなかった、粕屋村のことを言うんじゃなかったと独り言をもらしておりましてね」と、息子は言いにくそうにちょっと声を落とした。「それから、たきぎを拾いにでかけて、帰らないと思ったら、今朝方、あの湖に浮いておったんですよ」
「湖って、粕屋村が沈んだという、あの湖ですか?!」
克子の頭の中で、一瞬、湖が不気味なさざ波をたててぐーんと迫った。
「おばあさんッ……ごめんなさい……もし私が……あんなことをおたずねしなければ！」
言って、克子はがっくりうなだれた。
「いや」と、息子はあわてて言った。「岸には、足をすべらせた跡がありましたから、別にそんなわけじゃ……」

息子は、それから、問わず語りに湖底に沈んだ粕屋村の話をはじめた。

「六十戸ばかりの小さな村だったが、町村合併にも反対しつづけて、昔から近隣の村ともあまりつき合いもせん妙な村でしたよ。湖に沈むことになったとき、県のほうでも、近くに代わりの土地をちゃんと準備し、家も建ててやるちゅうし、資金の心配もしてくれておったんですが、誰もみんな、見向きもしないでどっかに行っちまいましたよ」

どうにも理解できないといった風情で、息子は首をかしげた。

「その後、粕屋村の人たちは、いったいどこへ行かれたんでしょうか」

「さあねえ、なにしろバラバラに散ったみたいですからねえ。下諏訪へ行ったり、出雲のほうへ行ったり、そうそう房総とか讃岐のほうへ行った者もおるとか……」

讃岐？　思いがけないその言葉に、克子はハッとなった。拓也の手帖に《讃岐》とのみ記された空白のページがあったからである。疑惑が、またガクンとその範囲をひろげたような気がした。讃岐――それは、四国の香川県である。

粕屋村が沈んだ湖の湖畔で、克子は小枝を拾ってくると、しゃがんで水際に立て、そっと掌を合わせ、眼を閉じた。

「克子……」

「私の赤ちゃんのお墓」と、克子が声をふるわせて言った。「男の子か、女の子か、それすらもわからなかった。私の赤ちゃん……」

「悪い夢をみたと思って、忘れることね」

言って律子は、いたわるように肩に手をかけた。小さな墓標が、風にふるえていた。

湖畔を散策してから、昼すぎ、上松町に戻る足で克子は《寝覚の床》に案内した。律子も、拓也

の足どりをさぐると、どこへ行っても浦島伝説がついてまわることに、さすがに考えこんでしまった。でも、どうしてこんな山奥に、浦島伝説が残ってるのかしら？　だって、浦島伝説なんて海のそばでなくちゃ成立しないお話でしょ！

ところが、その成立しそうもないことが、現実に起こっているのである。粕屋村が湖底に沈んだという事実も、妙に因縁めいている。やっぱり、と律子はふと思った。拓也さんが竜宮城へ行くと言って出ていったのは、本気だったのかしら？

克子は、巨岩を吹く風の中に、じいっと身をさらして立っていた。

「克子、どうしたの？　こわい顔をして」

「私、決心したわ」と、克子は挑戦的な表情できっぱり言った。「どんなことがあっても、拓也さんを追いつづけるわ」

「克子……」

「このままにしてはおかないわ」

「克子、あなた本気？」と、説得するように言った。「相手は、どこの何者だか、得体の知れない人たちよ。それに、ちゃんと手術のできるお医者なんかも仲間にいるみたいだし、ちょっとやそっとの相手じゃなさそうだわ」

「私にはもう、何も残ってないのよ。こわいものなんか、何もなくなったわ」

そう言う克子の表情には、思いつめた者の鬼気すら感じられた。

「だって、このままじゃ、あの子が……何も知らずに殺された赤ちゃんが、あまりにもかわいそうだわ」

克子の頬に、すーっとひとすじの涙がつたわった。

ひとまず東京へ帰って、隣りの尾形トメと対決しようと、克子と律子は勢こんでアパートに戻った。が、尾形トメはすでにどこかへ引っ越していた。克子は地団太を踏んでくやしがったが、もう後の祭りだった。

克子はふと、留守にきた色刷りの葉書に眼をとめた。

「律子」と、克子は決意をこめて言った。「私、やっぱり讃岐へ飛ぶことにするわ」

「だって克子、讃岐ったって広いわよ。いったい、香川県のどこへ拓也さんが行ったかわかんないじゃない」

克子は、その葉書を黙って渡した。拓也にあてられたもので、それは《高松・ホワイトホテル》からの宿泊礼状である。

常世の禊

翌る日、克子は拓也の足跡を追って、宇高連絡船の中にいた。
讃岐は、古くは竿調国（さおつきのくに）と呼ばれていたのが、のちに《さぬき》にちぢまったと伝えられている。讃岐の国、香川県の県都・高松市はいわば、本州と四国を結ぶ玄関口である。高松港の正面、丘の上には水城として名高い高松城の潮見櫓がそびえている。水門から瀬戸内海の湖水が、今も音高く流れこむこの城は、またの名を玉藻城ともいう。近代的な高松市のたたずまいの中に、お遍路さんたちの古風な姿が一種独特な抒情をそえていた。
克子は、ホワイトホテルに直行した。フロント係からルームキイをもらい、ボーイが荷物を持ってどうぞと奥へ行こうとしたとき、克子は「あ、すみません」と、バッグから夫の写真をとりだして、フロント係りにそれを見せた。
「あの、ひと月ばかり前だと思いますが、この人が、こちらに泊まったはずですけど」
「ちょっと拝見」
「こちらから、この葉書をいただいたものですから」
と、葉書もだしてみせた。

「神崎拓也さま……ええと、あ、存知あげております。確か、二日ばかりお泊まりいただいたように記憶しておりますが」

「その人は」と、思わずはずんだ声で克子が言った。「ここからどこへ行ったか、わかりませんでしょうか」

「さあ、あいにくですが……」

「そうですか、どうも」と、克子は行きかけたが、すぐまたふり返って聞いた。「つかぬことを伺いますけど、このあたりに、浦島太郎の伝説が残っているところはないでしょうか」

「浦島太郎?」と、フロント係りがきょとんとした表情で言った。

「ええ、浦島太郎がいたとか、生まれた場所だというような言い伝えのあるところ」

「ああ、それじゃ荘内半島のことですね、丸亀よりもっと愛媛県よりになりますが」と、フロント係りが笑いながら言った。「確かに浦島太郎が生まれたところと言われていますね。いまでも、浦島太郎を名のる方がいらっしゃるようですよ」

「えッ、浦島太郎が?!」

「噂では、浦島太郎の子孫とか何とか言われているようですがね」

言ってフロント係りは、明るく笑ったが、克子には笑いごとではなく、期待と不安にすっかりドギマギしてしまった。

そのころ、原宿大通りの彫金の店「ブランコ」では——

ひとりの男が、表からショーウインドーをのぞいていた。男の姿にふと気づいたとき、律子は思わずドキリとした。

男は、四十歳くらいに見えるが、つばの広い汚れた麦藁帽子に、流行おくれの、かつて高校生たちが身にまとっていたような、黒いマントを羽織っている。口には、大きなマスクをかけていた。その白さが、男の陰気くささのせいか、よけい目立ってみえた。律子は、ゾクリとするような寒気におそわれながら、じいっと男をみつめていた。すると、男は、律子に向かって、ていねいにお辞儀をした。

「すみません」と、律子は、ドアの鍵をあけて言った。「お店、十時からなんですけど」

「これを」と、男は、ふところから何やら数珠のようにつながったものをとりだして言った。「お店に置いてくれませんか」

言いながら、男がすーっと店の中へ入ってきた。律子は、ギクリとして、思わずあとずさりした。何とも不気味な男だった。

「いくらでもいいんです。売ってみてくれませんか」

言って、男はカシャリと、その手にしていた飾りものをショーケースの上に置いた。みると、それは勾玉の首飾りである。

「三日月ですよ」

仕方なしに、律子もそれを手にとってみた。そう言われてみると、確かにそれは三日月のつらなりといってもいい。

「三日月の首飾りです」と、男は低い声で笑った。「というのは嘘で、勾玉ですよ。ご存知でしょう。三種の神器のひとつの、あの勾玉ですよ」

「けど、どうしてこれを……」

「イミテーションですよ、もちろん」と、人を喰ったようにいんぎんに言った。「手すさびに作っ

てみたんです。売れるかどうか、しばらく置いてみてください。なに、売れなきゃ売れなくたってかまわんですよ」
「あの、うちは委託販売は……」
「一週間もしたら、また来てみます」
言って、男はすっと出て行った。
「あ、ちょっと待って……」
こんなもの置いていかれたって困るわよ。律子は、返そうと思って、ネックレスをにぎって、すぐ男を追いかけた。ほんとに、冗談じゃないわよ。
しかし、そのどこにも男の影はなかった。律子は、近くの歩道橋に駈けのぼってみた。が、マンションときらびやかな商店の並ぶ原宿大通りの並木道には、どこにも男の姿はなかった。律子は、ムキになって、原宿駅と神宮の社のほうに眼を転じたが、そこにもあのマント姿はない。オリンピック施設の、近代的なコンクリートの集積がそそり立つほうも見まわしてみたが、そっちにも、あの陰気な影は見えなかった。へんなオトコ！
律子が店に戻ると、電話が鳴っていた。
「はーい、はいはいはい、ちょっと待ってねえ」
と、律子が急いで受話器をとると、電話は高松のホワイトホテルからで、荘内半島にも浦島伝説があるので、これから荘内半島まで行ってくる、拓也がそこへ行ったのは間違いないと思うと、興奮した克子の声が流れてきた。
「そう、でも克子、気をつけて行って来るのよ」と、律子は、いたわるように言った。「私は、あの古ビルへ行ってみるわ。もう一度、管理人に会って、よく聞いてみる。あんたの言ってた儀式が

ホントとしたら、部屋を使われてたってこと、管理人が知らないなんてあり得ないでしょ。……こっちは大丈夫、あんたこそ気をつけてね」

と、名残り惜しい気持ちで電話を切った。

荘内半島は、東西に長い香川県のほぼ北西部にあたり、瀬戸内海に突き出した半島である。春は、除虫菊の白い花におおわれ、秋は赤い唐辛子畑に一変する。現在、荘内半島のほとんどは、香川県三豊郡詫間町に属している。

克子は、予讃本線の詫間駅で下車すると、丸山の浦島神社に直行した。すぐに神官をたずねて、拓也の写真をみせたが、記憶してはいなかった。今浦島太郎をたずねてみようと思いながら、神社をでてゆっくり歩きだした克子の耳に、にぎやかな歌声が浜のほうから風にのって聞こえてきた。海岸へでてみると、数名の老婆や婦人が、浜辺で歌いながら踊っていた。

昔浦島乙姫さんが
恋の濡れ場かあの竹生島
お願かけましょお三崎さんへ
ああやるせないこの願い

婦人たちが歌っているのは《浦島小唄》である。克子は、踊っている人たちに声をかけ、夫の写真をみせて聞いてまわったが、いずれも知らないというふうに首をふり、踊りつづけていた。克子は、がっくり肩を落としながら、踊りの一団から遠ざかるしかなかった。

玉手箱からでた白煙が
今日もかすむよ紫雲出の山に

のぼりつめたる二人の仲が
はれて添う日を指で祈る

と、このとき、踊りの一団からわびしく立ち去っていく克子の姿を、物かげからじいっとみつめる村の男がいた。男は、ニヤリとうす笑いを浮かべると、急ぎ足で村のほうへ駈けていった。雑貨屋の前までくると、男はあわただしく赤電話のダイヤルをまわした。
「もしもし、あ、俺だッ」と、男は荒っぽい言葉で言った。「とうとうあの女がここへきたよ……往生際の悪い女だぜ」
大浜海岸で、克子は、浦島太郎の姿をした今浦島の西川正一さんに会うことができた。西川さんの話によると、詫間町の生里が、浦島太郎の生まれた村である。太郎は、箱崎でいつも釣りをし、亀岩のところから亀の背に乗って竜宮城へ向かった。また、詫間町箱は太郎が竜宮城から帰ったときに、玉手箱のふたを開いたことにちなんで箱村の名ができたと伝えられる。そして、玉手箱から立ちのぼった煙は、そこの紫雲出山の山の端にかかったという。大空村には、太郎をのせた亀を祀る亀神社がある。
克子は、浦島伝説ゆかりの地を丹念にまわり、写真を見せて夫の消息をたずね歩いたが、知っている人はいなかった。
亀神社は閑散として、周辺のたたずまいを見まわしても、人影もなかった。克子は、見るともなしに石碑の《亀神社》と、裏面の《亀の図》をのぞいて帰りかけたとき、木のかげでスケッチブックをひろげている男に、ふと気づいた。四十歳はすぎていると思われるその中年男は、チラと克子をみてうす笑いをうかべると、そのままスケッチをつづけていた。
「あの、ちょっとよろしいでしょうか」と、克子は近づいて言った。「このお近くの方でいらっし

ゃいますか」

「そうじゃありませんがね」と、男は世なれたふうな口調で言った。「この荘内半島にある浦島伝説ゆかりの地を、ひととおり絵にしようと思って通ってるんですよ」

「それじゃ」と、渡りに舟とばかり、克子は拓也の写真をとりだして言った。「ひょっとしたら、こういう人をおみかけにならなかったでしょうか」

「人を捜していらっしゃるんですか。ちょっと拝見……こちらへ来られたんですか、この方は」

「実は夫なんですけど」と、克子は、親切そうな男の言葉についほだされて打ち明けた。

「ご主人がどうかなさったんですか」

「はあ、たぶん、こちらの浦島伝説をたずねて、まわってたんじゃないかと思うんですけど」

「ちょっと待ってくださいよ」

言って、男はしげしげと写真をみつめていた。首をかしげ、何かけんめいに思いだそうとつとめているふうだった。

「ひと月くらい前だと思うんですけど」

「うーんと、そうか」と、男は思わずヒザをたたいて言った。「すると、あのときの人かもしれないな……そうだ、まちがいない。確か、あのときのひとだ。お名前は、なんとおっしゃったっけなあ、ええと……」

「神崎拓也と言いますけど」

「そうそう、神崎、神崎ね……間違いありませんよ。夕暮れでしてね、ここで会いまして、暗くなるまでいろいろ話したんですよ」

「じゃ、主人は何か……」

地獄でホトケに会ったように、克子は思った。夫が讃岐に来ていることは確かなのだから、そのうちきっと、拓也の消息がつかめると克子は信じていた。いま、それがやっとかなえられたのである。

「そうでしたか」と、男は、しきりにうなずきながら言った。「が、ここで立ち話もなんですから、ちょっとそこまでいらっしゃいませんか。ご主人から、浦島伝説にまつわる不思議な話をいろいろ伺いましたよ。ま、お聞かせしましょう。それじゃ」

「はい」

男は、先に立ってすたすたと歩きだした。とても、足が早い。克子は、遅れないように、息せききって後につづいた。

「あの、どちらまで行くんでしょうか」

「すぐそこです」と、男はどんどん歩きながら言った。「ま、ゆっくりお話しましょう」

男と克子は、小さな漁村にさしかかっていた。と、家のかげから、一人の遍路がすっと出てきて、克子の後からついてきた。すると、反対側の道から、また一人の遍路が出てきて、一緒に歩きだした。

また一人、つづいて一人というように、次々と、家のかげや露路からあらわれた多勢の遍路たちに克子はいつしかとり囲まれるような形になっていた。足の早い男についてゆくことに夢中だった克子は、このときやっと異常に気がついた。

「あの、どうしたんですか」と、克子は思わず叫んだ。「すみません、私、ちょっと……」

克子は、なんとか抜け出ようとするのだが、そのたびに、遍路たちが囲みをかためるのでどうすることもできなかった。遍路は、中年男ばかりの一団である。口で唱える呪文と、木の杖についた

鈴の音が不気味である。

「あの、どこまで行くんでしょうか」と、克子は疑惑にかられながら、前をいく男に声をかけた。

「もし、あなたッ、ほんとうに夫のことを……」

男は、ちょっとふり向くと、ちょうどそこにあった漁師の納屋に入っていった。

「私、失礼しますッ」

克子は、そう叫ぶと、必死で逃げようとした。が、遍路たちにおしつつまれ、そのまま納屋の中に放りこまれてしまった。遍路の一人がピシャリと戸を閉め、杖を心張り棒のかわりにはめて開かないようにした。

納屋の中は、うす暗かった。恐怖におののきながら、眼を細めるようにして中をみまわした克子は、思わずアッと声をあげた。納屋の中には、あの古ビルの一室でみたのと同じ祭壇がしつらえられてあったのである。チチチッと、燭台の油が、かすかな音をたてて燃えていた。そして、床の上には、やはり赤いじゅうたんが敷きつめられ、男はとみると、祭壇に向かって、別人のように敬虔な祈りを捧げていた。

「あなたも」と、克子は思わず怒りの声を男にぶつけた。「尾形トメさんの仲間の方だったんですか」

遍路たちの呪文と杖の鈴が、しだいに遠ざかっていった。

「ま、お坐りなさい」と、男がふりかえって言った。「ゆっくりお話する約束でしたよ」

「返してッ」と、克子は突如、ヒステリックな声をはりあげた。「私の赤ちゃんを返してよ、返してッ!」

が、克子はこのとき、男に危険なものを感じてハッと声をとめた。男が、大きく前に立ちはだか

っていた。克子は、あとずさりし、あわてて戸口を開こうとしたが、ガンとして動かなかった。克子は、ドアを背にして、男が近づくのを、きっとなって身構えた、

「そんなに、ご主人のことが忘れられないんですか」

言葉は丁寧だが、明らかに、男は襲いかかろうとして、ジリジリにじり寄った。克子は、丸太の壁にそって逃げた。

「お帰りなさい。このまま東京へ帰って、ご主人のことは忘れなさい。……確か、あなたのご主人も、そうおっしゃったはずです」

「教えてちょうだいッ、主人はどこにいるんです！　あなた方は、何者なんですかッ」

「どうしても、ご主人のことが忘れられないというんでしたら……」

言って、男は、むんずと克子をつかんだ。

「私が忘れさせてあげましょう」

男に抱きしめられて、たまらず克子は悲鳴をあげた。

「ご主人のことを考えても、無駄なようにしてあげます」

「いやッ、放して……おねがいッ」と、克子は必死でもがきながら叫んだ。「助けてッ」

男は、克子を押し倒して組みしくと、ブラウスのボタンを引きちぎり、暴れる足の間に手を入れてきた。克子は、ありったけの力をふりしぼって、もがき、手をふり放そうとしたが、強い男の力にはおよばなかった。

男は、克子のブラウスを引きちぎると、あらわになった胸に顔を押しつけ、むしゃぶりついてきた。スカートをたくしあげ、克子の股間を力づくでひらくと、重い男のからだを容赦なくそこに割りこませた。

「助けてッ、誰か！」

声をかぎりに、克子は絶叫した。

と、そのとき、心張り棒がガランとはずされる音がして、ガラガラと戸口が開けられ、髪をふり乱した女が、外光を背にして躍りこんできた。中年の、村の女である。そのとたん、男はあッと驚いた。女が、男にとびかかって、二人を引き放そうとした。

「お前ッ」と、男が呶鳴った。「邪魔だてするんじゃない。帰りなさいッ」

女は、けとばされてもすぐ、男にすがりついていった。

「あんたッ」

その隙に、すばやく逃げようとする克子を、野獣のように、男は、喰らいついて放そうとはしなかった。

「放せッ」と、男が女に叫んだ。「つまらん嫉妬は、禊の邪魔だッ」

「りゃッ」と、女も言い返した。「こんな他国の女と、あんたという人は……」

「よさないか。私が、好きこのんで、こんなことをしてると思うのか、放せッ」

克子は、男の手が放れた一瞬の隙に、転げるように納屋をとび出していった。走りまくって、けんめいに逃げた。浜辺まで逃げ、もう追うものがいないとわかったとき、克子はいっぺんに力が抜け、波打ち際にがっくりとひざを折った。波が、寄せては返していた。克子は、むざんな自分の姿に気づいて、あわてて、破られた胸をかきあわせた。

逃げる一瞬、男の言った《禊》という言葉が、克子の耳に焼きついていた。禊とは、確か汚れた身を洗い清めるという意味である。では、常世とは？　克子は、いつか尾形トメの言った言葉を思いだしていた。神かくしにあった人間は、常世の国へ行ってしあせに暮らしているのだと、尾形ト

メは言った。そう言えば、夫のあとをたずねて行った丹後の国には、常世の浜という場所があった。そして、浦島太郎のたずねた竜宮城とは、常世の国のことであると語ってくれた人もいたと、克子は思いだした。

突然姿をかくした夫、夫をたずね歩く先々での異常なできごとの数々……そして、謎を解く鍵は浦島伝説……克子は思い惑った。思い惑った克子の足もとに、おだやかな波が単調に寄せては返した。すべてが半信半疑のことばかりだった。いや、あと少しですべてがわかりそうな気もする。そしてまた一方、これらすべては夢なのだ、たちの悪い夢……夢の中でこれは夢だ夢なのだ、と言っているような、一切合切が絵空事にすぎないことなのだ、とも思えてくる。冷たい波が克子の足を洗った。じゃ、なぜあたしはここにいるの？　こんな見ず知らずの讃岐の浜に……。女ひとりの力弱さ、わびしさが克子はたまらなかった。

思い直したように立ちあがり、克子はホテルに向かった。途中、村の洋品店で安物のコートを買い、乱れたブラウスを隠すように高松・ホワイトホテルに戻った克子は、ロビーでちょっと気をとり静めてから、フロントにルームキイをとりに行った。

「五一六号室おねがいします」

「五一六……ちょっと待ってください、神崎克子さんですね」と、フロント係りは言い、それから首をかしげた。「変ですね、さっき知り合いの方だという人が見えまして、急に東京へ帰ることになったからと、チェックアウトなさっていきましたが」

「何ですって、そんなッ」と、思わず克子は声を張りあげた。

「ちゃんと、料金も支払っていかれたんですがね」

「でも……」と、そう言ったとたん、フロント係りが入口を指さして言った。

「あ、神崎さん、あの方です」

克子が、驚いてふりかえった。と、それは、こざっぱりした服装に着がえていたが、あの漁師の納屋で、克子の危急を救ってくれた村の女に間違いなかった。「あなた……」と、克子は、女に礼を述べようと思ったが、あとがつづかなかった。

「ちょっと、そこの栗林公園をぶらっとしません？」と、女が言った。「あなたに忠告してさしあげたいんです」

克子は、女の後に黙ってついて行った。栗林公園は、すでに夕方の気配がただよっていた。女は、とつぜん立ちどまると、ふりかえって、じいっと克子をみつめた。敵意は、少しも感じられなかった。

「お帰りなさい、東京へ」と、女がかんでふくめるように言った。「これ以上、深入りなさると、どんなひどい目に合わされるかもわかりません」

「でも、どうしてお金まで払ってくださったんですか」

女は、答えるかわりに、深いため息をついた。深刻な表情を隠そうとはしなかった。

「……主人たちは、どうかしてるんです」

「えッ」と、克子は驚いて言った。「ご主人だったんですか、あの人……」

「あんな男だとわかっていたら、もちろん、結婚なんてしませんでした。でも、気づいたときは、もうおそかったんです」

「いったい、ご主人たちは、何をなさってるんですか？」

「常世の国を信じている人たちの集まりなんです」と、女は諦めたように言った。「ずっと古い昔から、先祖代々、常世の国を信じてきた人たちばかりです。そして、いつかは、浦島太郎のよう

に、その常世の国へ行きたいと思っているんです」
「常世の国……」と、克子は、息づまるような思いで女の話を聞いていた。
「常世の国というのは、いつも春で、不老長寿の国で、美しい乙姫さまのような女の人がいて、この世の天国のようなところだと、主人たちは考えているようです。そして、その常世の国を信じている男と一緒になった女は、同じように、常世の国を信じなきゃならないというんです。でも、私、とうとう今日まで、そんな話を信じることができませんでした」
女はまた深いため息をついたが、克子も、それにつられて、ふっと同じようにため息をもらした。
「常世の国を信じない女に」と、女はさらにつづけて言った。「子どもを生ませるわけにはいかないといって、二度も、妊娠中絶の手術をさせられたり……」
「常世の国を信じない女に、子どもは生ませられないというんですか！」
思わず、克子は気色ばんで言った。大きく女がうなずいた。
「どこか、おかしいんです。それで近ごろはもう、夫婦のこともほとんど……」と、女はちょっと恥かしそうに言った。「ね、だから、このままお帰りになったほうがいいわ」
「でも、そんな夢みたいな、常世の国なんてものが、ホントにあると思ってるのかしら」
「房総には、トコヨ神社というのがあって、そこが……」
言って、女は、ハッとしたように口をつぐんでしまった。
「何ですって！　房総？」
「お帰りなさい。そして、忘れてしまうことですッ」と、女は急にソワソワして、落ち着きなく言った。「さもないと、ひどい目にあいますからねッ……それじゃ、失礼します」

女は、何か物影におびえるように、駈け去った、
「あ、ちょっと」
追おうとしたとき、ふっと人の気配を感じて、克子はふりかえった。すると、夕もやのたちこめた木立の陰に消えたのは、まぎれもなく、いまあわてて別れていった女の夫、納屋で手ごめにあわせようとしたあの男であった。克子は一瞬、立ちすくんだ。しかし、男は人影をはばかってか追ってはこなかった。
数々の犠牲をこうむったが、おかげで、大きなナゾの一部がやっとわかった。常世の国を信じている人たちの群れは、狂信的で不気味な存在だった。が、問題は、夫の拓也である。夫と彼らとのつながりはどうなっているのだろう？　まさか、夫も、拓也もその常世の国とやらを信じる人間の一人だなんて……。

房総に「トコヨ神社」があるという、村の女の言葉を胸にたたんでホテルに戻った克子は、しかし、たちまち途方にくれてしまった。克子の泊っていた部屋はすでに他の客に予約されており、空室もないのだった。これから新しい旅館をさがさねばならないかと思うと、何とも気が滅入った。

背後から「神崎さん」と、声をかけられたのは、そのときだった。驚いてふりかえった克子は、思わず「あッ」と声をたてた。ロビーの椅子に坐っていたのは、下条鋭一である。「たぶん、浦島伝説をたずねて、讃岐へも見えるんじゃないかと思ってましたよ」と、懐しげに下条が言った。

「でも、まさか、同じホテルとは思いませんでした」

「下条さん」と、克子は駈け寄って言った。「よかった、お会いできて……お話したいことが、いっぱいあるんです」

下条は、ほお笑みながら、うなずいた。

「部屋がないそうですが、よかったらぼくの部屋をお使いになりませんか」

言って下条は、てきぱき部屋提供の手続きをした。克子はこれでやっと知っている人に会えた、やっと何もかも話せる人に会えたという気持ちでいっぱいだった。みるうち、張りつめていた心

が、下条鋭一のほお笑みのなかに溶けこんでいくのを、克子は知った。

下条にすすめられるまま、克子は後についていった。なぜかその日は、下条に対して素直になることができた。下条の人なつこい笑顔のせいだろうか。それとも、異常な経験を強いられた異郷で、多少とも顔見知りの人間に会えたという安堵感からであろうか。五〇三号室の前で、下条は立ちどまった。

「ここです」と、キイをあけながら言った。

「チェックインしたばかりで、まだ汚していませんから、そのまま、お使いになってください……どうぞ」

克子は、下条につづいて中に入って、はっとした。渋い間接照明に浮かびあがったその部屋は、ツインルームである。二つ並んだベッドを、克子はじっとみつめた。その視線に気づいた下条は、緊張を和らげるように、

「シングルルームが空いてなかったんです。少々、値段は高いですけど、ま、ゆっくり休めると思ってがまんしてください」

下条は、ことさら乱暴に、洋服ダンスをあけると、バッグのジッパーをこれも音たてて開き、タンスに吊してあったセーターなどを、バッグの中に叩きこむように入れていった。そんな下条を横目でみながら、克子は思案にあまって、そっと部屋の奥の窓際に寄り、背を向けた形で立っていた。

見るともなしに、克子は、高松市街の夜景を見おろしていた。下条の支度は、簡単に終わった。さーっとバッグのジッパーを閉じた下条は、戸口に向かった。その気配に、克子はふりかえった。下条は、やさしい笑みを浮かべていた。

「では、ごゆっくり」と、下条が穏やかに言った。「明日の朝、電話します。お話、それからでいいでしょう」

そんな下条を、克子は、黙ってみつめていた。話しかけようか、どうしようかと内心、思い悩んでいたのである。ドアをあけて、下条は外にでた。

「おやすみなさい」

言って、ドアを閉めようとしたとき、克子は「待って、下条さん……少し、お話したいんですけど」と声をかけた。下条は、手をとめて克子をみつめていたが、それから、部屋へ入ると、ドアを閉めた。

「いつか、浦島太郎がたずねた竜宮城というのは、常世の国のことだとおっしゃいましたわね」

「常世とは、常の世と書きます」と、今度は下条が、窓に向かって立ちながら言った。「いつも変わらぬ世の中、つまり不老長寿の国、あるいは、すべての人のあこがれの国、とでもいった意味でしょうか」

「その常世の国を、いまでも信じている人たちがいるんです。夫を連れていったのも、どうやらその人たちらしいんです……おそらく、あなたの奥さんを連れていったのも……」

「克子さん、あなたはどうしてそれを？」

「荘内半島で知り合った女の人から聞いたんです。ずっと昔から、先祖代々、常世の国を信じつづけてきた人たちがいるんです。そして、その人たちは、いつか常世の国へ行く日を楽しみにしているそうです」

「それじゃ、ぼくんとこの佐知子も、常世の国を信じていたのだろうか？」

思いがけないことに、克子の夫の拓也も、下条の妻の佐知子も、同じく信州の木曽、十数年前

に、ダム建設で湖底に沈んだ、あの粕屋村の出身だった。二人は、あらためて驚き、互いにじっとみつめあっていた。

「いまから思うと、佐知子というのは、奇妙な女でした。結婚して三年あまりになるのですが、どうしても、子どもを生みたがらないのです。はじめのうちは、最近の女性によくあることだと、別段、気にもとめてなかったんですが、実は去年のこと……」

と言いかけて、下条は絶句した。それから、つらそうに視線をそらせると、思いきったふうに話をつづけた。

「去年、佐知子は妊娠したことを、ぼくに知らせもせず、ひとりこっそり、子どもをおろしてしまったんです」

「赤ちゃんを！」と、克子が悲鳴のように叫んだ。「下条さん、実は私も……私の赤ちゃんを……麻酔をかけられて……気絶しているうちに、何者かの手で……」

あとは、声にならなかった。克子は、よろめくようにベッドに両手をつくと、声をおしころして泣き、肩のふるえはなかなかとまらなかった。

「克子さん、やめましょう……つらいことは言わないほうがいいですよ……女性の部屋に長居をしてしまいました……」と、下条はバッグをとりあげて言った。「あとは明日にしましょう。ゆっくり、休んでください」

下条の表情には、ほっとした気持ちが流れていた。それから、そっと部屋をでていき、バタンとドアが閉った。克子は、はっと顔をあげた。その眼の先に、並んだもうひとつのベッドがある。ふっとこの部屋の広さが克子の身にしみた。そして、とり残された者のさびしさがこみあがってきた。

克子は、からだを起こして「下条さんッ」と声をかけ、追いかけようとした。が、ドアに手をかけたとき、とつぜん、けたたましく電話が鳴った。克子は、はっと電話をみつめた。ベルが鳴りつづけていた。

克子が、ゆっくり受話器をとって、神崎と言いかけたとたん、いきなり「逃げてくださいッ」と、緊迫した女の声が流れてきた。まぎれもなく、それは克子の危急を救ってくれた、親切な村の女の声である。

「すぐ、東京へ帰ってくださいッ」

「モシモシ」と、克子があわてて言った。「もう一度お会いして、ゆっくりお話をお聞きしたいんですけど……」

「ダメです。すぐ逃げてッ！　これ以上、お話したら、私も……あァッ……」

突如、女の声ははげしい悲鳴に変わり、声にもならない絶叫となった。低いうめきとともに、電話はプツンと切れた。何か異常な事態が起こったことが、ありありとしのばれた。ゾクゾクしたものを感じて、克子は、そのまま受話器を置くと、部屋をとび出した。

急いでホテルを出てみたが、下条の姿はもうどこにもなかった。

いったい、何が起こったのだろうか？　常世の国を信じる人たちの群れについて話をしてくれた村の女の絶叫が、いつまでも克子の耳に残っていた。克子は、あのとき、どうして下条を引きとめなかったかと、心から悔んだ。

いっぽう、東京ではそのころ——

律子は、いつか克子が不思議な儀式に誘いこまれたという、あの古いビルをたずねていた。克子

はここで、夫の幻に出あったという。いや、克子は、それは幻ではなく現実であったと語った。いまは律子も、その言葉を信じる方向に気持ちが動いていた。

管理人室の窓口で、二階の空部屋をみたいというと、鍵束を持って出てきたのは、若い男だった。好感のもてる青年だった。

「あの、もう一人の管理人さんは」と、律子はなに気なしに聞いた。「今日は、おでかけなんですか？」

「前の人なら、クビになりましたよ」

「えッ」と、律子は驚いた。

「ここですね」と、青年は空部屋のドアを開けて言った。「前の人は何でも、この部屋を無断で、変な集団に貸していたらしいんですね。それに、貸し賃もとらずにいたことがバレて、クビになったんですよ」

するとやっぱり、克子が言っていたように、この部屋で不思議な儀式をやっていたというのは、ホントなんだわ！

「あの」と、律子は興奮ぎみに言った。「その方のご住所、おわかりになりません？」

「さあ、あの人は住みこみでしたからね。荷物を運んでいった軽トラは、千葉ナンバーだったとか聞きましたがね」

「千葉の車ですか?!」

言って、律子は思わずハッと立ちすくんだ。千葉ナンバーの車が動いたということから、律子は、木曽の山奥で、謎の死を遂げた老婆の息子から聞いた話を思いだした。湖の底に沈んだ粕屋村の人たちは、上諏訪地方、出雲地方、讃岐地方などにそれぞれ散っていったが、一部の人びとは房

総にも渡っていったということだった。房総、即ち千葉県である。半信半疑だった律子は、いまやこの現代の怪談を信じないわけにはいかなかった。

この青年からは、これ以上聞き出すことは無理だとあきらめた律子は「ブランコ」に帰った。ところが、店先の戸を開けようとしたとき、店の中でカタカタとかすかに物のふれあう音がした。

律子は、あわてて戸を開けた。が、店の中はひっそりしている。なんだ、気のせいか、と律子は炊事場の方に行きかけた。と、またカタカタ、ひそかな音がはじまった。何げなく音のほうをみた律子は、そのとたん、思わず息をのんだ。

律子は射すくめられたように、そこを動けなかった。その視線の先には、あの奇妙な黒マントの男がもってきた、勾玉のネックレスがかけてある。そして、そのネックレスにはなんと、白い蛇が、からみついているではないか！　克子の隣室にでたという白い蛇を思いだして、律子はさすがに、きみわるかった。黒マントの男は、今日、私があの古ビルに行ったことを知っているのだわ。そして私が克子の話しを信じはじめていることも……。頭の回転の鋭い律子は、この白蛇がそんな自分への彼らからの警告であることを、すばやく察知した。だが、気丈な彼女に恐怖はなかった。むしろ腹だたしさに胸がふるえた。

翌る朝、克子と下条鋭一は、連れだって予讃本線に乗りこみ、荘内半島の詫間町へと向かった。詫間駅で下車すると、克子は、海岸沿いに、昨日、暴行をうけた納屋のある小さな漁村に、下条を案内した。

「この村です」と、克子が言った。「お遍路さんの格好した男たちに囲まれたのは……ですから、あの女の人もきっと、この村の人じゃないかと思うんですけど」

「しかし、そんな悲鳴が聞こえたなんて、その人に、もしものことがなければいいが……」

下条がそう言ったとき、克子は、ずっと向こうの村はずれのあたりに眼をやりながら、思わず足をとめた。一軒の家の前に、村びとらしい多勢の人たちが集まっている。パトカーや救急車もとまっている。

漁師らしい家の前で、警官が人払いをしていた。克子と下条が駈けつけたとき、ちょうど、家の中から、担架が運び出されてきたところだった。そのとたん、克子は「あッ」と声をたて、みるうち、顔が真っ青になった。担架には、あの女の死体がのせられていた。そして、驚くべきことには、女の喉もとに、二本の朱塗りの箸が、ブッリと突き刺さっていたのである。思わず両手で顔をおおった克子を、下条は、かばうように胸に抱きしめてやった。

「さ、行きましょう」

と、下条は気晴らしに、克子を海辺へと誘った。男を信じられなかった女が、箸で殺されたことに、下条も少なからずショックを受けた。克子とならんで、じいっと海をみつめながら、下条は、問わず語りに《箸墓》について語った。

大和の国、三輪山のふもとに、箸墓とよばれる前方後円墳がある。箸で自らを突いて死んだ、ヤマトトトヒモモソヒメの墓だと言われている。が、一説によると、その箸墓は、邪馬台国の女王、卑弥呼の墓だとも言われている。むかし、三輪山のふもとに住む女のところへ、夜になって通っている男がいた。女はある日、男に姿をみせてくれとせがんだ。すると男は、明日、おまえの櫛箱の中に入っていようと答えて別れた。翌る日、女が櫛箱をあけてみると、そこに小さな蛇が入っていた。女が驚いて叫んだので、蛇は悲しげに三輪山へと帰っていった。

「あとで女は」と、下条は、そっと克子の後へ歩み寄りながら言った。「男を信じ切れなかった自

分を恥じて、自ら、自分の下腹部に箸を突き刺して死んだと言われています。これが箸墓の物語です」

二人は、肩をならべて、瀬戸内の光る海を飽かずに眺めていた。

「わからない、どうしてもわからないッ」と、下条が低声で言った。「常世の国は、海の向こうにあるという……その、幸せな、ゆたかな土地であるはずの常世の国を信じている人が、なぜあんなむごいことをするのか」

「二人目だわ」と、ポツリと克子がつぶやいた。「私に親切にしてくれ、手がかりを与えてくれた人がみな……木曽のお婆さんも、やはりそうだった……」

言って、克子は顔をおおってうずくまった。下条もしゃがんで、そっと、克子の肩に手をかけた。

「克子さん」と、下条は顔を覗きこむようにして言った。「常世の国を信じる人たちには、あのような無残なことをしてまでも、守らねばならない何かがあるようです……それでも、ご主人をたずねることを、やめようとはしないのですか」

「やめません」と、立ちあがりながら克子が言った。「だって、私の赤ちゃんも殺されたんですもの」

克子の足もとに波が寄せたが、彼女は濡れるにまかせ、じいっと海をみつめていた。

「この海の向こうに……海の向こうのどこかに、ほんとに常世の国があるのなら……私、必ず、きっと、つきとめてみせますッ」

きっぱりと、克子は言った。下条は、思わず、克子の手をぎゅうと握りしめた。それは同じ立場にある下条の、せいいっぱいのはげましだった。

しかし、夫の拓也が荘内半島の浦島伝説ゆかりの地をたずねているはずなのに、どこで聞いても出会った人がいなかったことに、克子は気持ちの底に引っかかるものを感じた。あるいは、常世の狂信者たちが、わざと隠していたのかもしれない。が、下条の話によると、なぜか、彼の妻も拓也と同じように、浦島伝説ゆかりの地をめぐり歩いているという。どうして、そんなことをして歩いているのか、その謎は、ますます深まるばかりだった。

下条の情報では、四国にはもう一か所、浦島伝説の残っているところがある。その謎を解くために、克子も下条と共同戦線を張ることになり、二人は新居浜に向かって、予讃本線をくだっていった。

愛媛県の新居浜市は、偉大な石油コンビナートの群れが海にのぞむ、近代的な工業都市で、下条が克子を案内したのは、多喜浜町黒島にある明正寺だった。二人が、その山門の前に立ったとき、克子は《浦島山観音院明正寺》という石碑をみて、思わず「あらッほんとだわ」と、はずんだ声をあげた。

観音像は、白檀の一本造りである。柔和な表情が印象的だった。本堂にはちょうど、住職が居合わせていて、寺の縁起について語ってくれた。

「観音像は、浦島太郎が竜宮城から持ち帰ったものと伝えられるものです。ま、おそらく後に、仏教思想と混合したせいでしょうがな……」

克子が、夫の写真をとりだしてみせると、案の定、この地にも拓也が巡歴していることがわかった。住職は拓也のことをよく記憶していて、この観音像の前で、一日中、端座して、瞑目をつづけていたと教えてくれた。

下条も、妻の写真をみせた。すると、住職は首をひねりながらも、数か月前に、やはり本堂にい

つまでも坐りつづけていた女性のことを語った。その年格好や特色などから推して、それはほぼ妻の佐知子に間違いないと判断した。

「いったい」と、克子は首をかしげながら独りごちた。「主人といい、奥さんといい、何のために浦島伝説のあるところを、そうやってまわってたのかしら？」

「それは」と、下条も同じことを考えていたようにすかさず言った。「たぶん、常世の禊ではないかと思うんです」

「えッ？」と、克子は思わず下条に聞き返した。彼女も《禊》という言葉には、漁師の納屋で暴行されて以来、たえず気持ちに引っかかっていた。

「おそらく、常世の国の信者が、そうでない者と結婚した場合、仲間に戻るには、身のけがれをはらう禊が必要なんでしょう……そうとしか考えようがありませんね」

「それじゃ、あの女の人は、なぜ殺されたのかしら、どうして？」

「裏切って、常世の国の話を他人にしたからでしょう」と言って、下条はがっくり肩を落とした。

「……佐知子も、あなたのご主人も、常世の国を信じている人たちの仲間に戻っていったということでしょうね」

二人は、本堂を出て、寺の境内を黙々と山門のほうへ歩いた。克子は、下条の言葉に衝撃をうけた。それじゃ、夫は私の愛を裏切ったのかしら？　私の愛を捨てて、昔の仲間たちのところへ戻ったというのかしら？

そのとき、突如、克子が「キャーッ！」と悲鳴をあげて、かたわらの下条にしがみついた。克子の視線の先を、白い蛇がすうっと草むらに消えていった。克子は、体を放して「白い蛇……」と、てれくさそうに言った。

「白い蛇は、竜神の化身だと言われています。しかも、それは女だそうですよ」
「白蛇が女？」
「そうです。そうすると、白蛇というのは、もしかして乙姫のことかもしれませんね」と、ちょっと空想を楽しむように、眼を細めて下条が言った。「克子さん、そう言えば、髪を飾ってネックレスをしたあの観音像は、やさしいほお笑みを浮かべて、何やら、乙姫さまの姿をあらわしていたように思いませんか」
浦島伝説にまつわる蒸発事件は、すべて海に関係しているような気がして、二人は、東京までを、海を渡って帰ることにした。徳島港で、克子と下条は、豪華フェリーの《あるぱとろす号》に乗りこんだ。
穏やかな海上を、船は、矢のように突きすすんだ。克子は、後部デッキの手すりに寄りかかって、ぼんやり、いつまでも泡立つ波を眺めていた。そんな船の旅は、克子の哀愁をかきたてずにはおかなかった。
泡立つ波は、虚しかった。うたかたのような愛――いま、私が必死になって夫のあとを追っているのは、やはり愛なのかしら？　だとすれば、もし夫にめぐり会ったとき、果たして夫は、私の愛にこたえてくれるかしら？
海上は、すでに夕焼けに変わっていた。
「風邪をひきますよ」
下条は、克子にそう声をかけると、背広をぬいで、そっと彼女の肩にかけた。
「どうも……」
「ご主人を、愛していらっしゃるんですね」

「ええ」と、克子は、悪びれずにそう答えた。

克子は、じいっと夕焼けに照り映えた赤い海をみつめていた。愛しているかと聞かれれば、愛していると答えるしかない克子であった。しかし、海上を渡る風の何というつめたさ！　克子はいま、下条鋭一の親切を、ただひとつのあたたかさとして肌で感じていた。

船内のレストランで、克子と下条は、夕食をともにした。が、水が高いところから低いところへ流れていくように、二人の話は、またしても夫と妻の周辺に落ちていった。

「下条さんは、白い蛇のことを、女だとおっしゃいましたわね」と、克子がポツリと切りだした。

「乙姫さまの化身かもしれないと」

下条も、ちょうど妻のことを考えているところだった。あとを追えば追うほど、妻は自分から遠ざかっていくように思われた。あるいは、こうしてあとをたずねてまわること自体、妻にとっては、迷惑なことであるかもしれない！

「ええ」と、下条はあわてて言った。「福井県の常神半島あたりでは、そのように信じられているらしいですね」

「福井県で？」

「常神半島の近くには、白蛇の住む島があるそうです。その島には、男が近づく分にはなんともないらしいんですが、女性が近づくと必ず海が荒れるんだそうです。それというのも、白蛇が女だからだというんです」

「ずいぶん、いろいろなことをご存知なんですね」

「調べたんです。妻が急に蒸発したことが納得いかなくて、ほうぼう、たずね歩いているうちに、どうやら浦島伝説に関係があるらしいとわかって、それから一生けんめい、実にさまざまな本を読

みました」
「愛してらしたんですね。奥さんを……」
下条はそれには答えず、ただ淋しくほほ笑んでいた。
疲れがひどいにもかかわらず、連続した異常な体験の興奮が身内をかけめぐって、克子は、うつらうつら眠りかけては、幾度も眼を覚ました。海上の夜明けは早い。金色に輝く朝の海を、豪華なフェリーがすべるように走っていた。
一時間以上も、克子は、手すりにもたれて、流れ行く陸地をじっとみつめていた。眼が覚めたばかりといった下条が、ようやくデッキにあがってきた。
「お早ようございます。眠れましたか」と、人なつこい口調で下条が言った。「むりに船で帰ろうなんて誘って、迷惑じゃなかったかなと思ったんです」
克子は、この下条に眠れなかったとは言えなくて「いいえ」と、笑顔で言った。
「ちっとも揺れませんでしたし、船に乗ってるって気がしなかったんですもの」
「ならいいんだけど」と、並んで陸地をみつめながら、下条が言った。「海がどんどん埋め立てられて、コンビナートができていくんですね。こんな時代に、海の彼方の常世の国を、まだ信じている人たちがいるなんて、ちょっと考えられないことなんですがね」
「……」
「東京の周辺は、もうほとんど自然が残っていませんね。房総半島なんかも、とくに内房などは巨大な工場がズラリとならんで、まったくひどいもんですよ」
「房総って、千葉県でしたわね」と、克子はふと思いだして言った。「房総にもトコヨ神社があるってこと、下条さんご存知？」

「なんですって?!」と、下条の驚きようといったらなかった。
「殺された女の人が言ってたわ。それに、木曽の人も、粕屋村が湖底に沈んだあと、讃岐や房総方面に流れていったって……」
「克子さん、ひょっとしたら、あなたのご主人や佐知子は、千葉県に潜んでいるかも……そのトコヨ神社というのは、どこにあるんですかッ」
「そこまでは、あの人、話してくれなかったわ。話しかけたとき、あの男があらわれて、次の日、女の人が殺された……」
「いよいよ、あやしいな、それは!」と、力をこめて下条は言った。「調べましょう。房総なら、東京とは目と鼻のさきみたいなところです。……克子さん、房総というのは盲点だったかもしれませんね……なるほど、そうか!」
東京の人間のクセで、海というと、すぐに湘南、伊豆方面に眼を向け、東京のすぐ隣りにありながら、房総というところは、なぜか人びとから忘れられがちなところだった。下条は、胸さわぎをとめようがなかった。
「徹底的に調べてみましょう!」
「そして、そこに、夫やあなたの奥さんがいたら……」
「妻や、あなたのご主人がいたとしたら……」
言って、下条は克子をみつめた。克子は、その強い視線に耐えられなくなって、眼を海に落とした。もしその房総に、さがし求める夫がいたら、妻がいたら……それは、二人の旅の終わりを意味していた。いや、終わりにしなければならないのである。それが、克子と下条の運命でもあった。

三日月村

豪華フェリー《あるぱとろす号》が長い船旅を終えて、東京港の竹芝棧橋にたどりついたのは、昼近くであった。克子と下条が、乗客にまじってタラップを降りてくると、岸壁には律子が出迎えていて、「克子ォ！」と手をふりながら駈けてきた。

が、律子は、克子の後ろに従っている下条を眼ざとくみつけて、はっと立ちどまると、敵意をあからさまに、睨みつけた。

「どうしたの、律子？」

「克子こそ、どうしたのよ。この人は……」

「あ、そうだったわね」と、克子は、笑顔になって言った。「改めてご紹介するわ。高校の先輩の高木律子さん、こちらは、下条鋭一さん」

「どうも、いつか、たしか伊豆で……」

と、下条は、人なつこい笑顔を向けた。律子もつられて、ちょっと頭をさげたが、けげんな表情のまま、不機嫌そうに「ちょっと」と克子の袖を引っぱって、下条から少し離れた。「なによ克子ッ」と、食ってかかるように律子はつめよった。

「どうしたのよッ、なぜ、あんな人と一緒なのよッ」

「なぜって、高松で偶然また会ったのよ。ほら、奥さんもやっぱり、竜宮城へ行くって蒸発した人の……」

「あなたってバカねえ、そんなこと信じてるの？」と、律子があきれたように言った。「克子の行く先々にあらわれるなんて、変だと思わないの！」

言って、律子はジレったそうに、克子の肩を小突いた。下条鋭一も、自分と同じように蒸発した妻の行方を追っている。少しも変なことはない。が、律子の言葉の調子があまりにもはげしいので、ふっと後めたい気持ちになって、言葉につまった。

「あなた、何を考えているのよッ」と、律子が、さらにきめつけるように言った。「私たち、狙われてるのよ。あんたがいない間に、いろんなことがあったのよ。変な男があらわれたり、白い蛇がお店の中に入りこんだり、あなたばかりじゃなく、私もよッ」

「白い蛇が?!」と、克子もこれにはびっくり仰天した。

「失礼ですが」と、下条が遠慮がちに近づいて言った。「それじゃ、ぼくはこれで……」

「下条さん、実は律子のところにも」

克子がそう言いかけたとたん、律子は「いいわよ、私のことは！」と、不快げに口を封じた。克子は、困惑の表情でおし黙っているしかなかった。

「それじゃ克子さん」と、下条もぎごちなく言った。「例のことは、きっと調べます。様子がわかり次第、お知らせにあがりますから……では」

「いろいろ、ありがとうございました」

と、克子は悪びれず、感謝の気持ちをこめて言った。下条が遠ざかっていく姿を、克子はじいっ

と見送っていた。
「克子ッ」と、律子が思わず首をかしげて言った。「いったい、あんたたち、どうなってんのよッ。あなた、拓也さんを捜してるんじゃなかったの？　それを、あなたたちはまるで……」
「いやだ、律子。そんなんじゃないわ。下条さんだって、蒸発した奥さんを捜して……」
「何だったら」と、その言葉をさえぎって、律子が言った。「私、こんどのことから降りたっていいのよ。そうしたほうが、いいんじゃないッ」
「律子……」
律子は、克子と下条がまるで新婚旅行の帰りみたいにタラップから降りてきたのをみて、ついカッとなってしまったが、しおれている克子をみると、すぐまたかわいそうになって「わかったわよ」と、気を変えて、克子のアパートまで車で送っていった。
わびしい克子の部屋をみているうちに、律子は、常世の国の狂信者たちのことが、ますます腹立たしく思われてきた。が、相手は蛇を繰るなど、現代の科学では割りきれない、奇怪な術を心得た、バケモノみたいな連中である。律子自身はそんな連中のおどしに負けたくはないと思う。だが、そんな連中とまじめに相手をすることが馬鹿らしくも腹だたしかった。
律子は、テーブルの上に、あの匂玉のネックレスを投げだした。
「白蛇は女で、乙姫さまの化身ですって？」と、うんざりするように律子が言った。「冗談じゃないわよ、まったく……夜中に、これに巻きついてるとこを想像してごらんなさいよ、克子、あんたほんとに、こんなんでもまだ拓也さんを捜しつづけるつもり？」
「ごめんなさい、あなたにまでそんな目に合わせて」と、克子はうなだれて言った。「だけど、私には拓也さんに裏切られたってことが、まだ実感として湧いて来ないのよ……それに、赤ちゃんを

……あんなに……殺されて……私……私……」
　きれぎれに言って、克子は、くやしそうに唇を嚙んだ。
「わかったわよ、それじゃ教えてあげるわ」と、なだめるよう律子が言った。「あんたがいつか、夢かうつつかわかんない間に、拓也さんに会ったって言ってた古ビルに、私、あれから行ってみたのよ、そしたら……」
「じゃ、管理人さんに会ってくれたのね」
「ところが、あの管理人は、もういなかったわ……こっそり、変な人たちに空部屋を貸してたことがバレちゃって、クビになったんですって」
「じゃ、やっぱり、あれは現実にあったことなのねッ。で、その管理人は、いったいどこへ行っちゃったのかしら？　もしかして仲間かも……」
「わかんない。でも、迎えにきた車は、千葉ナンバーだったそうよ。千葉って言えば、房総でしょ。だから、私もクサいと思うのよ。ほら、いつか木曽の人が言ったでしょ、湖底に沈んだ粕屋村の人たちが、房総方面にも流れていったって……」
　律子の話を、克子は息のつまる思いで聞いていた。殺された讃岐の女も房総という言葉を口にしていたが、ここでもまた、房総がでた。この符合を、単なる偶然とは克子にはどうしても思えなかった。
　コーヒーを飲みながら、漁村の納屋で暴行された話を律子に聞かせていると、玄関のブザーが鳴った。妙にドキリとするものを感じながら、ドアを開けると、思いがけなく、下条鋭一がニコニコしながら立っていた。
「克子さん、トコヨ神社の場所がわかりましたよ」

「えッ、もうわかったんですか」
「ええ」と、下条は人なつこい笑顔で、張りきって言った。「半年間さがしまわったおかげで、古いことを調べることだけは、すっかりうまくなりましたから」
下条が部屋にあがってくると、律子は立ちあがった。
「克子、それじゃ、私は帰るよ」
「あら、一緒に話きいてけばいいのに」
「結構ッ」と、すげなく律子が言った。「けど、あなた、拓也さんを捜してるんだってこと、忘れないでね」
捨てぜりふを残して、律子は、さっさとでていった。気まずい空気が流れたが、すかさず、下条の気持ちを傷つけまいとするように「ごめんなさい。彼女、妬いてるのよ」と、克子はわざと蓮っ葉な口調で言った。
「ええ、別に気にしてませんから」
と、わだかまりはたちまち消え、下条は、いつもの人なつこい顔で、テーブルのうえに『房総の古社』という本をとりだすと、しおりをはさんであるところを開いた。《常代神社》という活字が、克子の眼にとびこんできた。
「常世の国の常世とは、ちょっと字が違うんですが、この神社は、こう書いてトコヨ神社と呼んでいるらしいんです」
「千葉県君津市常代村……」
「村の名前は、トコシロと読むらしいんですがね」
言って、下条は、千葉県の地図を開いて「ここです」と指さした。《常代》と、そこにはっきり

でていた。

捨てぜりふを残して克子のアパートをとび出した律子は、下条の出現にすっかり腹をたて、気持ちがむしゃくしゃしてならなかった。が、車をぶっとばしているうちに、持ち前の楽天家にもどり、気分もスカッとなっていた。

自動車を駐車場において、鼻歌を歌いながら「ブランコ」の近くまできたとき、律子は思わず息をのんで立ちどまった。店の前に、あの不気味な黒マントの男が立っていたのである。一瞬、男が律子に気づいてニヤリと笑った。うすきみわるいが、しかたなく律子は男に近づいた。

「例のネックレスは、売れましたかね」

ニヤニヤうす笑いをうかべながら、男が言った。律子は、鳥肌だつような思いで、ハンドバッグの中から、匂玉のネックレスをつかみだすと、そっけなく「お返しします」と、突きだした。が、男はニヤリとしたきり、なぜかマントから手をだそうともしない。

「やっぱり、ダメでしたか」

「お受けとりくださいッ」と、律子はいらだって、ちょっと声をあらげた。

「ま、そうおっしゃらずに……何でしたら、あなたに差し上げたっていいんですよ」

「いりません。こんなうす気味わるいもの」

「そうですか。本物のヒスイなんですがね」と、男は、マントから手をだして、やっとネックレスを受けとった。「日本でも、昔はヒスイがとれたんです。これは日本産のヒスイで、とても珍品なんですがね」

律子は、思わずつりこまれ、男の掌のネックレスを「へえ！」という気持ちでみつめた。

「よろしかったら、差し上げますよ」
「結構ですッ」と、きっぱり律子は言った。
「いやなら、売られてもいいでしょう」
「そんな貴重なものを」と、律子はそっけなく言った。「どうしてそんなに、私にくれたがるんですか。おかしいじゃありませんか。なぜそう、しつこくなさるんですか」
「お願いがあるからです」と、男はやっと本題に入ったように、真顔になって言った。「お友だちに、もうこれ以上、深入りしないようにおっしゃっていただけませんか」
「友だちって、克子に？」
「ええそうです」と、男はきびしい口調で言った。「これ以上、深入りすると、いまに、きっとわるいことが起きます」
「あなたたちに」と、律子はついカッとなって言った。「克子は、麻酔をかがされて、赤ちゃんまで始末させられたんですよ。それよりわるいことが起きるというんですか。克子を、どうしようというんです、いったい、あなたがたは何者なんですか？」
「そのようにお伝えください。では……」
　男はいんぎんに一礼すると、すたすたと足早やに去っていった。律子は、ちょっと男の後姿を見送って、それから、思わずふうっとドアに寄りかかった。すると、そのとき、店の中で電話が鳴りだしたので、律子は、あわてて鍵をあけて中に入り、受話器をとった。興奮ぎみな甲高い克子の声が流れてきた。
　夕方、律子と克子は、華やかな都心部の夜景を見おろすことのできる展望レストランで落ち合った。二人は、窓際に坐って、思い思いにネオンの洪水にみとれていた。近代的なこの、同じ東京の

屋根の下に、いまだに常世の国を信じている人たちがいるなどということは、常識ではとても考えられないことである。が、律子は、何よりもまず、危険から克子を救いださねばならなかった。

「くどいようだけど」と、律子はポツリと言った。「克子、あんた、拓也さんを捜すの、どうしてもやめない気？」

「律子、もう絶対に、あなたまでまきこまないわ。ほんとにごめんなさい」

「私がおりちゃったら、あの下条とかいう男と一緒にやるつもり？」

「それはわかんないけど、とにかく私は諦めないわ」

「あんたって、バカねえ」と、律子はもうほとほとあきれた。「克子、拓也さんはあんたを裏切ったのよ。残酷な言いかたかもしれないけど、あんた、拓也さんに捨てられたのよ……それでもまだ、拓也さんをそんなに愛してるっていうの？ ……それとも、赤ちゃんの復讐？」

「たぶん、その両方だわ」と、克子もため息まじりに言った。「だって律子、いま私がやめちゃったら、ほかに何をしたらいい？ ほかに、私のやれることって、いったい何があると思う。なんにもありゃしない……」

いまにも泣きだしそうに、弱々しく克子が言った。そんな克子に、律子はもう、何も言う言葉がなかった。

「もういい。明日、迎えにいくわ」

「律子ッ、あなたこそやめて。これ以上、あなたにはもう、迷惑をかけられないわ」

「しかたがないわ」と、律子は諦めたように言った。「私がおりても、あなたがやめないかぎり、どうせ脅されるのは同じですもの。しようがない、とことんつきあうわよッ」

苦しいときに助け合ってこそ、友だち甲斐というものだ、と律子は思う。ここでおりてしまうわ

けにはいかなかった。

翌る朝、律子は国道127号線を、君津市に向かって突っ走った。空は青く晴れ、下りの車線はガラすきだったので、律子と克子は、カーステレオから流れる軽快なマリアッチを聞きながら、しばらく心配も忘れて、絶好のドライブを楽しんだ。

地図をみるとずいぶん離れているが、君津駅前についたときはまだ十一時前で、律子は房総半島中央部、上総のこの町まで二時間足らずでぶっとばしてきたわけである。駅前で道を聞いて、律子は、近くの市役所建設地から、国道へとつながる道をさらに突っ走った。東京湾に面したこの君津市は、いま全市をあげて大改造に着手し、新しい町づくりを始めており、あちこちの宅地造成地では、ブルドーザーがうなりをあげ、ダンプカーが走りまわっていた。

国道を走っているとき、とつぜん、克子が「あそこよ、見てッ」と、律子の袖をひいた。みると、前方に《常代団地入口》の矢印が出ている。

「トコヨ団地……だとすれば、このあたりはもう常代村なのかもね」

「常代と書いて、村の名前はトコシロって読むのよ」

得意げに、克子が訂正した。もうすぐ、夫の拓也にめぐり会えるような明るい希望が、克子の心に大きく拡ってきていた。車が矢印の方向に曲がっていくと、まもなく、団地が現われ、入口には《常代団地》のネームプレートがかかっていた。

二人は、そこでまた通行人に道を聞いて、車をすすめた。雑木林と田んぼの中に点在する集落がみえはじめた。そこが常代村である。律子の車は、細い田んぼ道のような通りへと入っていった。道端に、常代白寿会の立てた木の交通標語があり、その先を、律子はカーブを切った。と、道のつ

きあたりに、ひっそりとした神社がある。
「あれだわ！」と、克子がはずんだ声で言った。
常代神社の前までくると、鳥居のところに一台のマイクロバスがとまっている。律子は、車を横道へまわして駐車させた。待ちかねたように車からとびだした克子は、眼を輝やかせて、鳥居をじいっとみあげていた。
「字は違うけど、もとは常の世と書いてたらしいのよ。だから常世の国のトコヨと同じなんだわ」
下条が昨日、菱沼勇、梅田義彦共著の『房総の古社』を読みながら話したことを、克子は律子に受け売りした。
「常代神社」は、明らかにトコヨと読まれていたらしい。
『三代実録』の天慶元年紀には「上総国常世神に従五位下を授く」と出ているという。これによれば、神社の名前も、かつては「常世神社」であったことが明白である。
現在の祭神は、豊受姫神、またの名を食稲魂命となっている。しかし、『三代実録』には、「常世神」とはっきり出ている。いったい「常世神」とは何か。
『日本書紀』皇極天皇三年（六四四）七月の条に次のような話が出ている。
富士川のほとりに、大生部多という者がいて、長さ四寸、親指ほどの太さで、緑色で黒色のはん点のある虫を、村人たちに、常世の神だといって、祭ることをすすめたという。現在の、かいこか、いも虫のたぐいであろうか、その虫を祭るために、家を傾けるものも多かったので、大生部多は罪に問われ、この常世神信仰も消えたというのである。
それでは、この「常世神社」は、そのいも虫のようなものを祭った神社なのか。そうではあるまい。

考えてみれば、『日本書紀』の記事もおかしい。常世神を祭るために家財を捨てたものが多いというが、果たしてそれは事実か。

中にはそんなものもいたかもしれないが、それは、ひょっとすると「常世神」を弾圧するための口実に使われたのではないか。

時の大和朝廷にとって、「常世神」とは大っぴらに祭ったり、口にしたりしてはいけない神だったのではあるまいか。

いずれにしても、この君津市常代村の「常世神社」の真の祭神は、不明のままなのである。

「だけど」と、律子がちょっと皮肉っぽく言った。「別段どうってことないみたいじゃない？　こんなちっぽけな神社に、いったい、何があるのかしら」

が、その律子も、石段をのぼったとき、思わずギョッとなって立ちどまった。社殿の前に、十名ほどの白い衣裳を着た男たちが、じいっと坐っているのである。背を向けて大地に坐りつづける男たちの衣裳は、古代人の着ていたような、からだにゆったりとした貫頭衣に近いものである。息をつめて男たちをみつめていた二人は、どちらからともなく足音を忍ばせ、傍らの杉林の中に隠れた。

男たちは合掌しながら静かに頭をさげると、やおら立ちあがって、いっせいにこちらを向いた。そのとたん、あわや悲鳴をあげるくらい、二人は驚いた。それらの男たちはすべて、仮面をつけていたのである。その仮面は、伎楽面のようでもあり、土偶のようでもある。克子も律子も、息を殺して、杉林の中からこわごわ覗いていた。

男たちは、静かに歩いてきて、二人がひそんでいる前を通りかかった。そのとき、突如、克子があッと叫ぶと、いきなり「あなたッ」と、男たちの前にとび出していった。男のひとりが、はっと

立ちどまった。
「あなたッ」と、追いすがる克子を、仮面の顔がたじろぐようにちょっとみた。が、男は軽く克子を押しのけると、すうっとそのまま歩きはじめた。
「拓也さん、あなたなんでしょう!」と、克子は、追いかけ、追いすがって、その男の手をとらえようとした。「あなたッ、私です、克子です、返事をしてくださいッ……」
叫びながら、なおもすがりつこうとしたとき、横の男が力まかせに、克子を押し倒した。
「克子ッ」
律子が駈け寄って抱き起こすと、克子は、足早やに石段をおりていく男たちを、びっこをひきながら、狂ったようになおも追いかけた。
「克子、どうしたのよッ」と、律子が腕をとって、引きとめた。克子は、その手を「放して」と、ふりきって男たちを追った。石段をおりると、男たちはマイクロバスの中にのりこみ、車はすぐ走りだした。転げるような勢いで克子が駈けおりる。走りだしたマイクロバスを「待って、あなたッ」と、追いかける。そんな克子を、律子はやっと駈け寄りけんめいに抱きとめた。
「やめなさい、克子」
「放して……」と、もがきながら、克子は、なおも叫んだ。「ね、お願いッ、あのマイクロバス、追いかけてッ」
克子は、やにわに律子の車のドアをあけると、助手席に乗りこんだ。マイクロバスが角を曲がって消えた。
「いったい、どうしたって言うの?」
「あの人がいたのよ、主人が」

「拓也さんが?!」と、一瞬、律子があきれた顔になった。「なに言ってるのよ。そんなこと、わかりっこないわ」

しかし、克子には、それが夫の拓也であることがわかっていた。高校で野球をやっていたとき、拓也は肩の骨がはずれたのも気づかずにそのまま練習をつづけ、このために右肩が片輪になっていた。それ以来、歩くときにちょっと右肩をさげるクセが拓也にはあったのである。

「わかるのよ」と、克子は叫んだ。「あの人がいたわ、間違いないのよ。たとえ、顔がみえなくたって、私にはわかるわ。ね、お願い、追いかけて、律子ッ」

克子の眼にうっすら涙がにじんでいるのをみると、律子は言いなりになって追いかけるよりほかはなかった。

国道へでると、律子はマイクロバスの後を追って館山方面へ向かって南下した。右手は海で、湘南の山々、伊豆の山々が一望のもとにおさめられ、富士がひときわ高くそびえ立っていた。車は、まもなく鋸山付近にさしかかっていた。国道は、海岸線に沿ってうねうねと曲がって走り、はるか向こうを、マイクロバスが崖を曲がってはあらわれ、また崖のかげに見え隠れしていた。

「ね、もっとスピードを出せないの」

克子は、もどかしげに律子をせきたてた。

「だめよ、いまだって白バイに見つかったらたいへんなんだから」

克子は、残念そうに唇をかんでいたが、いつのまにか、律子はマイクロバスを見失ってしまっていた。

「ごめん、ごめん……でもさ、本当に拓也さんがあの中にいたか、どうか」

「いたわ、絶対ッ」と、克子がなじるように甲高い声をあげた。

「そんなに怒らないでよ」と、律子も食ってかかった。「だとすれば、拓也さんがあの神社に関係のあることがわかっただけでも、たいした収穫じゃない？　けど、あの人たち、いったい、何やってたのかしら」
「きっと、禊にきてたんだわ……常世の禊」
なんて変な連中だろうと律子は思ったが、それは言わなかった。とにかく、マイクロバスを見失ってしまった以上、常代神社にまた引き返して、近所の人にでも聞いてみるしかない。何か知っている人がいるかもしれないからと、克子をなだめすかして、律子は、車をターンさせ、また国道を君津のほうに向けて突っ走らせた。
律子の車がトンネルをくぐって出てきたとたん、克子が、ぎゅうッと腕をつかんで、あッと小さく叫んだ。「どうしたのよ」と、急ストップをかけて、克子の視線を追った。すると、国道から分岐した狭い道が斜めにくだっていて、その道の小さなトンネルからでてきたのだろう、あのマイクロバスが、こちらに向かって走ってきたのである。克子と律子は、ぱっと車をとび出すと、小道におりていき、マイクロバスの前に立ちふさがった。
「なんか用かい」と、運転手が呶鳴った。「邪魔しないでくれよなッ」
「あのォ」と、克子は近づいて言った。「さっきのお面をかぶった人たちを、どこで降したんですか？」
「この下の村だよ」
「この先に村があるんですか？」
「ああ、三日月村だよ」
運転手は、そんなことにいちいちかまってはおれないといった調子で、無愛想に車を走らせた。

そのあと、律子は車を狭い道に乗りいれ、じめじめした暗い小さなトンネルにはいっていった。トンネルの向こうには、山と海にはさまれて、崖にへばりつくように軒を連ねた二十戸ばかりの小さな集落があり、猫の額ほどの砂浜に数隻の漁船が引きあげられていた。律子は、なぜかためらうものを感じて、トンネルの近くで車をとめた。

「あの男たちは、この村から……」

律子がそう言いかけたとたん、突如、克子が村に向かって走りだした。村の中は、人影がなく、もの音ひとつしなかった。

「あなたァ……あなたァ」と、克子は、ひっそりした村の中を走りながら絶叫した。「拓也さーんッ、どこにいるんですか……私よォ、克子よォ……あなたァ」

しかし、村の中は静まり返ったまま、岸壁に、どどどーん、とうちよせる波のほかは、なんの答えもなかった。「あなたァ」と叫びながら走ってきた克子も、海に吸いこまれる声のあまりの虚しさに、思わず足をとめてしまったほどだった。実はそのとき、家々の窓、カーテンの隙間から、村びとの眼がのぞいていたのだが、克子は気づかなかった。

「あなた……いったい……どこにいるんですか……あなたァ……」

泣かんばかりに叫びながら、克子は、海岸線に沿ってなおも歩いていった。と、ふわーっと、柴色の煙が流れてくるのに気づいて、思わず克子はそのもとを眼でたどった。そそり立つ岩の前に、小さな鳥居があって、煙は、その鳥居の奥から流れでていた。けげんな表情で、克子はそっと鳥居をくぐっていった。岩壁の下は洞穴になっていて、煙のもとは、その中だった。

人の気配を感じながら、ふっと洞穴をのぞいた克子は、そのとたん、あッと思った。中には、四

角に切った石のいろりがしつらえられ、ほだ火がちょろちょろ燃えている。そして、いろりの向こうに、神棚を背にして白髪の老婆が坐っている。尾形トメである。

「しばらくでしたなァ、奥さん」

言って、トメがにこっと笑った。ごくありふれた老婆の挨拶だったが、克子には、ぶるぶるッと身ぶるいするほど不気味であった。まったく、得体のしれない老婆だった。が、克子はいま、ついにつきとめたという思いで、武者ぶるいがとまらなかった。房総半島の一角にひっそりうずくまったような三日月村、そこに尾形トメがいた。そして、夫の拓也もまた、確かにこの村にいるはずだった。

仮の契り

「尾形さん」と、克子は、トメの両肩に手をかけながら言った。「夫をかえしてください。拓也さんを、私の夫をかえしてくださいッ。ね、尾形さん、お願いッ……」
　トメは、黙って枯柴をいろりにくべていた。燃えあがる炎が、トメの顔を赤々と照りかえした。
　一本の柴を灰の中にさすと、焼イモをその先に引きぬいた。
「おあがりなさい」と、トメが何ごともなかったように言った。「ちょっと、ほかでは食べられない、おいしい焼イモですよ」
「ごまかさないでください。主人をかえしてくださいッ」
　と、克子は、なおもトメにむしゃぶりついた。しようのない駄々っ子の相手をするかのように、トメは、まったく動じなかった。
「あなたの夫？　ご主人？　はて、なんのことでしよう」
　言って、尾形トメは小馬鹿にしたように、むしゃむしゃ焼イモを食べだした。
「ご存知のはずです」と、克子はトメの肩をゆすりながら、じれったそうに言った。「いつか、あの古いビルの儀式で、あなたと夫は一緒でした。今日だって、夫の乗った車の後をつけて、この村

までやって来たんです……尾形さんッ、夫は、拓也さんはどこにいるんですか？」
「奥さん」と、トメが冷笑しながら、あくまでシラをきるように言った。「なんでしたら、気のすむまで捜しなさるがいい……ごらんのとおり小さな村ですから、一軒一軒、遠慮なく捜してみなさるがいい」
「隠したんですねッ、尾形さん、夫を、どこかに隠してしまったんですねッ」
半ば訴えるように、挙でトメの胸もとを軽くたたきながら、克子は問いつめた。
と、背後で突如、女たちの忍び笑いが起こった。いつのまにきたのか、克子をとりまくように、二十人ほどの村の女たちが、洞穴の入口に立っており、克子がふり向いたとたん、ピタリと笑いをとめて、じいっとみつめた。一瞬、克子はたじろいだが、勇気をだして、哀願するように、トメにしがみついた。
「ねッ、お願いです。主人をかえしてくださいッ」
「はて、どうしたもんかいな」と、尾形トメがなぶるように言った。「たとえかえしたくも、本人が帰りたくないということもありますからね……」
背後で、女たちがどッと笑った。克子が、思わずかッとなってふりかえると、女たちはいっせいに笑いをとめた。
「尾形さん」と、克子は、ちょっと皮肉な眼つきで言った。「この女の人たち、みなさん、常世の国の信者の方ですのね」
「ほう、もうそこまでご存知でしたか」
「常世の国と夫と」と、克子は、うって変わって悲痛な声で言った。「いったい、どんな関係があるというんですか。夫も、常世の国の信者だとおっしゃるんですか……尾形さんッ、主人も信者な

んですかッ」
「何を信じようと、いいじゃありませんか。信教の自由は、日本国の憲法でも保証されてますからね」と、トメは立ちあがり、さらにつづけた。「……もしかすると、平凡な家庭生活よりも、信仰の道のほうがよかったのかもしれませんね。現に、奥さん、あなたを捨てて来たんですからね」
女たちが、また笑った。
「お願いです」と、克子がトメに追いすがって言った。「合わせて……主人に合わせてください。尾形さん、お願いします」
が、このとき、いきなり律子の「助けてえッ」という悲鳴が聞こえてきた。克子は、はッとして立ちあがると、女たちをかきわけて走りだした。「律子ォ」と、克子は叫びながら、村の坂道をトンネルのほうへ、けんめいに走っていった。
自動車をとめたトンネルの前で、律子は、数名の村の男たちにとり囲まれていた。男たちは、ニヤニヤ笑いながら、律子ににじり寄って、首すじを撫でたり、スカートをめくったり、わるふざけをしていた。
「何すんのよッ……近寄らないで……いやーッ」
悲鳴をあげながら、律子は、トンネルのほうへ後ずさりしていった。が、暗いトンネルの中にも、数名の男たちがゲラゲラ野卑な声をあげながら待ちうけていた。律子は、ぞッとしながらも、男たちにからだを触られるのでどうしようもない。じりじり、トンネルのほうへ追いつめられていった。
「律子ッ」
と、克子が、男たちを突きとばすようにして、律子のそばに駈けつけた。気丈な律子も、思わず

「克子ォ」と、へなへなしゃがみこんでしまった。その律子をかばうように、克子は、男たちの前に手をひろげて、立ちはだかり、きっと睨みつけた。
「何するんですかッ」
男たちは、舌なめずりをしながら、ニヤニヤ笑っていた。一人がなおも律子に近づいた。
「この人には関係ないわ、離れてッ」
と、克子はいきなり、その男の股間をひざかぶで思いきり突きあげた。「痛ててッ」と、男は前を押えて転げまわった。が、これは単なる余興にすぎず、男たちは、手をたたいてゲラゲラ笑い興じていた。
「克子ッ、そこの黒マントの男なのよ。あの勾玉の首飾をもって来たっていうのは！」
克子は、黒マントの男を睨みつけるようにみすえた。と、その隣りには、なんと、あの古ビルをクビになったという管理人もいたのである。そればかりではなかった。拓也の蒸発を自殺にみせかけようとした、伊豆の偽警官や偽刑事もいたのである。改めてこみあがってきた怒りで、克子は、頭がくらくらッとなる思いだった。
「主人をかえしてッ」と、克子は、そこでも男たちに叫んだ。「主人は、どこにいるんですか……拓也さんに会わせてください」
が、克子の甲高い声は、逆に、男たちを挑発する結果になった。ニヤニヤしながら、二人ににじり寄ると、男たちはそのうち、いっせいに手をのばしてつかみかかってきた。男たちにもみくちゃにされて、たまらず、二人は悲鳴をあげた。
「やめなさいッ」
突如、ひときわ甲高い声がかかり、そのとたん、男たちがさっと手を引き、一瞬しんとなった。

それは老婆の尾形トメで、洞穴にいた村の女たちを後ろに従えていた。
「さ、男衆は帰った帰った」と、トメは、男たちを追いちらしながら言った。「このひとたちは、村の女じゃないんだから、手を出すんじゃないよ。わかったねッ」
女たちの間から、クスクス忍び笑いがわき起こった。男たちは、なぜか尾形トメの言葉には柔順で、誰ひとり逆らう者もなかった。トンネルの中へ、男たちは入っていき、そこにいた連中と一緒にガヤガヤ遠ざかっていった。
「奥さん、びっくりしたでしょ」と、尾形トメが近づいて言った。「この村じゃ、男も女もみんな、誰のものでもない、村全体の共有になってるもんだから……」
尾形トメの言葉が、あまりにも淡々としていたので、克子も律子も、あやうく聞きもらすところだった。
「えッ、村全体の?」と、克子は驚いて聞きかえした。「だって、それじゃ、赤ちゃんはどうなさるんですか」
「生まれた子どもだって、もちろん、村全体で育てとるんですよ」と、トメは平然とうそぶいた。
「もっとも、戸籍やら何やらとうるさいもんで、一応は、夫婦に子どもという形で役場に届けてありますがね……そんなわけで、男たちは、この村へ入って来た女をみんな自分たちのものだと思ってしまうんですよ」
律子は、なんという人でなしの集団なのだろうと、あいた口がふさがらなかった。何がおかしいのか、女たちは、ヒソヒソ語り合いながらクスクス忍び笑いをしていた。もうこれ以上、こんな危険なところにいたら、いったい何をされるかわかったものではない、早く立ち去ったほうが無難だ、と律子は思った。

「もうわかったでしょ、克子、さ、帰りましょう」と、律子は強引に腕をとって言った。
「ここは、私たちのいるところじゃなさそうだから……」
「そうそう」と、尾形トメが満足げに眼を細めて言った。「お友だちの言うとおり、おとなしくお帰りなさい。そして、この村のことは忘れることじゃ」
「いやです」と、克子はすっかりムキになって言った。「拓也さんに会わせてください。ここにいることは、もうわかっているんですから」
「しつこい人だの……だから、家さがしなりなんなり、気のすむまでやればいいと言うとるでしょう」
律子は、帰ろうというように、ぐいッとまた腕を引っぱった。が、克子は、その腕を力づくでふりほどくと、そうだわ、と尾形トメの背後の女たちのほうに、血走った眼を向けると、甲高いヒステリックな声を張りあげた。
「佐知子さん……下条佐知子さん、いらっしゃいませんか……いるんでしょ……あなたがたの中に、下条佐知子さんがいるんでしょ。いたら答えてください、ご主人が捜していらっしゃるんですよ……佐知子さん、下条佐知子さんッ……」
「おやめなさいッ」と、律子がきびしい口調で言った。「帰りましょう。さ、来るのよ」
と、克子の腕をとって、自動車の前まで強引に引っぱった。尾形トメと女たちが、勢いにのまれたように、思わず、前に歩み寄った。
「律子、お願い、放してッ」
「だめッ、とにかく、今はだめ……このままじゃだめよッ、ちゃんと準備をして出なおしましょ」
と、律子はなだめすかし、それから腹にすえかねたように言った。「尾形さん、東京へ帰ったら、

私、警察へ訴えでますよ。いいですねッ」

「ほう」と、尾形トメが眼を細めて言った。

「警察へね……なにしに行かれるのですかな。ま、それは、あなたのご自由ですがね」

「自分たちのやったことを、よく考えてみるといいわ」

「はてね」と、尾形トメが、うす笑いをうかべながら言った。「わしらが、いったい、何をしたのじゃろう……」

「しらばっくれないでよ」と、律子も負けてはいなかった。「私が、ちゃんと証人よ、覚悟しててちょうだいッ」

「おや、おかしな人もいるもんじゃで」と、尾形トメは、鼻もひっかけなかった。「証人ったって、第一、なんの証拠もないんじゃないでしょうかね……それより、あなた、信教の自由は何びとも束縛できないはず、あまり邪魔だてしないほうが身のためじゃないでしょうかねえ。天罰はおそろしいですよ……」

律子は尾形トメを睨みつけていたものの、グウの音もでなかった。

克子はそのとき、物に憑かれたように、じいっとトンネルのわきにある小屋をみつめていた。高床式のその小屋は、以前、納屋として使われていたものだろうか。が、いまは戸もこわれて落ちかかっており、明らかに使われてはいないことがわかる。じいっとその小屋をみつめながら、克子は、律子の腕をほどいた。

「どうしたのよ、克子ッ」

が、克子はそれに答えないで、すっとトメの前に歩み寄った。

「尾形さん……あの小屋は空いてるんでしょうか」

「ああ、空いてますよ」と、トメは眼を細めながら、すかさず言った。「けど、それがどうかしましたかね」
「どなたの小屋なんでしょうか」
「どなたのって、そりゃあ」と、トメは、柔和な表情で言った。「この村のものは、すべて村全体のものですよ。家も、子どもも、男も、女もね……あれは、ひと昔まえまではウブヤでしてな、女たちが子どもを産むときや、月のものでけがれたときは、あの小屋にこもったもんですよ」
山を背に、ひっそり建っている納屋のたたずまいを、克子は遠い眼でみつめていた。
「けど、ご時世ですかね、ちかごろは、ウブヤなどを使う女衆もいなくなりましたよ」
「そんなご時世でも」と、律子が皮肉な一矢を放った。「常世の国を信じることだけは、別ってわけね」
「そんなこと、あんたにいちいち、とやかく言われる筋合いはないッ」
一瞬、尾形トメはけわしい表情になったが、克子の心情の微妙な変化を思いだしたように、ん？と、もとの柔和な顔になった。
「あの納屋を、私に貸してくださいッ」と、眼を輝やかせて克子が言った。「私、あそこに引っ越してきたいんです。そして、この村の人間になりたいんですッ」
「何を血迷ってるのよ、克子」
律子が、あぜんとして叫んだ。
「貸していただけなければ、私、どこかに自分の小屋を建てて……」
尾形トメは、おかしそうにケラケラ笑った。が、克子は冗談ごとではないというように、強いまなざしで、自分の気持ちをじいっと訴えつづけた。

「もし本気なら」と、尾形トメが、にこっとして言った。「お貸ししないわけにいかないでしょうね。なんといっても、奥さんとは、ついこの間までお隣り同志だったんですものねえ。いいですとも、住みたければ、住んでごらんなされ」

律子は、あきれて物も言えなかった。が、それは、尾形トメの背後にいる村の女たちも同様で、異議を唱えるようにざわめきが起こった。

「おばば」と、ひとりの女が叫んだ。「よそ者ンに、そんなこと言うていいのンかいな」

「いいんじゃ、いいじゃ」と、尾形トメは、うなずきながら言った。「けどな、奥さん、さっきも言いましたとおり、男も女も村全体のものというのがきまりですよって……それに、二十歳をすぎたら、男も女も、それぞれ自分の相手を選ばねばなりません……きまりの相手がいない者ンは、村の男の誰かを必ず選ばねばなりません……」

「克子」と、律子が、がっちり腕をとって言った。「そんなバカなこと、私、ゆるさないわよ。おいで、さ、帰るのよッ」

律子は、ぐいぐいと克子を引っぱっていき、むりやり車の中におしこんだ。克子も、それ以上、律子に逆らおうとはしなかったが、納屋をみながらじいっと考えこんでいた。律子が乗りこむと、車はすぐ動きだし、小さな暗いトンネルの中へ消えていった。

原始社会じゃあるまいし、家も、子どもも、男も、女も、村にあるものはみんな、ことごとく村全体のものだなんて、いったいどういうことよ。あんな村に住みこんだ日には、まったく、何をされるかわかったものじゃない。いいぐあいに、村の男たちのなぶりものにされるだけよ。ひとをバカにしてるわ！

帰りしな、律子は、常世の国の狂信者たちが不愉快でならなかった。とりわけ、克子に「来るな

ら、いらっしゃい」などと無責任な手をさしのべた、あの尾形トメに対して、律子は、むしょうに腹が立ってならなかった。

しかし、克子にとっては、そんなことよりも、夫の拓也が、ほんとうに自分を捨てて、常世の国のほうを選んだのかどうかが、より重大な問題だった。だから、なんとしても、自分のことをもうなんとも思ってはいないのかどうかを、まず確かめたかった。それがはっきりしないかぎり、何も始められないとさえ思っていた。

「冗談じゃないわよ、克子ッ」と、律子は、ジリジリしながら叫んだ。「そんなことになったら、たとえ拓也さんに会えたところで、もう、とりかえしのつかないことになるわよ……そんな簡単なことが、どうしてわかんないのよッ」

「あの人に会うためには、仕方ないわ」と、克子は弱々しくいった。「それ以外に、拓也さんのことを探る方法がないんですもの……」

律子は、とめてもムダだと思い、それ以上はもう何も言わなかった。アパートの前で、車を降りると、克子は疲れたからと、そのまま律子と別れた。が、部屋へ帰ると、克子はすぐに下条鋭一に電話をかけた。律子と違って、自分と同じ立場にある下条ならば、この苦しい心境を理解してくれるはずだと思ったからだが、案の定、下条は車をとばして駈けつけた。

克子と下条では、お互いにブレーキをかけようがない。三日月村に夫の拓也がいることは、まず間違いない！　確信のこもった克子の話に、下条がすっかりあおり立てられ、それにまた克子の気持ちがはずみをつけられるというふうで、一緒に三日月村へ行こうという二人の相談は、たちまちまとまった。

翌る朝、克子と下条は、東京駅で落ち合うと横須賀線の久里浜に向かった。そこから、二人は、

久里浜と房総金谷を結ぶフェリーに乗りこんだ。いわゆる浦賀水道を横断すると、房総半島までは、ほんのひとまたぎである。フェリーは、海の向こうにどっかり横たわる房総半島へ、まっしぐらに突きすすんだ。

「昔、大昔……」と、下条がかすむ房総中部の山々をみつめながら、克子に言った。「大和朝廷に従おうとしない蝦夷の討伐に、ヤマトタケルノミコトが通ったのも、この浦賀水道だと言われているんですよ」

下条は、さものんきそうに、そんな伝説を克子に聞かせたりしていたが、その足もとに置かれた皮鞄が、いまや彼の全財産だった。蒸発した妻の足跡をたどって、各地を意地になってたずねまわるうち、すでに落ちるところまで彼は落ちていたのである。

「その海上の道を渡るとき」と、下条は、つらい思いでを忘れたように、楽しげに語りつづけた。「とつぜん、海が荒れはじめたので、海の神、わだつみの神の怒りだと、人びとは騒ぎはじめだしたんです。そのとき、ヤマトタケルノミコトにつきそってきたオトタチバナヒメが、海神の怒りをとりしずめるために、自らその身を、荒れ狂う海に沈めたと言われています。これは、古事記にでている有名な伝説です」

「昔からここは、海神の住む海と思われていたんですね」と、うねる波をじいっとみつめながら、克子がポツリと言った。「海神……それは、やはり竜宮城に住んでいたんでしょうか。常世の国だと言われる竜宮城に……」

そんな克子を、背後から下条は物言いたげな表情でみつめていた。克子は、ふとその視線を感じてふりかえった。

「克子さん」と、下条は、うろたえながらもわるびれずに言った。「三日月村では、二十歳をすぎ

た男女は、必ず相手をきめなければならないと言いましたね。もしきめなければ、村の男たちの誰かと、必ず結ばれなければならないと……」

覚悟はしているというように、克子は、大きくうなずいた。

「もし、ぼくでよかったら……」

「ぼくでよかったら、その小屋で、ご一緒にいかがでしょう……」

「えッ？」

「下条さん」

「わかっています」と、下条が、いくらか落ち着きをとり戻したように言った。「私は妻を、そして、あなたはご主人を捜しています……それならば、村の男や女から、お互いにかばいあうこともできるんじゃないでしょうか……」

克子は、すぐには返事ができずに、相手の真意をさぐるように、じいっと下条の顔をみつめた。下条も眼を伏せられなくなり、克子の顔をみつめているしかなかった。すると、そのうち克子は、一緒に助け合いましょうというように、しっかりとうなずいた。

いっぽう、三日月村では、尾形トメがトンネルわきの納屋を貸してもいいと言ったことから、女たちとの間に議論がわいていた。おばばはどうかしている、というのが女たちの意見だった。来るはずがない、とトメはたかをくくっていた。しかし、克子たちが三日月村をつきとめたことに、女たちは不安を抱いて、トメにつめ寄った。が、経験の豊富なトメは、女たちよりやはり上手だった。いざとなれば、近くにおいていたほうが、監視にもなるし、むしろ安全ではないか、と思っていたのである。

ところが、予想に反して、克子が翌日さっそくやってきたばかりか、思いがけなく下条鋭一まで

が一緒について来たことから、三日月村は、非常召集の半鐘が打ち鳴らされ、ちょっとした騒動になった。高みになっているトンネル出口の半鐘を打っているのは、律子の「ブランコ」にあらわれた、あの黒マントの男、伊吹信次である。

家々から、女たちばかりではなく、男たちもとびだしてきた。そればかりではない。トンネル向こうの上の村も、常世の国の信者たちの部落で、急を聞いた男たちが、トンネルからゾロゾロ、群れをなしてあらわれ、海岸へと駈けおりていった。

海岸では、克子と下条が尾形トメの前に立ち、女たちがそれをとりまいていた。下条は、女たちをひとりひとり眺めまわしていたが、まもなく、がっくり肩を落として首をふった。おそらく、拓也と一緒に、どこかに隠されているに違いない、と克子は思った。そのうち、男たちが勢揃いして、女たちの外側をぐるりととり囲んだ。

「みなの衆」と、尾形トメが村人たちに呼びかけた。「この人たちが、どうしてもこの三日月村に住みたいと言っての」

どどどーん、と岩をうつ波の音のほか、しわぶきひとつ聞こえず、しんと静まりかえっていた。村びとたちは、まったく無表情のままみつめているだけだった。

「それでこのふたりは、それぞれを自分の相手として認めてほしいと、こう申しでておるんじゃが、どうしたものかの？　反対の者は、前へでてくだされ」

村びとたちは、やはり冷ややかに克子と下条をみつめているだけだった。

「どうやら」と、一同を見まわして、尾形トメは言った。「別に反対はないようじゃの」

が、トメのその自信に満ちた言葉は、同意を求めるというよりは、むしろ命令だった。村の衆の中でも特異な立場にあることが、ありありとしており、トメは、単なる蛇使いの老婆ではなく、村

の長老といった図である。

「それじゃ」と、克子が、ほっとしたように言った。「あの納屋を貸していただけるんですね。ありがとうございました」

「それはまだです」と、尾形トメがきびしい口調で言った。「三日月村の住人になるためには、まず禊をせねばなりません……海神さまに、あなた方の身のけがれをはらっていただかねば」

尾形トメの言葉には、有無を言わさぬひびきがあり、克子と下条は、息づまる思いだった。蒸発したあと、下条の妻や克子の夫が、浦島伝説の地を巡礼してまわったのも、常世の国を信じる人びとの、きびしい戒律に従ったものである。

禊のために、克子と下条は、裸のうえに白い布をまとった姿で、寒風の吹きさらす鳥居の前に端座させられた。そのまわりを、村人たちがとりまいていた。老若男女、子どもたちも含めたその村の衆は、手に手に海水の入った器を抱えている。そのうち、老婆たちの呪文の合唱にのせて整然と列をつくると、凍てつくばかりに冷めたいその海水を、次々とふたりの頭にかけていった。正面、洞穴の中にちょろちょろ燃えるほだ火が、その向こうにしつらえられた岩棚の小さな神棚を照らしていた。海水に濡れた白衣はふたりの肌にぴったりと貼りつき、体の線を浮きたたせた。寒さで唇が真っ青になったふたりは、いやでも合掌して、海神に祈りをさゝげるほかはなかった。

こうした経過をへて、ふたりはやっと納屋の住人として許された。裸電球がひとつあるきりの小さな部屋のまん中に、ふたりは旅行鞄を置いて間仕切りがわりにし、その双方に分かれて毛布にくるまった。が、その夜は、克子も下条も疲れと緊張のため、何も考えずに眠った。考えるいともなく、ただ寝みたかったのである。

盟神探湯（くがだち）

こうして、ふたりの三日月村での生活がはじまった。
夜は間仕切りにカーテンを引いて寝、昼は村中を捜しまわった。しかし、一向に拓也や佐知子の消息はつかめなかった。
そんなある朝、克子は、船の発動機の音で眼をさました。朝の海は、隠やかだった。数隻の船がちょうど、朝日をうけて、黄金色に輝く波をわけながら、岩場にとりまかれた小さな渚に帰ってきたところだった。奇しくもそこは、天然の良港だった。山肌に囲まれ、朝日をいっぱいに受けた三日月村は、平和そのものである。海岸には、多勢の女や子どもたちが出迎え、近づく船のエンジンのひびきが、心地よくこだましていた。
克子は、階段の傍らの木の小枝に小さな鏡を吊るし、不自由な思いをしながら髪をすいていた。船のエンジンの音が、いつのまにか止んでいた。人の気配にふっとふりかえった克子は、思わず「あらッ」とあわてた。下条が立っていたのである。男に見られた気恥かしさで赤くなりながら、克子は、急いで髪をまとめあげた。
「海岸へ行ってもらってきました」

と、下条は手に二三匹の魚を提げていた。魚はまだ生きていた。船は、まだ暗いうちにでていき、漁を終えると、近くの港の市場に陸揚げし、村で食べる分だけを持って帰ってくるのである。それだけを見れば、なんの変哲もない、日本ではごくありふれた漁村の風景だった。

納屋の片隅には、小さな流しをしつらえ、そこにガスレンジを置いたりして、調理にもこと欠かなかった。納屋に住むようになって二三日は、克子も暮らしの設計やら整備に追われて、ずいぶん忙しい思いをした。それなりに気もまぎれ、久しぶりに充実した日をおくることができた。

そんな克子にくらべ、いっぽう下条のほうは、逆に、日ましに精彩を欠き、いらだちがしだいに色濃くなっていった。克子が、夫の拓也はこの村のどこかにいると信じているのに対して、下条のほうは、妻が果たしてここにいるのだろうかと疑惑を抱きはじめていた。ふたりの会話も、とかくすると、ちぐはぐなものになりがちだった。

「もう一週間にもなる」と、朝食の手をとめて下条が言った。「なのに、この村のどこにも、佐知子ばかりか、あなたのご主人がいる気配もなかった……」

「きっといるわ」と、克子は信じて疑わなかった。「きっと、私たちの探し方がたりないのよ。佐知子さんも、拓也も、三日月村のどこかに必ずいるはずだわ……わかるはずよ、そのうち……イライラしても仕方ないわ」

「なんのために、ぼくたちは、こんなことをしているのだろうか」と、不安な箸をおいて頭を抱えた。「こんなママゴトみたいな……君は、ここにいるのがぼくではなくて、この料理を食べてくれる人が、ご主人だったらと……」

「やめましょう、そんな話……会えるわ、そのうち、必ず……」

克子のはげしい視線に、下条はうろたえ、しだいにうなだれていった。

その日の午後のことである。山の中腹から、のどかな、やわらかい日ざしの中を四五名の男ばかりの行列が、静しずと降りてきた。男たちは手に手に花を持ち、中央の男は、胸に白い骨壺を抱いていた。克子は納屋の前で、その奇妙な行列が通りかかるのを偶然、目撃した。白い骨壺が、克子の眼に印象的だった。男の一団は、海岸へと降りていった。不審に思った克子は、男たちの後を追ってみた。

すると、男たちは待ちうけていた船に乗りこんだ。船尾に骨壺を抱いた男が立っている。それは、ちょうど骨壺に、村への最後の別れをさせているようだった。船は、軽快なエンジンの音をひびかせながら、沖に向かっていった。

克子が、海岸にでてみると、岸壁の日だまりに、老婆ばかりが六七人、車座になって、茶わん酒を飲んでいた。尾形トメがまん中にすすみでると、一升ビンをとりあげ「さあさ、おセツさんもこれでやっと、常世の国へ旅立たれたんじゃ、さ、やんなされ」と、老婆たちの茶わんに酒をついでまわった。

「尾形さん」と、克子は、思わず近づいて聞いた。「常世の国へ旅立ったといいますと……」

「三日月村のわしたちは」と、尾形トメが眼を細めて上機嫌に言った。「死んで骨になると、ああして常世の国へ旅立つんですよ」

克子は、遠ざかっていく船にそっと合掌した。貧しい、淋しい葬式だと思った。が、当の老婆たちは「ほんに、おセツさんも大往生じゃったのう」「この次は、この中の誰が旅立つかのう」などと、まるで祝いごとのように、朗らかな笑い声をあげながら、酒を酌みかわしているのである。

「お骨は」と、けげんな表情で克子はまた尾形トメに聞いた。「海へ捨てるんですか？」

一瞬、トメがきびしい眼つきになった。

「捨てるんじゃなく、今も言ったとおり、あれは旅立ちです……それを、親しくしていた者同士が、こうやってやるのがしきたりなんですよ」

と、トメは酒をついでまわり、老婆たちはなんの不安もないように、明るく笑い興じていた。

探索をつづけていたのは下条だけではなく、克子もあらゆる手をつくしていた。「いちいちことわらんでも、気のすむまで捜しなさるがいい」という尾形トメの言葉添えもあったので、上の村と下の村を合わせて四十数軒、くまなくたずね歩いた。家の中ばかりではなく、道端の納屋までものぞいてまわった。ときには、わるいと思いながらも、子どもをだしにつかってみた。が、確かにこの村にいるはずなのに、拓也の消息はまるでつかめないのである。

「もしかすると」と、そのうち克子も、すっかり弱気になってきた。「拓也も、佐知子さんも、この村にはいないかもしれないわね」

もう、三日月村に来てから一週間以上にもなる。村にいるのなら気がつかないはずはなかった。気がついているのなら、何か言ってきそうなものだ、と克子は思った。

「ひょっとしたら」と、憑かれたような眼でポツリと下条が言った。「あなたのご主人も佐知子も、どこかにおしこめられているのかもしれない……」

「そんなはずはないわ。私が一二度あった主人は、そんな、おしこめられてるって感じじゃなかったわ……むしろ、村の人たちに大事に守られ、尊敬されてるような……」

「そうかッ」と、克子の言葉にヒントを得たとでもいうように、下条はふいに立ちあがった。何か、急に思い当たるところがあったふうである。

「克子さん、ちょっと来てくださいッ」

言って、下条はいきなり克子の手を引っぱって外に連れだした。わけもわからぬまま、克子は後について、海岸のほうへ走っていった。が、小さな渚のほかは、とりたててなんの変哲もない岩場ばかりである。

「克子さん、あれを見てくださいッ」

と、波打際に立って、下条が指さした。その指先を眼で追った克子は、思わず、あッと声をたてた。海岸からのびた山の中腹に、小さな鳥居が海に向かっていた。あんなところに、どうして鳥居があるのかしら？

「ぼくは、なんとなく見すごしていましたが」と、下条がじいっとみつめながら言った。「もし、ご主人や佐知子が、あなたの言うように、村の人たちから大事に守られているとすれば……ひょっとすると、あの鳥居の先に、神社の祠があるのかもしれないッ」

そのとたん、克子はいきなり村の道に駈けあがると、その山裾に向かって、ひたむきに走りつづけた。すると、そこには、茂った樹々に隠れるように、玉砂利の細い道がついていたのである。鳥居に通ずる参道にちがいない、と克子は思い、ためらうことなく、登っていった。

「お待ちなさいッ」と、下条が、はあはあ荒い息をつきながら、むずと克子の腕をつかんだ。「やめなさいッ……克子さん、待つんです、しばらく……」

「だって、村のことはいくら調べてもいいって言われてるわ」

「それは、おそらく、ぼくたちがここにはちょっと気づかないだろうと思われているからですよ」

と、下条は、いつになく慎重であった。「村の中を、気のすむまで調べろというのも、そこをどんなに探しても、なんの手がかりもないからなんです……連中を、甘く考えちゃいけませんよ」

「でも、ここだって、行ってみたら何もないかもしれないじゃありませんか」

「ええ、それは何もないかもしれません」と、下条は、克子をさとすように言った。「しかし、もしも何かがあったとしたら、そのままですむとは思えませんね……克子さん、今日まで、常世の国の信者たちが、われわれに、いったい何をしたか、よく考えてみてください。あなたは、赤ちゃんまで奪い去られたんですよ……わるいことは言いません、この上に登るのは、われわれも、準備をしてからのことにしましょう……いいですね」

克子も、うなずくよりほかはなかった。

が、そこに鳥居があった。果たして、その鳥居の先に、何があるのか、鳥居の奥に、何が待っているのか。古い小さな鳥居だった。しかし、克子には、その鳥居が、その先にある大きな秘密をしっかりと守る扉のように、なぜかそう思えてならなかった。納屋へ帰ってからも、その考えは克子の頭に焼きついて離れなかった。

「近くの町で、あの鳥居のことを調べてきます」と、下条も気になるように言った。「あの山の上に何かがあれば、知った人もきっといるはずですからね……それに、神社ならば、あるいはそういう研究をしている人がいるかもしれません……克子さん、いいですね。つまらない真似は、本当にしないでくださいよ」

克子は、町へ行く下条をトンネルの入口まで見送った。向こう出口の明かりの中で、下条の姿がシルエットになって遠ざかっていった。「早く帰ってネ」という克子の声が、トンネルの中で反響し、シルエットの下条が手をあげて応えた。

克子はひとりになると、いたずらっぽく、また山裾のほうへ小走りに急いだ。玉砂利を敷きつめた参道までくると、樹々の枝の重なりあう中に、赤い鳥居がほのみえる。克子は、なんらためらうことなく、むしろ、心をはずませながら登っていった。

が、くどいように言い残してでていった下条の言葉を思いだして、克子もさすがに、上に登っていくにつれ、しだいに忍び足になった。するとそのうち、小道の両側の、滝木の茂みが、ざわざわと、妙にざわめくのが気になりだした。

風は、ない。にもかかわらず、滝木が妙にざわめくのである。ざわめきは、下から上へと、克子の歩みにそって、移動する。それはちょうど、滝木に隠れて、誰かが走っているようだった。克子が、立ちどまる。と、ざわめきも、とまる。克子が、歩きだす。と、ざわめきが移動する。克子が登りはじめると、ざわめきも登るのである。

突如、バタバタと山鳥の群れが、滝木の間からとび立っていった。思わず、克子は立ちどまった。と、ざわめきは今度、克子に先行するような形で、すうっと上へのぼっていった。一瞬、克子はギクリとして、思わず逃げ腰になった。

が、めざす鳥居はすぐそこにあり、鳥居の先には予想したとおり小さな祠も建っている。ここで引きかえすのは、克子としても忍びなかったので、思いきって突っ走り、鳥居の前におどり出た。そのとたん、背後から「ちょっとお待ちッ」と、声がかかり、滝木の茂みから村の女がとびだしてきた。

女は、克子に納屋を貸してもいいと言いだした尾形トメに、くってかかった杉島佳子である。と、あっちの茂み、こっちの茂みからも、二人、三人、四人の女たちがでてきて、克子の前に立ちふさがった。そして、女たちはなぜか、憎悪のこもった眼で睨みつけていた。

「どうも……あの……ちょっと、お宮さんをお詣りしようと思って、それで……」

たじたじとなって、克子は弁解したが、その言葉は、冷たく突っぱねられただけだった。

「おまえは」と、杉島佳子が敵意をむきだしにして言った。「村の掟を破ろうとしたね」

掟？　なんのことか、克子にはまるでわけがわからなかった。佳子が眼で指図し、女たちがぐいと克子につめよって、有無を言わせず、その腕を両方からぎゅうとつかまえた。
「なにをするんです……私が、何をしたというんです……乱暴しないでください……放してッ……」
何を言おうと、相手にはいっこうに通じなかった。掟？　なんの掟？　それを、女たちは、なんの説明も与えないのである。引きずられるように、山をくだっていくうち、克子も、しだいに罪人のような気持ちになっていった。何かわるい夢をみているような気がした。
女たちにとりまかれて、克子はある旧家の前につれて来られた。ガラリと女の一人が母屋の離れの土蔵をあけた。
「どうするんですッ」と、克子はそこに入るまいとして、足を突っぱらせながら叫んだ。
「私、ただちょっと、お詣りしようとしただけじゃない……ね、いったい、どうしようっていうんですか」
佳子は、土蔵の中へどんと克子を突きとばすようにして押し入れ、ピシャリと戸を閉めてしまった。克子は、恐怖におののきながら、眼をこらして、炉に赤々とほだ火の燃えている密室の中をみ、思わず息をのんだ。自在鉤で吊るされた鍋には湯が煮えたぎって、もうもうと湯気を立てていた。そして、その奥には、白木の祭壇が祀られてあった。中央の鏡も銅鐸も、いつかの古ビルでみたのとまったく同じである。
ちょうどそのとき、コオン、コオン、と銅鐸の音が鳴りひびいた。鳴らしたのは、克子のほうに背を向け、祈りを捧げていた巫女である。白髪の巫女は、その両側に同じような姿の巫女を侍らせ、三人とも、衣裳は貫頭衣に近い白装束で、袴ともモンペともつかないものをはいていた。

左右の巫女が手前を向いた。それは、中年の山村ケイと、初老の広田サキである。と、そのとき、克子を引っぱってきた佳子が、まだ祭壇に向かっている白髪の巫女のところへ近づき、何ごとか耳うちした。中央の巫女が大きくうなずいて、くるりと手前を向いた。

それは、やはりあの尾形トメだった。しかし、今のトメには、これまで克子の知っている人の好さはみじんもなく、神々しいばかりの威厳をただよわせていた。そして、異様に光る眼で、克子を無言のまま見すえていた。

「尾形さん、助けてぇッ」

と、克子は直訴するように、夢中でトメのそばに駈けよったが、そのからだは、二人の巫女に難なくとりおさえられた。

「無礼者ッ」と、初老のサキが、腹の底からふりしぼったような声で叱咤した。「おこもりの最中ですぞ、お控えなさいッ」

おこもり？　なんのことかしら？　頼みの綱の尾形トメは、依然、無言のまま威圧せんばかりに克子を見すえていた。

「おまえは」と、ケイがきびしく言った。「なぜ、村の掟を破って山に登ったのかッ」

「そんな掟、知らなかったんです。それに、尾形さんから、村ならどこを探してもいいって、おゆるしが……」

「おやめッ」と、サキが克子を呶鳴りつけた。「あんたたちが、三日月村に住むことを許したのは、村のきまりに従って生きることを約束したからです」

「でも、私が夫を捜していることは、尾形さんだって、ちゃんとご存知のはずです」

「うるさいッ、ごちゃごちゃぬかすな」と、サキが乱暴な言葉つきで言った。「村のきまりを守れ

んのなら、今すぐここから出ていってもらいましょう」
克子は、歯をくいしばってあらぬ屈辱にじいっと耐えていた。
「あんた、どうなのさ、約束できるの？」と、若いほうの巫子、ケイが、勝ちほこったように言った。「これから先、村のきまりを守っていけるか、どうか、おまえさんに聞いてるんだよッ」
「ま、守ります」と、克子はやっと答えた。
「嘘だッ」と、横に控えていた佳子が異議をとなえた。「この女は、心にもないことを言ってる。こんなのは、村から追いだしたほうがいいんだッ」
「守ります。いましばらくこの村に……」と、克子は、尾形トメのほうに向かって、けんめいに哀願した。
「禊じゃ」と、トメがやっと重々しく宣告するように言った。「常世の神に誓って、約束が守れるかどうか、見せてもらいましょう」
ケイが立って、尾形トメの前に小さな桶をもってきた。すると、サキがその桶に煮えたぎった熱湯を注ぎこんだ。いったい、何をするのかしら？　不安な面持ちで克子は、それをじいっとみつめていた。
「さ、この中に手を入れるのだ」と、サキが克子に命令した。「今の誓いがまことなら、けっしてヤケドはしないはず……」
「そんな無茶なッ」と、克子が金切り声をあげた。「こんな煮え湯の中へ手を入れたら、誰だってヤケドします」
「やるのか、やらぬのかッ」と、サキが怒鳴りつけた。「恐れるのは、心にやましいところのある証拠……今の約束も、口先だけのこととみなして、おまえさんには出ていってもらわねばならぬこ

とになるッ」
「早よう、やりなされ」と、尾形トメが迷いを断ちきるように言った。「これは盟神探湯と言われ、村では古くからそうして、白黒をはっきりつけてきたものです」
盟神探湯は古代、神に誓って熱湯に手を入れ、正邪を判断する裁判の一方法だった。正しい者の手はただれず、不正なものの手はただれたという。村の人びとは、こんな古代の風習をいまだに残していたのである。
「早くせんかッ」と、サキがじりじりしたように言った。が、克子は、もうもうと湯気の立つ桶をみつめて、後じさりするばかりである。
「何してんのよ、あんたッ」と、若い佳子は憎々しげに言うと、さっと体当たりして克子の腕をとり、湯の中に手をつけさせようとした。克子が必死で抵抗し、つかの間、二人ははげしくもみあった。
「やめなされッ」と、サキがトメの指示をうけて叫んだ。「これで、あんたが何を考えとるかようわかった。本日ただいま、あんたには、この三日月村から、ただちに出ていってもらいましょう。さ、行きなされッ」
このとき、土間の戸がガラリと開き「待ってくれッ」と男がとびこんできた。町へでかけたはずの下条だった。
「かわりに、俺がやれば文句はないだろッ」
言って下条は、あッという間もなく、熱湯の桶の中に手を突っこんだ。みるうち、下条の顔が苦痛にゆがんでいった。「ウウウッ……これで……」と、歯をくいしばりながら、必死の形相で言った。「この村にいることを、許してくれるんだろうなッ」

「下条さん」

克子は、たまりかねて下条にしがみつくと、その手を桶からひきあげ、いとおしむように涙にぬれた自分の頬におし当てた。素朴な感謝の姿であった。が、同時に、女の男に対する、小さな心のゆらめきがそこにはあった。

夫婦(めおと)の証し

克子は、下条のヤケドが痛々しくてならなかった。自分にかわって熱湯の中に手を入れてくれた下条に、克子は、すまないという気持でいっぱいだった。

「ごめんなさい、あんなにとめられていたのに、勝手なことをしてしまって……」

「いやそうじゃない」と、下条はムリに明るい笑いをつくって言った。「一刻も早く、ご主人に会いたいと思っている君をとめた、ぼくのほうが間違っていたかもしれない」

「だって、私のために、あなたがそんなヤケドをしてしまって……」

「いや、ぼくだって、妻に会いたいからそうしたまでで、あなたのためばかりじゃありませんよ。安心してください」

下条は、そうした思いやりのある男だった。克子のためというよりも、自分自身がこの村に居残りたいからやったまでのことだ。村を出ていくようなことになったら、せっかくここまでつきとめたのに、もう永久に佐知子とも会えなくなるかもしれない。下条は、つとめてそう思うように自分をしむけた。

が、ヤケドのひどい疼きに、しらずしらず下条は顔をしかめ、そっと包帯の手をいたわらずには

おれなかった。

「下条さん」

と、克子はそんな下条がいたわしく、思わずにじりよって、包帯のその手を両手でつつんだ。そうせずにはいられなかった。

「奥さんのお話を聞かせてください」と、克子がせつなさそうに言った。「どんな方だったんですか。こんなとき、どんなにして、あなたをいたわってくださったんですか」

「それよりも」と、下条はそっと克子の手から、包帯の手をぬきとり、笑顔でやさしく言った。「ご主人のお話をききたいですね。こんなとき、どんなふうに君をなぐさめてくれる人だったんですか」

克子は、そんな下条をみつめていたが、そのうち、たまらなくなって、くるりと背を向けると、ひざにおいた両腕の間に顔をうずめてしまった。

「こんなふうに、二人きりでひとつの家に住んでいるのをみたら、ご主人はいったいなんと思うだろうか……」

「どうして」と、克子は、きれぎれに言った。「……二人とも……お互いに……ここにはいない……私たちを捨てていった人のことばかり……話さなきゃならないんでしょうか……」

じいっとしていると涙があふれそうになって、下条はついと立ちあがった。寝るとき二人は、いつも、部屋の中央にカーテンをひいて、お互い分かれ分かれになって、毛布にくるまり、眠りにつく。下条は、所在なげに片側にたぐり寄せられていたカーテンを、すっとひきはじめた。そのとたん、克子はそのカーテンを衝動的に、にぎりしめた。つかの間、下条は克子をみつめ、克子も下条を見上げていた。

「もしいつか、君のご主人なり、ぼくの妻なりに出あったとき」と、下条がつぶやくように言った。「そのとき、お互い、明るくサヨナラを言うためです……」

言って、下条は、すうっとカーテンをひいていった。カーテンの向こうに、下条の姿が隠れた。克子は、そのまま、静かに揺れるカーテンをみつめ、これでよいのだと思いながら、じいっと坐っていた。

と、夜の静寂を破って、コオン、コオンという冴えた音が、海の微風に乗って忍びよってきた。銅鐸をたたく音である。克子は、ふっと顔をあげると、足を忍ばせ、納屋の外へ出ていった。そのとたん、はっとして納屋のかげに身をひそませた。暗いトンネルの中で、ひとかたまりの火がゆれながらこちらに向かっていた。

やがて、手に手に炬火をもった男たちが、トンネルの中から静々と出てきた。が、その男たちの姿をみて、克子はあッと驚いた。いつか常代神社でみたように、男たちはすべて仮面をつけていたのである。村の道をくだっていく男たちのあとを、克子はこっそりつけていった。

男たちの行列が村にさしかかると、それを待ちうけていたように、家々の戸があき、女たちが出てきた。あッとまた、克子は驚いた。村の女たちもまた、同じように仮面をつけていたのである。炬火を持っている男たちの行列に、女たちが次々と合流して、群れはしだいにふくれあがっていった。炬火の火に、仮面がゆらゆら揺れて、不気味だった。

男と女の仮面の流れは、あの盟神探湯の禊をうけた旧家の前でとまった。仮面の男女は三々五々集まって、お互いひそやかに、しかし、楽しそうに、軽い笑い声をあげながら語り合っていた。すると、そのうち、母屋に隣接した離れの土蔵の戸が、静かにあけられた。そのとたん、仮面の人びとの囁きがぴたりとやみ、一同は、土蔵のほうに向いて、人を迎える形になった。

まもなく、土蔵の中から静々とあらわれたのは、巫女姿の広田サキと山村ケイで、二人は、白木の柱を捧げていた。その二本の柱には《門》のかたちに一本の白木の横木が渡されていて、そこに銅鐸が吊りさげられていた。そして、サキとケイは外に出ると、これも土蔵のほうを向いて、つづいて出てくる人を迎える形になった。

つかの間、あの厳かな巫女姿の尾形トメが、足どりもおもおもしくあらわれた。トメは、一同を見渡すと、コオンと銅鐸を打ち鳴らした。一同が静かに頭をさげる中を、トメはゆっくりと歩きだした。そのあとを、銅鐸の柱を捧げたサキとケイ、さらに仮面と炬火の行列がつづいた。

暗い海のうえには、三日月がかかっていた。その岸壁の道を、行列はいま、あの山裾に向かっており、案の定、尾形トメは、そこから鳥居への道を登っていき、仮面の一団がそれにつづいた。そのあとをつけてきた克子は、思わずためらった。いったい、山の神社で何があるのか、克子はあとをつけていきたい衝動にかられた。が、すでに自分の勝手な行動のために、下条が犠牲になっていることを思うと、迷わずにはいられなかった。

と、そのとき、背後に人のやってくる気配を感じて、克子ははっと木陰に隠れた。思いがけなく、それは下条鋭一だった。

「下条さん……」

「よかった」と、下条はほっとしたように、克子の手を両手で握りしめた。「村のざわめきがわかったのでね……また、君が危険な目に会うのじゃないかと思って心配した」

「もう、大丈夫だわ……でも、いったい何があるのかしら？」

木の間がくれに、炬火の行列がちらちら登っていく。

「尾形トメさんが、おこもりしてると言ってたんでしょう？　だとすれば、おそらく祭りじゃない

かな」と、下条が言った。「トメさんというのは、常世の神を祀る巫女なんですよ……近くの町の人に聞いたところでは、三日月の夜になると、この上の神社にああして村人が集まるらしい」
「三日月の夜……」
ふっと、克子は空を見上げた。いつのまにか、また三日月の夜になっていた。そう言えば、夫の拓也がいなくなったのも、三日月の夜だった。ひょっとしたら、私は、夫というひとりの人間の、光り輝く三日月の部分だけしか知らなかったのかもしれない。三日月のかげの部分については、何ひとつとして知らなかったのだ。克子は、とぎすまされた鎌のような三日月をみながら、ふとそう思っていた。
村の道をとおって、二人は納屋に向かった。家々から明かりがもれて、テレビの音が流れていた。大人たちはみな山の祭りにいき、村に残っているのは、子どもたちだけだった。
「いま、テレビをみている子どもたちも、いつかはやはり、常世の国を信じるようになるのかしら？」
「さあ、こんなことが、いまの子どもたちに受けつがれていくとは思えませんね」と、下条が批判をこめて言った。「だから、三日月村の大人たちは、やっきになってるんですよ。自分たちの信仰と、祖先から伝わってきたしきたりを守ろうとして……」
克子も、下条も、いわばその古い殻を身につけた常世の信者たちの犠牲だった。いったい、拓也は、佐知子はどうなっているのだろうか。克子は、ぞくぞくと寒気におそわれて、そっと下条によりそった。下条は、その克子の肩を抱くように手をかけた。克子は、立ちどまって、下条の顔を仰いだ。彼女の唇が、彼のすぐそばにあった。
「海をみてきます」と、下条は、そっと肩にかけた手を引っこめながら言った。「ひとりで、海を

眺めたいのです……先に寝てててください……君が寝入ったころ帰ります」
「下条さん……」
「そうさせてください」
言って、下条は足早やに克子から遠ざかっていた。
克子は、下条のやさしい心根を痛いほど感じていた。着がえをした克子は、ちょっと、カーテンをめくって下条の寝間をみた。くしゃくしゃになった毛布をなおし、枕をきちんとおいて、ほお笑みながら、自分の寝間に戻り、そっとふとんの中に入った。
と、納屋の表に、かすかな人の気配がある。克子は、しあわせな安らぎをおぼえながら「すぐ寝ます」というように、眼をとじた。すると間もなく、静かに戸がひらいた。克子の心に、ふっとおかしさがこみあがってきた。ずいぶん、早かったじゃない。きっと、淋しかったのね……だけど、女の部屋を無断で覗くなんて、ちょっと失礼じゃない！　克子は満ち足りた気持ちでうす目をあけた。そのとたん、克子はガバッとはね起きて身構えた。ぬっと入ってきたのは、下条ではなく、仮面の男である。
「誰なんですッ」
男は、ぬっと魚を突き出した。
「何をなさるんですッ」
「土産だよォ」
と、男はのんびり言って仮面をはずした。律子の店「ブランコ」にあらわれた黒マントの男、伊吹信次である。
「何の用ですか」と、身をひきながら克子が言った。「いきなり入ってくるなんて、失礼じゃない

の……」

「あれ」と、伊吹が意外に人のよさそうな笑顔をうかべながら言った。「この村のしきたりってのの、まだわかってないの？」

伊吹が、部屋にずかずかあがってきた。克子は、壁ぎわにあとずさりしながら「出ていってッ」と叫んだ。傍若無人に、伊吹は笑った。

「よせよ、今夜は祭りだよ」

「だから、いったいどうしたっていうんですかッ」

「ほんとに知らないのかい？」と、伊吹は眼をまんまるくして、いかにも驚いたふうに言った。

「この村じゃ、男も女も、二十歳すぎたらみんな、村全体のもんだってことになってるんだけどな」

「それは、聞いてるわ。でも、私には下条鋭一という人がちゃんと……」

そのとたん、伊吹がケラケラ笑いだした。

「ごまかしたってだめだよ。じゃ、あんた、このカーテンは、いったい、なんだよォ」と伊吹は、ニヤニヤしながらつめよった。「あんたたちが、本当にお互いのものになってないことぐらい、俺たちには、ちゃんとわかってるんだよ」

「出ていって……ね、お願いッ」

「よせよ」と、伊吹は、せせら笑った。「山の上じゃ、今夜は村じゅうの男と女が、楽しくやってるんだぜ。それを俺は、わざわざ、おまえさんのところにこうして、お土産まで持ってきたんじゃないかよ……」

伊吹は、じわじわにじり寄ると、ぱっと克子にむしゃぶりついていった。

「放してよ……出ていってッ」と、克子は必死で抵抗しながら叫んだ。「助けてえ……誰か来てえッ」

「何言ってんだ」と、伊吹は容赦しなかった。

「おばばの前で……おめえ……村のしきたりに従うって、誓ったばかりじゃないか」

伊吹は、克子におおいかぶさり、押えつけながら、寝巻を乱暴にはいでいった。「やめて、助けてッ」と、克子は金切り声を張りあげた。伊吹が狂暴になって克子の下着に手をかけ、はぎとろうとした一瞬、だっと下条が駈け込み「何するんだッ」と、おどりかかった。

「やめろ」と、伊吹が下条に胸ぐらをとられて、苦しそうに言った。「俺はただ、村のしきたりどおり……く、苦しい……」

「出て失せろ、帰れッ」

納屋の入口から、下条は思いきり突きとばし、伊吹は勢いにのって、だだだッと階段から下へ転げ落ちていった。

「下条さん」

克子は、なりふりかまわず下条にとりすがり、二人はしっかり抱きあった。山の上では常世を信じる人たちの性の祭典が、いよいよたけなわらしく、ドンドドンと、大太鼓の音がひびいてきた。下条の腕の中で、克子の肩が小刻みにふるえていた。嗚咽を、彼女はけんめいに噛み殺していた。ひと騒動もちあがることは、明らかだった。時間とともに、二人の不安はつのるいっぽうだった。

翌る日、克子と下条は案の定、伊吹の訴えにより、旧家の離れの土蔵に呼び出された。常世の信者たちの祭りがまだつづいているのか、その日も、尾形トメは、《おこもり》の巫女姿で、同じく

サキとケイが左右に侍っており、いろりの傍に、伊吹が坐っていた。戸口を背にして、克子と下条は土間に坐るようケイに命じられた。
「おばばよ」と、伊吹がトメに甘えるように鼻をならした。「俺はよ、あんな赤っ恥かかされたのは、始めてだァ。この村の女なら、夜はみんな、カギを外して待っててくれるはずじゃなかったかよォ」
「でも、それは」と、克子も負けてはいなかった。「相手のきまっていない人だけのはずでしょ」
「尾形さん」と、下条もトメに抗議した。「われわれが、お互いそれぞれを相手に選んでこの村へ来たことは、あんただってわかってるはずじゃないですか」
「ごまかすな」と、伊吹が、ここぞとばかり大声を張りあげた。「表向きは一緒に住んでるがよ、おまえらは、間にカーテンを吊して別々に寝てるじゃねえかッ」
「それは……」と、克子は思わず言いよどんでしまった。
「それじゃ、あんたたちは」と、若いほうのケイがきびしく言った。「私たち村の人間の眼を、ごまかそうっていうんだね」
「でも」と、克子があわてて弁明した。「私たちには、ちゃんと夫もいるし、下条さんには奥さんが……」
「それじゃ」と、初老のサキが、意地のわるい笑顔で皮肉をこめて言った。「あんたの言う、そのご主人と奥さんとやらを、見せてもらおうじゃないの」
「そんな無茶なッ」と、下条が激怒した。「佐知子や拓也さんを、どこかへ隠したのはあんたたちじゃないかッ」
相方の言い分を黙って聞いていた尾形トメは、眼をつぶったまま、おもむろに口をひらいた。

「あんたたちが、この村に来た日のことを、もう一度、思いだしてもらおうかの……確かあのとき、あんたたちは、お互いに自分の相手としてきめたと言うたはずじゃ」と、トメは、眼をひらいて、鋭い視線で克子と下条を睨みつけた。「あの言葉は、嘘じゃったのかッ」
「尾形さん」と、克子が哀願するように呼びかけた。トメが、静かに眼を閉じて言った。
「嘘じゃったのか、やはり……」
「やっぱり、あんたたちは都会の人間じゃ、この村には向かんのう」と、トメの気持ちを代弁するようにサキが言った。「わるいことは言わん、間違いが起こらんうちに、早ようこの村から出ていったほうがええんじゃ」
「いやです、私はもっとこの村にいたいんです」と、克子は必死でトメに呼びかけた。「もし、私が下条さんを本当に私の相手としてきめたら、この村に、私たちをこれまでどおり、いさせてくださいますか」
「克子さんッ……」
「下条さん、お願ッ」と言うなり、克子は、その胸に身をなげると、はげしくむしゃぶりついていった。「お願いです。私を……私をあなたのお相手として……」
「克子さん、バカなことを言うんじゃない、君にはご主人が……」
「お願いです、許してッ」
言って、いきなり下条の顔を引きよせると、克子は、その唇に自分の唇をおしつけていった。下条は放そうとしたが、克子は、その首にしっかりとしがみついて離れようとはしなかった。そんな二人を、トメは何を考えているのかわからない無表情な眼で、じいっとみつめていた。
克子と下条は、ひとまず納屋へ帰ることを許されたが、二人に対する試練は、それで終わったわ

けではなかった。納屋へ帰ってほっとするのも、つかの間、若いほうのケイがあとを追うように、新たな難問をかかえてやってきた。
「お二人に、祭りに来ていただきます」
言って、ケイがさし出したのは、奇妙な表情の二つの仮面である。この面をつければ、常世を信じる村の人びとと一緒に、山の上の神社にゆくことができるという。そのとたん、克子は「えッ、ほんと！」と声をあげて喜んだが、それは、しかし、単なる祭りへの好意ある招待ではなかった。「海神さまの前で」と、ケイが有無を言わせぬきびしい口調で言った。「あんたたちが、本当にひとつになったかどうか、その証拠をみせていただきます」
「何を言うんですか」と、思わず顔色を変えて下条が言った。「それだったら、さっき、祭壇の前ですんだじゃないですかッ」
「あれしきのことは、偽りでもできます」と、ケイは冷笑しながら突っぱねた。「まこと、この村にいたいのならば、二人ともが、真から結びついているという、確かな姿をみせていただかねばなりません……今日は祭りの仲日、村の衆は昼間から山へ登ります。決心がついたら、その面をつけて、ご一緒においでください」
それだけ言うと、ケイはすっと立ちあがり、出ていこうとした。
「ま、待ってくれッ」と、下条が血相を変えてあわてて声をかけた。「あんたたちは、いったい、なんの権利があって、そんな理不尽なことを強制するんだッ」
「別に強制はしません。あんたたちが東京へ帰るんでしたら、どうぞご自由に」
ケイは、問答無用とばかり、階段を足早やにおりて行ってしまった。下条は、克子の顔を正視するに耐えないように、がっくりうなだれた。が、克子は、そっと仮面のひとつをとりあげると、そ

れを顔にあてて、下条をみつめた。

「君、やめなさいッ」と、下条は克子の仮面をもった手を払った。「いつまでも、こんな茶番につきあう必要はないッ」

「えッ、茶番……」と、克子が声を落としてつぶやいた。「それじゃ、下条さん、さっきも茶番だったんですかッ……」

さっき祭壇の前で、村に住むために、とっさの判断で克子は下条に身をなげ、唇をもとめたが、そのうち、下条はしっかり克子を抱きしめ、逆に、克子の唇をはげしくもとめてきた。唇とは言え、あのとき、二人は互いに燃え、ひとつにとけ合ったのではなかっただろうか？

「……さっきのことも……あなたにとっては……偽りの……茶番でしか……」

つらそうに、克子はきれぎれに言った。

「克子さん」と、下条は背をむけ、窓の外の荒い海に向かって言った。「なぜ、そんなつらいことを言わせるんですか……いえ、どうして、そんなことを聞くんですか」

克子は、じいっと下条の背中をみつめていたが、それから、ふっと二人の仮面に眼を落とした。他人になりたい、別の顔をもった他人になりたいと克子は思った。そして、そっと手をのばすと、その仮面をひとつ、またひとつと取りあげた。窓ぎわに立っていた下条が、そのとき、ぱッとふりかえった。

「行くつもりですか、君は」と、下条は苦悩を隠さずに言った。「それをかぶって、あの山へ行くつもりですかッ」

克子は、仮面のひとつを、すっと下条にさしだした。その眼が、きらきらとうるおいをもって輝いていた。

「克子さんッ」
「別の人になれますもの」と、自分に言い聞かせるように、克子はつぶやいた。「これをかぶれば、別の人になれるんですもの」
下条は、そのひとつの仮面を、ひったくるようにとった。もうひとつの仮面を、克子はすっと顔に当てた。すると、下条は、ぱッと手荒にはずした。
「やはり、君は、別の人になりたいと思っているんですね」と、下条は、激情にかられて克子につめよった。「別の人にならなければ、やはり、ぼくとは……なぜ……どうして、無理に、別の人にならなきゃならないんですか……ぼくはもう、別の人なんかにはなりたくない……」
下条は、ぐっと克子をひきよせると、頬ずりし、唇をもとめて、はげしく抱きしめた。克子は、しだいに力がぬけ、下条の腕の中に崩れた。
「克子さん……この村を出よう……この村から、ふたり一緒に出ていこう……」
愛に、克子は飢えていた。そして、彼の胸に顔をうずめ、頬ずりし、はげしく動かしながら、また唇をもとめた。
「いっそ、どこかで……二人っきりで、このまま……」
「いけないわ……そんなこと」と、克子はあえぎながら言った。「そんなこと……いけないわ……いけないことだわ……だって、あなたには奥さんが……奥さんを捜すために……この村へ来たんですもの……」
「君はずるい」と、下条は、克子のからだを思わず突き放すようにして言った。「君は卑怯だッ……君は、ぼくの妻のことを言いながら、自分のご主人のことを考えている……なんのために、この仮面をかぶるんですか。この村にいるためだ。じゃ、なんのために、こんな村にいなきゃならな

い。それは、君のご主人を捜すためなんだッ」
「違うわ」と、克子はくやしそうに叫んだ。
「あなたの奥さんを捜すためにも、ここにいなきゃならないんだわ」
「君ッ」と、下条は睨むようにはげしく克子をみつめた。その顔に、ふっと自嘲的な笑いがうかび、それは、かすかな笑い声になってもれた。そして、その笑いが、だんだん大きくなっていった。克子は、その笑いにじいっと耐えていた。下条は、まるで噴きあげるように笑って、笑って、笑いつづけた。克子は、そんなうつろなバカ笑いがついに耐えられず、ついと立ちあがって出ていこうとした。
「忘れものですよッ」
下条は仮面のひとつを克子にさし出し、もうひとつの仮面を、そっと自分の顔に当てた。
「別の人間になりましょう」と、下条がもとの率直な人間にかえって言った。「お互い、別の人間になってみましょう……だけど、常世の神は、顔だけじゃなく、どうして心も別のを与えてくれないんだろう」
下条がそう言って仮面をはずすと、克子が「心は、殺しておきますわ!」と、すかさずそう応え、恥かしさを隠すように、仮面を顔に当てた。下条は、そんな克子を改めていとおしそうにみつめていたが、やがて「うん」とうなずくように、また仮面を顔に当てた。
それから二人は、互いに、真から結びついている証拠を明かす決意を秘めて、納屋を出ていった。

愛の乱舞

仮面をつけた村びとたちが、山裾の神社の道をぞくぞく登っていった。その一番あとに、克子と下条がつづいていた。鳥居のあたりまでくると、荒い海の光景は、すっかり趣きをかえて、のどかにキラキラと美しく輝いていた。鳥居をくぐって少し登ると、神社の杜と社がみえてきた。

神殿の前に、いずれも仮面をつけた村びとが、ずうっと並んでひざまずいている。克子と下条も、信者たちと同じく、その端に連なってひざまずいた。小さな神殿は、いまその扉をいっぱいに押し開き、中では、尾形トメを中心に、サキ、ケイの三人の巫女が祭壇に向かって祈りを捧げている最中だった。この三人の巫女だけが、仮面をつけていない例外的な人物である。

この神殿の祭壇も、旧家の土蔵や古ビルの祭壇とつくりは同じで、ここでも、鏡と銅鐸が眼を射る。青い空には、白い雲がぽっかり浮かび、のどかだった。社殿をつつむ雰囲気も、どこか牧歌的だった。尾形トメが、銅鐸をコオンと打ち鳴らし、左右の巫女が祀ってあった三宝を手に捧げた。トメは立ちあがると中央に入り、三人並んで社殿の入口へと進みでた。

「では、塩と米を——」

サキとケイは、トメにうながされて、三宝に盛られていた塩と米を、下にひざまずいていた仮面

の村びとたちにふりまいた。
「さ、今日は祭りの仲日」と、尾形トメが、常世の信者を代表して声音を張りあげた。「三日月の一番細くなる日、常世の神に、五穀の豊穣を感謝し、あわせて子々孫々の栄えを誓おうぞ」
その声の終わりと共に、仮面の村びとたちは歓声をあげて立ちあがると、それぞれ、男は女の、女は男の名を呼びあって、互いに愛を求めあった。神殿の境内は、それら異性を求め、まさぐり、もつれあう男女で、ひとつの渦となっていった。克子は、思わずぎゅうっと下条の腕をにぎりしめた。下条は、男女の求愛の姿を、われを忘れたようにみつめていた。
「これは、まさしく歌垣です」と、下条は、不思議な感動をおぼえながら言った。「古代の歌垣の再現だッ……祭りの日に、若い男たちと女たちが、自然の中で自由に愛しあう習慣があったんです……」
ある男女は、蝶のように追いつ追われつ、もつれあいながら、潅木の茂みに日ざしをさけると、みるうち、人前もはばからず、草を褥にあられもない姿をさらし、からみあい、愛欲のおもむくままに、のたうちまわっていった。そこかしこの木陰にくりひろげられている、仮面の男女の愛欲絵巻に、克子と下条は、つかの間、ただ驚嘆の眼でうち眺めるばかりだった。
古代の習慣がここにもひとつ、常世の信者たちの間に残っていた。古代の歌垣は嬥歌ともいい、とりわけ名高いのは『常陸風土記』にでている筑波山の嬥歌である。大自然の中で、男と女が、その日ばかりはすべての身分も忘れて愛しあった、この嬥歌については、各地の『風土記』や『古事記』『日本書紀』などに語られ、『万葉集』にもそれから生まれた愛の歌がいくつかのせられている。

鷲の住む
筑波の山のもはき津の

その津の上に
あともひて
おとめおとこの
行き集い
かがうかがひに
人妻に
我も交らん
我が妻に
人も言問へ
この山をうしはく神の昔より
さへざるわざぞ
今日のみは
めぐくもな見そ
言もとがむな

人妻に我も交らんわが妻に人も言問へ――と、おおらかに嬥歌の様子をうたったこの高橋虫麻呂の歌は、『万葉集』巻の九に載っている。

愛欲の饗宴は、いままさにたけなわだった。

「その二人」

と突如、茫然と立ちつくす克子と下条に、背後から声がかかった。はっとふり向くと、それは巫女のケイで、「こちらへ」と神殿の前に立つトメとサキのところに、克子と下条を引き連れていっ

た。

「どうやら、そのほうたち、三日月村に住む決意がついたようだの」と、サキがいつになく機嫌よく言った。「さ、早よう交わりなされ、おまえたちが真に一つじゃという証拠を、早ようみせておくれ」

「いやです、こんなところでは……」

「なんてことを言うのじゃ」と、サキは思わず眼をむいた。「誰はばかることもない海神さまの御前で、子々孫々の栄えを祈るいとなみのどこがいやなんじゃ」

「あんたたちッ」と、若いケイがかっとなって言った。「ここまできて、ごまかそうたって、そうはいかないよッ」

「わかりました」と、さっと克子を抱きしめて、下条が言った。「さ、克子さん、心はもうきまっているはずです……向こうの茂みへいきましょう」

下条は、ぐいと手をひいて、克子の決意をうながした。が、言葉とは裏腹に、克子の手は、すっかり下条にゆだねていた。

「お待ち」と、そのとき急に、トメが二人に声をかけた。「この中を貸しましょう」

トメが指さしたのは、なんと、祭壇のある神殿の中だった。「おばば、そんな無茶な」と、ケイが異議をとなえた。

「いや、そうじゃない」と、トメはケイを手で制した。「二人の真に結びついた姿を、われらの常世の神にみていただくのじゃ。偽わりのない姿をなッ」

「なるほど、おばば殿の言うとおりじゃ」と、サキが大きくうなずきながら言った。「さ、二人とも、この中で早よう交わるがよい。中へ入れば人目もさけられよう……何をぐずぐずしておる。早

よッ」
　下条が克子の手をひいて社殿の中に入ると、ケイとサキが、両側から扉を閉めた。トメは境内いっぱいにくりひろげられた人びとの愛欲図絵を、感慨無量の面持ちで眺めていた。サキとケイが、トメの左右に侍り、微笑をうかべながらあたりをみまわした。
「若い者ッはええのう」と、トメが眼を細めてつぶやいた。「な、サキさん、わたしらには遠い昔のことになってしもうたのう……」
「ほんに」と、サキがすかさず相づちをうった。「けど、おケイさんは中年たってまだ若い。まだ花も実もあるというに、巫女になってしもうて、もったいない」
「なあに」と、ケイが笑いながら言った。「私はもう、男の移り気にはコリゴリしてますから、せいせいしてるわ」
「いつになっても、男の移り気と女の妬み心は、果てしのないものよのう……」
　と、トメが言い、三人はほがらかそうに笑い興じた。
「それよか、おばば」と、ケイがさも感心したように言った。「今になってやっと、あの二人を村に住むことを許したおばばの、深いおもんばかりが、わかったような気がして」
「ほんに」と、サキが言った。「このまま、忘れてくれればええんじゃが」
「忘れるとも」と、トメは、確信をこめて言った。「若い二人のことじゃ、そのうちきっと、互いに血迷うて、以前のつれあいを忘れるときがくる」
　つかのま、三人の巫女は、じいっと光る海をみつめていた。
「おばば、常世の国からのお使いはいつ？」
「まもなく来るはずじゃ。とうにもう、向こうを船出なさってるはずじゃから……」

常世の国からの使いがまもなく来る、と尾形トメは言ったが、それは果たして誰なのだろうか？もし、そのことを克子が知っていたら、おそらく、今日、この山へは登らなかったのではなかろうか？

神殿の中では、仮面をかぶった克子と下条が、荒い息をついてみつめあっていた。克子は、もうがまんがならないように、その仮面をかなぐり捨てた。

「君ッ」

「おねがい、あなたもとって」

「別の人間になる約束だった」

「下条さん……」

つぶらな克子の眼が、うるみがちにキラキラ光っていた。すすんで、男に身をゆだねようとする、燃えた女の眼だった。

「後悔しますよ、必ず」と、下条がなだめすかすように言った。「せめて、この仮面をつけていることだけが、あなたのご主人に対する言いわけになる……違いますか」

「いやよ」と、克子がきっぱり言った。「そうして、あなたは、奥さんに言いわけしようとしてるんだわ」

「克子さんッ」

「もう、私は別の人間じゃありません。克子です。私自身として、あなたに抱いていただきます……私自身を……」

下条は、捨てられた仮面を拾うと、克子に「おつけなさい」と、突きつけた。克子は「いやよッ」とはっきり首をふると、なんのためらいもなくワンピースのジッパーをおろした。腕をはずす

のからだを下条にぶっつけていった。
と、服が、ぽとりとずり落ちた。克子は、肩で大きく息をつき、「下条さんッ」と、うすものだけのからだを下条にぶっつけていった。
「克子さん」と、下条は、いとおしげにしっかりと抱きしめた。
「いいんです、もう」と、克子があえぎながら言った。
「君と、はじめて会ったときから」と、むしゃぶりつき、感情を高ぶらせながら下条が言った。
「こうなるような気がしていた……これが、ぼくたちの運命かも……」
「お互い……裏切られたふたり……」と、はげしく身もだえながら、克子は言った。「捨てられたふたり……なのに……どうして……そんな人たちのために、いつまでも自分の感情を押えてなきゃならないのでしょう……」
　下条は、そんな克子の情にほだされたように、仮面をかなぐり捨てると、「克子さん」と、はげしく頬をよせ、くちづけしていった。そして、くちづけしたまま、そっと克子を押し倒すと、強く抱きしめながら重なって、しだいに情欲のとりこになっていった。
　克子は、身も心もふるえながら、すべてを下条にゆだねていた。と、そのとき、祭壇の銅鐸が、かすかな音を立てて鳴った。克子は、はっとしたように祭壇のほうに眼を向けた。すると、そこにはひとつの白い影が立っていた。いつか、古いビルで幻影のような夫に会ったときの、あの夫の位置に、まだ若いひとりの女が立っていたのである。そして、トメたちと同じ巫女の姿のその女は、まばたきもしないで、じいっと二人がひとつにとけあうさまをみつめていたのだ。息をつめた克子のただならぬ気配に、下条もふっと女に気づいた。そのとたん、
「佐知子ッ」
　と、思わずそう叫んで、下条は克子のからだを放して立ちあがった。克子は、あわてて服でから

だを隠すように、そこにうずくまった。佐知子は、じいっと、下条をみつめ、それから、そのうつろな眼を克子に向けた。二十三、四歳だろうが、まだ少女のような面影も残している。美貌である。ふっと、佐知子が下条に眼を移した。
「この人は、神崎拓也さんの奥さんだ」と、下条は、悪びれずに言った。「どこにいたんだ、佐知子……神崎さんも一緒なんだろう……今までどこにいた……どこからここへきた……佐知子、俺は半年間もおまえを探しもとめて……」
せつなさそうに下条が両手をさしのべると、佐知子はもうたまらなくなって「あなたッ」と、その胸に身をなげた。克子は、眼をぎらつかせながら、すっくと立った。
「この人、本当に神崎さんの奥さんなの？」
「そうだ」と、下条が勢いこんで言った。「二人とも、おまえや神崎さんを捜すために、わざとこんな真似までして……」
そのとたん、克子の顔が、ぎゅうと苦痛にゆがんだ。
「それは嘘ですッ……私たち、わざとやったわけじゃないわ……わざとじゃないわ……」
克子はそう叫ぶと、いたたまれぬ思いで、だっと外へとび出した。からだをおさえた洋服が、ひらひらなびいた。克子は、そのまま神殿の前に立つトメたち三人の巫女の前に転げるように坐りこんだ。
「みなさん、見てくださいッ。私たちは、たった今、このとおり……身も心も、ひとつにとけあいました……本当に、私たちはひとつになりました……常世の神に誓って……」
「克子さん、待ってくださいッ」
と、下条が、扉の陰から顔をのぞかせ、身じまいをただしながらあわてて言った。その下条に、

佐知子が「あなた」と、とりすがるのをみたとたん、トメたちは、老人とも思えぬすばやさで、神殿の中にとびこんでいった。克子は、わけもなく哀しくなって、わあっとそこに泣き伏してしまった。

佐知子は、サキとケイに押えられて、下条から引き離され、祭壇のほうへ引きずられていった。佐知子は「あなた、あなたッ」と、泣きわめき、下条も「佐知子」と名を呼びながら追いかけようとした。と、その前にトメが立ちはだかった。

「どいてくれッ」

と、思わず呶鳴りつける下条を、トメは、はったと睨みつけた。その瞳は異様な光をたたえていた。下条の足はやがて、すうっとだるくなったかと思うと、なぜか動かなくなった。佐知子が夫の名を叫びつつ、祭壇の奥に連れこまれていくのを眼のあたりにしながらも、下条は「佐知子ッ」と呼びかけるほか、なすすべもなかった。トメが、その下条に向かって、両手を高くさしあげた。すると、そのとき、祭壇の鏡がキラッと光って下条の眼を射た。その一瞬、下条は、ふわっとした気分になり、ゆっくり眼を閉じると、そのまま、崩れるように倒れた。

克子はそのとき、山道を一目散に駈けおりていた。思いがけない出会いだった。下条鋭一の妻、佐知子とまさかあんなところで、あんなふうにして出会うとは、克子は考えてもいなかった。そして、それは克子にとって大きな屈辱となった。いや、なによりも、下条の妻、佐知子の、若さと美しさが、克子には耐えられなかったのである。

村の道を駈けおりると、克子はそのまま渚に向かって走った。どどどっと打ち寄せる荒い波しぶきの中へ、おどりこもうとした克子は、そのとき「やめなさいッ」という凛とした声に、思わず足をとめてふりかえった。そして、あっと克子は息をのんだ。海岸の鳥居の下に立っているのは、ま

ぎれもなく夫の拓也だったのである。いつか、常代神社で会ったときの姿、佐知子と同じ白装束である。まじまじとみつめる克子に、拓也は思い沈んだ表情で近づいてきた。克子は、高ぶった気持ちを隠すようにくるっと背を向けた。

「来ないで……来ないでよッ」と言い、すぐまたふりかえった。「近づかないでください。お願いですッ」

拓也は、立ちどまると、克子にわびるように、深く頭をさげた。

「やっぱり、あなたは、ここにいらっしてたんですのね」と、克子は恨みのこもった眼で拓也をみつめた。「なのに、なぜ……どうして、来てくださらなかったのよ……」

「いや、この村にいたわけじゃない」と、低声で拓也が言った。「俺も、それから佐知子さんも、この村にはいなかった」

「じゃ、いったい、どこにいたのですッ」

「言えば笑うだろうが」と、拓也は荒い海に眼を移して言った。「常世の国だ……今日は祭りのために、常世の神のお使いとしてこの村へ来たのだ……君たちの話は聞いている……できれば、下条君と、新しい人生をはじめてほしい……頼むッ」

言って、つらそうにまた頭をさげた。克子は複雑な気持ちだった。これが、待ちに待った夫との対面かと思うと、無念でならなかった。ひとすじ、涙が頬をつたわった。

「教えてください」と、克子は心を静めて言った。「あなたは、私より常世の国のほうがよいのですか……私を捨てて、常世の国をえらんだのですかッ」

「克子ッ」

「教えてッ、それだけ聞けば私……」

「なぜ、そんなつらいことを言わせる」と、拓也は苦悩をにじませながら言った。「どうしても答えろと言われれば、そのとおりだと言うしかない」
「あなた……」
「だから、言わないでほしいと言ったのだ」
「あなたッ」
叫ぶように言うと、克子は夫の胸にむしゃぶりついていった。拓也は、その克子を、両手でこばんだ。
「頼むッ」と、拓也は弱々しく言った。「俺のことはもう忘れて、君自身の新しい人生をはじめてくれ……」
言い捨てるようにして、拓也は、足早やに去っていき、克子がいくら名を呼んでもふり向こうとはしなかった。山裾から、拓也は神殿への道を駈けのぼっていった。
「あなた、待ってちょうだい」
夫の後を、克子はどこまでも追っていった。夫が自分を嫌い、捨てていったとは、克子にはどうしても納得がいかなかった。と、両側の灌木の茂みから、仮面をつけた村の男女がどっとでてきて、克子の前をはばんだ。
「あなた……」
克子は、村びとたちを押しのけ、かきわけながらなおも進んだ。すると、最後にサキとケイを従がえたトメが、山道をおりてきて、異様に光る眼で克子を睨みすえた。克子は、思わずあッと立ちすくみ、トメにうながされて、そのまま、すごすごと山をくだっていくよりほかはなかった。
黄昏の海は、みるうち、ただれたような暗い灰色に変わっていった。かもめの鳴きさわぐ間に、

しだいに遠ざかっていく船のエンジンの音が、かすかにひびいていた。希望が少しずつ消えていくような、荒れたわびしい海だった。

克子と下条は、暗くなった納屋で、互いに離れて、うずくまるように坐っていた。もう小一時間ものあいだ、二人は、何もしゃべらずに、そうしてじいっと坐っているきりだった。が、やがて克子がそっと自分の鞄をひきよせると、自分のものをその中につめはじめた。びっくりしたように、下条は立って明かりをつけた。ちらっと克子は下条をみたが、そのままつづけた。

「どうするんですか」と、下条が、不安な表情で言った。「どこへ行くんですか……君、まさか帰るというのでは……」

「あなたが」と、手をつづけながら、克子がつぶやくように言った。「最後まで、仮面をとろうとしなかった理由がわかったわ……できれば、ずっと仮面をつけて、別の人間のままでいたかったんでしょう」

「克子さん」と、当惑したように下条が言った。

「おきれいな奥さんね……それに、とってもお若いのね」

言って、バタンと鞄をとじると、克子は逃げるように納屋をとび出した。

「克子さん、待ってくれッ」

と、下条があわてて追ってきた。

「黙っていかせて」と、克子は、もう後へは戻らないというように、ぐんぐん足早やに歩きながら言った。「奥さんは、まだあなたを愛していらっしゃるわ」

「しかし、君のご主人だって……」

「言わないでッ。私はもう、疲れちゃったわ……さよなら」

言って、克子は一気に駈けだすと、そのままトンネルの中へ消えていった。足音がしだいに遠のき、やがてそれも消えた。

祭りとは、晴れやかな行事のはずであった。しかし、今日の祭りは、克子にとってはただ新たな哀しみと屈辱を与えたにすぎないものだった。国道へ向かう道を急ぎながら、克子は、泣けて泣けてしかたがなかった。その涙をふり払うように空を仰ぐと、三日月が雲間にかかっていた。

ゆくりなくも出会った夫、拓也の、すべてを忘れて新しい人生をふみ出してくれという言葉は、哀しみでしかなかったし、はじめて会った下条の妻、佐知子の、愛くるしい若さと下条への想いは、克子にとって屈辱以外の何ものでもなかったのである。

突如、遠く半鐘の鳴りひびく音が聞こえた。半鐘はまぎれもなくトンネルの向こうの三日月村からで、あやふやな克子の心をいざなうようにつづいていた。思わず、克子は衝動にかられ、二三歩ひきかえしかけた。が、ぱっと両手で耳を押えると、くるりときびすをかえし、国道へむけて走り去った。

女の闘い

三日月村の火の見櫓で、一人の男がはげしく半鐘を打ち鳴らしていた。トンネル入口にはかがり火がたかれ、男たちが数名、張り番をしていた。ほかにも、男の影があわただしくうごめき、ただならぬ気配があたりにみなぎっていた。

その異常な事態を、下条鋭一は、階段をおりたところから、じいっと様子をみていた。何が何やら、まるでわけがわからなかった。と、そのとき、低いおし殺したような声が、高床式の納屋の下から聞こえてきた。

「あなた……」

下条は、ぎくりとしながら納屋の下にしのびよった。柱の陰に人目をさけるように隠れているのは、ほかならぬ妻の佐知子だった。

「佐知子ッ」

そのとたん、男たちの走る足音が納屋に向かっておしよせてきた。下条は、思わず妻をかばうように奥へ逃げこみ、木の茂みに隠れた。「探せッ」という男の声が聞こえ、だだだっと階段を男たちが駈けのぼっていった。

「男の姿も見えんぞ」
「ふたりして逃げたかな」
「いや、トンネルの入口は見張ってる」と、別の声が叫んだ。あそこを通らなきゃ、村から出られん、どこかに隠れてるんだ、探せッ」
あわただしく床下をのぞく男もいたが、奥までは探索されなかった。男たちは、そのまま鳥居のほうに駈けていった。いつしか半鐘は鳴りやんでいた。木の茂みから下条が妻の肩を抱きながら、そっと床下にでてきた。
「今だ」と、下条が声をかけ、妻をかばいながら納屋に駈けあがった。「調べられたあとだから、当分ここが安全だ」
追われているのが、妻の佐知子であることを知って、下条は、改めてがくぜんとした。
「佐知子、いったいどうしたんだ……なぜ、君が追われてるんだッ」
「島へ帰る船に乗らなかったんです」
「島？　なんだい、そりゃ……」
下条は、窓から外の様子を覗き、いらだちながら聞いた。トンネルの入口で、ひときわさわぐ声がおこった。
「ええ」と、おびえながら佐知子は言った。「神崎さんと一緒に帰るはずの船に、私、乗らなかったんです」
「すると、やっぱり、克子さんのご主人と一緒なんだなッ」
「違うわ」と、佐知子がムキになって言った。「同じ島にいることは確かだけど、神崎さんと私は、別々に暮らしてるわ」

「佐知子、よく順序だてて話してくれ……いったい、その島とはなんの島なのだ……どこにあるんだ……そして、おまえたちは、そこで何をしてるんだッ」

佐知子のおびえはますますひどくなり、口をつぐんだまま、おし黙ってしまった。納屋の中には、さっきまで克子のいた痕跡がいくつか残っていた。佐知子は、壁に忘れられたブラウス、小さな箱の上のいくつかの化粧品、そして小さな流し、ガスコンロなどを眼ざとくみてとった。そのとたん、下条は、別人のように落ち着きをなくして、おどおどするばかりだった。

「ここで」と、佐知子は皮肉な調子で言った。「あなたは、神崎さんの奥さんとふたりだけで暮らしてたのね」

「それは……君たちを捜すためだ」

「あなた、ほんとうに、あなたも克子さんも、私たちを捜すためにだけ、ここで一緒に？」

「佐知子ッ」

「そうなんですね……それだけなんですね」と、佐知子がヒステリックに言った。「あなたッ、どうして答えてくださらないの？」

「すまない」と、下条はゆっくり坐りながら言った。「君に嘘は言えない……実は俺、克子さんと……」

「いや、その先は言わないでッ」と、佐知子がさえぎった。「聞けば、私がみじめになるだけだわ……そうね、あなたに黙っていなくなった私が、わるいんですものね……でも、こんなに長くなるとは思わなかったわ。すぐに帰れるものだと思ってた、だから」

「君を責めてるわけじゃない」と、下条は思い直したように言った。「佐知子、教えてほしい……いったい、君たちのいる島って、なんなのだ」

佐知子は、救いを求めるように夫の腕の中にとびこむと、「ほら」と、高なる胸の鼓動に手を当てさせた。島のことを語るのは、タブーになっているように、つかのま、佐知子は眼をつぶり、気持ちを静めてからやっと口をひらいた。

「三日月村の人たちは、その島のことを、常世の国と言ってるわ……小さな無人島なの。けど、その島は、常世の国を信じている人たちにとっては、聖地なんだわ……なぜなら、そこには、竜宮城みたいに乙姫さまなんかもいて……」

「乙姫さま？」と、下条はぶぜんとした表情で聞きかえした。

「あなたには、おかしいでしょう……でも、ほんとうに乙姫さまと呼ばれる人が、島にはいるのよ……で、私は、その乙姫さまの世話係りをやらされてるってわけ……そして神崎さんは、乙姫さまの花婿さんなのよ」

「乙姫の花婿だって！」

下条は、あまりのことに、あいた口がふさがらなかった。事情がわかった以上、ますます、こんなところに妻をおいておくわけにはいかない。いつまた踏みこまれるかもわからなかった。ぐずぐずしてはいられないと、下条と佐知子は、手に手をとって、納屋をあとにし、暗闇にまぎれこんでいった。

しかし、逃亡者への詮索はことのほかきびしく、提灯や懐中電燈などの光りが、あっちにもこっちにも、チロチロと動きまわっていた。下条と佐知子は、いったん海岸の岩場に隠れ、そのうち、ころあいをみて、山裾に向かって走った。

「こっちだッ」と、下条は、佐知子の手をひいてしゃにむに走りつづけた。

「あなた……もうだめッ」と、山道にさしかかったとき、佐知子は、へなへなと崩れるようにしゃ

がみこんでしまった。「あのトンネルを見張られてたんじゃ、もうとても、この村から逃げられそうにないわ」

「山を越えるんだ、さ、早くッ」

「許して」と、佐知子はもう諦めたように、動こうとはしなかった。「神崎さんも私も、同じ粕屋村の出身だから、もうだめなのよ。私たち、木曽の粕屋村で生まれた者は、昔から、一度はこんな運命に……」

「もういい、さ、急ぐんだッ」

と、下条は思わず妻を呶鳴りつけ、なおも手をひいて走ろうとした。が、このとき、前方から炬火が近づいてきて、引きかえそうとすると、後からも灯りがせまって、みるうち、ふたりは、多勢の村の衆にとりまかれた。

下条と逃亡者の佐知子は、祭壇のある旧家の土蔵にひきたてられていた。ふたりの逮捕を予知していたように、トメが左右にサキ、ケイを侍らせて、待ちうけていた。ふたりは、罪人のように土間に坐らせられた。

「ひと騒がせなッ」と、よほど癇にさわったふうに、尾形トメが、はったと佐知子を睨みつけた。

「常世の国へ帰る船から逃げだすとは、なんたるバチ当たりなッ……これ、おケイ、佐知子に塩まけッ……お潔めじゃ」

ケイは、祭壇の三宝をおしいただくと、そこに盛られた塩をつかんで、パッと佐知子にふりかけ、ついで下条にも潔めをした。

「おばば殿」と、佐知子はがっくり肩を落としながらも、最後の抵抗を試みた。「お願いでございますッ……私を……この私めを、このまま、夫の許へかえしてくださいまし」

「なにを女々しいことをッ」と、トメは拳をふるわせて、はげしく憤った。「ひとたび常世の国へ渡った者が、元の世界にかえれぬことぐらい承知のはず……それを今さら、何をたわけたことを申すのじゃ」
「尾形さん、それじゃあんまりじゃないか」と、たまりかねて下条が叫んだ。「帰りたいというものを、むりやりに引きたてるなんて、それじゃ、まるで誘拐じゃないかッ……それが、平和な神に仕える人間の言うことかッ」
「そのうち、常世の国のよさがわかるはずじゃ」と、トメはあっさりかわした。「それ、皆の衆」
すると、奥から「おう」と女たちが数名あらわれて、佐知子をひったて、土蔵の扉から出ていった。
「あなたッ」
「佐知子ッ」
下条は、妻を追った。が、土間を出たところで、どっと男たちにとり囲まれ、押えつけられた。
「佐知子……佐知子ッ」
闇の中から「あなたあッ」と、佐知子の呼ぶ声が聞こえ、しだいに遠ざかっていった。「尾形さん」と、下条は、くやしそうに歯をかみ鳴らしながら、トメを睨みつけた。「いくらなんでも、ひどいじゃないか……あんたは、鬼だ、鬼ばばあだッ」
「おや、下条さん」と、トメは一件落着のゆとりをみせながら、軽くいなした。「あなたは、克子さんと、男女のちぎりを結んだのではなかったでしょうかね……それとも、あれもまた、私たちをごまかす手だてだったとでも言うおつもりですか」
はげしい下条の眼は、みるみるしおたれ、彼は、がっくり肩を落として、そこに坐りこんでしま

った。

納屋へ帰る下条の足どりは重かった。常世の国へ佐知子が帰っていったのか、船のエンジンの音が、しだいに遠のいていき、やがて暗い海は、どどーん、どどーんと、仄白い波のしぶきをあげ、いつ果てるともなくつづいていた。克子のいない納屋で、下条は、ぽっかり二つの穴があいたような淋しさを、どうふせぎとめることもできないまま、毛布にくるまり、まるくなって眠りについた。

十時すぎの原宿通りは、まだ宵の口だった。その光の洪水の中を、影のように克子はうっそりと歩いていた。まっすぐアパートへ帰る気にもなれないまま、克子は、とうとう「ブランコ」の前まできてしまった。ショーケースの向こうの作業場で、律子が黙々と金槌をにぎってスジ彫りをしている姿が見えた。

克子は、しばらく、ウインドーの外からそれを眺めていた。みるうち、人恋しさがつのり、もう、がまんができなくなって、克子は、狂ったようにはげしくガラス戸を叩いた。驚いて律子が、ドアのところにとんできた。

「どうしたのよ」と、律子は、よろよろと入りかけた克子を、両手で抱きしめるように支えた。

「いったい、何があったの？」

「律子……帰ったわ、私……」

「あたりまえだわ」と、いたわるように椅子に坐らせながら言った。「あんな村にそうは長つづきするはずがないと思ってね……それで今日も、あんたのアパートへ行って、ちゃんとお掃除しといたわ」

ほんとは、そうではなく、長すぎると思っていたにちがいない。律子は妙にそわそわしながら、コーヒーを入れていた。

「インスタントだけどさ、あの村じゃ、コーヒーなんて飲めなかったでしょ」と、コーヒーを克子の前に置きながら、もどかしげに言った。「ね、あすこで何があったか、話してくれるんでしょ、克子ッ」

克子は、ひとくち飲んで、それから思わず、ほっとため息をついた。

「あなた、ひょっとしたら、下条さんとのことで何か……」

一瞬、克子は眼をそらせ、ふっとうつ向いてしまった。

「しょうがないわよね。男と女が、あんな小屋で一緒に住んでたんですもの」

克子は、たじたじとなって「そんなんじゃないわ」と、あわてて打ち消したものの、どうしても弁解がましい言葉になった。

「じゃ、どうして帰ってきたのよ」と、直情な律子の追及はきびしかった。「それとも、あの村じゃ、やっぱり拓也さんのことがわからないとでも？」

「彼には会ったわ、また」と、多少、克子はやけぎみに言った。「けど、やはり、同じことしか、彼、言わなかったわ、忘れてくれって……」

「そんなバカな！　で、それから、拓也さんとはどうなったの？」

「船で、どっかに行っちゃったわ」

「どっかって、どこよ」

「常世の国って言ってたわ」

「まあ、あきれたッ」と、思わずまた顔をしかめて言った。「拓也さんまで、まだそんなお伽噺み

たいなこと言ってるの……バヵね、どうして、しっかりつかまえていなかったのよ」
「律子ッ」と、克子はつらそうに言った。「やっぱり……彼……私より、常世の国のほうをえらんだのよ……私は、常世の国に負けたのよ」
克子は、哀しみに耐えられなくなって、がばッとテーブルに顔をうずめた。律子は、傷心の克子を、なんと慰めてよいのかわからなかった。夫に捨てられ、疲れきっているこの友人を、今夜は早く寝かせつけねば、と、律子は、わざと荒っぽくせきたて、車にのせた。
が、夫のものがすべてなくなったアパートの部屋で、克子は、また新たな哀しを誘われて涙ぐんだ。ガランとした本棚と、とまったままの置時計は、あまりにもわびしすぎた。確かに、眼に見えるものは、何ひとつとして残ってはいない。しかし、この部屋には、夫とふたりで暮らした半年間の愛の数々が、そこここにしみついている。そして、肌で知った夫のぬくもりが、まだ、生々しく残っている。まぎれもなく、ここは克子と拓也、ふたりの部屋だった。
「で、これからどうするつもり?」と、律子も、あえてまたタブーをもちだした。「常世の国に負けたなんて、さっき言ってたけど、拓也さんのこと、あきらめるの?」
「わかんない……何もかも、わからなくなってしまって……」
「何を言ってるの」と、律子がけしかけるように言った。「出かけるときは、あんなに張り切っていたくせして……私がとめるのもきかずに、ふり切っていったのに、そんな意気地のないことで、どうすんのよッ」
「だって」と、克子は、ふっとのせられたように言った。「信じる力に勝てる? 人間の信仰みたいなものに、どうやったら勝てると思う? あのひとが常世の神の信者だってこと、よくわかったわ……どうしようもないわ、信仰が相手じゃ……」

「それじゃ、拓也さんのことは、もう諦めるのねッ」

克子は、ふっと窓の外に眼を移した。夫のことを諦めるのかと言われると、また迷いがでた。今日、思いがけなく出会ったとき、夫の眼は、言葉とは裏腹に、哀しげにまばたいていた。克子にとっては、それがいま、夫と自分をつなぐ、ただひとつのよすがであるような気がした。そして、その夫の哀しげな眼に、克子は、すがりたい気持ちでいっぱいだった。

翌日の昼ごろ、克子が、スーパーストアの買物から帰ると、部屋のドアの前に、ひとりの男が立っていた。足音に気づいたように、男がふっとふりかえった。克子を待っていたのは、下条鋭一だった。克子の足は、はたととまり、つかのま、ふたりは距離をおいてじいっとみつめあった。かりそめの愛が、そこにはあった。と言うよりも、追いつめられた者同士が、閉ざされた世界で求めあった愛のなごりがあった。いや、もしかすると、いま克子の心の奥底に横たわるためらいは、夫への思慕と、この下条鋭一に対する愛とのはざまに立った女の、心のゆらめきであったかもしれない。

部屋へ入っても、ふたりは、なかなか言葉が見つからなかった。が、けだるいようなその沈黙は、むしろ、心地よかった。克子は、ベランダに立ち、下条の強いまなざしを全身に感じながら、いつまでも背を向けて外をみていた。

「克子さん」と、下条が、きちんと端座して言った。「昨日までのことは、どうかゆるしてください……確かに、ぼくは、あなたとの触れあいの中で、ふと、あなたに……」

「やめてください」と、背を向けたまま、克子が言った。「それは、私も同じです……私も、あなたにふっと、すべてをまかせてもいいような気持ちになっていましたから……」

「男のぼくが、自制すべきだったんです」

「いいえ、男も女も、責任は同じですわ」
言って、克子は、くるりとふりかえった。
「忘れてください」と、克子はさらにつづけて、ふっと自嘲した。「これは、たまさか出合ったときの、夫の口ぐせですけど」
「克子さんッ」と、下条はその言葉じりをとらえて早口に言った。「その、ご主人のいらっしゃるところがわかったんです……わかったと言っても、それがどこにあるのかはまだ知りませんけど、あなたのご主人も、ぼくの妻も、村の人たちが常世の国とよぶ、小さな島にいるらしいんです」
「小さな島に……ほんとですか」
「昨夜、妻がこっそりしのんできて、そのことを教えてくれました……その島には、乙姫とよばれる女のひとがいるそうです」
「乙姫さまッ?!」
「ええ、そうです……そして、言ってもかまいませんか?」
言って、下条は大きく息をついだ。克子は、そんな下条をじいっとみつめながら、うながすようにうなずいた。
「あなたのご主人は、その乙姫の花婿として迎えられているらしいんです」
乙姫さまの花婿という言葉を耳にしたとき、一瞬、克子の眼に、あの別れの日の、竜宮城へ行くと言って家を出た夫の姿がよぎった。
「妻の佐知子は、その乙姫の、身のまわりを世話する係りだと言っていました」
「乙姫さまの花婿」と、よろめくように克子が言った。「やっぱり、夫は、ほんとうに乙姫さまの竜宮城へ行ったんですのね」

「あの湖底に沈んだ、木曽の粕屋村で生まれた者は」と、下条が勢いにのってしゃべりつづけた。
「先祖代々、その島の、乙姫の花婿と、乙姫の世話係りにえらばれるしきたりになっているそうです……あなたのご主人は、その乙姫の花婿の、第二候補だったといいます……そして、佐知子の話によると、あの尾形トメさんというのは、先代の乙姫だということですよ」
克子の驚きようといったらなかった。
「新しい乙姫が成人して、花婿を迎えると、前の乙姫は、あの三日月村へ来て、村長になるのがしきたりだそうです」
「それじゃ、その花婿の第一候補の人は、どうしたんですか？」
「新しい乙姫は、まず、その第一候補の花婿と婚礼をあげました。神崎さんはおそらく、その事実を見とどけてから、安心してあなたと結婚なさったのだと思います……ところが、その第一候補の人は、婚礼後、いくばくもしないうちに、ふとした病気で亡くなったというんです」
「それで」と、克子の顔が、みるうち、怒りに燃えていった。「夫が、第二候補だった夫が、呼びかえされたとおっしゃるんですかッ……そして、いま、その乙姫さまの花婿として、夫は、常世の島にいるというんですかッ……そんな身勝手な……それじゃ、私はいったい、どうなるんですかッ……私は、いったい、どうすればいいんですかッ……子どもまで、犠牲を強いられた私は……」
不幸な克子のその眼に、色あざやかな幻想の世界がほのみえるように、浮かびあがった。絵本でみたような竜宮城で、きらびやかな衣裳を身にまとった乙姫さまと、夫の拓也が、楽しげにたわむれている。うすものの布が、さながら水のように、藻のように流れるその中で、裸体の乙姫と拓也がたわむれながら、いつ果てるともなく愛を交わしている……。
下条鋭一は、三日月村へと帰っていった。帰りしな、下条はしきりにゆるしを乞い、克子も、忘

れてほしいと答えた。が、ふとしたかりそめの愛ながら、それは、下条にとっても、克子にとっても、忘れようにも忘れ得ぬことではあった。

が、克子は、いつまでもそんなことにこだわってはいられないというように、決意をひめて立ちあがると、また、旅行鞄に身のまわりのものをつめると、なんのためらいもなくアパートを後にした。

その足で、克子はまず原宿の「ブランコ」へ律子をたずねていった。乙姫と拓也の関係を明かすと、とたんに、律子はケラケラと笑いだした。

「浦島伝説も、とうとう落ちるところまで落ちたって感じね」

克子にとっては、しかし、それは笑いごとではなかった。もし、下条の言ったことが事実なら、今までのことはすべて、つじつまが合うからである。拓也はおそらく、幼ないころから、そのことを言い含められて育ってきたに違いない。だから、半年前に迎えがきたとき、逃れてもだめだと諦めたのだろう、と克子は思った。

「その後、二三度あの人に会ったとき、いつも村びとたちに守られてるみたいな感じがしたのも、常世の信者たちにとって、主人が、現人神の乙姫さまの、花婿だったからなんだわ!」

「じゃ、克子は、ほんとうに信じてるのね。そんなこと」

「ええ」と、克子がうなずいて言った。「私の赤ちゃんが闇に葬られたのも、おそらく、乙姫さまの花婿の子どもが、他にいたんじゃ困るからじゃないかしら? きっと、常世の信者たちは、血の純潔を守ろうとしているに違いないわ……きっと、そうだわッ」

「克子、それであなたは」と、律子は旅行鞄に眼を落としながら言った。「これからまた、あの三日月村へ行くつもりなの? だってあなた、信仰の力には勝てないと言ってたじゃない、負けるが

勝ちってこともあるわよ」
「ええ、でも」と、克子は眼を輝かせ、決然として言った。「相手が乙姫さまなら話はまた別よ、私と同じ女だわッ」
「じゃ」と、あきれかえったように、律子はまじまじと克子の顔をみつめた。「あなた、拓也さんを奪いかえす気でいるのね」
「せめて、もう一度、あの人……拓也さんから赤ちゃんをもらわなければ、私の、人生のサイクルは元にもどらないわ！」
言って、克子は思わず挑戦的な表情になった。そして、これからが、本当のたたかいだ、と思った。

フェリーのデッキで、克子と律子は手すりにもたれて、しだいに近づく房総半島をみつめていた。律子は、まだ半信半疑だった。乙姫の住んでいる島など、この房総半島にあるわけがない。観光会社の宣伝文句ならともかく、無人島の常世の国だなんて、話ができすぎていると思った。
「克子」と、律子がさとすように言った。「言っとくけど、これ以上、傷ついて帰られるんじゃいやよ……わかるわね」
「ありがとう、律子」
と、克子は海とその先の半島をみつめながら言った。下条のもたらした話は、時間の経過とともに、ますます克子の心に大きくのしかかってきていた。三日月村へ帰ることにきめたのは、乙姫とよばれる女に対する嫉妬のなせるわざかもしれなかった。が、その動機はともあれ、もう引きさがるわけにはいかないというのが克子の気持ちだった。
フェリーが、木更津港に到着した。タラップがおろされ、次々と車が桟橋におりていった。律子の車も、それらに交って陸にあがった。そして、走りかけたときちょうど、ひとりの若い女性が道ばたからとび出してきて、外国風に指をあげ、律子の車をとめた。まだ二十二、三歳くらいのその

女は、格好のいいジーンズ姿に、つばの広い帽子をあみだにかぶり、ザックをひょいと肩にかけていた。まぎれもなく、混血娘である。女は、車の中をのぞきこむようにして、窓をあけろというようにやたらにガラスを叩いた。律子は、窓をさげてやった。

「あんたたち」と、その女は無遠慮に声をかけてきた。「あっちへいく？　それともこっち？」

「どういう意味？」と、律子は苦笑しながら言った。

「こっちだったら、乗っけてってほしいんだけど」

「こっちって、あなた、どこまでいくの？」

「まだ、きめてない」と、女はにこっと笑った。「あんたたちの行くところまで一緒に行って、そこから考えるわ」

律子が、あきれた表情で、どうしようかというように克子の顔をみた。

「いいじゃない、律子……どうせ、私を送ってくれたついでなんだから、かまわないでしょ」

言って、克子はドアをあけてやった。

「サンキュー、あたしは江上麻理子、よろしくね」と、女は乗りこみながら言った。「レッツ、ゴー」

あまりのいけ図々しさに、律子もサジをなげたように笑いだして、車を走らせた。混血の麻理子は、後部座席で左右いっぱいにからだをのばして、リズミックにのうのうと歌を歌いはじめた。オーナーの律子は、さすがに顔をしかめた。

「ちょっと、あんた、もう少し静かにできないの？」

「でもさ」と、麻理子は気にかけるふうもなく言った。「久しぶりに乗っけてもらえたから、てんでいい調子なのよ……日本人てだめね、閉鎖的っていうのかしら、なかなか乗っけてくんないの

よ。だまにとまってくれるかと思うと、痴漢みたいな男で、これじゃ危くってしようがないしね」
「久しぶりって」と、克子が笑いだしながら言った。「そんなに長いあいだ旅行してるの？」
「そう、お金がなくなると、アルバイトしてね……あ、そうだ、おばさんたち、いったいどこまで行くの？」
と、麻理子はまったく屈託なかった。おばさんと言われて、律子はクサリながらも、海岸ぞいの国道を快調に突っ走らせた。やがて車は、三日月村に通ずる支道の分岐点にさしかかって、ストップした。鞄をとりあげて、克子はそこでおりた。
「あんたも、ここでおりるのよ」と、律子は麻理子に言った。「私、ここから引きかえすんだから」
「そう、どうしようもないわね」と、麻理子がザックをとって言った。「じゃ、克子さんと一緒に行くかな」
「だめよ、律子」と、克子はあわてて言った。「お願い、もうしばらく乗せてあげて……いま、この子と一緒じゃ、また面倒が起こりかねないわ」
それもそうだ、と律子は、麻理子を乗せたまま、さらに館山方面へ向かって走り去った。麻理子が、窓から身をのりだすようにして、克子にいつまでも手をふりつづけていた。あとでこの混血娘が、克子にとって重大な発見をする人になろうとは、そのとき、思いもよらぬことであった。
克子が、トンネルをぬけて三日月村に足を踏み入れたちょうどそのとき、野菜をさげた下条が高床式の納屋の階段をのぼりかけたところだった。眼ざとく下条は克子に気づき、そのとたん、男やもめのわびしい顔が、ぱっと笑顔に変わった。
「お帰りなさい」と、下条が興奮を抑えながら言った。「きっと、そのうちに戻って来るだろうと思っていました」

その言葉どおり、納屋の中はまったく元のままだった。喜びを隠しきれないように、下条は、よく動いて、部屋の中を片づけた。克子は、鞄の中からバター、チーズ、コーヒー、クリームなどを次々にとりだしては、テーブルの上に置きならべた。

「やっぱり、女性だな」と、感心したように下条が言った。「ぼくは東京へ行っても、コーヒーを買って帰ることなんか、まるで思いつきもしなかった……それも、ちゃんとクリームまで……どうも、かなわないなあ」

いちいち大仰に驚く下条の言葉に、克子はふと童心にかえり、ママゴト遊びをしているような錯覚にとらわれた。と、そのとき、下条がもじもじしながら「克子さん」と、言いにくそうに呼んだ。

「ええ、わかっています」と、克子が笑顔で答えた。「この間までのことを、村の人たちに、ほんとのことにしておきたいんでしょ」

「許してくれますか」

「だって、そうしとかなきゃ、この村にいられないんですもの」と、はずんだ声で克子が言った。

「そんなことより、島を探さなくちゃ……あなたの奥さんと、私の夫のいる常世の島を……」

「克子さん、それじゃ、あなたはやっぱり、ご主人を……」

「ええ、とり戻します」と、勢いこんで克子が言った。「乙姫などという得体の知れない女から、夫をとり戻してみせますッ」

こうして、克子と下条の奇妙な共同生活はまた復活することになった。が、その常世の島とは、いったい、どこにあるのだろうか？　五トンていどの漁船で、しばしば行き来をしているところから推しても、それは、房総半島から、いやむしろこの三日月村から、さして遠くないところにあ

る。下条は、この考えに確信を抱いていた。

祭りが終わって、男たちは漁にでていき、まだ戻っていなかった。女たちも山の畑やたんぼへでていったらしく、村の中は静まりかえっていた。下条は、トンネルをくぐって、下の村へでかけていった。克子も海岸へでてみようと、納屋をでた。三日月村の近くにあると思われる無人島を探がすことに、ふたりは意欲を燃やしはじめた。

克子は、海岸へおりていった。が、島影らしきものは、どこにも見えない。断崖のほうへ行き、岩場をよじのぼって沖を見たが、無人島はおろか、島影らしきものは、まったく見えなかった。佐知子の伝えた、常世の国と呼ばれる無人島は、いったい、どこにあるのだろうか?

いっぽう、下の村へでかけた下条も、岩場を渡って、突きでた断崖をまわり切るあたりまでいった。しかし、そこからも島影は見えなかった。が、下条は妻の言葉を信じていた。必ず、近くのどこかに、乙姫の住む島があるはずだと思った。そして、妻の言葉を信じれば信じるほど、下条は、克子のことを思って胸をいためていた。

山裾の近くで、克子と下条は顔を合わせた。この村からも、下の村からも見えなかったことから、克子はこの近くにある無人島という説に疑問を抱いた。

「しかし、必ず近くにあるはずです」と、下条はゆずらなかった。「常世の国は、この三日月村に住む人たちの聖地です。他人がみだりに渡ったりしないためにも、この村の近くにちがいありません」

あくまで、妻の佐知子の言葉を信じようとする下条を、克子はうらやましく思った。

「それじゃ、この山へ登ってみましょう」と、克子が情にほだされて言った。「鳥居のあたりへ登ったら、ひょっとすると見えるかもわからないわ」

「君、この道は」と、下条はあわててひきとめた。
「もう、許されてるはずだわ」と、克子は、ちょっとすねたように言った。「だって、私たちは常世の神の前で契りを結んだのですもの、かまわないはずよ」
驚いてみつめる下条に、克子はほお笑みかけると、それから、ぱっと背を向けて駈け登っていった。ためらうものを感じながらも、下条は、克子の後を追わないわけにはいかず、急いで山道を登っていった。
鳥居への山道が、村の旧家の前庭から手にとるように眺められることを、ふたりは知る由もないことだった。おりしも、その庭に立って、尾形トメとサキ、ケイの三人が、山道を駈け登っていく克子と、その後を追う下条の姿に気づいて、じいっと見ていた。
「おばば」と、ケイが言った。「あの二人に、勝手なまねをさせといて、いいもんだろうか？」
「大事ない……祭りが終わったんじゃ、ほっておけッ」
「けど、万一、島でも見つけられたら、厄介なことに……」
「知るわけがない。そうじゃろ、あの二人が島のことを知るわけがなかろうが」
「だけんど、おばば殿」と、年かさのサキも心配するように言った。「佐知子が逃げたとき、亭主に告げ口したかもわからんがな。何せ、佐知子は亭主のところへ帰りたがっていたからのう……明日は、いよいよ常世詣りじゃというに……」
「じゃとしても、ほっておくがいい」と、トメはおうように言った。「下手に騒げば、かえって怪しまれる。それに、あの島は、めったなことじゃ他人の眼にふれる気づかいはない。心配せんでもええ」
トメは、そう言いながらも、克子と下条をじいっと眼で追っていた。

克子は、鳥居のところまで駈けのぼると、夕焼けに染った海を眺めまわした。が、そこからも、島影は見えなかった。下条が、はあはあ荒い息をつきながら、追いついてきた。すると、克子は、下条をからかうように、さらにまた上へ駈け登っていった。

神殿の前からの展望は、すばらしいものだった。克子は、あちこちと、くまなく見渡した。しかし、島影はどこにもなかった。山の上から見はるかす海上のどこにも、島らしい点は見つけることができなかった。下条が、ゆっくり登ってきた。

「見えませんね、島らしいものは」と、下条は、がっくり肩を落として、ぐあいわるそうに言った。「すると、佐知子は、ぼくに嘘を教えたんだろうか」

「奥さんを、疑っちゃいけないわ」と、克子は下条に背を向け、扉の閉まった神殿をみつめながら言った。「だって、あなたの奥さんは、あなたのところへ帰りたいと思ってらっしゃるんでしょ……私の夫は……ただ忘れてくれとだけしか言わないけど、奥さんは違うわ……」

「克子さん、ゆるしてください……つらい話を、あなたに聞かせてしまって……」

「いいえ」と、克子は、ほお笑みをうかべて言った。「その話をあなたから聞かなければ、私はきっと、二度とここへは来なかったと思います……来られるはずが、ありませんもの……でも、今は違います。夫を奪った、乙姫とかいう女を、どうしてもこの眼でみてやりたいんですッ」

「探しましょう」と、下条は思わず、克子の手をとって強く握りしめた。「きっと、島はあるはずです」

素直に、克子はうなずいた。海が、とてつもなく大きい夕日を、静かに浮かべていた。

夫と妻に去られた男女の、かりそめの愛の生活がまた始まった。ひどく疲れていたので克子はその夜、夕食のあと、早々と寝る支度にかかった。ふとんを二つ並べて敷いたとき、下条が気を利か

せて、仕切りのカーテンをひこうとした。

「まって、鋭一さん」と、その手を押えて克子が言った。「村の人たちに、どこから見張られてるかもわからないわ。カーテンなんかひいたら、またこの間のように、いちゃもんがつくんじゃないかしら」

「しかし……」

「私のことなら、遠慮はいらないわ」と、戸惑う下条に克子は言った。「どうか、奥さんのことだけを考えていてください」

ふとんにもぐった克子を、下条は、じいっとみつめていた。その視線を感じたように、克子は、すうっとふとんをずりあげ、眼までおおった。と、そのふとんから、かすかな含み笑いがもれた。くっくっと笑っているのである。

「どうしたんです」

と、下条も笑いを誘われながら言った。

「この間、会ったとき、主人たら、俺のことは忘れてくれって」と、恥かしそうにふとんをかぶったまま、克子は言った。「俺のことは忘れて、下条さんと新しい人生をはじめてくれですって……あなたと、新しい人生を始めろっていうことだけが、その前に会ったときより変わってたわ」

言って、克子は、おかしそうにくっくっと笑いつづけ、そのうちしだいにばか笑いになっていった。が、それは悲しい笑いだった。すると、案の定、その笑いはいつかすすり泣きに変わって、克子はまた、ふとんの中に深くもぐっていった。やがて、泣き疲れたようにそのまま寝入ってしまった。

早く寝たので、克子は翌朝、空が白みかけるころにはもう眼がさめていた。と、トンネルから、

ひたひたと多勢の足音が聞こえてきた。漁にでていくのだろうと思って、ふと窓から覗いた克子は、思わずあッと驚いた。トンネルを出てきたのは、白装束の男たちで、足早やに村の道をくだっていった。

克子は、そっと扉をあけると、階段をおりて納屋の外にでてみた。すると、村の家々から、これもまた一様に同じ白装束の女たちが次々とでてきて男たちに加わった。いつかの仮面の祭りに行くときとそっくりだった。それらの男女は、旧家の前で三々五々、楽しげにガヤガヤ談笑していた。

克子は、納屋に引きかえすと「下条さん、起きてッ」と、呼び起こした。ふたりは、納屋の陰で、奇怪な村びとたちの動きに眼をみはっていた。まもなく、祭壇のある旧家の土蔵から、巫女姿の尾形トメがサキとケイを従えてあらわれ、渚に向かって歩きだした。白装束の一行が、そのあとにつづいた。

海は、昇りかかった朝日が照り映え、美しく輝いていた。トメを先頭に、村びとたちが数々の船に次々と分散して乗りこんでいった。やがて船は、エンジンの音とともに、しだいに沖合に遠ざかっていった。

克子と下条は、船の後を追うように、海岸へ走った。船はすでに、岸をはるかに離れ、女の子がひとりポツンと見送っていた。

「ね」と、克子がその子に声をかけた。「みんなはどこに行ったの?」

「トコヨマイリ」と、女の子が答えた。常世詣り? ひょっとしたら、常世の島のことではないかと克子は考えた。

「ね、そのトコヨってどこにあるの? 島へ行ったんでしょ」

「知らない……」

「知らないって、村の人たちは、ときどき行くんでしょ」
「でも、十五歳になんなきゃ、連れていってくんないもん」
と、女の子は、言い捨てるようにして、村のほうへ駈けていった。克子と下条は、遠ざかる船をじいっとみつめて、立ちつくしていた。いったい、総勢で、どこへ行ったのだろうか？　ふたりは、思わず、山の中腹の鳥居をみた。山の上から見れば、行く先がわかるかもしれない。そう思ったとたん、ふたりは、どちらからともなく山裾の道に向かって走りだした。
「克子さーん」
突如、背後から声がかかった。克子が、驚いてふりかえると、ヒッチハイクの混血娘だった。ザックをかついで、手をふりながら駈けてきた。
「麻理子さん」と、克子は二の句がつげなかった。
「ああ、よかった」と、呑気な声で麻理子が言った。「もしかして、探しまわらなきゃなんなかったら、どうしようかと思ってたのよ、よかった」
「あなた、どうしてここへ？　もっと先へ行ったんじゃなかった？」
「館山まで送ってもらったんだけどさ、車の中で律子さんの話をきいたら、面白そうなんで、引きかえしてきたのよ」
克子は、あきれながら、みつめるほかはなかった。
「克子さん、その人は？」と、下条を興味ぶかげにみて麻理子が言った。「私はマリー、江上麻理子です……克子さんのご主人なの？」
「違うわ」と、克子はイライラしながら言った。「わるいけど、いま、麻理ちゃんにつきあってるひまはないのよ」

言い捨てると、克子は、山道を駈け登っていき、下条があとにつづいた。

「あ、待ってよォ」と、麻理子もあわててつづいた。「夜通し歩いて来たのよォ……ねえ、何か食べるものなァい?」

麻理子にかかわりあってはおれないと、克子は一目散に鳥居のところまで駈けあがっていった。

「妙だ、船が見えないッ」

克子を追い越して、ひとあし先にあがった下条が思わず叫んだ。確かに、船の姿は海上のどこにもなかった。

「おかしいわ、エンジンの音が聞こえるのに!」

「しかし、どうして見えなくなったのかな」

駈けあがってきた麻理子が、それを聞きかじって「ね、何が見えないのよ」と、克子につきまとった。

「うるさいわねッ、関係ないでしょ」と、克子が思わず呶鳴りつけた。「ね、下条さん、もっと上へ行ってみましょう」

しかし、いちだんと高い社殿の前まであがったが、やはり、船は見えないのである。風の音にまじって、数隻のエンジンの音がひびいているのに、なぜか船影が見えないのである。克子と下条は、顔を見合わせるばかりだった。

「隠れ島かもしれない」と、下条が独りごちた。「平家の落武者などが住みついた隠れ里と同じように、どこか特殊なところからしか見えない島なのかもしれない」

克子は、不思議でならなかった。朝日をうつした美しい海のひろがりがあるだけで、そこには、船影も島影も何もない。しかし、どこからか、船のエンジンの音だけが、規則的にひびいているの

である。
「わあ、こんなとこから、島が見えるわァ」
と叫ぶ麻理子の声に、克子は思わずふりかえった。みると、神殿の扉がひらかれて、麻理子は、その中に入っていた。
「来てみてッ、島が見えるよ。変だな、この柱の間から見えるのに、ちょっと横へずれると見えなくなるんだよ……」
克子と下条は、顔を見合わせ、どっと駈けだし、神殿の中にとびこんだ。麻理子は、白木の祭壇の向こう側に立っていた。
「ほら、ここから島が見えるのよ、きれいでしょ」
祭壇の裏側へまわったふたりは、あッと息をのんだ。二本の柱の中間、鏡と銅鐸のあたりから、はるかな海上に、小さな島が見えるのである。
「ここからしか見えないのよ。わきへ寄ってごらん、もう見えなくなるから」
麻理子の言うとおり、わきへちょっと眼をずらすと、島は柱の陰へ入り、そこからはもう見えなくなるのである。
「船だッ」と、そのとき、下条が叫んだ。「常世詣りの船が近づいている……」
白木の柱の間から見はるかす島に、いま、数隻の船が近づいていた。
「あれが、常世の島ね」
と、克子は感慨ぶかい面持ちで、朝日をうけて輝く島と、近づく船の群れを、じいっとみつめていた。そこに常世の島があった。乙姫と呼ばれる女の住む島が見えた。いや、夫と、そして探し求めた妻の住む島を、ふたりはやっと見つけたのである。

「あれが」と、下条がポツリと言った。「乙姫の住む竜宮城か」
「いいえ、あなたの奥さんと、私の主人がいる常世の島ですッ」
と、克子は、じいっと島をみつめていた。
常世の島を発見するきっかけをつくってくれた、この混血娘の麻理子に、克子は、しみじみと不思議な縁を感じないわけにいかなかった。で、克子は、その功に報いるために、麻理子を納屋に連れ帰って朝食をふるまった。
下条は、黙々と箸を動かしながら、今後の対策をめぐらせた。まず、近くの町へ行って、その島の情報を集める必要がある。それに、常世の島へ渡るにしても、舟を手配しなければならないと思った。
「私も行くわ」と、克子は言った。
「いや、君は残ったほうがいい。ふたり一緒にいなくなると、常世詣りから帰った人たちに怪しまれる」と、下条は言い、さらにつづけた。「とにかく、村の人たちには、ぼくたちがあの島をみつけたことを、内緒にしておきましょう……必ず、舟をみつけてきますから、待っててください」

麻理子は、興味ぶかそうにふたりの話を聞いていたが、下条が立ちあがって納屋を出ていくと、
「待って、私も行くッ」と、あわてて声をかけた。
「麻理子さん……」
「だって、私だってあの島へ行きたいんだもん」
麻理子は、とめる間もなく駈けだしていった。
食事の後かたづけをして、何もすることがなくなると、克子は、夫の写真を手にして、ぺたんと坐りこんだ。あの日、竜宮城へ行くと言った拓也の姿が、まざまざと克子の脳裏に浮かんだ。あなたは、やっぱり乙姫さまのいる竜宮城へ行ったんですね！　と克子は、写真の夫に語りかけた。あなた、乙姫ってどんな女ですか？　そんなにすてきな人なんですか？　写真を持つ克子の手が、こきざみにふるえた。唇をかみしめ、こぼれそうになる涙を、じいっとこらえていた。
「常世詣りがもどって来たぞォ」
子どもたちの声が聞こえてきた。克子は、はッとして納屋の外へとびだしていった。常世詣りの船の群れが、小さな港に近づいていた。へさきに立つトメ、サキ、ケイ、三人の晴れがましい巫女姿がはっきり見えた。
克子は村の道を小走りにくだっていくと、鳥居のわきの潅木の茂みに隠れて、じいっとうずくまり、船の到着を待っていた。間もなく、常世詣りの人びとが陸にあがり、男たちはガヤガヤと話しあいながらトンネルのほうに向かい、トメたちが村の道にあがってきた。
「いいお日和りで」と、満足そうにトメが言った。「海も穏やかで、近ごろにないのどかな常世詣りじゃったのう」
「これで」と、初老のサキが言った。「乙姫さまに子どものできた兆しでもあれば、もっとよい常

世詣りになったものを……」
「サキさんも気が早いわ」と、中年のケイが笑って言った。「なんぼなんでも……だってまだ、花婿さんがきて、ひと月ちょっとじゃないの」
茂みの陰で、克子は、思わずはッとなった。そのとたん「誰じゃ、そこにいるのは！」と、尾形トメが、鋭い視線で克子のひそんだ茂みをはったと睨みすえた。人のよさそうな老婆の表情は消え、妖術使いのようなきびしい顔だった。血相を変えた顔で、克子がさっと潅木の茂みからとび出し、興奮の声を張りあげた。
「言われなくたって、今、出ていくとこだったわ。あなたがたは今、乙姫さまとおっしゃいましたね、乙姫さまの花婿と……」
「よくも、盗み聞きなんかしてくさりよって、このォ」と、サキが思わずかッとなって、克子につめ寄った。「油断もすきもありゃしないッ……さ、出て行っておくれ、今の話を聞かれた以上は、もう、この村においておくわけには……」
「やめなされ、サキさん」
「でも、おばば殿ッ」
「昔話ぞ」と、トメは高らかに笑った。「年よりの、たわいのない昔話ぞ。なあ、サキさん、ケイさん……おや、おケイさんは、わしらほど年じゃなかったかの、こりゃ失礼……」
「いやな、おばば」と、ケイがついのせられて言った。「この村じゃ、男を断った女はみんな同じですよ」
「おう、そうじゃった。そうじゃったのう」と、トメが笑って言った。「そういうわけじゃから、克子さん、忘れてしまいなされ……たわごと、たわごと、年よりの昔話ぞ」

言いながら、トメは去っていった。サキとケイは一瞬、克子を睨みつけるが、トメのあとを追っていった。

尾形トメたちの話が、また新たな傷となって克子の心に残った。花婿が来てひと月、早く乙姫さまに子どもができればいいと語っていた。その花婿とは、克子の夫であり、その子どもとは、かつて克子の胎内に宿り、無残にも闇に葬られたいのちの代わりを意味していた。克子は、心の中で叫ばずにはおれなかった。あなた、あなたにとって乙姫とは、いったい何なのですか？

昼近くになって、下条がひとりで納屋に帰ってきた。

「麻理さんは、どうしてもあの島へ行ってくれる船をみつけるんだといって、別行動をとったんですよ」

「それじゃ……」

「ええ、この近くの漁民は、誰もあの島へ行きたがらないんですよ」と、がっかりしたように下条が言った。「あの島は、種島といって、古くからこの三日月村の村有地になっているらしいですね。町役場で調べたところでは、島の周囲は一キロ足らずで、全島が切り立った崖に囲まれていて、滝木しか育たない不毛の島だそうです」

「じゃ、誰も住んでいないことになってるんですか？」

「登記上は、無人島になっています。ただ、三日月村の信仰の対象になっていて、ほかの村や町の漁師たちも、よっぽどのことがないかぎり、あの島へは寄りつかないようにしているらしいんです」

下条は、何人かの漁師に会って頼んでみたが、三日月村の人たちともめごとを起こすのは嫌だからといって敬遠された、共同体意識が強く、よそ者の入りこめる余地はなかった、と言う。そして麻理子は、どうしても島へ行くのだと言い、下条がとめるのもふりきり、隣の町へ行ってしまった

のだった。
「しかし、ぼくの感じじゃ、いくら彼女が頼んでも、このあたりの人たちは、誰も行ってはくれないと思いますね」
「じゃ、私たちはいったいどうすればいいんですか」
「しばらく様子をみましょう。なに、そのうちに、チャンスはきっとあるはずです」
「しばらくって、いつまで待てばいいんですか」と、つっかかるように克子が言った。「……ごめんなさい。でも、私、一刻も早く島へ渡りたいんです……あの人は、乙姫という女と一緒なんです……そして、村の人たちは、その乙姫に、一日も早く子どもができる日を待ってるんです……私の子どもを勝手に葬ってしまった人たちが、主人と乙姫の子どもを待ってるんです……」
克子はつらそうにうつ伏した。いたわりをこめて、下条は、克子の背中にそっと手をかけた。克子は、ふりかえって、下条をじいっとみつめた。
「嫉妬かしら……その乙姫って女に、私、嫉妬してるのかしら」と言うなり、克子は、にじり寄って下条のひざにすがりついた。「行きたいんです。一分でも、一秒でも早く、主人のいるあの島に行きたいんですッ」
下条は、そんな克子がいとおしく、何も言えないままに、やさしく背中をさすりつづけていた。そのとき突如、村の道を誰かが悲鳴に似た叫びをあげながら、駈けてくるのが聞こえて、ふたりは、はッと顔をあげ、納屋の外へとびだした。
と、村のほうから、スーツケースを下げた十七、八歳の娘が、必死で駈けてきて、その後から、巫女のサキが叫びながら追っていた。
「誰かつかまえとくれッ……みどり、帰るのよ、みどり！」

　サキの娘、みどりである。
「みどり、頼むから帰っておくれッ」
と、悲痛な声で、サキは追いかけた。ちょうどそのとき、トンネルから、杉島佳子がでてきた。サキの叫びを聞いた佳子は、「みどりちゃん」と、体当たりするようにして、娘の腕をつかまえ、ふたりは激しくもみ合った。「待って」と、佳子がけんめいにとめた。「待ってッ……どこへ行くのよ、みどり……」
「放してッ、おねがい……」
「だめよ、あんたは、お母さんのあとをついで、巫女になるんでしょッ」
「いやよ」と、みどりが叫んだ。「あたしは東京へ行くッ、放してッ」
「なに言ってるのよ……あんたがいなくなったら、次の巫女に誰がなるのよ」
　ふたりは争い、スーツケースがはねとんだ。必死でそれを拾おうとするみどりに、佳子がまたとびついていった。ふたりは、転げまわって、激しく争っていた。克子は、ふたりのところへとんでいくと、間にわって入った。「やめなさい……どうしたのよッ、やめなさい……」
　そこへ、サキが息をきらせて駈けつけた。「みどり」と、サキは泣きわめきながら娘を抱きしめた。「このバカ……母さんを裏切りよって……よくも、母さんを……」
　サキは、思いあまってバシッと、みどりに平手打ちをくわした。みどりは、わあーっと大地に泣き伏した。
「さ、立つんだ……立つんだよ、みどり」
「サキさん」と、克子は、みどりをかばうように言った。「いったい、娘さんがどうしたというんですか」

すると、サキは克子を突きとばしかねない勢いで、克子に向かって「あんたのせいだ」と、くってかかった。
「あんたたちが来たおかげで、この娘まで妙な考えを起こすようになったんじゃないか……あんたたちは、厄病神だ……ろくでなしッ……亭主のことも忘れて、二人ができちまったんなら、さっさと村を出ていったらいいだろ……出てお行き、さっさとこの村を出ていくんだッ……」
娘の反抗に逆上したサキをとり静めたのは、「さァサキさん、もうそのへんでやめなされ」と、間にわって入ったトメのひと言だった。サキの罵詈雑言は、それでぴたりととまり、恥ずかしそうにうつ向いてしまった。みどりは、涙のたまった眼で克子をみつめていた。
サキとみどりの母娘は、トメによばれて旧家の土蔵へいった。トメは、柴を折って囲炉裏にくべながら、静かにもの思いにふけっていた。囲炉裏をはさんで、サキとみどりが並んで坐っていた。サキが、がっくりうなだれているのに対して、みどりのほうは反抗的に眼を光らせながら、トメを睨んでいた。
「おばば殿」と、サキが手をついて心からわびた。「みっともないところを見せてしもうて……かんにんしてください」
トメは、自在鉤につるした鍋から、湯気の立つごった汁を椀によそうと、みどりにさしだした。
「よう煮えとる……さ、みどりちゃん、一杯食べなされ」
みどりは、うつ向いたきり、手を出そうともしなかった。サキが、かわって椀をおしいただいて、「ほれ、ご馳走になりな」と、みどりの前においた。
「さぞ、わしが憎いじゃろうなァ……」
「とんでもない、おばば殿」と、サキがあわてていった。「この子には、子どものときから、高校

を出たら私のあとをついで巫女になるんじゃと言い聞かせて、本人もようわかっとるはずなんです。なのに……」
「もうええ。若い人じゃから、東京へ行きたいのは無理もない」
「おばば殿」
「みどりちゃん」と、トメが淡々と言った。「けど、ここでわしらのあとをつぐ者がいなくなったら、村は滅びてしまう。このことをもう一度、ようく考えてみておくれでないかね」
「もう大丈夫……なあ、みどり」と、無言のみどりに代わってサキが答えた。「どうした、返事せんかッ」
「もうええ、もうええ。かしこいみどりちゃんのこと、ちゃあんとわかってくれるはずじゃ……さ、もう帰ってよい……そして、ちょっとでもええ、おばばの言うたこと、考えてみておくれ」
みどりは立ちあがると、すっと出ていった。サキはにがりきっていた。世の中はたしかに変わった、が、乙姫さまだけは、命にかえても守らねばならないとサキは思った。東京からやってきた二人が憎い、あの二人が納屋に住みついてからロクなことが起きないと、サキの憎しみは、いっそうつのるばかりだった。

その夜、トンネルの入口には、かがり火がたかれ、男たちが交替で不寝番をつとめていた。サキの娘、みどりの家出を警戒する見張りである。克子は、いたいたしい気持ちで、その光景を納屋の窓から眺めていた。若いみどりが、このまま巫女にされてしまうかと思うと、かわいそうでならなかった。
「もしかすると、今日の常世詣りは、新しい巫女をきめる儀式だったのかもしれませんね」と、下

条がふと思いついたように言った。「その巫女を乙姫の前に、常世の信者が全員集合して……すみません、克子さんには乙姫のことはタブーでしたね」
「いいんです」と、克子は淋しく笑って言った。「どうせ私は、その乙姫に夫を奪われた女です……わかってるんです、わかってるはずなのに……」
そのときコンコンと納屋の戸を叩く小さな音が聞こえ、ふたりは思わず顔を見合わせた。「どなた?」と、克子が声をかけると、戸が静かにあいて、みどりがさっと納屋の中に入ってきた。克子は、あわてて戸を閉めると、しっかりと心棒をかけた。
「どうしたの、みどりちゃん……」
みどりは、ひどく興奮しており、とっさに言葉もでてこないようだった。
「島へ……」と、みどりがやっと口をひらいた。「あんたたち、常世の島へ行きたいんでしょ」
えッと、ふたりは息をのんだ。
「そこに、あんたたちのご主人と奥さんがいます」
「それじゃ、君、島へ連れていってくれるというんですか」
みどりが、大きくうなずいた。
「だって」と、克子が言った。「そんなことをしたら、あなたは村の人たちに……」
「かまいません。ぶっこわしてしまいたいんです、こんな村。あんたたちが、乙姫さまからご主人と奥さんを奪ってしまえば、この村はもうおしまいです……お願いッ、私と一緒に行って、常世の島を目茶目茶にしてください」
「みどりさん、いったい乙姫さまって誰なの」
「名前はありません。あの島で生まれて、一度も島から出たこともないんです。学校も行かずにず

っと島で……だから、話し相手にあんたの奥さんがえらばれたんです。そして、花婿さんにあんたのご主人が……」
「でも」と、克子が首をひねった。「乙姫さまは、いったい、どうしてあの島で……」
「おばばの娘です」
「何ですって！　尾形トメさんの子ども！」
克子は二の句がつげなかった。
尾形トメは、先代の乙姫であった。乙姫の使命は、常世詣りの祭りを司ることと、つぎの乙姫を産むことにある。だから、今の乙姫はトメの娘であり、村長のトメがわざわざ東京へ行って、自ら妖術を駆使して工作の手を打ったのも、単に常世の国のためばかりではなく、自分の娘のためでもあったのである。みどりは要点をかいつまんで話すと、二人をせきたてた。
「来てください。私が舟を出します。あの島を……ううん、島と一緒に、この村も目茶目茶にしてください」
「みどりさん、それであなた、ほんとにいいの」
大きくうなずいて、みどりは立ちあがった。
「でなきゃ、私だって一生、この村にしばられて巫女にされてしまうんです……じゃ、私、浜で待っています」
みどりは納屋をでていった。チャンスは、意外に早く、まったく思いがけないところからやってきた。
トンネルの入口では、かがり火があかあかと燃え、数名の男たちが、茶わん酒を酌み交わしていた。納屋の前に下条が、這うようにあらわれ、じいっと、かがり火の男たちの様子をうかがいなが

ら、後に手招きした。克子が、腰をかがめてあらわれ、ふたりは物かげから物かげへと伝い、ひた走った。

村の道には、テレビの歌や、万才の声が流れていた。前方、ある家の戸がガラガラッとあき、いきなり「みどり、どこへ行ったんだ、みどりッ」と、叫ぶ声が聞こえ、ふたりは、はッとして隠れた。サキが、みどりの名を呼びながら駈けぬけていった。そのすぐあとを、佳子が「みどりちゃん！」と叫んで駈けてきた。それをやりすごして、ふたりは渚に向かって、けんめいに走った。

渚では、みどりが、小舟を海へ押しだしていた。ふたりが駈けてきて、一緒に押した。村のほうからは、みどりを呼ぶ声が聞こえる。三人は、舟にとびのった。みどりが櫂をつかい、下条が、水棹で舟を押しすすめた。

克子は、舟のへさきに坐って、じいっと暗い海をみつめていた。舟は、夜の海をすべるようにすすんでいった。波頭だけが、ほのかに白く、あとは真の闇であった。しかし、その暗い海の向こうに、夫の住む常世の島があり、舟はいま、確実にそこに近づいていた。

「しまったッ……」

という下条の声にふりかえった克子は、あッと思った。渚のあたりが、かがり火がいくつも動きまわっている。舟の脱出が発覚したことは、もはや明らかだった。

「みつかったんだわ……感づかれたんだわ」

叫ぶ克子の声は、ふるえをおびていた。みどりと下条は、必死で舟を漕ぎつづけた。克子は、村びとの様子が、気が気ではなかった。が、予感は的中し、そのうち、エンジンの音が遠く海を伝って聞こえてきた。数隻のエンジンの音がひとつになって、近づいていた。

「船が来るわッ」と、克子が叫んだ。ひざがガクガクして、とめようにもとまらなかった。

追手の船団は、互いにサーッと照明の灯りを海上に交錯させながら、ぐんぐん近づいてきた。下条は、力をふりしぼって一心に漕ぎつづける。だが、みどりの手は、エンジンの音が大きくなるにつれて鈍くなっていった。
「みどりさん、どうしたんだッ」と、下条が手をとめたみどりを叱咤した。みどりは放心したように後をみていたが、やがて、がっくりと全身の力がぬけたように、舟の中に坐りこんでしまった。
勇ましいエンジンの音が近づいてきて、交錯していた灯りがひとつにまとまり、その中に、小舟がすっぽりとはまりこんだ。

祭壇のある土間に、三人はひかれていった。土間に、みどりが坐らされ、その後に、克子と下条が並び、まわりを佳子たち村の女が戸口を背に、びっしりとり囲むように立っていた。するとそこへ、いきなり「やめなさいったら……サキさんッ」という声とともに、髪をふり乱し、びしょぬれになったサキがとびこんできた。ケイが、それにつづいてきた。
「サキさん」と、ケイがサキをつかまえて言った。「あんたのせいじゃないわ……ともかく、気を静めるのよ、いいね」
サキが、ものすごい形相で、娘のみどりを睨みつけた。そんな母親を、みどりはあわれむようにみつめたが、そのとたん、思わず表情を硬くしてあとずさった。サキの手には、古い小太刀が握られており、後からケイが、サキを羽交い締めに必死で押えつけていた。
「サキさん、やめなさい……さ、それを私によこしなさい」
言って、ケイは小太刀をとろうとした。その一瞬、サキは身をよじるようにしてケイの手を逃がれると、だだッと、祭壇のそばに駈けよった。祭壇の前には、こちらに背を向けたまま、トメが、

身じろぎもせずに坐っていた。サキは、その後にのめりこむようにひざまずくと、バシンと小太刀を眼の前においた。「おばば殿ッ、かんにん……村の衆をさわがせたおわびに……」

言いながら、サキは、すーッと、小太刀をぬいた。そのサキに、ケイが猛烈な勢いでとびかかった。

「とめないでッ」と、サキが叫び、ケイは、その気魄に、思わずたじろいた。「自分の娘ひとり、言うことをきかせられないで、なんの村役ぞ……村の衆、あとのことは頼みますぞ。ひと足お先に、常世の国へ行って、待っていますぞ」

言って、サキは小太刀をのどもとにぐっと擬した。

「お母さん」と、みどりがとりすがった。

「みどり……お前は、この三日月村の子ぞ、そのことを、ゆめ忘れるではないぞ」

「待ってくださいッ」と、克子が叫んだ。「みどりちゃんのせいじゃないわ……私たちが頼んだのよッ」

「ええい、言うなッ……もうおそいわ」

ぐいと、サキは小太刀をのどもとに突き刺そうとした。そのとたん、トメが突如、ケラケラと明るく笑いだした。

「おサキさん、昔みた村芝居じゃあるまいし、やめなされッ」

「おばば殿ッ」と、サキがちょっと毒気をぬかれたように低声で言った。「私は本当に、死んで村の衆におわびを……」

「わしの言うことがきけんというのかッ」と、トメが、くるっと手前を向いて、サキを睨みつけた。

「もうええ、もうええ……かわいそうに、みどりちゃんは、そんなに東京へ出て働きたかったのかい」

「そんなことは、ありゃせん」

サキはそう言って、やおら立ちあがると、白木の桶をとって、みどりの前におき、囲炉裏にかかっていた鉄ビンの熱湯をざあっとその中に注いだ。「あッ、それは」と、思わず克子が叫んだ。盟神探湯である。

「さ、みどり」と、血相を変えて、サキはきびしく命じた。「村の衆の前で、常世の神に誓って、二度と村を裏切ったりせんと約束するんじゃ」

「母さん」と、みどりが恐怖に顔をひきつらせてあとずさった。その手をサキは、しゃにむにつかんで、湯の中につけようとした。一瞬、下条が、おどりかかるように母娘の間に割ってはいり、みどりを抱きかかえた。

「やめなさいッ……野蛮じゃありませんか」

「黙れ、よそ者めが！」と、サキが呶鳴った。「この村には、村の掟があるんじゃ、みどり、さ、誓うんじゃ」

サキは、しゃにむに手をつかまえた。が、このとき、祭壇の銅鑼が、コオン、コオンと三つ鳴った。トメが《お静まり》を打ち鳴らしたのである。サキはそのとたん、ふりあげていた手を放すと、合掌して、静かに眼をつむった。あたりが、別世界のように、静まりかえった。

「みどりちゃん、東京へ行くがええ」と、トメの確かな声が流れるようにひびいた。「行きなさい。東京ですてきな仕事をみつけるがいい……なァに、この村を捨てていくのは、みどりちゃんが初めてのこっちゃない……何も心配はいらぬ……」

「おばば殿ッ」と、サキが、複雑な心情をこめて言った。「でも、みどりは村役をつとめるわしの子どもです……わしの眼の黒いうちは、そんな真似をさせることは……」
「おサキさん、いくらがんばってもご時勢には勝てん……そうとも、ご時勢にだけは勝てやせん」
サキは、がっくりとうなだれ、つらそうに土間に手をついていた。さすがにトメも疲れたふうで、ケイに「今夜はもうおそい」と言い残して、母屋のほうへ消えていった。こうして、克子と下条の裁きは、翌日に持ち越されることになった。
その夜も、トンネル入口には、かがり火がたかれ、厳重な警戒網が敷かれていた。みどりの一件が落着をみた今では、まるで、ふたりの納屋をとり囲むように、ふたりを見張るように、男たちの影がチロチロ動いていた。
下条は、外の警戒ぶりを眺めるうちに、いつになく不安が高まっていった。常世の島のこと、乙姫のことを深く知りすぎたことは、それだけ危険の度合が増したことでもあった。静かに窓の戸を閉めると、下条は、すっと克子の手をとった。
「逃げなきゃだめです」と、下条はじいっと克子をみつめながら言った。「ぼくが、彼らを誘い出しますから、その間に、あなたはトンネルをぬけるんですッ」
「それじゃ、あなたは……」
「ぼくのことはいい。君に、もしものことがあったら……」
「逃げるなら、あなたのほうだわ」と、克子は、ちょっとすねたように言った。「私のほうはどうせ、主人を乙姫さまに奪われてしまったんですもの、今さら……けど、あなたは違うわ。佐知子さんを助け出してあげなければならないでしょ」
「克子さん」

「私が、村の人たちを誘いだします」

背を向けたまま、克子は言い、それから戸をあけ、出て行こうとした。あわてて追って、下条は「やめたまえ」と言うなり、ぐいと乱暴に手をひっぱった。克子がふりかえり、ふたりは、のびきった腕の両端で、じいっとみつめあった。

「なぜ、逃げないんです」

「あなたこそ、どうして……私なんかのために……」

「克子さん」

せいいっぱい、わがままを張ろうとする克子の心根がいとおしく、下条は、衝動的に強くひっぱった。克子がその胸の中に崩れこみ、下条は、がっと抱きしめた。克子は、やるせない思いで、その胸に顔をすりよせた。が、次の瞬間、ふたりはなぜか、どちらからともなく離れた。離れて、ただじいっとみつめあうことしか、ふたりには何もできなかった。高まる鼓動をもてあますように、克子は窓に近づくと、戸を一杯にあけ放った。

「あの人たちに」と、克子は叫んだ。「私たちがどこへも行かないってこと、わからせて、安心させてやるわ」

窓の外は、かかり火が美しかった。克子はそれを見ながら、ゆっくりと窓辺によりかかって、そっと口ずさんだ。

むかしむかし浦島は
助けた亀につれられて
竜宮城へ来てみれば
絵にもかけない美しさ

しゃくりあげながら、きれぎれに歌う克子の歌声が、風にのり、暗い波の上を渡っていくようだった。下条は、そんな克子が、ただもう、いじらしく、じいっと後姿をみつめていた。

乙姫様のごちそうに
鯛や平目の舞い踊り
ただ珍しく面白く
月日のたつのも夢のうち

歌い終わったとたん、ホロホロと涙が、克子の頬をつたわった。泣けて、泣けて、しかたがなかった。

床の中に入ってからも、克子は、涙がでてどうしようもなかった。そうして、泣きながら、いつしか眠ってしまった。下条は、そっと毛布をかけてやった。彼女の頬に、涙のあとがはりついている。彼は、そっと指で拭いてやった。すると、彼女は無意識で、彼のほうに寝返りをうった。彼は、たまらなくなって、そっと抱いてやった。そうせずには、いられなかった。

お互いに、奇妙な関係のふたりであった。女には夫が、そして、男には妻がいた。そのことを知りつつ、ここにこうしている、ふたりであった。いや、夫があり妻があるからこそ、ここにこうしていなければならない、ふたりであった。

夜のしじまが、それぞれの夫と妻のことを、つかの間忘れさせてくれるように、二人をつつんでいった。

乙姫の島へ

何はともあれ、みどりが晴れて東京へ出立できるようになったことは、明るいできごとだった。翌る朝、旅仕度のみどりと佳子が連れだって村の道をやってくると、トンネルの入口に佇み、別れを惜しんで語り合っていた。
「ごめんね、佳子」と、みどりが、うれしさを包み隠しきれぬように言った。
「もういいじゃない」と、みどりの肩に手をやりながら佳子が言った。「だって、みどりちゃんのことは、おばばが許してくれたんだもん、それでいいわよ」
「それじゃ、佳子はやっぱり、この村にずっといて、巫女になるつもり？」
「もう言わないでよ。小さいときから、そう言われて育って、そのほかのことは、何ひとつ考えないようにしてるんだから」
「佳子」
「私の分まで、しあわせつかんでね」
言って、佳子はそっと手を出した。みどりは、その手をぎゅうっと握りしめた。そこへ克子が、ほお笑みながら近づいてきた。

「よかったわね、みどりさん……」と、克子が紙片をさしだして言った。「これ、私のお友だちの住所、原宿の裏で《ブランコ》って飾り物のお店やってる人なんだけど、何かあったら、たずねて相談するといいわ」

「ありがとう」

みどりは、ちらっと時計をみた。バスの時間が迫っているらしく、スーツケースを抱え「それじゃ」と、トンネルをくぐっていった。見送る佳子は、サヨナラをひとこと言ったきり、それ以上は追おうとしなかった。

「杉島佳子さんだったわね」と、克子は、みどりの幼な友だちに声をかけた。「あなたも、東京へ行きたいんでしょ」

そのとたん、佳子は敵がい心をあおられたように、ぐっと克子を睨んだ。

「そんなうまいこと言って」と、いきなり佳子はくってかかった。「この村を滅ぼそうたって、そうはいかないわ……あんたたちのこと、どう裁きつけるか、おばばたちは、もうとっくに考えてるはずだよ……ふン」

悪態をついて、佳子は駈けていった。あぜんと見送る克子は、そのとたん、思わず眼をみはった。佳子が駈けおりていった村の道から、入れちがいに、尾形トメが、ゆっくり、ゆっくり、こちらに向かっていたからである。村の掟を破り、村のタブーにさからった克子と下条に対して、いったい、この老婆はどのような裁きを考えているのであろうか？　克子は、まるで射すくめられたように、尾形トメの小柄な影が近づくのをじいっと見つめていた。トメのあとから、サキとケイがつきそうように従っていた。

克子が、あわてて納屋に駈けこみ、下条に事態を話すいとまもなく、階段をあがってくる足音が

聞こえた。その足音に怖えたような克子の表情を見て、下条はすべてを理解したように表情をこわばらせた。
「上がってもええですかの」
「どうぞ」
　克子のかぼそい答えを聞くまでもなく、サキとケイが部屋に入りこみ、トメがつづいた。
「ここで、男と女が幾晩もふたりきりで過ごしながら、よくもまあ、気持ちを押えつづけたものよ……」と、サキが皮肉をこめて、じろじろ部屋を眺めまわしながら言った。「と、ほめてやりたいのは山々なれど、そうはいかん。ふたりは一緒になったの何のと……結局、この村のことを探るために、わしらをコケにしよってたんじゃないか」
「だったとしたら、どうだというんですか」と、下条がサキにくってかかった。「ぼくたちの気持ちは、はじめからわかっていたはずです」
「なによ、その言い方は！」と、ケイが横合いから口をだした。「いまさらそんなこと言って、恥ずかしくないのッ」
「何が恥ずかしいんですか、私は主人を捜すためにこうして……」
「そのご主人が、このありさまを見たら、なんと思うかな。知らぬ存ぜぬ、何もないで、果たしてすむと思ってかね」と、ケイが勝ち誇ったように言い、さらに下条に向かって言った。「あんただってそうさ、女ってのはかくべつ嫉妬ぶかいもんだからね」
「そうか」と、下条が軽蔑のまなざしで言った。「最初からそれがあんたたちの狙いだったのか。ぼくたちを一緒に住まわせて、ぼくたちのことを誤解させようと……」
「いまさら、言いわけしても、言い逃がれられるもんじゃないわ、諦めちまいな」

「いいえ、主人は私を信じてくれるはずです。私だって主人を……」

　サキが、そのとたん、けたたましく笑った。

「そのあんたの主人なら、もうとっくに乙姫さまの花婿になっておるわい……あとは、乙姫さまにやや子ができるのを待つばかりじゃよ」

「嘘です。主人は、そんな乙姫などという女に心を奪われたりはしません」

「しつこい女だね」と、サキが憎々しげに言った。「ふたりで、何もかも忘れて、さっさと村からでていくのじゃ」

「そうはいきません」と、下条が言った。「少なくとも、常世の島で佐知子たちが何をしているか、どんな生活をしているか、この眼でちゃんと確かめるまで、ぼくたちはこの村をでていくわけにはいきません」

「どんな目に会ってもか」と、サキがぎょろっと眼をむいた。「村の人間を瞞し、村の掟を破ったものが、どんな目に合わされるか、まんざら知らないわけでもあるまい……とっくり、そのからだで確かめたいっていうわけだね」

「待ちなされ」と、トメがサキに声をかけ、ゆっくりと坐りなおした。そして思いがけないことに、トメは、いきなり手をついて、ゴザに頭をすりつけた。

「おふたりさん、これ、このとおりじゃ。何もかも忘れて、どうか、このまま村をでていってくだされ」

「おばば殿ッ」と、がくぜんとした表情でサキが言った。「いったい、なんてことを……」

「さ、あんたたちも頼んでくだされ」と、トメが言い、さらに話をつづけた。「乙姫は不憫な娘じゃ、いま、拓也さんと佐知子さんに捨てられたら、あの子は独りぼっちになってしまう……わかっ

てやってください。稲一本、イモひとつとれぬ孤島に生まれて、島の外のことは何ひとつ知らん娘です。女として、きれいなべべを着たこともなければ、友だちとさわいで遊んだこともない。物心ついたときから、乙姫としての修業だけをさせられて、そのほかのことは、何ひとつ知らずに育った娘です……佐知子さんに、やっと娘らしいことを教わって、拓也さんにはじめて女の喜びを知らされた、不憫な娘です……このとおりじゃ、かんにんしてくだされ」

「尾形さん」と、克子が声をふるわせながら言った。「それじゃ、そのためにとつぜん夫や妻を奪われた私たちは、いったい、どうすればいいんですか」

「あんたたちには、広い世間がありましょうが」と、トメが、けんめいに訴えた。「だけど、あの娘にとっては、小さな島だけがすべてです……それに、あんたたちは、もう、心のどこかで、お互いに好き合っていることでもあるし」

「待ってください、ぼくたちはそんな……」

「いいや、隠そうとしても、わしにはようわかる。あんたたちは、互いにもう好き合うておる。いや、よしんばそうでなくとも、東京へもどればきれいな女も、立派な男も、いっぱいいるでしょ。だけど、乙姫には、拓也さんと佐知子さんのふたりしかおらんのです。どうか……」

言って、トメはまた深々と頭をさげた。

「おばば殿ッ」と、いまいましそうにサキが言った。「何も、こんな奴らに、そうまで頭をさげんでもッ」

「サキさん」と、トメがきびしい声で言った。「みどりちゃんを許した、わしの気持ちがわからんのか……わしは、乙姫にできぬ夢を、せめて、みどりちゃんにはかなえてやりたかったんじゃ、それだけのことぞ……さ、あんたらも一緒に頼んでくだされ。さ、早よう」

「おばばッ」と、がっくりケイが手をついた。
「おばば殿ッ、わかったとも」と、サキも両手をついた。「このとおりじゃ、おばばの願い、どうか聞いてやってくだされ」
「お願いじゃ、いや、お慈悲じゃ、わかってくだされ」と、トメは悲痛な声で訴えつづけた。「このばばと、ばばのあわれな乙姫のために、どうか、こらえてやってくだされ……どうか助けると思って、このまま、村をでていってくだされッ」
トメにならって、サキとケイも頭をたれてゴザにすりつけた。突如、克子はいたたまれないように立ちあがった。
「どうしたらいいのよ……いったい、私、どうしたらいいのよッ」
叫びながら、克子は、納屋をとびだすと、渚に向かって走った。
肉親の情うすい克子であった。父に早く死にわかれた克子は、年老いた母とふたりで生きてきた。その母が亡くなって、天涯孤独の身になったとき、克子は、神崎拓也と知り合ったのである。その夫を求めて、この村へ来たはずなのに、いま、心を責める虚しさは、いったい何だろうかと克子は思った。そして、はじめて女の弱さをみせた尾形トメに、克子はしらずしらず、亡き母の面影を重ねていた。
船によりかかって、克子は、じいっと沖をみつめていた。
納屋に戻ってみると、混血娘の麻理子が思いがけない知らせを持って、克子を待っていた。
「麻理ちゃんッ」
「克子さん、オッケー、オッケー、オッケーちゃんよ」と、麻理子がはずんだ声で言った。「も

ら、あっちでもこっちでも、みんな断わられちゃってさ、頭にきちゃって、千葉市まで行ったらさ、やっとこさ、モーターボートで走ってくれるって男の子がいたのよ」

モーターボートは、しかも、隣り村の港まで来ているというのである。克子の気持ちは複雑にゆれ動いた。

「どうしたの？　まさか、気持ちがひるんだんじゃない？」

「そんなことないわ……ありがとう、麻理ちゃん」

「じゃ、私、先に行って待ってるからね、早く来てよ」

言って、麻理子は、納屋からでていった。尾形トメに手をついて泣きつかれた後だけに、ふたりで村をでていっても、疑われる気配はなかった。下条が、手早く身のまわりを片づけるのを、克子はぼんやり立ってみつめていた。

「どうしたの？」と、下条が、けげんな表情で聞いた。

「下条さん」と、克子がおびえたように言った。「私、こわいんです。何だか、こわいんです」

「何を言ってるんですか。乙姫という女から、ご主人を奪いかえすんだと言ってたのは、あなたじゃありませんか」

「ええ、でも、ひょっとしたら、逆にこれっきりになってしまうような、そんな気がしてならないんです」

「急ぎましょう」と言って下条は、元気づけるようにポンと肩を叩いた。「せっかくの麻理ちゃんの好意が無になってしまいます」

「ええ」

言って克子は、重い手つきで荷物をまとめはじめた。

あとから思えば、そのとき克子の、もうこれっきりになるかもしれないという怖れは、なかば正確な予想だった。しかし、いまは、下条にせきたてられるようにして、村をあとにした克子であった。

隣り村の港には、モーターボートが岸壁につながれ、いち早くふたりを見つけた麻理子がさかんに手をふっていた。

「こっちこっち、早く早く」

「何だ、おまえひとりじゃないのか」と、若者が鼻をならした。

「ケチケチするなよォ、五人乗りだっていばってたじゃない!」と、麻理子は、若者を軽くあしらっていた。

克子と下条が乗りこむと、モーターボートはすぐエンジンがかかり、若者は、ヤケクソみたいにスピードをあげ、みるうち、岸壁から遠ざかっていった。

「地図でみると、種島ってある島のはずだよ」

と若者が呶鳴ったが、エンジンの爆音で聞きとれないらしく、麻理子は調子よく歌を歌っていた。その種島に向かって、モーターボートはいま、ぐんぐん近づきつつあった。が、その島は、文字どおり切り立った断崖によって、近づく者を拒むかのように、そそり立っていた。そのまわりを、モーターボートが走りまわって、ようやく、小さな船着き場を見つけた。そこには、ロープの手すりのついた岩の階段がのびていた。

「三時間したら迎えに来てね」と、麻理子が言い、若者は「えッ、また来るのかよ」と、不満たらたらだった。

「だって、迎えに来てくんなかったら、デートできないじゃん」

「ちぇッ、これじゃ、どっちがひっかけたのかわかりゃしないや」

いま、克子は夫の住む島に立った。その島の岩をふみしめて立った。果たして、夫はどうしているのだろうか？　そして、乙姫とはいかなる女なのだろうか？　克子の胸の鼓動が、にわかに高まった。

狭い船着場に三人が立ち、モーターボートは旋回しながら帰っていった。その船影に向かって、麻理子が「迎えに来てよォ、必ず」と、さかんに手をふりながら叫び、元気に岩場の階段を駆け登っていった。

「さ、行きましょうか」

と、下条も歩きだした。しかし、克子は、曲りくねってつづいている。その岩の階段をじいっと見上げるばかりだった。

「どうしたんですか？」

下条がふりかえって、声をかけた。そのとたん、克子はくるりと背を向けた。モーターボートはもう、はるか彼方に遠ざかっていた。階段をおりて、下条が近づいてきた。

「帰りたい」と、克子がポツリとつぶやいた。

「このまま、何も見ないで、帰ってしまいたい……」

しかし、帰ろうにももはや、帰るすべがなかった。できれば、ここから動きたくないとも思った。島のすべてを見ることが、克子にはこわかった。たとえようもなく恐しく思えたのである。下条は、そんな克子の後髪をじいっとみつめていた。そして、はげますように、そっと肩に手をおいた。克子は、下条をふり仰ぎ、つかの間、ふたりは無言でみつめ合った。

「何してんのよォ、早くおいでよォ」

麻理子の声が降ってきた。みると、よほど高いところから、麻理子が、手すりのロープにつかまって、身をのりだすようにして叫んでいた。

「今、いくわァ」

克子は、固いほお笑みをかえすと、下条の先に立って、岩の段々を登りはじめた。下条は、それを守るように、後からついていった。そこは、常世の島であった。夫と妻の住む島であった。そして、乙姫とよばれる女の住む竜宮城でもあった。延々と曲りくねってつづいている、その段々を、麻理子が、少しおくれて克子と下条が、登っていった。

思えば長い旅であった。ある日、竜宮城へ行くといって夫が消えてから、克子の歩いた道は何百キロにおよんだであろうか。横浜へも行った。伊豆へも行った。丹後半島から木曽の山奥へ、そして香川県、讃岐まで、夫の足あとをたずねて、克子は、ただ歩きつづけた。その道程で出あった下条鋭一と、やっとこの房総半島の小さな村へたどりつき、さらに夫の居場所を求めて、いま、克子は常世の島、乙姫の島、いわば竜宮城へ一歩一歩、足あとを印している。この島の先は、怒涛千里の太平洋である。おそらく、この島が、克子の長い旅の終着点にちがいない。そう思えば思うほど、胸はふるえ、足の動きは鈍った。

夫の告白

「わあ、一番のりだァ」
大声をあげて駈け登った麻理子の姿が、はるか上で消えた。
「麻理ちゃーん、そこに何があるの？」
急ぎながら、克子が叫んだ。が、返事はなかった。
「麻理ちゃん、どうしたの？　どこにいるのよォ？」
「麻理子さん、どうしたんだッ」
下条も、大声で叫んでみたが、返事はなく、はるか下のほうで、岩を嚙む怒涛の音がひびくばかりである。ふたりは、思わずいぶかしげに顔を見合わせた。それからまた、息をはずませながら、岩の階段を駈け登っていった。そして、やっと、階段のつきるところまで来た。と、そこに麻理子が、じいっと一点をみつめて立っていた。
「麻理ちゃん……」
麻理子は、黙って視線のほうを指さした。その指の先を眼で追って、克子は、はっと息をのんだ。島の上は、一面の草原であった。その草原の中央に、天を衝くばかりの白木の柱が一本、にょ

っきりと立っている。そして、その白木の柱が、さながらご神体であるかのように、その前には、これまた白木の、小さな鳥居がある。
　思わず、克子は瞳をこらした。その鳥居の前に、白いものがうづくまっていた。白木の柱を伏し拝んでいたのである。白い、うす物の裳裾が、風にひらめいていた。克子、下条、麻理子の三人が、じいっと声もなくみつめていた。
「乙姫だ」と、うなずきながら、下条が言った。「あれが多分、乙姫ですよ……そうか、乙姫というのは、常世の神のご神体を祭る巫女だったのか？」
　克子は、ただまじまじと、その白い裳の女をみつめるばかりだった。
「ね、だけどさあ」と、麻理子が素っ頓狂な声をあげた。「あの、でっかい柱は、いったい何なのかねえ？」
「シンのミハシラですよ」と、確信をこめて下条が言った。「心の御柱ともいってね、古代日本では、あの柱に神が宿ると信じられてたんです」
　心の御柱――古代日本にあっては、大木に神が宿ると信じられていた。そして、わが国には、この心の御柱をご神体とする代表的な神社がふたつある。ひとつは太平洋に面して建つ伊勢神宮であり、もうひとつは、日本海を見おろして建つ出雲大社である。
　しかし、このふたつの神社の心の御柱には、大きな違いがある。出雲大社の心の御柱が、白雲八雲たつ大空に向かって、まっ直ぐ伸びているのに対して、伊勢神宮の心の御柱は、その本殿の床の下で、土の中深く打ちこまれているのである。いま、眼の前に見る心の御柱は、青空に向かって直立している。とすれば、この常世の島は、出雲の流れをひくものであろうか？
「ね、あんたたちのご主人や奥さん、どこにいるのかしら？　聞いてこようか！」

言うなり、麻理子は、「ね、ちょっとォ」といきなり駈けだした。そのとたん、乙姫がすっと立ちあがった。麻理子が、思わず足をとめた。克子は、はっと息をつめた。静かに、乙姫が三人のほうを向いた。黒い長い髪、大きな瞳、一見ギリシャ彫刻を思わせるうす物を身にまとったその姿は、息をのむくらい美しく可憐である。

さあーっと風が吹いた。三人と乙姫の間の草々にうねりをうたせて、風は、吹きすぎていった。克子はただ、乙姫をみつめるばかりだった。そこに、女がいた。乙姫とよばれる女がいた。夫を奪った女がいた。克子は、胸のふるえるのを感じていた。そして、乙姫も、心なしか克子をみつめているふうであった。

下条は、じいっと乙姫を睨む克子をみていたが、そのうち、静かに乙姫のほうに歩きだした。克子は、ぱッと下条に駈けよると、その腕をつかんだ。みつめる下条に、克子は、黙って首を横にふった。

「どうしたんです。あの人に聞けば、ご主人のことも、佐知子のことも……」と、下条が、くるりと背を向けた克子に言った。「克子さん、何をおそれてるんです。せっかく、ここまで来たんじゃありませんか」

乙姫は、涼しげな瞳で、黒髪と、白い裳裾を風になびかせながら立っていた。

「あのひとと……あのひとと夫が……」と、克子はつらそうに言った。「私より、ずっと若くて……ずっときれいで……」

「何いってるんですか。あなたは、神崎さんの奥さんじゃありませんか」

そんなふたりを見ていた麻理子が、ゆっくりと、乙姫に向かって歩きだした。

「あのォ、すみませんけど……ちょっと伺いますけど、この島に、神崎拓也さんと、下条佐知子さ

んて人がいると思うんですけど」

そのとたん、乙姫は、ぱっと駈けだした。麻理子が「あッ、逃げる」と、小さく叫んだ。美しく裳裾をひるがえしながら、乙姫は、走り去っていった。すると、克子が、いきなりあとを追って駈けだした。「克子さんッ」と、下条が思わず声をかけた。克子は、その声も聞こえなかったように、乙姫を追って走りだした。

「待ってくださいッ」

という克子の声に、乙姫はちょっと立ちどまってふりかえったが、近づいていく克子をみて、また、一散に駈けだした。克子は「待って」と追っていき、下条も、そのあとを追って走りだした。麻理子も走ったが、白木の心の御柱の前で、ふっと足をとめた。

捨てられたくせして、男がそんなに恋しいのかしら？　だけど、こんないい草原に、こんな柱を一本立てとくだけだなんて、もったいないわね、レジャーランドにでもしたらもうかるのに！　麻理子は、そう思いながら、心の御柱をピシャピシャ、掌でたたいていた。

いっぽう、克子と下条は、背の低い潅木の、枝々の下をくぐりぬけるように走っていく乙姫を追っていた。が、慣れているのか、乙姫は、枝にさえぎられて、まごまごしているふたりを、みるうち、引き離していた。そして、乙姫は、そそり立つ岩山の角を曲って姿を消した。

ふたりは、あとをつけて岩山の角を曲った。すると、そこに、ポッカリと口をあけた洞穴がある。克子は、その前で立ちどまった。下条が中を覗くと、うす明かりがもれている。中へふみこんで、克子の手をとってやり、ふたりは、おそるおそる中へ入っていった。

洞穴の奥からもれてくる灯りで、岩肌が美しく輝いている。ふたりは、手をとりあってさらに奥へと進んでいった。と、いきなり、岩肌にふわーっと人影が動いた。ふたりは、はっと立ちどまっ

た。奥からでてきたのは、巫女の姿をした佐知子であった。
「佐知子」
　思わず、下条は声をかけ、熱っぽくみつめた。そして、つかつかと佐知子に近づくと、その手を握りしめた。
「佐知子、迎えに来たんだッ」
　佐知子は、その手を、そっと離した。
「お帰りください、そのまま」
「何を言うのだ。いつか、おまえは逃げだしたいと言ってたじゃないか」
「あなたも」と、佐知子は今度、克子に向かって言った。「このまま、お帰りください……黙って帰ってください」
「主人は、どこにいるんですか！」と、克子は、佐知子につめよった。「主人は、いったいどこにいるんです」
　するとみるうち、佐知子の顔がゆがんでいき「なぜここまで来てしまったんですか」と、非難のこもった言葉を投げつけると、洞穴の出口のほうへぱッと駈けだしていった。下条は「佐知子」と追いかけようとしたが、ふと足をとめて克子をふりかえった。
「奥さんのところへ、行ってあげてください」
「しかし……」
「私なら大丈夫です。さ、早くッ」
「すみません」
　下条は、駈けだしていった。克子はちょっと見送って、すぐに奥を睨んだ。そのとき、コオン、

コォンという、あの銅鐸のひびきが聞こえてきた。克子は、決心してゆっくりと奥へすすんでいった。もれてくる灯りが、しだいに明るさを増してきた。すると、とつぜん、周囲がすっと開けたところへでた。思わず、克子は叫びそうになった。そこは、洞穴の中の広場である。中央に、祭壇がしつらえられ、銅鐸のひびきは、そこから起こっていた。中央の高い所に祭壇があった。白木の鳥居に、銅鐸がつり下げられていた。その下で火焔土器をかたどった大きな土器に火が燃えていた。その前に一人の男と一人の女がひざまずいて祈っている。そして広場には、白い衣裳の女たちが数人、同じように祭壇に向って祈りをささげている。こんな洞穴の中に、こんな広間が！　克子は思わず息をのんだ。中央で祈りを捧げていた男と女が、克子の気配にふりかえった。拓也と乙姫である。

「あなたッ」

克子は、けんめいに自分を抑えるように呼びかけた。

乙姫は、拓也に寄り添い、その陰に隠れるようにしていた。拓也は、乙姫をかばうようにしながら、克子をじいっとみつめていた。

「よく、この島がわかったね」

と、拓也が静かに言った。が、乙姫をかばうようにした拓也のしぐさで、克子の自制はふきとんだ。

「そのひとが、乙姫さんですね」と、克子は睨みつけながらヒステリックに声を荒げた。「そうなんですね、そのひとが、乙姫さんなんですねッ」

乙姫は、こわそうに、ますます拓也にすがりついていった。

「離れなさい、そのひとは、私の夫ですッ」

「克子……」

「離れるのよッ、それは私の夫ですッ」

言いつつ、克子は一歩前にでた。乙姫は、いよいよ、拓也の陰に隠れようとし、拓也も乙姫をかばうように、立ちはだかった。

「どいてッ」と、克子は張り叫んだ。「その女のひとと話があるんです。あなたは、どいてくださいッ」

「よしなさい」

「あなたは黙っててよ。私は、その乙姫さんってひとと、話したいんです」

拓也は、そっと乙姫を引き離した。すがりつくようにみつめる乙姫に、拓也は目顔で奥へ行くように指示した。乙姫が、さっと祭壇の奥へ入っていった。「待って」と追いかけようとする克子の前に、拓也が立ちはだかった。

「どいてくださいったら……あのひとと、話をさせてッ」

「お願いだ、あのひとは、そっとしてやってほしい」と、拓也が悲痛な声で言った。「およそ、世の中のことは何も知らない、かわいそうなひとなんだ。たまに、村びとが来てもお祈りをするだけで、ほとんど話もしないで帰ってしまうのだ。どうか、そっとしておいてやってほしい」

「あなた……あなたはやっぱり……私より……あのひとのほうが、いいんですか……」と、克子はきれぎれに言い、みるうち、嫉妬に燃えていった。「この奥に何があるんですッ。この奥で、あなたはあのひとと、何をしてるんです……どいて、あのひとと話をさせてくださいッ」

「よしなさい」

「あなたは、そんなに……そんなに、あのひとを愛してるんですか」

「そう思われても、仕方がないかもしれないな……」
「あなた！」
言って、克子はみつめるが、ううっとこみあげる嗚咽をおさえかねて、そこにうずくまった。もう泣くしかなかった。
拓也は、そんな克子をじいっと見おろしていたが、そっと近づくと、肩に手をかけた。
「克子、よく聞いてほしい……この世には、愛よりも強いものがある。そのことを、ぜひわかってほしいのだ……俺は、おまえが嫌になって捨てたわけでもなければ、おまえより乙姫を愛したわけでもない……聞いてくれ、俺がここへ来たのは、出雲族千五百年の血のためなのだ」
と、拓也ははじめて、自分たちのすべての秘密を打ち明けた。
出雲族とは、古代の日本で海に生き、土地を耕し、のんびりと豊かに暮らしていた民族だった。三世紀ごろの日本には、女王卑弥呼をいただく邪馬台国という国があった。その邪馬台国が、四世紀から五世紀にかけて、忽然と姿を消し、今だにそれは、どこにあったのかさえわかっていない。出雲族も、いわばその邪馬台国と同じように、古代のある時期、今からおよそ千五百年前ころ、大陸から侵攻してきた民族に滅されてしまったのである。その民族は、馬をよく乗りこなし、戦いと掠奪を好む集団であった。
「それじゃ」と、思わず克子は聞いた。「この日本は、よそから来た民族に支配されてしまったというんですか」
「そのとおりだ」と、拓也は、熱っぽく言った。「日本列島を騎馬によってふみにじったその民族は、やがて、大和民族と名のり、征服王朝としての大和朝廷をうちたてた。しかし、出雲族も完全に滅びたわけではなかったのだ。ある者は、海岸の崖に隠れた場所に小さな村をつくり、ある者

は、山深く隠れ住んで、脈々と出雲族の血を現在までつづかせて来たのだよ」
「そして、あなたはその、出雲族の子孫だというんですね」
「そうなんだ。千何百年かの間には、混血がすすみ、すべてが入り交って、今や、出雲族も大和族も、区別がつかなくなってしまった。しかし、乙姫をいただいたごくわずかの人たちだけが、出雲族の純血を守りとおしてきたんだよ」
「そんな、千年以上も遠い昔のできごとのために、あなたは、自分を犠牲にするとおっしゃるのですか？」
「笑われるかもしれない。また、確かにつまらないことかもしれない。しかし、そういう民族の千五百年にわたる恨みを、一身に背負って生きるということも、やはりひとつの生き方だと俺は思っている……許してくれ、克子、俺はもう、そういうふうに生きようと決心してしまった男なんだ」
「あなた……」
「これは、愛の問題でもなんでもない。ただ、ひとつの生き方の問題なのだ」
拓也がそう言ったとき、乙姫が、祭壇の奥からすっと姿をあらわした。そして、乙姫は拓也の傍らに並んで坐ると、深々と頭をさげた。
「このひとも、生まれたときからそういう運命に殉じて生きてきたんだ……」
克子は、そんなふたりを、ただ黙ってみつめるほかはなかった。夫の話は、まったく思いがけないものであった。千数百年の昔、この日本列島は、海を渡ってきた民族に征服されたのだ、と夫は語った。そして、滅された出雲族の末裔として、その血に殉じて生きたい、と夫は言うのであった。
「あなたは、卑怯です」と、克子はうめくように、つぶやくようにやっと言った。「そんな話を聞

かされて、いったい、私はどうすればいいのですかッ」
「頼むしかない、俺にできることは、それだけだ……許してくれ。克子、頼む……」
言って、拓也は乙姫といっしょに、また両手をついて頭をさげた。
「やめてくださいッ」と、克子は絶叫した。
「そんな、みじめな姿をみせないでください……いやです、あなたのそんな姿は、もうみたくありません。やめてください！」
いたたまれない思いのままに、克子は、いきなり駈けだした。克子は、洞穴から岩場を走って草原にでた。叫びたい思いを押えながら、わけもなく一散に走りつづけた。断崖の近くまで駈けてきたとき、克子は、はっと立ちどまった。向こうに、下条と佐知子の姿があり、話声が手にとるように聞こえてきた。克子は、電気にうたれたように、立ちすくんでしまった。
「あなた」と、佐知子がふりしぼるような声で言った。「どうか、神崎さんの奥さんのところへ行ってあげてください……あのひとのところへ行ってあげてください」
「佐知子……」
「私はしあわせでした」と、佐知子は、空の一点をみつめながら言った。「あなたと結婚して一年、私はとってもしあわせでした。……女として、一生かかっても経験できるかどうかわからないほどのしあわせを、私は、あの一年であなたからいただきました」
「やめなさい。これからだって、ふたりで努力をすれば、きっとまた、しあわせになれるさ……」
「かんにんしてください。私には、もう一度あなたとやっていける自信が、なくなったんです。許してください」と、佐知子はせつせつとつづけた。「こわいんです。やり直して、あの思いでがこわれるかもしれない……それがこわいんです。私の知っているだけのしあわせを、今度は、乙姫さ

まにわけてあげたいと思います……許して、もう会いません……」
　佐知子は、みるうち、眼に涙をいっぱいため、それをふりはらうように駈けだしかけ、潅木の陰にひそむ克子と、バッタリ顔を合わせた。佐知子は、その前に歩みよった。
「下条を……あのひとを、よろしくお願いします。おしあわせに……」
　言って、深く頭をさげると、佐知子はあわてて駈け去っていった。克子に、がっくり肩を落とした下条が、ゆっくり近づいてきた。
「ご主人とは会えたんですか」
　そのとたん、克子は、せきを切ったように、わあーッとそこに泣き伏してしまった。下条も、同じ思いで、茫然と立ちつくしていた。
「あなたの言ったとおり」と、下条がポツリと言った。「……やはり来なければよかったのかもしれない……こなければよかったんです、きっと」
　下条は、くるりと克子に背中を向けた。その肩が嗚咽をこらえ、男泣きに泣いていた。ふっと顔をあげた克子は、涙のたまった眼で、そのふるえる肩をみつめていた。
「あのォ、おふたりさん、わるいんですけど、ちょっと……」と、駈けつけた麻理子がのんびり叫んだ。「船が近づいてんのよ。モーターボートとは別な船だから、注意したほうがいいんじゃないの？」
　下条は、はっと海上に眼を落とした。十トンばかりの漁船は、まぎれもなく三日月村のものだった。しだいに近づいて来る船のへさきには、白髪をふりみだしてぐっと島を睨みすえている尾形トメの姿があった。

土蔵の中、祭檀に向かったトメの後に、克子と下条は引きすえられていた。
夫の話は、克子にとってあまりに大きな衝撃だった。腹だたしく、なさけなかった。
「こんな村なんか、今すぐにでて行くわ」と、克子は肩をふるわせながら興奮して言った。
「そうしましょう。こんな村からは、できるだけ遠く離れたいだけです」と、下条も腹の底からそう思った。
夫と妻から、はっきりと訣別を宣告された女と男は、ようやく、悪夢からさめ、村を離れる気持ちになっていた。が、せっかくのそうした決意にもかかわらず、二人に下された宣言は、思いもかけないものだった
祭壇に向かって、長いこと祈りを捧げていた尾形トメが、ぐいとふりかえった。
「あなたたちを、この村から出すわけにはいきません」
土間に坐っていた克子と下条が、思わずはッと顔をあげた。まったく予期しない言葉に、一瞬、ふたりは互いに顔を見合わせるばかりだった。
「いいですか、あの島を知られてしもうた以上は、もうこの村から出すわけにはいかんのじゃ」

「それは、どういうことなんです」と、下条はむっと気色ばんで言った。

「ふたりとも、死ぬまでこの村にいてもらいます」

しかし、トメの言葉には、きびしい中にも、ふたりに対する思いやりがほのみえていた。その気持ちが隠せないように、トメは表情をかえて、柔和な眼つきになった。明らかに、トメは、克子と下条がどうやら完全に、夫と妻を諦めたことに満足し、すっかり寛大な気持ちを抱いていた。

「今度こそ、ふたりとも一緒になって、この村の人間になんなされ」

「いやですッ」と、克子が猛然とトメにくってかかった。「誰がこんな村に……もう一分だっていたくありません」

興奮した克子は、だっと土蔵をとびだしていった。夕焼の村の道を、克子はもうじっとしていられない、追いつめられた気持ちで、ひた走りに走った。島で聞かされた夫の話は、もう完全に、夫の気持ちが克子を離れていることを意味していた。夫は、愛を捨て、出雲族千五百年の血と恨みに生きると宣告した。克子はいま、もうこんな村に用はない、いたくないと心からそう思っていた。

トンネルの入口には、村の男衆が数名たむろしており、無表情に克子を迎えただけだった。克子は、一瞬、決意してその男たちの中央を突破しようとした。と、たちまち男たちに捕まってかつぎあげられ、納屋の前まで連れてこられて投げだされた。下条が駈けてきて、「何をするんだ」と克子を抱き起こした。

「むだな抵抗はしないこったな」と言って、黒マントの男、伊吹信次が鼻で笑った。「このトンネルを通らなきゃ、村から出られねえことぐらい、もうわかってんだろうによ」

その夜の克子は、これまでになく不幸な女だった。夫のことはもう忘れてしまいたかった。けれ

ども、この村にいるかぎり、忘れようにも忘れられず、無念な思いはいっそうつのるばかりであった。
「食事をなさい、少しでも食べておかないとからだによくありませんよ」
心配した下条が手料理を並べてくれたが、食欲はまるでなかった。しかし、下条のやさしさにほだされ、夜のおとずれとともに、興奮は少しずつ柔らいでいった。克子は窓辺によりかかって、ぼんやりと外の闇を眺めていた。トンネルの入口で、かがり火がたかれ、男衆の影がうごめいていた。月がでていた。やや欠けた月であった。
「月は……お月さまは、何千年もの昔から、ずっとこの地球をみていたんでしょうね」
思いだすまいとしても、でてくるのは、夫のことばかりである。下条には、そんな克子の気持ちが、痛いほどわかった。
「あなたのご主人も」と、下条は、あえて話題にして言った。「ぼくんとこの佐知子も、出雲族の末裔だというわけなんですね」
「ほんとに、そんなことがあったんですか」
「確かに戦後、歴史の仮説のひとつとして、そういう説がでていたことは事実です。北方アジアに勃興した騎馬民族が、中国大陸へ侵入し、漢民族に追われて朝鮮半島を南下、日本列島へ渡って来て、そこにいくつかの部族を征服して大和朝廷をうちたてたと……」
「じゃ、やっぱり本当なんですね」
「日本歴史には、謎の四世紀といって、そのころ、約百五十年にわたって空白の期間があるんですけど、その時期に、歴史的な大きい変動があったことは事実のようですね」
「もう結構です」と、克子が淋しい笑みをうかべながら言った。「そう信じているひとに、何を言

ってても勝てませんもの……忘れます、今度こそ本当に」
下条は、コトリと佐知子のよこした結婚指輪を茶袱台においた。
「佐知子も、これを、ぼくに返してよこしました。ぼくも、できれば、このまま佐知子のことはもう……」
「下条さん」
「いいんです。確かに、佐知子の言うとおり、もし、ぼくたちが今、元どおりになったとしても、果たして、何のこだわりもなく生きていけるかどうかわかりませんし」
克子は、ふと手の指輪をみつめた。と、彼女はそっと、指輪をぬこうとした。下条は、ついと手をのばして、その手をとめた。
「いけません。最後まで希望を捨てちゃ……」
「いいんです、ほんとに……私、こんなもの持ってちゃだめなんです」
言って、克子はふらっと立ちあがり、納屋の外にでていった。夜の海に向かって克子は駈けていった。そして、岩の上に立つと、じいっと暗い海をみつめた。下条が、追いかけてきた。念ずるように軽く眼をつぶって、克子はそっと指輪をぬいた。そして、一度ぎゅうと握りしめた。
「サヨナラ」
克子は、力いっぱい、海に向かって指輪を放った。が、それは、さほど遠くへとばずにチャポンと小さな音がした。今度は、ぼくの番だというように、下条も力いっぱい、海に向かって指輪を放った。克子は、気持ちの整理がついたように、つぶやくように歌いだした。

帰ってみればこはいかに
もといた家も村もなく

　路に行きあう人びとは
　顔も知らない者ばかり

　急にやるせなくなったように、克子は、下条の胸に顔をうずめた。寄り添うようにして、ふたりは村の道を帰っていった。テレビの歌声も聞こえれば、子どもの泣き声なども聞こえてくる、何の変哲もない漁村の情景だった。

「こうしていると、どこにでもある、ありふれた村なのに、遠い昔に滅ぼされた出雲族の血統を脈脈と伝えているなんて信じられませんね……出雲族は、もと海洋民族だったと言われています。その海に生きる人たちが、やがて、農耕を覚えて、少しづつ内陸部へ移っていったと言われていますが、その、もともと海洋民族だった名残りが、おそらく、現在、各地に残っている浦島伝説や浦島神社になったのだと思います」

「やめましょう、その話はもう」と、克子が力なく言った。「今さら思いだしても仕方がないし、もう、思いだしたくもないわ」

「そうですね。あるいは、ぼくたちにはもう、思いだす資格もないのかもしれない」

「後悔してらっしゃるのね」と、克子は相手の気持ちをわざと誘うように言った。「指輪を捨ててしまったことを、やっぱり後悔してらっしゃるんですね」

「あれでさっぱりしたと言えば、嘘になります。しかし、忘れていくための、ひとつのキッカケにはなったと思っています」

　トンネルのかがり火を横目でみながら、いつ、この村から出られるのだろうか、と克子は思った。そして、この村から、いや、あの島から少しでも遠ざかりたいという思いは、克子も下条も同じだった。

ふたりの納屋の中から、麻理子の口ずさむ軽快な歌が流れていた。麻理子が食卓に向かって、歌いながらパクついているところだった。
「麻理ちゃん」と、驚いたように克子が声をかけた。
「ごめんなさい。入ってきたら、ちょうどご馳走があったから、いただいちゃったわ」と、ケロリとして言った。「だって、お腹ペコペコだったんだもん」
「あなた、今までどこへ行ってたの？」
「探険」と、いたずらっぽく麻理子が言った。「この村のまわり、ずっとまわってみたんだけど、すごい村ね。結局、あのトンネルを通らなきゃ、どっからも出られないわ……けど、そのかわり、よそから誰かがとつぜん入ってくることもないから、安心かしら……あ、克子さん、今夜ここんちに泊まってもいい？」
「そりゃ、かまわないけど、あなたこれからどうするつもりなの」
「うん、ちょっと面白そうな村だからさ、しばらく居ついちゃおうかと思って」
「居つくって、あなた」と、克子はあいた口がふさがらなかった。「この村にいちゃいけないわ……あなただって、あの島でみたでしょ、白髪のおばあさんたち……」
「あら、どうして」と、麻理子はまるで頓着するふうがなかった。「でも、あのおばあさん、やさしそうなひとじゃないさ」
「あなたは、よく知らないから、そんなのんきなことを言ってられるのよ」
しかし、麻理子はそんなことよりも、あの島へ渡るモーターボートの話をつけたのが自分なので、夫婦仲がそれぞれ不首尾に終わったことが、まるで自分のせいのように思いこんで気にやんでいた。

さっぱりした気分で生きられそうだよ……」

「そのことなら」と、下条は冗談めかして言った。「君のおかげで、克子さんもぼくも、これから

「ひょっとしたら」と、克子も思わずはずんだ声で言った。「私たち、あなたに感謝しなけりゃいけないかもしれないわ」

麻理子は、ふたりの言葉がよくのみこめないように、首をかしげていた。混血娘の麻理子は、日本語の微妙なアヤが苦手のようだが、そのほかのこととなると、すこぶる感度のよい娘だった。部屋のほうに、ふとんが二つ並べて敷いてあるのをみて、はっとした。下条が、座ぶとんにタオルをまいて枕をつくっていた。

「じゃ、ぼくはちょっと外へ出てくるから、君たちは先にふとんに入っててくれたまえ」

言って、下条が女性に気をきかせて外に遠慮しようとしたとき、麻理子は「ちょっと待って」と声をかけた。

「えッ、どうしたの？」と、克子が聞いた。

「私、やっぱりわるいな」と、麻理子は舌足らずながら、妙に大人びたことを言いだした。「いろいろわかっちゃうのよ。私、わるいから、よそへ行って泊めてもらうわ」

「何でもないわよ……それに、よそへ行って泊めてもらうといっても、今からじゃ」

「いいよ、あのおばあさんのところへ行って頼んでみるわ。おやすみなさい」

言って、麻理子はザックをかつぎ、さっさと納屋をとびだしていった。

「麻理ちゃんたらバカね」

と笑って、すぐに克子は真顔になった。二つ並んだふとんが、気持ちにひっかかった。眼をあげたとき、下条の視線とぶつかって、心持ちあわてながら、すいと手をのばしてカーテンをつかん

だ。もう何もかもわかったんだからいいでしょ！　すーっとカーテンをひいた。そして、カーテンのこちら側のふとんの上に坐った。
わけもなく気恥ずかしかった。昨夜まで何ごともなく過ごしてきたのに、その日の状況の変化が、克子の心に、下条に対する恥ずかしさを呼びさました。それは、薬指の淋しさと重なった感情だったかもしれない。克子は、そっと指輪のはまった指をなでていた。真中のカーテンをへだてながら、その夜は、ふたりともなかなか寝つかれなかった。なぜか、ふたりとも、お互いにはじめての夜のような気がしてならなかった。
三日月村の漁師たちは、朝が早い。朝日のさしそめる時分に、船は港をでていく。翌朝の未明に、伊吹信次が納屋の戸を激しく叩いた。
「おーい、漁に連れてってやるぞ、早く来いや」と、意外に親切気のある声を張りあげた。
「今日から、村の者になるんだろ……なら、一緒に漁に行こうや」
下条は、あわてて縁側へでていった。
「わかりました。すぐ、支度して行きます」
「早く来いッ、港で待ってるぞォ」
言って、信次は去っていった。下条が支度しているところへ、克子が起きてきた。
「ほんとに行くつもりですか」
「せっかく誘ってくれたんだから、行かなきゃわるいでしょう」
「だって……」
「仲間に入ってたほうが、みんなも安心するでしょう」と、下条は早口で言った。「それに、男たちが漁に行っている間には、逃げるチャンスがあるかもしれない……いいですか。ぼくにかまわ

ず、あなただけでも、機会があったら逃げてください」
「ぼくは自分で何とかします。とにかく、ひとりでも逃げることが先決です」と、作業衣をひっかけながら、下条があわただしく言った。「ためらわずに、村を出るんですよ」
港に向かって駈けていく下条を、克子はじいっとみつめていた。朝日の海へ、三日月村の数隻の船団が、次々とでていった。男たちの中に、下条が交っている。港の岩壁で、克子は村の女や子どもたちと一緒に出航を見送っていた。下条がちょっと手をあげて応え、男たちと一緒に作業にとりかかった。船は、みるみるうちに遠ざかっていった。
港から、納屋に戻るとき、克子は、そっとトンネルの入口に近づいてみた。ひとりでもいいから逃げろ、下条は言った。今がチャンスだと克子は思った。ゆっくり、ゆっくり、克子はトンネルの中に入っていった。トンネルの向こうに、出口の明かりがみえる。それは、さながら別世界からの光のようにみえた。いまわしい思い出を、すべて忘れさせてくれる別の世界がすぐそこで待っていた。
中央まで、克子はすすんだ。が、ふっと立ちどまった。立ちどまったまま、克子は動かなかった。自分を逃がすために、あえて村びとの中にまじっていった男のことを思うと、それ以上、一歩も前へ歩くことができなかったのである。
克子は片づけが終わってから、ふらっと尾形トメのところへ行った。村を出ることをもう一度、トメに頼んでみようと思ったわけだった。と、母屋の囲炉裏ばたで、混血娘の麻理子が、トメに教わりながら、もう一台の糸繰り車をまわしていた。
「麻理ちゃん」と、克子は眼をまるくした。
「おばばに、少しずつ教えてもらうことにしたのよ。トメさん、居候をオッケーしてくれたわ」

「さ、それじゃ」と、トメが笑って言った。「さっき言うたとおり、この糸を、隣り町の集荷場まで届けてもらおうかの……ちゃんと、三日月村の尾形トメの使いじゃと言うてな」

「オッケー、オッケー、じゃ行ってくるわ」

言って、麻理子は糸の包みを抱えて出て行った。トメは、ことのほか混血の浮浪娘を気に入っているふうで、しきりに「ええ子じゃ、素直なええ子じゃ」と、つぶやきながら糸繰り車をまわしていた。

「尾形さん」と、機嫌のよいトメにほっとしながら、克子は思いきって声をかけた。「お願いです。この村からだしてください。こうなった以上は、夫のことも早く忘れてしまいたいと思ってるんです。だから、この村を出ていって……」

「出ていったらええじゃろう。いまは、誰も見張りはおらんはずじゃがな」

「えッ、それじゃ、下条さんも一緒にいいんですか？」

「それはならん」と、トメはきっぱり拒否した。「あの島を知られた以上、この村から出すわけにはいかんな」

克子が独りだけならよいが、下条とふたり一緒では、出すわけにはいかないというのである。これを、どう解釈したらいいのか、克子にはわからなかった。が、いまの克子には、下条と一緒でなければ困るのである。

「なぜです。この間は、みどりさんが東京へでていったじゃありませんか」

「ああ、ほかにもでていった者はおる。けど血のつながった者は、村を捨てても、村を裏切ったりはせんからの」

「じゃ、麻理ちゃんはいいんですか」

「あの娘は、なかば異国の人間じゃ、何もわかっとりゃせん」
「約束します。よそへ行っても、けっして村のことも、島のことも、誰にも言いません」
「信じられんの」と、トメはそっけなく言った。「おまえさんたちは、わしらを滅ぼした奴らの仲間じゃからの」
どうして、そんな古い昔のことにこだわるのか、克子には、どうしてもわからなかった。国を滅ぼされ、あとから来た者のために、住む場所を追われ、一族皆殺しの目にあわされた者の怨念は、そうされた者にしかわからないというのが、トメの答えだった。
「わかったわ」と、克子はトメにくってかかった。「それじゃ、私ひとりでも出ていきます。そして、この村のこと、島のこと、乙姫のことを、あっちこっちで言いふらしてやるわ。それでいいのねッ」
と、克子はトメに腹を立て、さっさとでていこうとして、ガラッと戸をあけた。そのとたん、トメの声が、ぐさりと克子の胸にひびいてきた。
「下条さんを置いていきなさるのか。それでええのなら、出ていきなされッ」と言って、トメは、うすく笑った。「あのひと独りを、この村に置いて、それでええというのなら、あんたは、いつでも出ていきなされ!」
「尾形さん」と、克子は、トメに駈けよった。
「間もなく、野良が忙しくなる」と、トメが独り言のように言った。「女たちも、子どもにかもうているひまがのうなっての、保育所がひらかれる……今までは、村の女衆が交替で子どもをみてきたが、今年は、あんたにその仕事をやってもらおうかの」
「尾形さん……」

「この村にいるには、何か仕事がのうては弱るじゃろ」

言って、トメは、無心に糸繰り車をまわしつづけていた。克子は、唇をかみながら、黙ってみつめつづけるほかはなかった。

下条は、お昼近くになって漁から帰ってきた。克子は何気なく「お帰りなさい、疲れたでしょう、すぐご飯にするわ」と言った。それは、ひと月前まで、毎日のように夫に向かって口にしていた言葉であった。その言葉を、いま、何の抵抗もなく下条に向かって言ったことに、克子は、自分でも驚いていた。

「なぜ、逃げなかったんです」と、部屋に入って来るなり、下条が怒ったように言った。

「こんな村にいるのは嫌だ。あの島からも、思い出からも、できるだけ遠くへ逃げたいといったのは、あなたじゃありませんか……克子さん、なぜ、逃げなかったんですか」

下条は、自分たちが漁にでている間に、克子は逃げていったものとばかり思っていた。下条には、意外だった。しかし、とっさに、彼が怒ったような口をきいたのは、むしろ、何か面映ゆい感情を隠すためのようでもあった。

「逃げていればよかったんですか」と、克子は、ちょっとすねたように言った。「私が、いなくなってるほうが、よかったんですか」

「いや」と、下条があわてて言った。「そういうつもりじゃなくて、ただ、ふたり一緒ではむりだ

から、せめて、あなただけでもと思って……」
克子は、逃げようと思った。事実、トンネルの中まで逃げかけた。
「ごめんなさい。ほんとは、ひとりで逃げようとしたんです……でも、行けなかった。どうしてだか、自分でもわからない。トンネルの途中までいって、気がついたら引き返してたわ」
下条は、不器用につっ立っていた。
「それでも、やっぱり、あなたを置いて、ひとりで逃げろとおっしゃるんですか……嫌です。ひとりで逃げるなんて、嫌です！」
言って、克子は下条にすがりついた。反射的に、彼は、彼女を抱きしめた。
「教えて」と、克子は、あえぎながら言った。「私ひとりで、この村からでていっても、これから先、どうやって生きていけばいいんですか！」
克子は、そっと眼をつぶった。克子のその問いに、今度は、下条が答えねばならなかった。下条は、いとおしげに克子の頬に、自分の頬をすりよせながら、そっと、その唇に自分の唇を重ねていった。それが下条の答えでもあった。愛の渇きをいやすように、ふたりは長いくちづけをかわし、離れられなかった。そのとき、克子の脳裡には、もはや何もなかった。夫は、あの島で別れた夫は、この世には愛より強いものがあると言った。しかし、いま、ここにいる男と女には、その愛以外にすがるものはなかった。
納屋の外から、麻理子の「克子さーん」とよぶ声に、克子は、はっと身をおこした。そして、すばやく髪を直した。
「おばばが、よかったら風呂へ入りに来ませんかって」と、麻理子がのんびり言った。「下条さんと一緒にいらっしゃいよ」

「わるいけど、行かないわ」
「どうして？　私、もう入っちゃったけど、とってもいい気持ちよ」
「トメさんとこなんかに、もらい風呂にいくなんて、嫌よ」
つっけんどんに克子が言い、麻理子は、きょとんとした表情で戸口に立っていた。すると、下条が「ありがとう、すぐ行きます」と答えた。麻理子が首をひねってトントンと駈け去ると、下条は黙って、タオルをとってさしだした。
「いやよ、私は」と、克子はかたくなに言った。「あの人のために、今まで、どんなひどい目に合わされてきたと思うの？　あんなひとのところへなんか、もらい風呂に行くわけにはいかないわ。私、行かないわ」
「克子さん」と、下条がほお笑みをうかべながら、やさしく言った。「一日も早く、この村をでていくためには、油断をさせるにかぎりますよ……さ、行きましょう。少しでも、この村にとけこもうとしているようにみせることです」
下条のやさしさにほだされ、克子も、タオルを受けとるよりほかなかった。
旧家では、トメが麻理子と一緒に糸繰り車をまわしていた。下条が風呂に入っている間、克子は、ぎごちなく坐って、睨むようにふたりをみつめていた。トメと親しげにうちとけている麻理子のことも、克子は不愉快に思えてならなかった。
「おばば、いまの話のつづきをして」と、麻理子が言った。
「あ、そうじゃったの」と、糸繰り車をまわしながら、トメがやおら語りはじめた。「そのころの日本はの、静かで、平和な国じゃった……海にも川にも、魚がいっぱいいたし、山には鳥やけものがあふれておった。種をまけば、放っておいても野菜や米がみのってのう、わしらの祖先は、腹が

へればそれらをとって食べ、腹がくちくなれば男は女と、女は男と、親は子どもと楽しく暮らしておったんじゃ」
「それが、常世の国だというんですか」と、克子が皮肉をこめて言った。
「そうじゃ。あいつらが、あの馬に乗った戦の好きな連中がやって来るまでは、わしらの祖先の暮らしは、常世の国そのものじゃった。ところが、そこへ馬に乗って、弓矢をつかう奴らがあらわれた。海の向こうからやって来たんじゃ」
「そいつらが、おばばの先祖をやっつけたのね」と、麻理子が合づちをうった。
「ある日のことじゃ、鐸を隠せッ、銅鐸を隠せッ、鐸を持っておると、皆殺しにされるぞという噂が、津波のように伝わってきた。そこで、人びとは、先を争って銅鐸を隠した。ある者は土を掘ってその中へ、ある者は山のほら穴の中へ、ある者は海辺の岩の間へ、みんなは銅鐸を隠したんじゃ……中には、それまで拝んできた銅鐸を隠すには忍びなくて、村中でそれを守るために、山奥へ逃げた者もおったよ」
銅鐸——それは、銅で作られた大きな鈴のことである。現在、銅鐸は中部日本を中心に数百個が発掘されているが、いったい、それが古代に何のために作られ、どのように使われたものなのか、考古学でも、歴史学でも、まだ解明されてはいなかった。
トメは、よっこらしょと立ちあがると、風呂の火加減をみるためにでていった。
「麻理ちゃん」と、克子は眉をひそめて言った。「あなた、よくこんな家に、落ち着いていられるわねッ」
「あら、どうして？　おばば、とっても親切ないいばあちゃんだわ」
「そうね、あなたは、トメさんの怖しい面をなんにも知らないんですものね……」

「それよりさ」と、麻理子は、そんなことはまでる眼中にないふうに言った。「克子さん、あんたたちもここに落ち着いたら？」
「なんですって」と、克子は思わず気色ばんだ。
「だってさ、もう前のご主人のことは、さっぱりしたって言ってたじゃないさ」
「麻理ちゃん」
「隠したってだめ」と、麻理子は首をふって言った。「わかってるのよ。あんたも、下条さんも、お互い愛し合ってるくせして、つまんない意地を張り合ってるんだわ」
「そんなんじゃないわ」
「じゃ、何なのよ。せっかく男と女が一緒にいて、愛し合ってるというのに、もっとぱあーっと燃えなきゃ、つまんないと思うな」
「あなたの指図は、うけないわ」
湯上りの下条が入ってきた。つかの間、彼は克子の顔をみつめた。克子さん、さっき言ったことを忘れたんですか。どうして、もっと調子を合わせられないんですか。彼の眼がそう訴えているように思われて、ふっと、克子はわびるようにうつむき、それから「お風呂をもらってきます」と、明るく言って、すっと立ちあがった。
久しぶりの風呂であった。克子は、湯のぬくもりが、心の中までしみとおるように思った。
「湯かげんはいかがかの」と、トメが外から声をかけた。
「ええ、ええ、どうもありがとう……」
あつい湯の中で、克子は、この村にとけこむように見せかけて、村の人びとに油断させるのだと言った下条の言葉を思いだしていた。そして、どうしてもっと素直に、下条の言うことがきけなか

ったのだろうかと克子は反省していた。

トンネルのかがり火はその夜もたかれて、不寝番の男たちの影がうごめいていた。

「今夜も、トンネルを見張ってますわね」と、枕元に坐って、髪を束ねながら克子が言った。「いつまでつづけるつもりかしら?」

「そのことは、もう考えないようにしましょう」と、下条が言った。「チャンスはありますよ、きっと、近いうちに……とにかく休みましょう、明日はまた、早いうちに起こされますからね。それじゃ」

カーテンに手をかける下条を、克子はじいっとみつめていた。

「おやすみ」

「おやすみなさい」

克子の坐っている眼の前で、カーテンがひかれていった。そのとき、克子は、思わずカーテンをひき裂きたいような衝動にかられた。それを押しとどめようとする意識を振り払うように、克子は勢いよくカーテンをひきあけた。床へ入っていた下条が、驚いて上半身をおこした。そして、克子の強い視線に、うろたえた。

「克子さん」と、下条は立ちあがり、克子の手のカーテンをとった。「ひとりずつなら、村を出ることが許されてるんです。もし、どちらかが、そのまま帰らないでおこうと思ったとき、後悔することになりますよ……さ、おやすみなさい」

克子は、じいっとみつめながら、床の上に坐った。下条は、ゆっくりとカーテンをひいていった。がっくり、克子は肩を落とした。そして、ふとんの中にもぐると、すっぽり顔まで隠した。下条は、克子の心を傷つけまいとしながら、逆に、傷つけていたかもしれなかった。

下条は、まだ佐知子のことを愛しているのだろうか？　いや、そういう自分だって、ほんとうに、夫のことを忘れたのだろうか？　意識の動きと感情の働きの大きなギャップに、克子はそのとき気づいた。そして、同時に、克子はひとつの新たな決意をしたのである。ふとんの中からすっと顔をだして、克子は、いつまでも虚空をみつめていた。

翌る朝、克子はトンネルをくぐって、東京へと帰っていった。そのとき、下条はちょうど出漁中だった。何日ぶりの東京だろうか。いや、そんなに長い間のことではない。しかし、あの海辺の村の数日と、この東京の雑踏とでは、まったく別の世界であった。

東京の明るい街にいると、あの村のことも島でのできごとも、まるで夢のように思われた。そして、克子はふと、いま自分が浦島太郎になったように思った。いや、そのとおりである。現実に、克子は乙姫とよばれる女の住む竜宮城から帰ったのである。しかし、浦島太郎は玉手箱をもらったが、彼女は、そこで夫の愛を失った。それが、克子と浦島太郎の決定的な違いであった。

アパートへ帰った克子は、あらためて室内をみまわした。今となってみると、夫の持ち物がすべてなくなっていることが、かえってさっぱりした思いにさせてくれた。克子は、ひきだしの奥にしまっておいた離婚届をとりだした。それは、夫が蒸発して三日目、貯金通帳や証券類と一緒に、夫から送られて来たものであった。克子は、しばらくみつめていたが、決心してボールペンを手にすると、ゆっくりとていねいに署名し、そして、力をこめて捺印した。

克子は、それから原宿へ車をとばして、律子の店「ブランコ」へ行った。克子が入っていくと、仕事をしていた律子がふっと顔をあげ「克子ッ」と、とんできた。あれから、どうしたのよ。拓也さんに会えたの？　乙姫って、どんな女だった？　拓也さんとは、ちゃんと話ができたの？　どれ

も、これも、律子の知りたいことばかりだった。
「その前に」と、克子は、離婚届を眼の前にだして言った。「律子、お願いがあるんだけど……これの保証人になってほしいのよ」
「克子、あなた、これは……」
「やっと、決心がついたわ」
「ちょっと待ってよ、ね、いったい何があったのよ。拓也さん、何て言ったのよ」
「お願い、律子、何も聞かないで……黙ってハンコ押してほしいのよ」
「克子」と、律子は、何があったのかさぐりをいれるように、じいっとみつめた。「それじゃ、あなた、乙姫などという女に負けたっていうの……え？　どうなのよ、こんなことをして、後悔しても知らないわよッ」
「後悔はしないわ　絶対に……律子には、洗いざらい話すつもりだけど、もうちょっと時間がほしいのよ。わかってくれるわね」
律子は、あわただしい克子の様子に、眼を白黒させながら「わかった、わかった」と、うなずくよりほかはなかった。律子の店をでた克子は、その足で、区役所へ直行し、戸籍係りの窓口に離婚届をさしだした。
下条の出漁中に、克子が東京に帰ってしまったことは、村中の話題になっていた。市場のある近くの港に荷をおろして、船団が三日月村に帰港した。麻理子は、岸壁に立って、下条が船からおりてくるのを、いまかいまかと待ちうけていた。
「下条さん」
麻理子は、魚をさげて船からあがってきた下条に駈けよった。

「克子さんが、とうとうこの村を出ていったそうよ」と、麻理子は興奮してまくしたてた。「今朝、あんたが漁に出たあと、間もなくトンネルをくぐったんですって」
「そうですか」と、下条はひとことそう言ったきりだった。
「あのひと、やっぱりあなたを独りにしていったのね」と、当てがはずれたように、しかし何やらちょっぴり嬉しそうに麻理子が言った。「愛してると思ってたんだけどなァ、私の間違いだったのかなァ……けど、下条さんだっていけないのよ。克子さんをしっかり抱きとめてあげないから、だから、彼女もでていったんじゃないの」
「いや」と、下条は低声で言った。「だからよかったのかもしれない……彼女がもし、ほんとうに出ていったんだとすれば……」
そう言ったとき、下条は、ふっと足をとめた。麻理子も、その視線を追って、あッと思った。村の道の坂の上で、買い物を両手にいっぱい抱えた克子が下条の方に駈けてきた。下条も大きく手をふって応えた。
「なァんだ、わかってたのか」一瞬眼を伏せ、しかしすぐに明るい声で麻理子は言った。「心配してそんしちゃったァ……けど、今度こそ逃げられないようにしなきゃだめだよ。余計なことかな」
下条は、ゆっくりと克子に近づいて行った。
狭い部屋に、置い物の包みがいっぱい置きならべられていた。
「おいしいフランスパン買ってきたわ」と、克子が買い物をとりだしながら言った。「それと奮発して上等のすきやき肉、今夜は麻理ちゃんを呼んで、一緒にスキヤキパーティをしましょうか。たまにはいいんじゃない」
「君は」と、下条がポツリと言った。「東京まで行っていながら、どうしてまた……」

「現代の浦島太郎は」と、克子がはずんだ声で言った。「東京には、いる場所なんかなかったのよ……玉手箱でも持ってて、白髪のお婆ちゃんにでもなれば、別でしょうけど」

はればれとした克子の笑顔につられて、下条のうかない表情もわずかにほころんだ。このとき、納屋の外から「ちょっといいですか」と声がかかって、杉島佳子が入ってきた。いつも克子を白い眼でしかみない佳子が、なぜかにこにこしていた。

「帰って来たのね」

「ええ、帰ったわ」

「ちょうどよかった」と、ホッとしたように佳子が言った。「だったら、お願いがあるんだけど……しばらく、私の仕事を手伝ってくんない？」

「あなたの仕事を、私が？」

「ええ、私、常世の島へ、食物や水を運んでるんだけど」と、佳子がにこにこしながら言った。

「あなたに手伝ってもらえると助かるわ。なんたって、あなたなら拓也さんの好みもわかってるし、それに下条さんに聞けば、佐知子さんのことだって……」

「とんでもない……いやよ、いやです、そんなこと！」

「そんなこと言わないで、手伝ってよ」

「いやッ、そんなこと絶対いやよ！」

叫びながら、克子はとび出して行った。離婚届けを出してすっきりしたはずだった。すっきりしたはずの克子の心がわなないていた。消しきれない嫉妬だろうか。未練？　屈辱？　それとも下条への……。そんな心のわななきが、拓也と乙姫の住む島の見える鳥居へと克子を走らせた。

鳥居の向こうに、夕焼けの海が広がっていた。その燃えるような海のかなたに、かすかに黒い島

影があった。
「誰が、あんな島のために……」
「克子さん」
追って来た下条が、やさしく、いたわるように克子の肩に手を置いた。
「また、村のひとに調子を合わせろというんですか」
「いや、ぼくだって、そんな屈辱的な仕事はできない……けど、やっぱり、あなたは東京から帰るべきじゃありませんでしたね。この村にいれば、どうしたって、あの島のことが、あの島に住んでいるひとのことが気になる。そうでしょう……」
「下条さん」と、決意を秘めて、克子は強いまなざしで下条をみた。「私を、抱いてください」
下条は克子を無言で見つめた。
「あの島の見えるここで、私、裏切ってやりたいのです……下条さん！」
「君ッ」と、下条は離そうとしたが、克子は、なおもしっかりとすがりついていった。
言うなり、克子は下条にはげしくすがりついていった。
「抱いてください……私、今日、離婚届をだしてきたんです」
「何ですって！」
「もう私は、あの島にいる男とは、何の関係もないんです……それとも、あなたは、まだやっぱり、奥さんのことを……」
そのとたん、下条は胸を大きくひらいて、ぎゅうと克子を抱きしめた。
「あの島の見えるここで、僕も……」
下条も、何かにつかれたように積極的にくちづけていった。

ふたりは、互いにはげしく求めあい、むさぼりあい、まさぐりあって、みるみる燃えていった。ふたりの耳に海が鳴っていた。その海の、すぐむこうの小島に、ついこの間まで夫と呼び、妻と呼んだ男と女がいた。そのことが、よけいにふたりを燃えつのらせた。燃えることによってしか、忘れるすべを知らないふたりであった——

夕焼けに燃える海よりももっと激しく、さながら、夕焼けに抱かれたあの島を焼きつくそうとするかのように——

村での生活が、日に夜を継いで、すでに十日余りも経った。

トンネルの前の見張りは、その間も休むことなくつづけられた。しかし、克子ひとり、下条ひとりが、村を出てゆくことは認められていた。すでに、ふたりは愛しあっていて、他のひとりを捨てたまま帰ってこないなどということはありえないことと、村人たちに思われていたのであろう。

事実、克子にしろ、下条にしろ、たまさかの買い物に村を出ることはあっても、必ずその日のうちに帰ってきた。村に残された相手をそのままにして自分ひとり姿を消すことなど、二人はすでに、とてもできなくなっていた。

いくつかの夜が重なり、克子が下条の胸に抱かれて眠ることが、習慣となった。しかし、そんな克子も下条も、つい眼と鼻の先に、かつて夫と呼び、妻と愛した男と女がいるという強迫観念から、どうしてもぬけ出すことができなかった。克子は離婚届けを出してはいたが、いや、拓也との離婚が成立しただけに、かえってあの「常世の島」から少しでも遠くへはなれたいという思いはつのっていた。

そして、その思いを忘れるために、また下条のふところへ逃げこむのであった。

そんなある日、夜が明けないうちに、ふたりは、またいつかのような、ひたひたという足音を聞いた。

足音は二つが三つになり、三つが五つになり、十人のものになり、二十人のものになって、静かに静かに歩きつづけている。

そっと窓からのぞくと、白装束の村人たちが、無言で海の方へ降りていくのがみえた。

「また、常世詣りだ」

「あの人の……乙姫たちのところへいくのね」

克子の脳裏に「この世には愛よりも強いものがある」と言った拓也の言葉がよみがえってきた。出雲族千五百年の恨み？　騎馬民族に滅された出雲族？　大和朝廷は征服王朝だ？　そんな遠い昔のことを、まだ脈々と伝えて生きる人たちのいることが不思議だった。そして、常世の国とは、大和朝廷を名のる騎馬民族にじゅうりんされる前の、この日本列島の姿であるとトメは語った。

そんなことは、どうでもいい、と克子は思う。いまのわたしは、一刻も早く、あの拓也と乙姫の住む島から、できるだけ遠くはなれて、下条とふたりで新しい人生を始めたいだけだ。

じっと、「常世詣り」に行く人々をみつめていたふたりに、同じような白装束の杉島佳子が歩みよって来た。

「十日に一度の常世詣りだわ」

「………」

「逃げ出そうとしてもだめよ。見張りはちゃんと残ってますからね」

「安心して下さい」と下条が言った。「いまさら逃げようなんて思ってませんよ」

「そう」と、佳子は白い歯をみせて笑った。そして言葉をつづけた。「常世の島へ行ったら、御主

人や奥さんに何て言いましょうか」
克子ははげしい眼で佳子を睨んだ。この人は、わたしたちの状況を面白がっているのだろうか。
「それとも、あんたたちは、もうちゃんと愛しあってるから安心しなさいって言いましょうか」
「余計なお世話です！」
克子は叫ぶように言った。
そのとき、尾形トメの言葉が、薄明の村の空気をやぶってひびいた。
「さあ、常世詣りに行こうぞ」
入江の方から、船のエンジンがひびいて来る。
克子は、下条の手をひっぱると、床に倒れこんだ。
「忘れましょう！　あんな島のことも、島に住んでいる人たちのことも」
克子は、獣のように下条を求めた。下条もまた、何もかも忘れようとするかのように、克子の中に入ってくる。それは、あの島から帰って今日まで、何度となくくりかえしたふたりの日課であった。
燃えた。燃えながら、克子は涙を流した。
「出て行きたい。こんな村を出て、どこか遠くへ行きたい……」
「……」
「あの島から、遠く遠くはなれたところで、あなたと……」
「行けるさ、必ず」
力強く言って、下条は克子のうなじを嚙んだ。
「いつ？　いつこんな村を出て行けるの？」

克子は、下条の下腹部の茂みに顔をうずめながらきく。
「必ずチャンスはある。それまでじっとがまんするんだ」
下条は、それが自分をはげます言葉であるかのように、克子の中でのぼりつめた。
そして、その「チャンス」は、意外なことにその日のうちに、意外な方向からやって来たのである。

まだ午前中のことであった。「常世詣り」の人々はまだ帰らない。
ひっそりとした村を、克子は麻理子と一緒に、村の子供たちをつれて歌いながら歩いていた。いつか尾形トメが言ったように、克子は子供たちの保育所をあずかるようになっていたのである。
歌いながら海岸へ出た克子は、そこの岩の上に腰を下しているひとりの男を発見した。
四十歳くらいであろうか、濃紺の背広をきちんと着こなして、淡いカラーシャツに、あざやかな赤の入ったネクタイを風になびかせている。
「こんちわァ」
根が人なつっこい麻理子が、まず声をかけた。
男はにっこりと笑ってふりむいた。白い歯が印象的であった。しかし、その眼は何か鋭い光をたたえているようである。
「あなた、いったいどなたですか」
思わず克子はきいていた。
「うむ。ちょっとね」
男は、あいまいな言葉を残して去っていった。
克子はじっと見送った。子供たちが、貝がらを拾いはじめている。できれば、男のあとを追って

いろいろ問いただしたい、と克子は思ったが、子供たちをあずかっている身ではそうもいかない。しばらく、克子は子供たちと一緒に海岸の砂の上を歩きまわった。

「あッ、あいつ、あんなところに登ってるぞ」

とつぜん、麻理子が言った。指さす方を見ると、何と男は、あの山の上の、「常世の島」の見えるところに立っているではないか。

「麻理ちゃん、子供たちをおねがい」

叫ぶやいなや、克子は駈け出した。ただの男ではない。いったいこの村へ何しに来たのだろう。できれば下条に話したかった。しかし、その下条は見張りの男と一緒に、芭蕉畑へ行っている。活花用に東京へ出荷するのだ。芭蕉畑も、この村の大切な財源のひとつになっていた。

克子は、とにかく男の正体をつきとめたかった。

「常世の島」の見えるあの場所は、自分たちが必死になってさがしても、わからなかったところだ。村人たちも、まさか克子たちがさがしあてまいと安心していた場所だ。偶然のことから麻理子がみつけたのだが、その場所にあの男が立っている。いったい、何者なのだろう。

克子は、あえぎながら山腹を駈け登って行った。

「島を、いま船がはなれます」

駈けて来て、まだ息をはずませている克子に、男がこともなげに言った。

見下す海に、ここからしか見えない「常世の島」が浮かんでいた。そして、男の言うとおり、「常世詣り」の船が帰るのであろう、数隻の漁船がまさに島をはなれようとしていた。

「十日に一度、乙姫様に祈りに行った人たちが、いま帰って来ます」

「あなた、どうしてそれを御存知なんですか」

男は克子をみつめ、こともなげに言った。
「神崎克子さんですね」
克子は思わず息をのんだ。どうして、わたしの名前を……。
「いや、もう離婚なさったんですから、神崎さんと言っちゃいけなかったですかね」
離婚のことまで知っている、この男は！
「ここから見えるあの島に、あなたの別れた御主人がいらっしゃるんでしたね」
「あなたは……」のどを詰まらせるようにして克子は言った。「いったいどなたなんですか。どうしてそんなことを御存知なんですか」
「いや、この村のことをずっと調べていたものですからね」
男はそう言いながら、名刺をさし出した。『関東観光開発株式会社・開発部長・岡島幹彦』
「岡島さん……」
「実はね、あの島をレジャーランドにしたいと思って、三年ほど前から交渉してるんですがね、なかなかこの村の人たちは頑固でして」
「レジャーランドに？」
「こんなに東京に近く、あんなにすばらしい島があるんです。この村の人たちで独占してるのは、もったいないじゃありませんか」
岡島は、そう言ってまた白い歯をみせた。
レジャーランド！　あの「常世の島」をレジャーランドにする計画がある。
それは、克子にとって青天の霹靂（へきれき）であった。しかし、と同時に、もしあの島がレジャーランドになってしまえば、わたしはいまわしい思い出からも解放される、と思うと、克子の胸は騒いだ。

その日の午後、「常世詣り」から帰った村人たちは、全員、尾形トメの家へ集められた。「われら出雲族の聖地、常世の島をレジャーランドにしたいと言って来ておる」

「あの男が、性こりもなくまたやって来た」トメが怒りにふるえながら言った。

村人たちの中からも怒りの声がもれた。

「よいか、ひとりたりとも村を売るような者が出たらいかん。わかるな！　村の衆、今こそ心をひとつにして村を守るのじゃ。常世の島を守るのじゃ」

あくる日、克子は子供たちのおもちゃや絵本を買うと言って村を出た。

「いいわね。夕方までに帰らないと、村に残った下条さんがどんな目にあわされるか、わからないわよ」

杉島佳子が、村を出る克子に皮肉な顔でそう言った。

「わかってるわ。おもちゃと絵本を買って、すぐ帰るわ」

そう答えて村を出た克子ではあったが、果たして夕方までに帰れるかどうか、自信がなかった。克子は岡島の事務所をたずねてみるつもりだったのだ。ひょっとしたら、岡島に協力できるかもしれない。そして、あの島が岡島たちの力でレジャーランドに変わってしまえば、当然、この村も崩壊するであろう。そのとき、克子は下条と一緒に、はじめて拓也や佐知子の幻影を捨てて、新しい人生をはじめられる、そんな気がしていたのである。

名刺に刷りこまれていた岡島の事務所は、赤坂のホテルの中にあった。東京へ出た克子は、ためらわずに岡島の事務所をたずねた。

ホテルの七階にある「関東観光開発株式会社」というプレートのついたドアをあけたとき、まず

眼にとびこんで来たのは、正面にはってある大きな日の丸の旗であった。
そこはホテルの特別室で、その応接部分を事務所にしているらしかった。大きな日の丸の旗だけにちょっと奇異な感じを受けただけで、あとは観光地のポスターやら、泰西名画の模写やらを壁にかけ、ファイルや書類が雑然とスチール製の棚におさめられている平凡な事務所であった。
「きっと来てくれると思ってましたよ」
日の丸の旗を背中に背負ったような形で、岡島幹彦はにこやかな微笑で克子を迎えた。
「あんな村で軟禁状態にされてるなんて、耐えられるはずはありませんからね」
「もし……」と、そこまで言って克子は一度言葉をのみこんだ。ふと、村に残っている下条のことが頭にうかんだのだ。わたしがここに来たことがわかったら、下条はいったいどうなるだろうか。いや、しかし、これも結果的には下条と自分のためなのだ。
そう思いかえして、次の言葉をつづけた。
「もし私が、あなたに協力できるとしたら、何があるのかしら」
「ありがとう、克子さん」岡島はゆっくりとたばこの煙を吐いて言った。「尾形トメ、広田サキ、山村ケイの三人の女たちを、分裂、反目させてほしい」
「……」
「あなたも御承知のとおり、あの村は、現代にはめずらしい女中心の、つまり古代の母系制社会の名残りをとどめた村です。村のすべては、トメを中心に、サキ、ケイの三人の女の合議によって運営されている。その女たちが分裂すれば、村の中枢が砂壊されたに等しい……」
「でも、あの人たちの結束はかたいんです。そう簡単に反目しあうなんてことはないと思います」
「克子さん、そう言わずに考えてごらんなさい。あなたはそのための強い武器をもっているはずで

すよ」
「………」
「広田サキの娘、みどりですよ」
この男は、あの娘のことまで調べていたのか、と克子は内心おどろいた。
「たしか、みどりはあなたの友だちの高木律子さんの紹介で、律子さんの知人のいるスーパーマーケットへ勤めているはずですね」
「みどりちゃんを利用しろ、とおっしゃるんですか」
「みどりはサキの一人娘でしたね」
岡島はそう言って、じっと克子をみつめた。その眼には、どこかゾクリとする程の冷たい光がたたえられていた。

「克子さん、おそいわね」
麻理子がそう言って小屋を訪れたのは、すでに海に陽が沈んでからのことだった。
「どうしたの、灯りもつけないで」
下条は、うすくらがりの中でひっそりと坐っていた。
「克子さんのこと、心配してるのね」言いながら、麻理子は裸電球のスイッチをひねると、下条の前に坐りこんだ。「しあわせな人ね、克子さんって」
下条は黙って麻理子をみつめかえした。
「わたしね」麻理子は下条から眼をはずして言った。「わたし、いま、ほんとは、このまま克子さん帰らない方がいいと思ってるのかもしれない」

「麻理ちゃん」
「そうなんだ！　あの人、帰らない方がいいと思ってるんだ。そうすれば、わたし、ずっと下条さんと……」
そこで言葉をのんだとき、杉島佳子が、ノックもせずに入って来た。
「下条さん、おばばが呼んでるよ」
「ありがとう」
下条は立ちあがった。立ちあがりながら、ふっと麻理子をみつめた。みつめた先に、何かを訴えるような眼があった。それを振りきるようにして、下条は小屋を出た。
克子がまだ帰らない今、トメが自分を呼んだということに、下条は何かよくないことが起りつつあるような予感で身をふるわせた。
尾形トメの家の大きな板戸を開けると、今日もトメは自在かぎからつるした大鍋で何かを煮ているところであった。
「尾形さん、何の用ですか」
「克子さんが、岡島の事務所を訪ねたそうな」
「何だって！」
「東京の見張りから、そう言って来たよ。まず間違いはあるまい」
「まさか、そんな……」
下条はおどろいた。おどろくと同時に、克子の気持ちがわかるようにも思った。
岡島という観光業者がこの村をたずねて、「常世の島」をレジャーランドにしたいと言いだしていることは、下条も聞いていた。おそらく克子は、あの島を心からも、現実的にも消してしまうた

めに、岡島に協力を申しこみに行ったにちがいない。

「克子さんは、この村を売るために岡島のところへ行ったんじゃ」トメが低い声で言った。低い声ゆえにかえって不気味であった。「何くわぬ顔で村へ戻るじゃろうが、さてそのときは、また新しい禊が必要になるのう」

「おばば！」下条は叫んだ。「待ってくれ、俺にできることがあったら言ってくれ！　そのかわり、克子さんはそっとしておいてくれないか」

「その言葉にまちがいはないかの？」

「もちろんですよ」

「それじゃ、岡島のところへ行ってくれるか」

瞬間、下条はわれとわが耳をうたがった。

「岡島のところへ行ってくれと言うとるんじゃ」と、追いうちをかけるようにトメが言った。

「しかし、岡島はいわばこの村の敵なんでしょう」

「だからじゃよ。あいつの正体を探ってほしいんじゃ」

「正体？　正体といったって、岡島は単なる観光業者にすぎんじゃないですか」

「いや、ちがう。三年間も島を売れと言いつづけるのは、少々しつこすぎる。そんな業者は今までにも何人もいたが、みんなあきらめてしもうた。しかし、岡島ひとりだけはなぜかあきらめん。……ひょっとしたら、わしら出雲族を、あの常世の島ぐるみ、滅してしまおうとしておる奴らかもしれん」

「そんなバカな」

「だから、それをあんたに探ってほしいんじゃよ。村の者ではとうてい近づけん。だけどあんたな

ら、克子さんが協力を申し出とることでもあり、岡島も安心して気を許すかもしれんでのう」
「わかった」下条ははっきりと言った。「奴らの正体を探って来たら、きっと克子さんを許してくれますね」
トメは静かにうなずいた。そして一枚の紙片を出した。
「これが岡島の事務所のあるホテルじゃよ」

そのホテルの回転ドアを、いま克子が出てきていた。
トメ、サキ、ケイの三人を分裂させる……それは容易なことではない。しかし、やらなければ、下条とふたりで一生あの村に閉じこめられていなければならないかもしれない。
しかし、もし万一失敗したら！　そのことを考えると、克子の足はにぶった。自分に粕屋村のことを話してくれただけで不慮の死をとげた木曽山中の老婆のことが思い出された。讃岐で、常世信仰のことを話してくれただけで、のどに赤い箸をつき立てられて殺された人妻の顔が眼に浮かんだ。いや、それよりも何よりも、出雲族の血の純血のために、克子をねむらせて拓也の子供を人工中絶してしまった彼らの残酷さを、克子は自分の肉体の傷みとしてまだ忘れてはいない。
もし失敗したら！　数々の思い出が克子の足をにぶらせた。
そんな克子は、そのころ下条が一路この東京をめざしていることなど、もちろん知るはずはなかった。
そして下条は、その克子が出ていった岡島の事務所のあるホテルの前に立った。トメのくれたメモではここの七階のはずだった。下条はためらわずに、エレベーターに乗った。
七階について廊下の角をひとつ曲がると、そこに「関東観光開発株式会社」のプレートのかかっ

たドアがあった。
下条がそのドアに近づこうとしたとき、ドアは中から開いて、一人の男が出て来た。トメにきいた風貌から、岡島にちがいないと思った下条は、とっさに、そのあとをつけようと決心した。
岡島は、ホテルの地下駐車場から車に乗ると、銀座方向へ向かった。
おりよくホテルの前で客待ちしていたタクシーに、下条はあわてて乗りこんだ。
銀座はネオンの洪水であった。
岡島はその一軒のクラブのドアを肩で押して入った。「クラブ・銀の靴」とあった。下条もためらわずに、そのあとへつづいた。ドアをあけると、そこはたばこの煙と女たちの嬌声と、ピアノの弾き語りとの渦であった。
下条は岡島の姿をさがした。と、その前へぬっと立ちはだかったものがいる。
「下条さんですね、ようこそ」
「あなたは……」
「岡島幹彦です」
下条がつけていたことは、とっくに知られていたようであった。下条はとっさに逃げようとした。しかし、後にはいつの間に来たのか、鋭い眼つきの男たちがつめえりの制服状の服に身をかためて、三人ばかりで通せんぼするように立っていた。
「何をするんです」
「何もしません。ただ克子さんに、わたしとの約束を守っていただくために、あなたにはしばらくの間、わたしどものところにいていただきたいんですよ」
「人質ですか」

岡島は低く笑った。

「三日月村のやり方と似てますな」

その不敵な顔をみながら下条は、いいだろう、その方が、あるいはこの男の正体をさぐるには都合がいいかもしれない、と思った。

久米歌

次の日、三日月村はいつに変わらぬ朝を迎えた。
そして克子は、ひとりぼっちの小屋で下条の身を案じながら、血走った眼の広田サキと山村ケイを迎えた。
「岡島と何を取引きしくさった」と、サキがほえるように呶鳴った。
「どうせこの村を売ろうとして、その相談をしてたんでしょ」と、ケイがわめいた。
「この裏切り者！」
「いったい、どうしてくれようか」
先に手を出したのは、ケイであったかサキであったか、克子にはわからなかった。右と左から同時に女たちの手がのびて、克子の髪の毛をつかんでいた。
「さ、岡島と何を話して来たか白状するんだ」
サキの声と共に、克子は髪をぐいッとひっぱられ、床に顔を押しつけられた。くいしばった克子の唇から、思わず悲鳴がもれた。
「やめなされ！」と、声と共にトメがずいと入って来た。「やめなされ、サキさん、ケイさん」

「おばば、けんどこの女は岡島と……」
「ええじゃないか。そのおかげで下条さんは奴らの正体を探りに行ってくれとるんじゃ」
「何ですって、下条さんが？」
克子は、はじめて下条の留守の理由を知った。
「克子さん」トメが静かに言った。「岡島はおそらく、観光業者というても仮りの姿にちがいない。奴はこの出雲族を滅ぼそうとする奴らの仲間にちがいない。そんな奴らがおるからこそ、あんたにも下条さんにも苦労をかけねばならんのじゃ」
「そんな人たちがいるんですか！」
「いるとも。千五百年の昔から、この日本列島に大和民族以外の人種の住むことを好まない連中がな」
「だからこそ」と、サキがつづけた。「だからこそ、大和民族は、熊襲、土蜘蛛、国栖、越人、蝦夷らを次々とたいらげ、滅ぼしていったのじゃよ。わかるか、わたしらが今日までどんな思いで出雲族の血を守りつづけて来たか……」
「もうええ。サキさんもケイさんも仕事に行きなされ。克子さんには、わたしからじっくりと話してきかせるでな」
トメの言葉に、サキとケイは不満げな顔をしたが、トメの眼に睨まれて不承不承に出ていった。
「克子さん」二人が出ていったのをみすましてから、トメはいきなり克子の前に両手をついた。
「許して下され。ひどいばばじゃと思うておるじゃろな」
「……」
「あんたからはわたしは次々と大事なものを奪って来た。はじめは拓也さんじゃ。それからはお腹

の子じゃ」
「やめて下さい」
「すまんことじゃ。その上いままた下条さんまでわたしらのために……」
「……」
「克子さん、常世の島にいる乙姫がわしの娘じゃということは御存知じゃったの。あの乙姫が、拓也さんが来てくれてからというもの、ぱあっと明るい顔の娘に変わった。そんな娘を見るたびに、わしはあんたに申し訳がないと、いつも心の中で手を合わせて来たんじゃ。拓也さんのことだけじゃない。下条さんのことも、今のあんたがどんな気持ちでいるか、それを思うとわしの胸はしめつけられるんじゃ」
「トメさん」と克子は冷静な声で言った。こんな言葉でごまかされてたまるものかと思っていた。
「そんな、おためごかしはやめて下さい」
「そう思うかもしれん。けど、これはわしの本心じゃ」
「ききたくないわ、そんな話。本当にそう思うなら、わたしをこの村から出してくれればいいじゃありませんか」
もう、トメの顔を見ていることも、声を聞くこともいとわしかった。克子はいきなり立ちあがると、小屋をとび出した。
村は明るい日射しの中で、閑散としていた。その中を走るように海岸へ向かいながら、克子はポロポロ涙が流れるのをどうしようもなかった。
たしかに、自分はトメの言うとおり、この村によって次から次へと愛する者を奪われた女であった。なぜ、自分がこんなみじめな運命に殉じなければならないのか……たった今、トメのしおらし

い姿をみただけに、克子はむしょうに腹がたってならなかった。
「克子さん！」と呼びかける声に、克子はふと我にかえった。
みると、麻理子が駈けてくる。
「どうしたの？　麻理ちゃん」
麻理子は、はじめて克子たちが出合ったときのように、旅姿でザックを背負っていた。
「うん、東京へ行く」
「この村を出て行くのね」
「たった今、下条さんたちが岡島たちにつかまったって知らせが入ったのよ」
「何ですって！」
「助けられるかどうかわかんないけど、とにかく行ってみるわ」
「麻理ちゃん、あなた」
「うん、正直言って、ちょっぴり下条さんを好きだった。でも、わかってるのよ、あの人の気持ちはあんたから動かないってこと」
「麻理ちゃん……」
「とにかく、出て行く。うまくいけば下条さんをあんたに返してあげられるかもしれないわ」
そう言うと、麻理子は克子から顔をそむけるように走りだした。ひょっとしたら、涙を見られたくなかったのかもしれない。
克子は、トンネルの中へ駈けこもうとする麻理子をじっと見送った。そして突然、決心した。
「麻理ちゃん、ちょっと」駈け戻ってくる麻理子に、克子は早口で言った。「わるいけど、律子に手紙をとどけて欲しいのよ」

克子はそのときはっきりと、岡島の側に立ってこの村と敵対しようと決めたのである。律子にたのんで、広田みどりを一時岡島のところに監禁する。そして、それを利用して母親のサキを裏切らせるのだ。下条さん、待ってて下さい。必ず私があなたを助けます。

克子は、麻理子に律子への手紙を託すと、その足で、海岸で流木を集めているサキのところへ行った。

「サキさん」

「何じゃ」サキははげしい眼で克子を睨んだ。「さっきはおばばの手前だまってひきあげたが、わしはあんたを許しとりゃせんぞ」

「わかってるわ。それより、みどりちゃんに会いたくはない？」

「……」

「みどりちゃん、東京へ行って、かれこれもうひと月ね」

「あの子のことは言わんでくれ」

「サキさん、一度たずねてあげたら？」

「常世の神に仕える巫女は、村の用事以外に村を出んしきたりじゃ。第一あんな、村を捨てて行った娘をわしがたずねられるものか！　余計なことは言うもんじゃない。みどりはもう死んだものと思うとるわ」

「そう……そうね、その方がみどりちゃん、かえってさばさばするかも知れないわね」

「なに？」

「だって、もう恋人もできているかも知れないし……」

「うるさい！　みどりはそんな浮気な娘じゃないわ」

サキはわめくように言い捨てると、流木を拾って去って行った。

その後姿をみつめながら、克子は、これでひとつの布石はできた、と思った。おそらく、ひとり娘思いのサキは、今夜にでもみどりのアパートへ電話するにちがいない。ところがみどりはいない。そこでサキは驚いて東京へ行きたがるにちがいない。しかし村の掟はサキを東京へ行かせないだろう。

サキさん、いままでさんざんいじめられた仇をとらせてもらうわ！　克子は心の中でそうつぶやいていた

わたしがこの村へ軟禁されていることを、人一倍心配してくれている律子のことだ。この村を出るためだと知ったら、きっとうまくやってくれるだろう。

夕方の来るのが待ちどおしかった。やがて、夕日が海を染めるころ、克子は、広田サキがあたふたとトメの家へ駈けこんで行くのを認めて、そっとトメの家に近づき、耳をすませた。

「おねがいじゃ、おばば殿、あした、わしを東京へやってくれい」

「サキさん、わしら常世の神に仕える巫女が、そんなことはできないことくらい、承知のはずじゃなかったの？」

これはケイの声らしかった。

「ようわかっとる。けんどなァ、ケイさん、みどりがアパートへ戻らんちゅうんじゃ。さっき電話してきいたら、二三日戻らんちゅうて出かけたそうなんじゃ。わしは心配で、心配でのう」

サキがかきくどくように訴えている声をきいて、克子は、どうやら律子が手紙どおりにうまく運んでくれたことを知った。案の定、サキは海岸での克子の言葉にしげきされて、東京へ電話を入れたのだ。

「かわいそうじゃがの、サキさん」と、トメのりんとした声がきこえた。「いまは岡島たちが動いとる時じゃ。その時にあんたが東京へ行ったら、村の衆は何と思うじゃろう」

ケイがそのあとを引きとって言った。

「おばばの言うとおりよ、いま東京へ行ったら、痛くもない腹をさぐられるわ。いや、それどころか、みどりちゃんがいなくなったのが岡島たちのせいだとしたら、あんたどうするつもりなの」

「それなんじゃ、岡島たちの手にかかったのかどうか、それが心配で心配で……」

「岡島に両手をついて、みどりを返してくれとたのむつもりなの！」

「おばば殿！　ケイさん！　わしがそんな女かどうか、あんたらよう知っとるじゃないの。無事かどうか、確かめるだけでいいんじゃ」

サキの声は涙声であった。

「サキさん！」トメが言った。「わしらよりも村の衆じゃ。ええか、いま村の衆が動揺したらおしまいじゃ。こんな時こそ固い団結が必要なんじゃよ。村役のあんたに、ここの道理がわからぬはずはあるまいに」

あとには、サキのすすり泣きの声だけがひびいていた。

克子は、そっとトメの家をはなれると、海岸へ行った。海はもう、とっぷりと暮れていた。その暗い海をみながら、克子は背後にサキのすすり泣きが近づくのをきいた。

「サキさん！　みどりちゃんがどうなったか、一緒にしらべてあげましょうか」

「何じゃと！」

「みどりちゃんは、わたしの友だちの律子をたよっていったわ。だから、律子なら何かを知っているかもしれないわ」

「ほんとか！」
「でも、律子はわたしがこの村に閉じこめられていることを心配してるわ。だから、わたしが行かなければ、あんたひとりじゃ何も教えてくれないと思うわ」
「あんたは！」そこでサキは絶句した。そしてうめくように吐き出した。「あんたは、わしを利用してこの村をぬけ出るちうのか！　うまいこと言うても、その手にはのらんぞ」
サキは叫ぶように言うと、村の中へ駈けこんで行った。
ふっと、徒労感が克子の胸に押し寄せてきた。やはり、みどりを利用しようなどというのは姑息な手段だったかも知れない。サキにとっては、一人娘への愛よりも、村への忠誠心の方が強かったのかも知れない……。

岡島の事務所はホテルの特別室にある。その応接部分を事務所に改造していたが、その奥のベッドルームには、そのころ、下条とみどりが押しこめられていた。
いったい何がおこったのかわからないうちにここへ連れてこられ、そのまま閉じこめられてしまったみどりは、何もなすすべもなく、ぼんやりとベッドに腰をかけていた。
「みどりちゃん、寝てなさい」
下条の言葉にも、みどりは首をふるばかりである。
下条はそんなみどりを見ながら、事務所との境のドアをノックした。つめえりの岡島の部下がドアを開いた。
「女の子と一緒じゃまずい。そっちのソファで寝かせてくれないか」
部下は下条とみどりをチラチラと見くらべたが、大事な人質だと思ってか、黙って身体を開い

た。

「となりにいる。安心して寝てるんだよ」

下条は、ツィンベッドのひとつから毛布をはぎとると、事務所の方へ入った。

「いいか、電話は通じない。いくら叫んでも近くの部屋はすべて、われわれが借りてある。無駄なことはしないことだ」

つめえりの部下は、鋭い眼で睨んで出て行った。

事務所には、下条ひとりになった。下条はこの機会に岡島の正体をさぐろうと、デスクの引き出しを次々とあけてみた。しかし、そこにはありふれた事務用品とか、伝票とかしか入っていなかった。次にスチール棚のファイルを調べようと思って、下条は岡島のデスクのうしろをまわった。

その時、ふと腕がふれたのか、そこにはってあった日の丸の鋲がはずれた。だらりと旗の一角がたれ下って、その背後に文字の書かれた額が見えた。日の丸の旗のうしろに隠されていたように見える……そのことが下条の注意を引いた。

そっと日の丸の旗をはずしてみると、文字の額があらわになった。そこに書かれていた文字は、奇妙なものであった。

「みつみつし　久米(くめ)の子等(こら)が
垣下(かきもと)に　植ゑし椒(はじかみ)
口(くち)ひひく　吾(われ)は忘れじ
撃(う)ちてし止まむ」

その文字は、こう読めた。

「これは！」下条は思わず声に出して言った。「『古事記』に出てくる、久米歌じゃないか！」

たしかにそれは『古事記』にも『日本書紀』にも出てくる久米歌であった。

たとえば『古事記』では、それは「中巻」の「神武天皇」記の「東征」の条に出てくる。

神武、すなわち神倭伊波禮毘古命が、忍坂（大和国磯城郡忍坂村）に来たとき、そこにいた土蜘蛛族を滅そうとして、わざと餐宴をひらき、歌を会図に酔い痴れた八十建（書紀には梟師とある）を討った。さらに、登美毘古（トミノナガスネヒコ）を討とうとしたときも同じやり方をしたと記されているが、その時歌われた歌が、この「久米歌」であったという。

下条は、急いで壁にはられている観光ポスターや、泰西名画の復写などをはずしてみた。そして、そのいずれの下からも、同じような文字の額を発見したのである。

「みつみつし　久米の子等が
　頭椎い　石椎いもち
　撃ちてし止まむ」

「神風の　伊勢の海の　大石に
　這い廻ろふ　細螺の
　い這ひ廻り
　撃ちてし止まむ」

すべて「久米歌」であった。そしてこの最後の言葉は、下条にもかすかながらも記憶があった。「撃ちてし止まん」それは、たしかにあの太平洋戦争中、日本にみちあふれていた言葉であった。「久米歌」とは、もともと久米氏を族長とする古代軍団にうたわれた歌のことである。そしてその久米氏は、古代にあっては大伴氏と共に、大和朝廷の近衛軍団としての役割りを果たしていたはずである。

『日本書紀』は、天孫降臨の露払いとして、ニニギノミコトが高千穂の久士布流嶽に天下った、その時の守備隊が、天の忍日と、天つ久米であったという。天の忍日は、後に大伴氏の祖となり、大伴旅人、大伴家持へとつづくのであるが、歌人としても有名な家持は、一方では地方鎮守の責任者として、遠く越の国、能登国へもその足跡を残していることは周知の事実である。

そして、天つ久米は、大和朝廷の近衛軍団、久米一族として栄え、いわば騎馬民族の征服王朝たる大和朝廷の、その急先鋒だったのである。

その「久米歌」が、なぜこんなところにあるのか。しかも、ひそかに隠すようにして……。

ひょっとしたら、岡島は久米一族の末裔かもしれない……。下条の胸にそんな思いがふっとよぎった。

そのとき、下条はドアをしのびやかにたたく音をきいた。あわてて、はずしたポスターや日の丸の旗をもどそうとした下条は、ささやくような声に気づいた。

「下条さん、いる？」

それは麻理子の声であった。

「麻理ちゃん」

下条はドアのところへとんで行った。

「やっぱりいたのね」

「危険だ、帰りたまえ」

「大丈夫。何とかするわ。しばらく待っててね」

麻理子はドアのすきまから、そう言ってよこした。

ホテルの深夜は、ときどき動くエレベーターのモーターのうなりの他は、シンと音もなかった。

騎馬民族

三日月村は、また新しい朝を迎えていた。
寝不足のまま、克子は、明け方になってようやく少しまどろんだ。
「克子さん、克子さん」
とつぜん、身体をゆすられて、克子ははっとめざめた。そこに広田サキの顔があった。
「おサキさん！」
「おねがいじゃ。わしを東京へつれていって下され」
サキは思いつめたように、声をひそめて言った。おそらく、昨夜一晩、考えつめたにちがいない。そして、やっぱり娘かわいさの思いが村への忠誠心にまさったのであろう。
「村の者にしかわからん隠し道がある。そこを通って、わしを東京へ」
「わかりました。行きましょう。サキさん」
克子ははねおきた。やっと、サキは村を裏切る決心をしてくれた。この村をぬけ出し、あのいまわしい島を現実的に消してしまうための行動が、やっとはじまるのだ、と克子は胸がおどった。
克子は、サキにつれられ、まだ朝食の支度に忙しい村の中を忍ぶように走った。村をぬけて海岸

へ出、そこから岩の間を通って山道へ入った。それは、村人たちが芭蕉畑へ行くための道のようである。克子とサキは、息をはずませながら、走りつづけた。

しかしそのころ、すでにケイが異変をトメに知らせていた。トメはあらかじめわかっていたかのように落着いて立ちあがると、ケイに言った。

「いいか、わしがつかまえる。あんたはこのことを村の衆の誰にも気どられんようにしておくれ」

そして、杖をとりあげると、これがあの老婆かと思うような早さで、岩場をこえて走りだした。

芭蕉畑をぬけると、滝木の茂みであった。その背の低い雑木の枝の下を、サキがくぐり、克子も後につづいた。おどろいたことに、草におおわれた滝木の林だと思っていたそこに、細い辿道がつづいていた。これが村人しか知らない「隠し道」なのだろう。

克子は、サキに遅れまいと必死に後につづいた。滝木の林をすぎると、草原になった。見下すと、はるかに海と三日月村が見えた。

やっと村を出た！　自由になれた！

そう思ったとき、克子は左のふくらはぎにはげしい痛みを感じて、思わず立ちすくんだ。

「まむしじゃ！」

サキが叫んだ。

克子は、一瞬、自分の足にからみついた縄状のものを視線の端にとどめて、倒れた。

「克子さん」

サキが駈けよって抱きおこそうとした。そのとき、

「動かしたらいかん！」

鋭い声がとんで来た。トメであった。

「おばば！」と絶句して、サキは硬直したように立ちすくんだ。
「動かしたら毒がまわる。木の棒をさがすんじゃ」
トメはサキに言いつけるなり、手拭いを取り出すと、それで克子の腿をきつく結んだ。サキがさし出した棒を手拭いにつっこんで、トメは更にギリギリとしぼりあげた。
「サキさん、わしの家にある薬をッ。何をしとる、早くいかんか！」
トメの叱声にあおられたように、サキが駈け下ってゆく。その後姿を見送るいとまもなく、トメはいきなりその口を克子のまむしに噛まれた傷あとに近づけた。
「トメさん……」
「静かに」
トメは傷口に口をつけた。そして克子の血を吸いとっては地面に吐いた。
三度、四度、五度……。トメは克子の血の中の毒を吸いとっては吐きつづける。うすくなってゆく意識の中で、克子はトメの唇の感触をここちよく思っていた。
遠い海鳴りが聞こえる……。それは、幼い日にきいた、母の子守り歌のようであった。
逃げようとしたわたし、いや、サキを裏切らせようとしたわたしを、トメはいま必死で助けようとしてくれている。なぜだろう。わたしが死んだとて、トメにとっては何ごとでもないはずなのに。いま、トメは自分の危険もかえりみず、毒を吸いつづけてくれている。
克子は、いまはじめて、トメに対して言いようのない親しみを感じはじめていた。それは、肉親の情うすく育った克子の、母に対する思慕のようなものだったのかも知れない。
そのころ、麻理子は、ホテルの七階で、非常階段のドアのすき間から、岡島の事務所をうかがっ

ていた。下条がすぐ近くにいる、そう思うと、昨夜からここに坐っていることのきゅうくつさと寒さも苦にならなかった。

やがて、つめえりの岡島の部下がやって来た。麻理子は、すばやくその部下に近づくと、いきなり隠しもっていたビールのあきビンの先を、部下のみぞおちめがけて突き出した。

この不意うちに、岡島の部下は息をつめて昏倒した。そのポケットから鍵を取り出すと、麻理子はもどかしげにドアをあけた。

「下条さん、早く!」

「麻理ちゃん!」

「時間がないわ、早く!」

下条はみどりの手を引いてとび出すと、そのまま一気に非常階段を駈けおりた。

「ありがとう、麻理ちゃん」

「ううん、下条さんに喜んでもらえれば本望よ」

「君……」

「早く、克子さんのところへ帰ってあげて」

麻理子はこみあげるものを抑えてそう言った。

「みどりちゃんも、このまま一度村へ帰った方がいいわ。東京にいると、また岡島たちにつかまるかもしれないわよ」

「ありがとう、麻理子さん」

川崎港は、フェリーの出航前のあわただしさにつつまれていた。

「麻理ちゃん、君は来ないのか」

「克子さんによろしく」
「……」
「しあわせにね」
そう言ったとき、はじめて麻理子の眼に涙が湧いた。フェリーは静かに岸壁をはなれだした。
「さよなら」
ポツリと言った。もう二度と会うことはないだろう、と麻理子は思った。
「さよなら」
こんどは口の中だけで、声にはならなかった。じっと船尾でみつめている下条とみどりの姿が、涙にぼやけてくる。
「バカヤロ！」と、つぶやいてみる。
でもいいんだ、どうせわたしは流れもんだから。そう自分に言いきかせてザックをかついだ麻理子は、遠ざかるフェリーに背を向けると、あともふりかえらずに駈け出した。
フェリーは静かに東京港をすべって、木更津港へ向かっていた。

「なに？　岡島は久米一族の末裔じゃというのか！」
下条がさぐって来た岡島の正体は、尾形トメたちに大きな衝撃を与えたようであった。
すでに、克子の傷は、トメの秘薬で痛みがおさまっていた。そして、下条と一緒に村へ帰ったみどりは、母親のサキが、自分のために村を裏切ろうとまでしたことをきいて、サキの胸に泣きくずれた。
「お母さん、わたし、一生この村にいる。そして巫女になるわ」

みどりのことばは、サキにとって千金の価だった。みどりがこうなったのも、考えてみれば、克子と下条のおかげかもしれない、とサキは思いはじめていた。
そして、克子の、トメの献身への感謝の気持ちは、いつか、克子自身を、この村からはなれがたく思わせていた。
すべてはうまくおさまりかけていたのだったが、岡島が久米一族の末裔かもしれないという下条の報告は、また三日月村に新しい波紋を呼びおこしたようであった。
「久米一族が！　性こりもなく！」ケイがうめくように言った。「三十年前、日本が戦争に負けたときに、もうあきらめたかと思うていたに……」
「いや執念深いだけが久米一族のとりえじゃ。奴らを恐れるからこそ、必要以上に警戒して来たんじゃが……」
トメが、ボソリと言った。
そうだったのか。出雲族は、古来より、この久米一族と戦いつづけて来ていたのか！　だからこそ、今日までわたしが経験した、あのような方法をもってまで、出雲族たちは自分たちを守って来たのだったのか。偽警官まで使い、裏切った者を殺し、催眠術を使って、部外者に出雲族のことを知られまいとしたのも、実は、この久米一族から自らを守るための、自衛の手段だったのか。
克子の胸に、そんな大昔のことがなぜ今の世に、という疑問は残りながらも、自分の経験した個々の事件がすべて一本の糸でつながって理解されるのであった。
トメは、ピシリと枯柴を折って囲炉裏にくべた。ぱあーっと燃えあがった炎が、三人の女たちと、下条と克子の顔を照らした。
「闘わにゃなるまいの」トメが言った。「久米一族が頭をもたげて来た以上、闘わにゃなるまい。

わしら出雲族は千五百年、そうして生きて来たんじゃからの」
　誰も何も言わなかった。重苦しくはりつめた気配が一座にみなぎっていた。
「わしらの代で、出雲族の血をけがすわけにはいかん」
　そのことばでケイが立って、表に向かって手をふった。やがて半鐘があわただしく鳴り出した。村人全体に非常呼集がかけられたのだ。克子も下条もその半鐘を、身のうちがふるえるような思いで聞いた。
「克子さん、下条さん、すぐにこの村を出なされ」
　トメが、とつぜん言った。
「おばば！　何を言うんじゃ」ケイがおどろいて言った。「今、こいつらを村から出したら、また岡島と通じるかもしれません」
「ケイさん、そう思うたら、むしろよそ者はおらん方がええのとちがうかな」トメが、静かに言った。「闘いになる。この二人が敵じゃと思えば、獅子身中の虫にせん方がええ」
「トメさん？　私、もうそんな敵になどなりません」と、克子も静かに、しかしはっきりと言った。
「わかっておる。長い間、すまなんだな。今日限りあんたたちは自由じゃ。どこへでも行きなされ」
「トメさん！」
「今日までのことは、本当に許してくだされや」そういうとトメは立ちあがった。「さ、闘いの前の祈りじゃ。山の祠へ参ろうぞ」
　トメがサキとケイをひきつれて出ていったあとに、克子と下条だけが残った。

「克子さん、やっと自由になれたね」
「あなた」克子は、その下条をじっとみつめて言った。「闘いがはじまるわ。いま、この村を捨てて行ける？」
「行って下さい」
とつぜん、奥の方から声がひびいた。おどろいてふりかえると、そこにしつらえられた祭壇の前に、拓也と佐知子が立っていた。おそらく、裏口から入ったものにちがいない。
拓也は、じっと克子と下条をみつめた。
「今さら何もいうことはありません。ここを出られたら、どうか私たちのことは忘れて下さい」
「神崎さん、しかし、岡島は久米一族の末裔としてこの村を……」
「わかっています。いつかはこんな日の来ることを予想していました」
「本当に闘うつもりなんですか」
拓也は、うなずいた。
「佐知子さん、じゃ、あなたも」と、克子が言った。
「はい。それが私たち出雲族の運命です」
「いや、これが少数民族というものの運命なのかもしれません」拓也がきっぱりと言った。「さ、一刻も早くこの村を出て下さい」
「おしあわせに」
佐知子が頭を下げると、拓也が、そんな佐知子を目でうながして出ていった。
半鐘がまだ鳴りつづいている。
「あなた！」克子は叫んだ。「私も、私も仲間に入れて下さい！」

しかし、拓也の答えはなかった。半鐘のひびきだけがそれに答えた。
克子は、本当に、このまま、この村で、トメたちと一緒に岡島と闘ってもいいと思っていた。
「克子さん！」そんな克子を、下条が抱きしめた。「出ていきましょう。この村にとって、いまやぼくたちは厄介もの以外の何ものでもなくなったようです」
「あなた……」
下条の胸にくずれながら克子は不思議に思った。あんなに脱出したかったこの村が、いま自由に出ていけるとなったとき、どうしてこんなにもしたわしく恋しいのであろうか。それはいのちをかけてまむしの毒を吸いとってトメが示してくれた「母なるもの」に対する懐しさだけとは思えなかった。

翌る日、ふたりはそろって、ホテルの中の岡島の事務所をたずねた。
「どうやら戦いの準備をはじめたあの村から、今度は追い出されたようですね」と、日の丸の旗を背負って岡島が言った。「私たちにとっても、もうあなた方を利用するなどという姑息な時季はすぎたようです」
「やっぱり、出雲族と闘うつもりなんですか」
克子の質問に、岡島は、しずかに目をとじると、つぶやくように語りはじめた。それは『古事記』の上巻にある「天孫降臨」の一節であった。
「故爾に天津国子番能邇邇芸命に詔いたまひて、天の石位を離れ、天の八重多那雲を押し分けて、伊都能知和岐知和岐弖、天の浮橋に宋岐士摩理、蘇理多多斯弖、筑紫の日向の高千穂の久士布流多気に天降りまさしめき。故爾に、天忍日命、天津久米命の二人、天の石靫を取り負い、頭椎の大刀

を取り佩き、天の波士弓を取り持ち、天の真鹿児矢を手挟み、御前に立ちて代へ奉りき」
　それをきいていた下条が言った。
「やはり、久米一族の末裔であることを認めるんですね」
「末裔という言葉はつつしんでもらいたいですね。末裔というと、滅びゆくものの子孫が細々と生きているという感じがする、それは出雲族に対して用いられるべき言葉で、我々久米一族は、この日本列島を支配する大和民族の名誉ある古き氏族のひとつとしてますます栄えていくはずです」
「あんたは、征服者をそのまま認めろと言うんですか」
「下条さん。人類には滅びゆく民族と栄えていく民族とがある。政治、経済、文化、あらゆる面にわたって劣等なる民族は滅びていく、これは人類の進歩です」
「あんたの考えはナチズムだ！」
　岡島は声を上げて笑った。
「しかし、あんたの考えはセンチメンタリズムにすぎん。ごらんなさい、この窓から見える東京の繁栄を！　大和民族は三十年の間に、あの廃墟からこれだけの文化を築きあげたんです。この日本列島は、大和民族のものです」
「でもッ」克子は叫んだ。「出雲族がいたっていいじゃありませんか！　どうして大和民族だけでなくてはいけないんですか」
「そうだ」と下条も同調した。「世界のどこをみても、二つ、三つ、あるいはもっと多くの民族による複合国家だ。それが、どうして日本だけ単一民族でなければならないんだ」
「たしかにそうです」岡島はひるまなかった。「しかし、世界の多くの国々の内乱は、つねに、その民族同志の争いから始まっている。あるいはそこへ帰着する。強固な一枚岩の国家を作るには、

単一民族国家以外にはない」
「それはファシズムじゃありませんか」
「何といわれてもけっこう。下条さん、克子さん、これだけはいっておく。あんたたちが我々に協力しないのはあんたたちの自由だ。しかし、あんたたちが、この日本列島上で普通の市民権と生活権を求める限り、それは間接的に我々に手をかしていることになる。それだけは忘れないで下さい」
「やめてちょうだい」克子は耳をおさえたい気持ちだった。「いったい、あの人たちに、あの村の人たちに何をするつもりなんですか」
「別に村人の大虐殺を計画しているわけではありません。ただ、出雲族の象徴たる乙姫さえいなくなれば……」
「何ですって」
「乙姫さえいなくなれば、出雲族の結束は乱れ、内部崩壊するでしょう」
「それでは、あなた方は、乙姫さんを殺すつもりなんですね」
「さあ、もう部外者は帰って下さい。私は三日月村と最後のとりひきをしなければなりません」
「最後のとりひき？」
「そうです。あなたたちを使ってあの島をレジャーランドにする合法的な手段に失敗した以上、あとは、村人全体のいのちと、乙姫のいのちのどちらをえらぶか、三日月村の人たちにつきつけてみるのです」
　岡島は平然と言い切った。

出雲族

その夜、克子と下条は新宿の裏通りにある小さなホテルに泊った。ラブホテルと呼ばれるそこは、男と女が愛を交歓するためにだけ使われるホテルであった。

しかし、広いベッドによりそって寝ながら、克子も下条も、その夜は互いにいだきあうことすら忘れていた。

「どうなるのかしら、あの村」

「……」

「やっぱり、岡島たちは、どうしても乙姫さんを殺すつもりなのかしら」

「民族抹殺政策だよ」下条が眉をひそめて言った。「アメリカにおけるインディオ、あるいはアフリカ、南太平洋における様々な小数民族に対する弾圧、それらはすべて、岡島の言ったような論理から生まれてくるのかもしれない」

「……」

「日本においても、琉球民族、アイヌ民族に対してとられている政策はそれと同断と言ってもいいだろうね」

「どうしたら、そんなことをしなくてもいい社会がくるのかしら」
「さあ、おそらく、社会主義の世の中になっても無理かもしれないね。この世に国家というものが存在する限り」
「あなた……」
「もともと海洋民族だった出雲族は、騎馬民族に追われて全国各地の海岸へ隠れ住み、そこに浦島伝説を残したんだね。海ばかりではなく、山へも逃げた人たちがいただろう。浦島伝説は、いわば、大和民族たる騎馬民族に追われた出雲族の、せい一杯の生存の証しであったのかもしれない」
そういえば、あの木曽の山の中にも、浦島伝説が残っていたことを、克子は思い出した。
「信州の諏訪神社は、出雲系の神様なんだよ」
下条はしだいに熱っぽくなった口調で更につづけた。
『古事記』によれば、天孫族による出雲族の弾圧は、その長たる大国主命の「国譲り」という形で表現されている。それは「国譲り」という言葉に示されるようないかにも無血交替のように聞こえるものでは、実はなかったのである。
大国主命には、子供がふたりいた。事代主命（ことしろぬし）と建御名方命（たけみなかた）である。事代主命は「国譲り」におとなしく同意したものの、弟の建御名方命は武力抵抗をあくまで主張した。そして闘いに闘いを重ね、ついに「科野（しなの）国の州羽（すわ）の海」まで「長征」したあげく、そこで降服した。
現在、信州、諏訪湖のほとりにあって、全国にその末社を持つ諏訪神社は、その建御名方命、及びその妃などを祭神としている。おそらく、全国に広がる膨大な末社郡は、その建御名方命をしたう出雲族の、大和民族に対するささやかな抵抗のしるしであったのかもしれない。
そして、現在長野県にのこる「安曇郡」の名は、もと海人族を統割した安曇氏から出たことや、

あるいは木曽山中にある寝覚の床の浦島伝説を考えるとき、建御名方命をしたう南方系海人族が、日本アルプスの尾根をわたって信州へ入りこんでいった痕跡であるかもしれない。

　　むかしむかし浦島は
　　助けた亀につれられて
　　竜宮城へ来てみれば
　　絵にも書けない美しさ

心なしかこの歌も、何だか愛調をおびているように思える。
「ね、このまま、新しい生活を始めてしまってもいいの？」
下条の顔をみつめながら克子が言った。
「わたし、何だかこのままじゃ、いつまでもあの島のことが心にのこるみたい」
「克子……」
「本当に逃げだしたようで、一生つらい思いをすることになるんじゃないかしら」
「行ってみようか、もう一度」
「ほんと！」
克子の声がはずんだ。
「ああ、明日、行ってみよう」
「あなた！」
克子は下条の胸にすがった。下条はそんな克子を、そっと抱きしめた。
やっと、ふたりに男と女の欲望がよみがえったようであった。しかし、それはなぜか、敬虔な儀式に似た愛の交歓であった。

翌る日、ふたりはまたいつものフェリーにのった。

今まで何度利用したフェリーであるかしれない。しかし、そのとき克子は、これがこのフェリーを利用する最後になるかもしれないと思っていた。

木更津港へつくと、タクシーにのった。三日月村まではかなりの料金になるにちがいなかった。だが、今は一刻も早くあの村へつきたかったのだ。

タクシーは一路国道を南下した。

「ちょっとまって！」

君津市へ入ったとき、とつぜん克子が叫んだ。

「どうしたんだい」

「今すれちがったマイクロバス、三日月村の人たちがのってたような気がするの」

「まさか」

「まちがいないわ、ほら常世詣りのときの白い衣裳に、あのお面をつけていたもの」

「常代神社へいったのかもしれないな」

「運転手さん、おねがい、バックして！」

克子は気がせいた。なぜなのだろう、岡島との闘いが迫っているというのに。なぜ、今ごろ三日月村の人たちがこんなところにいるのだろう。

タクシーはせまい村道をぬけて、君津市常代村の奥にある常代神社の石段の下についた。なつかしい神社だった。

克子が息せききらして石段をかけ上ると、鳥居の向うに、やはりいた。いつか拓也を発見したと

きのように、白い衣裳に仮面をつけた人たちが、常代神社の社殿に向かって深く頭を下げていたのである。

が、やがて、その人たちが、祈りをおえてこっちへ向いたとき、

「克子さん！　下条さんも！」と、おどろきの声が、仮面の下からもれた。

「あなたたちは……」

仮面をとった二人は、広田サキと山村ケイであった。

「いったいどうしたですか」

下条の問いに、仮面をつけたままの村人の中からしのび泣きがおこった。

「何かあったんですか」

「拓也さんが、岡島と取引きをしたんです」

「拓也さんが？」

「村の人たちを救うために、拓也さんと乙姫様が、二人だけであの島に残ると」

「何ですって？　そんなことをしたら、岡島のためにあの二人は……」

「わかっています。でも、拓也さんがどうしてもそうしろと……」

「あなたたちは、乙姫様がいなくなってもいいんですかッ」

克子は叫んだ。

「私はここにいます」

一人の白装束が、しずかに仮面をとった。そこに、乙姫のまだあどけなさの残った顔があった。

「それじゃ、島に残ったのは……」

「下条さん、すみません、佐知子さんがわたしの身代りに……」みるみる涙の粒をふくらませて乙

姫が言った。「拓也さんが言ってくれました。私さえ残っていれば、また新しい花婿をさがせばいいって、佐知子さんもその通りだと言って身代りになって下さったんです」
「そうだったんですか」
「それで、あなたたちはこれからどこへ……」
「全国に散らばっている出雲族の仲間をたよっていきます」と、サキが言った。
「そして、そこで、この乙姫様を中心に、新しい常世の島を作ります」と、ケイが言って仮面をかぶった。
乙姫は、克子と下条の前に深く頭を下げた。
「最後まで拓也さんと佐知子さんを犠牲にしました。お詫びの言葉もありません」

三日月村には、物音一つなく、聞えるのは海鳴りばかりであった。一見、昨日までと何のかわりもないたたずまいであったが、どの家にも人っ子ひとりいなかった。
克子は、村をぬけて海岸へ出てみた。
ざあッと波がよせる。その波の向うに、常世の島がある。そしてそこに、死を覚悟した拓也と佐知子がいる。村人を救うため、犠牲になった男と女がいる。
きけば、岡島は今朝早くこの村へ来て、村人たちをおどしたのだという。台風の時期に山崩れをおこすこともできるし、簡易水道の水源に薬物を投げこんで全村に疫病をはやらせることも可能だと言ったという。三方を山に囲まれたこの村では、おそらく山崩れがあればひとたまりもないであろう。まして、水源に薬物を投入された恐怖は想像することもできない。
その話をきいたとき、拓也の心はきまったのだと、サキとケイは話した。

じっと、海をみつめてたたずむ克子と下条の前へ、そのときうすい煙が流れて来た。みると、煙は、あの岩にあいた洞穴の中から流れてきていた。

二人は、洞穴の前に立てられた鳥居に走りよった。

「トメさん！」

洞穴の中に尾形トメがひとりで笑っていた。

「なにしに来なすった」

「トメさんこそ、どうして、みんなと一緒にいかなかったんですか」

「年よりは、生まれそだった村は捨てられん」

「……」

「心配しなさるな、わしがいなくても、出雲族の新しい巫女は次々と育ってくる。……克子さん、下条さん、みてなさるがええ。いつか、この日本列島のどこかで、出雲族は必ず出雲族の旗印をかかげて立ちあがるわい」

「独立するというんですか」

「そうじゃ、出雲族はいつの日にか、必ず独立するんじゃ」

そう言ったとき、トメの目は妖しくらんらんと輝いてみえた。

「あなた」と克子が下条の腕に手をかけて言った。

「わかっている」

下条はうなずいて、そっとトメの巫子洞穴の前をはなれた。

島へ行こう。さっき乙姫たちに出合ったときから、克子の心はきまっていた。そうしなければ、自分たちの行為は完結しないのだと思っていた。

近くの港でモーターボートをかり、下条がハンドルをにぎって、ふたりは夕やみ迫る海に出た。常世の島が近づいてくる。あれほど嫌っていたこの島へ、いま、自分の意志で近づいている。そのことが不思議であった。

船つき場にモーターボートを結ぶと、岸の階段を駈けあがった。草原に、白木の「心の御柱」が夕もやの天に向かってそびえている。

ふたりは一直線に、あの岩穴の祭壇へ向かった。

銅鐸の音がしていた。火焔土器をかたどった大きな土器に火がもえていた。そしてその前に、拓也と佐知子が坐っていた。

「君たち！」

拓也は、克子と下条をみておどろいたように言った。

そのときとつぜん、克子はいま自分が何をすればいいかに気づいた。

「あなた、佐知子さんをつれてにげて下さい。私たちののって来たモーターボートがあるわ」

「何をいうんだ、克子」

「いや、克子さんのいうとおりだ。佐知子、神崎さんと一緒に行きたまえ」

「ありがとう、しかし」拓也がきっぱりと言った「もうあなたたちの好意をうけるわけにはいかない」

「あなた！　行って。あなたが行かなければ乙姫様の花婿はどうなるんですか」

「そんなものは幻想だ」拓也が思いがけない言葉を吐いた。「万世一系、血の純血を誇りたがるのは騎馬民族だけだ」

「しかし……」

「きいてくれ！　出雲族は本来血の純血とは、無縁の存在だ。そういう意味では、乙姫もいなくてもいいんだ。村人たちに乙姫をつけてやったのは、あの人たちの安心のためだけだ」
「神崎さん、あなたは出雲族が滅びてもいいと思っているんですか」
「いや、出雲族は不滅だ」拓也は言った。「たとえ、血がどうであろうとも、我こそは出雲族だと名のる人間がいる限り、出雲族は不滅だ」
そう言ったとき、拓也の顔は輝いてみえた。
「お帰りなさいまし。そして、あなたたちはあなたたちのしあわせを……」
佐知子が決意を秘めた静かな口調で言った。
「いやです！」克子は叫んだ。「いやです、それじゃ私はどうなるんです。今日まで、私が苦しみ、悩み、耐えて来たのは何のためなんですか！」
「克子……」
「行って下さい！　私のために！　私が失ったあなたの赤ちゃんを、いつか乙姫さんに生ませてあげて下さい！　そうでなければ、今日までの私は、一切無駄に生きて来たことになります！」
克子は、すべての思いをこめて訴えた。そうなのだ。ここで、拓也と佐知子が、岡島のために殺されてしまっては、私のすべては無駄になってしまう。克子が今日まで生きて来たその「生」は、拓也と乙姫の「生」のためだったのではなかったのか。
「おねがいです。私のために、行って下さい」
「佐知子、おれも克子さんと同じ気持ちだ」
下条が言った。
「わかりました」と拓也が、二人の言葉に押しきられたように頭を下げた。「だまって行かせてい

ただきます」
「ありがとう、あなた」
克子は、佐知子が着ていた乙姫の衣裳を身につけた。下条は、拓也と衣裳を交換した。
やがて、拓也と佐知子の乗ったモーターボートが島をはなれて行った。島はすでにすっぽりと夜の闇につつまれていた。
「ね、ほんとのことを教えて」
「……」
下条は、じっと克子をみつめた。
「ほんとは、やっぱり、佐知子さんのことを愛してた？」
「……」
下条は何も答えなかった。
「私は……」そう言いかけて、克子は、胸の中にこみあげるものを感じた。「いまは、たったいま、あなたを好きで好きでたまらなくなったわ」
下条は無言のまましっかりと克子を抱きしめた。
「心の御柱」が闇にそそり立っている。
海に船のエンジンがひびきはじめた。それは、一隻や二隻ではなかった。
おそらく、岡島たち久米一族が、乙姫と拓也を抹殺するために島に近づいているにちがいない。
その船のエンジンをききながら、克子は、下条のために、しずかに身体を開いていった。

（了）

昭和51年3月25日 発行

定価 八九〇円

著 者 佐々木守

発行者 藤山真人

発行所 株式会社 東邦出版社

東京都新宿区西早稲田三—三

電話東京(二〇二)七六三一～三

振替 東京八五二七五

印刷・日大印刷 製本・東京美術紙工

